

一般国道157号（鶴来バイパス）改築に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

野々市町

清金アガトウ遺跡

2006

石川県教育委員会

(財)石川県埋蔵文化財センター

きよ がね
清金アガトウ遺跡

2 0 0 6

石 川 県 教 育 委 員 会
財)石川県埋蔵文化財センター



第1次調査 掘立柱建物4・5 (北から)



第1次調査 竪穴建物1 (南から)



第 2 次調査 土坑10出土遺物



第 2 次調査出土遺物

例 言

- 1 本書は清金アガトウ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県石川郡野々市町清金地内である。
- 3 調査原因は一般国道157号（鶴来バイパス）改築工事であり、同事業を所管する建設省北陸地方建設局金沢工事事務所（現 国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所）が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は、石川県教育委員会から委託を受けて、昭和63年（1988）年度に石川県立埋蔵文化財センターが実施し、平成元（1989）年度、同2年度に、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が実施した。整理は、平成12年度、平成14年度、平成16年度、平成17年度に財団法人石川県埋蔵文化財センターが実施した。
- 5 調査に係る費用は、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が負担した。
- 6 現地調査の期間・面積・担当者は下記のとおりである。
 - 第1次調査
期 間 昭和63年6月6日～同年10月22日
面 積 3,000m²
担当者 中島俊一（石川県立埋蔵文化財センター主査）
 - 第2次調査
期 間 平成元年5月16日～同年12月4日
面 積 6,100m²
担当者 山本直人（社団法人石川県埋蔵文化財保存協会主任調査員）
 - 第3次調査
期 間 平成2（1990）年4月26日～同年8月28日
面 積 9,800m²
担当者 山本直人
- 7 報告書の執筆、刊行は調査部調査第1課が担当し、編集を空良寛が行った。執筆分担は下記のとおりである。
 - 第2章・第6章：空良寛
 - 第1章・第3章：中島俊一（企画部長）
 - 第4章・第5章：松尾実（調査部調査第4課）
- 8 整理作業には下記の個人の協力を得た。
田村昌宏（野々市町教育委員会）
- 9 調査に関する記録と出土品は、石川県埋蔵文化財センターが保管している。
- 10 本書についての凡例は、下記のとおりである。
 - (1) 調査に当たっての座標は、国土座標系第 系を基準にしている
 - (2) 水平基準は、海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 遺物番号は、調査年次ごとに1から通し番号を付してあり、挿図、写真、本文で一致する。
 - (4) 遺物実測図については、須恵器の断面は黒塗り、黒色土器は■■■■赤彩土器は■■■■で示した。
 - (5) 遺構番号は、調査年次ごとに1から付してある。

目 次

第 1 章	調査に至る経緯と経過	1
第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	調査に至る経過	2
第 2 章	位置と地理的歴史的環境	3
第 1 節	位置と地理的環境	3
第 2 節	歴史的環境	3
第 3 章	第 1 次調査の成果	10
第 1 節	調査の方法	10
第 2 節	基本層序	10
第 3 節	調査成果	13
第 4 節	まとめ	31
第 4 章	第 2 次調査の成果	37
第 1 節	調査の方法	37
第 2 節	基本層序	38
第 3 節	調査成果	41
第 4 節	まとめ	63
第 5 章	第 3 次調査の成果	117
第 1 節	調査の方法	117
第 2 節	基本層序	118
第 3 節	調査成果	123
第 4 節	まとめ	129
第 6 章	考察 第 2 次調査土坑10出土の犁先	145

挿図目次

第1図 清金アガトウ遺跡の位置	3	第39図 第2次調査出土遺物実測図3	66
第2図 周辺遺跡地図	7・8	第40図 第2次調査出土遺物実測図4	67
第3図 第1次調査調査区区割図	11	第41図 第2次調査出土遺物実測図5	68
第4図 第1次調査空中写真測量図	12	第42図 第2次調査出土遺物実測図6	69
第5図 第1次調査竪穴建物1・2 遺構遺物実測図	15	第43図 第2次調査出土遺物実測図7	70
第6図 第1次調査竪穴建物3 遺構遺物実測図	16	第44図 第2次調査出土遺物実測図8	71
第7図 第1次調査竪穴建物4 土坑2 遺構遺物実測図	17	第45図 第2次調査出土遺物実測図9	72
第8図 第1次調査掘立柱建物1・3 遺構遺物実測図	18	第46図 第2次調査出土遺物実測図10	73
第9図 第1次調査掘立柱建物2・土坑1 遺構遺物実測図	21	第47図 第2次調査出土遺物実測図11	74
第10図 第1次調査掘立柱建物4・5 遺構遺物実測図	22	第48図 第2次調査出土遺物実測図12	75
第11図 第1次調査掘立柱建物6・ 土坑3 遺構遺物実測図	25	第49図 第2次調査出土遺物実測図13	76
第12図 第1次調査土坑4・5・6・7・8 遺構遺物実測図	26	第50図 第2次調査出土遺物実測図14	77
第13図 第1次調査土坑101・102・103・104・105・106 遺構遺物実測図	27	第51図 第2次調査出土遺物実測図15	78
第14図 第1次調査土坑107・108・109・110・111 遺構遺物実測図	28	第52図 第2次調査出土遺物実測図16	79
第15図 第1次調査溝2・包含層出土遺物実測図	29	第53図 第2次調査出土遺物実測図17	80
第16図 第1次調査包含層出土遺物実測図	30	第54図 第2次調査出土遺物実測図18	81
第17図 第2次調査区位置図	37	第55図 第2次調査出土遺物実測図19	82
第18図 第2次調査4Y～10Y、29Y～41Y土層図	38	第56図 第2次調査出土遺物実測図20	83
第19図 第2次調査遺構配置図	39・40	第57図 第2次調査出土遺物実測図21	84
第20図 第2次調査竪穴建物1 平面・断面図	41	第58図 第2次調査出土遺物実測図22	85
第21図 第2次調査竪穴建物2・3・4 平面・断面図	42	第59図 第2次調査出土遺物実測図23	86
第22図 第2次調査竪穴建物5 平面・断面図	43	第60図 第2次調査出土遺物実測図24	87
第23図 第2次調査竪穴建物6 平面・断面図	44	第61図 第2次調査出土遺物実測図25	88
第24図 第2次調査竪穴建物7 平面・断面図	45	第62図 第2次調査出土遺物実測図26	89
第25図 第2次調査竪穴建物8・9 平面・断面図	46	第63図 第2次調査出土遺物実測図27	90
第26図 第2次調査竪穴建物10 平面・断面図	47	第64図 第2次調査出土遺物実測図28	91
第27図 第2次調査竪穴建物11 平面・断面図	48	第65図 第2次調査出土遺物実測図29	92
第28図 第2次調査掘立柱建物1・2・3・4・5 平面・断面図	50	第66図 第2次調査出土遺物実測図30	93
第29図 第2次調査掘立柱建物6・7 平面・断面図	51	第67図 第3次調査区位置図	117
第30図 第2次調査掘立柱建物8・9・10 平面・断面図	52	第68図 第3次調査39R～88R土層図	119
第31図 第2次調査掘立柱建物11・12 平面・断面図	53	第69図 第3次調査130R～180R土層図	120
第32図 第2次調査土坑1・2 平面・断面図	54	第70図 第3次調査遺構配置図	121・122
第33図 第2次調査土坑3・4 平面・断面図	55	第71図 第3次調査竪穴建物1 平面・断面図	123
第34図 第2次調査土坑5・6・7 平面・断面図	56	第72図 第3次調査建物1 (土坑1・溝3・5・6) 平面・断面図	124
第35図 第2次調査土坑8・9・10 平面・断面図	57	第73図 第3次調査小穴22 平面・断面図	125
第36図 第2次調査小穴25・52・60・61・88・99・100・ 114・120・121 平面・断面図	58	第74図 第3次調査土坑2・溝8・10・流路1 平面・断面図	126
第37図 第2次調査出土遺物実測図1	64	第75図 第3次調査出土遺物実測図1	130
第38図 第2次調査出土遺物実測図2	65	第76図 第3次調査出土遺物実測図2	131
		第77図 第3次調査出土遺物実測図3	132
		第78図 第3次調査出土遺物実測図4	133
		第79図 第3次調査出土遺物実測図5	134
		第80図 第3次調査出土遺物実測図6	135
		第81図 第3次調査出土遺物実測図7	136
		第82図 第3次調査出土遺物実測図8	137

表目次

第1表	清金アガトウ遺跡の周辺遺跡	9	第29～34表	第3次調査遺物観察表	138～143
第2～5表	第1次調査遺物観察表	33～36	第35表	第3次調査金属製品観察表	143
第6～25表	第2次調査遺物観察表	94～113	第36表	犁先の法量比較	147
第26・27表	第2次調査石製品観察表	114・115	第37表	犁・鋤の出土例	147
第28表	第2次調査金属製品観察表	116			

図版目次

卷等図版1	第1次調査 掘立柱建物4・5、竪穴建物1	図版8	第2次調査4 (竪穴建物11、掘立柱建物4・5)
卷等図版2	第2次調査 土坑10出土遺物	図版9	第2次調査5 (掘立柱建物4・5、土坑3・4ほか)
図版1	土馬脚部、瓦片	図版10	第3次調査1 (調査区全景)
図版2	第1次調査1 (航空写真)	図版11	第3次調査2 (調査区全景)
図版3	第1次調査2 (発掘作業風景、掘立柱建物ほか)	図版12	第3次調査3 (調査区全景)
図版4	第1次調査3 (土坑4他)	図版13	第3次調査4 (壁断面、土坑1)
図版5	第2次調査1 (調査区全景)	図版14	第1次調査出土遺物
図版6	第2次調査2 (調査区全景、西壁断面)	図版15～37	第2次調査出土遺物
図版7	第2次調査3 (竪穴建物1～10)	図版38～45	第3次調査出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

昭和30年代からの高成長時代を背景として、石川県でも昭和39（1964）年に「県勢振興基本方策」を策定し、全国総合開発計画（S37年閣議決定）の、工業の地方分散を促進する拠点開発方式の具体化を目標として、産業の近代化を主軸に産業基盤・生活環境の整備、労働力の確保と能力の開発を重点施策に掲げる県政長期計画をうちだした。地域間の均衡ある発展を基本目標とするなかで、経済の高度成長期を迎えるとともに、交通網の整備が主に政府により大々的に進められ、東海道新幹線の開通（S39年）、名神高速道（S40年）、東名高速道（S44年）の開通もさらなる拍車となり、国土のありようは太平洋ベルト地帯への産業・人口の集中による過疎密の著しい偏在化とともに、集積地域と非地域との各種格差の拡大や公害なども含め、新たな環境問題を顕在化させてきていた。

そうした背景のなかに、石川県は昭和43（1968）年に「石川県総合開発計画」を策定し、農業・工業の近代化と振興を始めとし、交通体系の整備（北陸自動車道の建設・金沢港の整備など）の他、生活環境・民生の整備充実、教育の振興、県内地域格差の是正を重点項目として先の「基本方策」から、より具体性を伴った施策目標を掲げるものとなった。

昭和44（1969）年に政府は、新全国総合開発計画を策定し、拠点開発構想から開発可能性の全国土への拡大と均衡化を基本目標として大規模プロジェクト構想方式へと改定が行われている。石川県内における大規模化した諸開発計画は、昭和40年代に入って具体的な姿をもって動き始めることとなった。昭和42（1967）年には、北陸の大動脈となる新潟県・富山県・石川県・福井県、滋賀県湖北を縦貫して名神高速道に連結する「北陸自動車道」（日本道路公団）建設に係る予定地内の遺跡所在調査が開始され、昭和46（1971）年より同路線内に所在する埋蔵文化財の発掘調査も順次行われていった。また、昭和41（1966）年には県下最大の河川である手取川のダム建設に関する事前の地質地形調査が県土木部によって開始されて、昭和46（1971）年に県企画開発部より県教委事務局埋蔵文化財保護担当主幹課に「手取川ダム」建設計画が示されることとなり、埋蔵文化財の所在確認も含め、保護に関する調整・協議が進められていった。このダム建設（電源開発株式会社）は治水（建設省＝現国土交通省以下同じ）はもとより、きたるべく農・工業振興を視準した発電（北陸電力株式会社）と、民生も含めた水道用水源の確保・広域供給（石川県企業局）のほか、ダム建設地域の振興にも寄与する幹線・支線道路網の機能向上をはかる整備（石川県）も含めた、多目的性をになった「手取川総合開発事業」という県政の発展にも大きく寄与する、「新日本海時代」を目指した構想のなかで実施された。当該報告の石川郡野々市町に所在する清金アガトウ遺跡は、建設省による一般国道157号（鶴来バイパス）改築に係わるもので、この国道157号は、金沢市を基点として野々市町、鶴来町をとおり、ダム建設にかかる手取川沿いに、福井県境の谷峠を越えて岐阜市にいたる総延長206.8（石川県内60.48）kmをいう。県内の路線管理区間区分は、起点から手取川谷口部の鶴来町白山町間までは建設省で、これより以南から福井県境間までは石川県の管理区間となっており、県は昭和49（1974）年に先の、「手取川総合開発」にかかる地域振興事業として整備工事に着手し、建設省は昭和52（1977）年に機能向上の一を図る、鶴来バイパス（鶴来町白山町～松任市乾町で国道8号線までの区間）の改築着工へと連動的に実施されている。

第2節 調査にいたる経緯

鶴来バイパス改築に係わる路線内埋蔵文化財の発掘調査は、昭和54（1979）年度からの順次協議と事前の包蔵地所在確認調査を経て、昭和55・56（1980・1981）年にかけて、縄文時代後～晩期の集落跡と中世の屋敷地ほか一部墓地が含まれた白山町遺跡・白山町中世墳墓遺跡約4,800㎡の調査をかわきりに、昭和56年には9世紀代の掘立柱建物跡等があった安養寺遺跡約2,000㎡（以上は旧石川郡鶴来町：現白山市）、昭和59年～62年（1984～1987）年には、主として7世紀後葉～9世紀代にかけての集落跡であった松任市木津地内から石川郡野々市町末松地内に所在の木津遺跡・末松A遺跡14,500㎡（末松遺跡群と汎称）昭和63年～平成2（1988～1990）年には今回の報告に係わる、野々市町清金地内に所在の8～11世紀代を中心とする集落跡のほか、中世の土坑等も一部に含まれる清金アガトウ遺跡18,900㎡、平成2年には松任市所在の橋爪遺跡約6,200㎡では、縄文・弥生・平安・中世の遺物の一定量の出土はあったが、調査地区が微高地間に挟まれた鞍部であったためか遺構密度が希薄であった。また、平成2・3（1990・1991）年にかけて国道8号線に接する同市の乾遺跡約14,000㎡が、17世紀代の墓地と推測される160基を越す土坑群の発見や、弥生時代の玉つくりに関係したとみられる竪穴建物跡と玉石材・鉄製錐の出土のほか、厚い間層を挟んだ下層部には、縄文時代晩期～弥生時代前記頃の約40基程の集石・配石遺構があり、その幾つかは再葬墓とする見解が示されている。

以上系8遺跡で60,000㎡強の発掘調査が行われたがこの間、県内各地で各種の開発事業が盛んにとり行われてくることとなり、埋蔵文化財保護サイドの調査等対応機能の強化向上を図とする組織の一部改編があり、平成元（1989）年度に県立埋蔵文化財センターの発足（昭和54＝1978年）に合わせて出土遺物整理を掌る、（社）石川県埋蔵文化財整理協会が組織されており、ここに県からの調査員を出向させ、調査機能も付帯させた（社）石川県埋蔵文化財保存協会が新発足し、以降の建設省関連発掘調査を担当（清金アガトウ遺跡第2次調査から受託）するものとなった。

参考文献

『県政早わかり辞典』 1993 石川県県民生活局広報室

『一般国道157号』 国土交通省発行パンフレット

『松任市橋爪遺跡』 2000 （財）石川県埋蔵文化財センター

第2章 位置と地理的歴史的環境

第1節 位置と地理的環境



第1図 清金アガトウ遺跡の位置

清金アガトウ遺跡は石川県石川郡野々市町清金地内に所在する。

野々市町は白山を源流としている手取川の扇状地の扇中央部分の位置し、東側を金沢市、西側を白山市に接している。町の面積は13.56km²人口は42,000人を数え人口密度は3,097人/km²と石川県内一の人口密度を有し、現在も金沢市のベッドタウンとして膨らみ続けている。

本遺跡の所在する清金は野々市町の南西にあり手取川扇状地の扇中央部東側に位置している。標高は35m～30mで南から北に緩やかに低くなる。現在の清金は人口600人を数え旧集落は現在の清金一丁目にあたる、上清金と、清金二丁目にあたる下清金である。さらにその北には清金三丁目に昭和45年から分譲を開始した清金団地がある。区の東側には郷用水の分流大塚川が流れ灌漑用水には恵まれた地域である。現在では南北に国道157号線鶴来バイパスが、東西に県道額谷三浦線が開通し交通の便は格段によくなっている。

第2節 歴史的環境

手取川扇状地の扇中央部・扇端部は県内でも有数の遺跡の存在が確認されている。近年の都市化で開発に伴う発掘調査分布調査が多数実施されている。

縄文時代

この地域で本格的に遺跡が発達するのは縄文時代後期前葉のころであるが、後期前葉期の遺跡は扇端部でしか見つかっておらず標高10m前後の地下水自噴地帯に立地しているのが特徴である。扇中央部で縄文時代の活動が開始されるのは晩期後半下野式期の長竹遺跡、乾遺跡である。乾遺跡では住居跡、埋設土器遺構、配石遺構、集石遺構などがみついている。粟田遺跡、末松遺跡、では打製石斧が縄文土器小片と共に出土している。末松遺跡のような扇中央部の遺跡では打製石斧が必ず出土しているようである。高橋川から流れ出した土砂で形成された地域では高橋セボネ遺跡、扇が丘ハワイゴク遺跡などから晩期の縄文土器片とともに打製石斧が発見されている。これらは素材採取地、打製石斧を利用し根茎類を採取する場所、などと考えられているようである。遺物、遺構の濃度が薄いからといって軽視はできないようである。扇中央部の縄文時代の遺跡は晩期の短期間に営まれたものであり、手取川の氾濫を要因とした不安定な地域であったことが伺える。

扇状地上ではないが富樫丘陵末端の額谷カネヤカブ遺跡では中期前葉、中期後葉から後期前葉の時

期の縄文土器が発見されている。

弥生時代

弥生時代の遺跡分布は扇端部には押野大塚遺跡、御経塚遺跡、横江A遺跡、横江E遺跡など多くの遺跡が分布し、後期になると宮永遺跡、法仏遺跡、相川新遺跡など活動が活発化する。地下水自噴地帯に沿って分布しているようである。富樫丘陵末端部分では額谷ドウシンダ遺跡、額谷遺跡、額谷カネヤカブ遺跡で法仏から月影期の遺物が見ついている。扇中央部の遺跡はこの時期も少ない。上林遺跡、高橋セボネ遺跡では柴山出村式期の遺物が見ついている。また前述した乾遺跡でも柴山出村式期の土器が出土している。弥生時代後期の扇中央部での遺跡は高橋セボネ遺跡で法仏期から月影期までの竪穴住居が12棟発見しており、そのうち4棟が焼失住居である。扇ヶ丘八ワイゴク遺跡、扇ヶ丘ゴショ遺跡、末松廃寺跡でも竪穴住居に伴い同時期の土器が発見されている。ほかにも大額キョウデン遺跡、扇台遺跡、上二口遺跡などで弥生後期の遺物出土している。手取川扇状地扇中央部の弥生時代の遺跡は扇中央部のやや東よりの地域に集中しているようで当遺跡周辺では上二口遺跡で少量の土器が発見されているだけである。

古墳時代

古墳時代も扇端部では活動が活発なようである。御経塚シンデン遺跡では古墳時代の集落跡と古墳群が発見されている。扇端部では弥生時代終末から続く遺跡が多く見られるが扇中央部では古墳時代になっても僅かな遺跡しか確認されていない。長竹遺跡では弥生時代終末月影式から古墳時代前期に続く集落が確認されている。上二口遺跡では弥生時代終末から古墳時代の土器が確認できている。上新庄ニシウラ遺跡では弥生時代末から古墳時代初頭に属する竪穴住居跡、掘立柱建物跡が発見されている。古墳時代後期になると扇中央部でも古墳が築かれるようになる。田地古墳は横穴石室、須恵器が発見されており6世紀末から7世紀初頭の築造と考えられている。上林古墳は横穴式石室を持つ古墳である。削平のため墳丘の痕跡は見られず埋葬の形態はわからないが近くにある田地古墳との類似性より7世紀前半ころの築造と考えられる。末松古墳もまた大きく削平を受けているために埋葬形態、墳丘形状は不明ながら田地古墳、上林古墳との立地での類似性より7世紀前半ころの築造だと考えられる。

古墳時代末から奈良・平安時代

律令期に入ると全国に郡郷制という行政区分が敷かれることになる。手取川扇状地とその近隣地域には石川郡、加賀郡が置かれている。郷は、石川郡には中村・富樫・椋部・三馬・拝師・井手・笠間・味知、加賀郡には大桑・大野・芹田・井家・英多・玉戈・田上が置かれている。そのうち手取川扇状地扇中央部に位置する郷は中村・富樫・三馬・拝師・井手・味知である。しかし郷は50戸をひとつの里とし2・3の里を組み合わせ便宜的に構成された集団で必ずしも地域に根ざしたものではなかったと考えられる。よってこの時期の集落の郷名は特定しにくい。

古墳時代末から律令期にかけては扇端部の主要な遺跡は上荒谷遺跡、上安原遺跡、横江荘遺跡、御経塚B遺跡である。前時期までは扇中央部に比べ、大きな集落はあまり見られなかったが、古墳時代末から律令期の時期には扇端部に遜色のない遺跡が扇中央部でも見られるようになる。

扇中央部では当遺跡から南西に750mほどいったところには末松廃寺がある。末松廃寺は江戸時代からその存在は知られており、昭和に入り発掘調査が実施された。その結果末松廃寺の創建は7世紀後半、8世紀第三四半期を迎えるころに一度終焉を向かえる法起寺式の配置を持つ伽藍が作られ、その後約一世紀の空白期間を得て、9世紀第三四半期ごろから11世紀まで再建末松廃寺があったと考えられる。末松地区とその周辺には末松廃寺創建直前の7世紀後半ころから遺跡が集中して見られるよう

になる。末松ダイカン遺跡、末松A遺跡、清金アガトウ遺跡、末松廃寺跡では7世紀後半から9世紀末までの竪穴住居や、掘立柱建物跡で構成される集落が発見されている。これらの遺跡は末松廃寺と深くかかわりのある集落と考えられる。

このほか扇央部では下新庄アラチ遺跡、上林新庄遺跡、上新庄ニシウラ遺跡、上林遺跡、粟田遺跡など野々市町新庄から粟田にかけて細長い島状の微高地に奈良時代を中心とする奈良時代から平安時代の集落が形成されていた。特に下新庄アラチ遺跡では大型の掘立柱建物を核とする大きな集落が形成されていたと考えられる。また上林新庄遺跡は上林古墳が築造されたと考えられる7世紀前半ころから8世紀にかけて営まれた集落である。

末松地域、粟田から新庄地域のいずれの地域も9世紀後半集落が途絶えるかまたは活動が弱まっているようで末松廃寺の廃絶との関連性が伺える。扇央部のこのほかの遺跡は、三浦幸明遺跡では7世紀末から8世紀前葉の集落跡が、長竹遺跡からは、奈良時代から平安時代の集落跡、橋爪B遺跡では7世紀前半から9世紀初頭の竪穴建物を中心とした集落が、橋爪ガンノアナ遺跡では9世紀中葉から11世紀、上二口遺跡では7世紀終末ころから8世紀後葉に一度途絶えて、安養寺遺跡では9世紀後半から11世紀前葉の集落が福正寺ゴコメマチ遺跡では7世紀前半の集落が見ついている。扇が丘ゴシヨ遺跡では7世紀前半の一時期と8世紀後半から10世紀の集落が見ついている。扇台遺跡では10世紀前半ころの集落が見ついている。大額キョウデン遺跡では平安時代前期の集落が見ついている。

扇央部の多くの遺跡で少々の時期の前後はあるようだが9世紀ころに一度衰退に向かっている様子が伺える。

古代になると扇央部での遺跡数は増えてはいるがすべて扇央稜線から東側の地域で、扇央稜線から南西側では弥生時代、古墳時代から引き続き遺跡を見ることができないが、古代においてもこの地域は手取川の氾濫源で人が住めるような状態ではなかったということを示していると考えられる。

中世

中世に手取川扇状地周辺で有力であったのは林氏、富樫氏である。林氏は手取川扇状地での荒廃した耕地の再開で勢力をつけており同じような在地領主の居館の伝承地はほとんどが扇端部で扇央部ではあまり知られていない。富樫館跡は富樫氏の居館跡として古来知れてきている。室町期の数少ない守護城下町の発掘調査の事例である。扇ヶ丘ゴシヨ遺跡、扇ヶ丘ハワイゴク遺跡は鎌倉時代から室町時代までの、散居村である。扇ヶ丘ハワイゴク遺跡では鎌倉時代前期の大型建物をもち在地領主の居館であった可能性も考えられている。

このほか扇央部では中世の遺跡は劔崎遺跡、倉光ゴキヤマ遺跡、三浦高麗野遺跡、長竹遺跡、乾遺跡などである。劔崎遺跡では五輪塔、寶篋印塔、中世の周溝を持つ墳墓が発見されており。林氏と関係のある在地領主の倉光氏の墓地と考えられている。

近世

この地域の近世の遺跡は乾遺跡がある、乾遺跡では17世紀前後の墓域を検出している。遺物は多岐にわたる。近世は文献資料が豊富で考古学的なことに関心があまりもたれていないが今後の調査に期待したい。

参考引用文献

石川県教育委員会 1992 『石川県遺跡地図』

手取川七ヶ用水誌編纂委員会 1982 『手取川七ヶ用水誌』上刊

野々市町史編纂専門委員会 2003 『野々市町史』集落編

野々市町史編纂専門委員会 2002 『野々市町史』資料編1 考古 古代・中世

なおこのほか多くの発掘調査報告書を参考にしたが紙幅の関係でその書名を記すことができなかった。



第2図 周辺遺跡地図 国土地理院発行2万5千分の位置地形図(金沢、松任、粟生、鶴来合成)

第1表 清金アガトウ遺跡の周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代
1	寺地シンド口遺跡	金沢市寺地	古墳～平安
2	寺地向田遺跡	金沢市寺地	
3	円光寺B遺跡	金沢市円光寺	縄文
4	円光寺向田遺跡	金沢市円光寺	奈良・平安
5	窪遺跡	金沢市窪	古墳・中世
6	高尾新マトバ遺跡	金沢市高尾	奈良・平安
7	高尾イシナ塚遺跡	金沢市高尾	古墳
8	高尾新町遺跡	金沢市高尾	奈良・平安
9	高尾公園遺跡	金沢市高尾	平安
10	高尾天神堂遺跡	金沢市高尾	平安
11	高尾C遺跡	金沢市高尾	弥生・古墳
12	高尾B遺跡	金沢市高尾	奈良
13	高尾A遺跡	金沢市高尾	奈良・平安
14	狐青横穴群	金沢市高尾	古墳
15	額谷城跡	金沢市額谷	平安
16	額谷ドウシダ遺跡	金沢市額谷	縄文～平安
17	額谷遺跡	金沢市額谷	古墳
18	三十万遺跡	金沢市四十万	奈良～平安
19	四十万遺跡	金沢市四十万	縄文
20	四十万中世墓群	金沢市四十万町	中世
21	四十万B遺跡	金沢市四十万町	平安・中世
22	四十万ヒッカシ遺跡	白山市曾谷・金沢市四十万町	奈良・平安
23	四十万南遺跡	白山市曾谷・金沢市四十万町	奈良・平安
24	久安トノヤシキ遺跡	金沢市久安1丁目	古墳
25	高橋セボネ遺跡	野々市町高橋	弥生後期・奈良後期
26	高橋ウガバタ遺跡	野々市町高橋	弥生末
27	扇が丘ゴシヨ遺跡	野々市町扇が丘	弥生～中世
28	扇が丘ハワイゴク遺跡	野々市町扇が丘・金沢市馬替1丁目	縄文～中世
29	扇台遺跡	金沢市馬替1丁目	弥生・平安
30	馬替遺跡	金沢市馬替2丁目	縄文
31	富樫館跡	野々市町住吉	中世
32	大額キョウデン遺跡	金沢市大額3丁目	不詳
33	三林館跡	野々市町上林	安土桃山
34	粟田遺跡	野々市町粟田・中林	縄文・奈良・平安
35	下新庄タナカダ遺跡	野々市町新庄	奈良・平安
36	上新城ニシウラ遺跡	野々市町新庄	古墳・奈良
37	下新庄アラチ遺跡	野々市町上林・新庄	奈良
38	上林新庄遺跡	野々市町上林・新庄	縄文・古墳～平安
39	上林テラダ遺跡	野々市町上林	奈良
40	上林遺跡 旧安養寺遺跡上林地区	野々市町上林	弥生・平安
41	部入道A遺跡	白山市部入道	奈良・平安
42	部入道B遺跡	白山市部入道	奈良・平安
43	部入道C遺跡	白山市部入道・熱野	奈良・平安
44	熱野遺跡	白山市熱野	平安・中世
45	新荒屋遺跡	白山市新荒屋	奈良・平安
46	安養寺遺跡	白山市柴木	平安前期～中期
47	柴木東遺跡	白山市柴木	奈良・平安
48	柴木D遺跡	白山市柴木	平安
49	安養寺B遺跡	白山市安養寺	平安
50	安養寺C遺跡	白山市安養寺	平安
51	柴木南遺跡	白山市知気寺・柴木・部入道	平安前期
52	道法寺遺跡	白山市道法寺	平安
53	道法寺C遺跡	白山市道法寺	平安
54	道法寺B遺跡	白山市道法寺	奈良
55	坂尻遺跡	白山市坂尻	奈良・平安
56	道法寺南遺跡	白山市道法寺	平安
57	荒屋B遺跡	白山市荒屋	弥生
58	荒屋集落遺跡	白山市荒屋	平安
59	荒屋遺跡	白山市荒屋	縄文～古墳
60	知気寺B遺跡	白山市知気寺	平安
61	知気寺遺跡	白山市知気寺	平安
62	井口B遺跡	白山市井口	不詳
63	五歩市遺跡	白山市五歩市町	不詳
64	田中ノダ遺跡	白山市田中町	弥生・古墳
65	高田遺跡	白山市専福寺町	縄文・平安

番号	遺跡名	所在地	時代
66	専福寺遺跡	白山市専福寺町	中世
67	乾町遺跡	白山市乾町	縄文～近世
68	長竹遺跡	白山市長竹町	縄文～古墳・中世
69	橋爪遺跡	白山市橋爪町	縄文・弥生・中近世
70	橋爪松の木遺跡	白山市橋爪町	中世
71	橋爪ガンノアナ遺跡	白山市橋爪町	奈良・平安
72	幸明経塚・西方寺跡	白山市幸明町	安土・桃山
73	幸明遺跡	白山市光明町	奈良・平安
74	倉光館跡	白山市倉光町	鎌倉
75	若林長門館跡	白山市倉光町	室町・安土桃山
76	三浦遺跡	白山市三浦町	古墳・奈良～中世
77	三浦常在光寺跡	白山市三浦町	鎌倉
78	三浦高麗野遺跡	白山市三浦町	鎌倉
79	上二口遺跡	白山市上二口町	古墳・奈良・平安
80	清金アガトウ遺跡	野々市町上清金	平安～中世
81	末松信濃館跡	野々市町末松	中世
82	末松A遺跡	野々市町末松	縄文・平安
83	末松B遺跡	野々市町末松	弥生
84	末松福正寺遺跡	野々市町末松・松任市福正寺町	古墳・平安
85	末松ダイカン遺跡	野々市町末松	奈良～中世
86	末松麩寺	野々市町末松	奈良・平安
87	古元堂館跡	野々市町末松	不詳
88	末松C遺跡	野々市町末松	奈良・平安
89	末松古墳	野々市町末松	古墳
90	大館館跡	野々市町末松	平安～室町
91	法福寺跡	野々市町末松	不詳
92	末松砦跡	野々市町末松松任市木津町	不詳
93	木津遺跡	白山市木津町	弥生～中世
94	法蓮寺跡	白山市木津町	不詳
95	菅波遺跡	白山市菅波町	中世
96	来同本覚寺跡	白山市中ノ郷	中世
97	園の道観館跡 (藤木氏館跡)	白山市藤木町	不詳
99	安古城跡	白山市安吉町	不詳
100	下福増遺跡	白山市中新保町・宮永新町	縄文・弥生・奈良・平安
101	平木A遺跡	白山市平木町	弥生
102	平木B遺跡	白山市平木町・北安田町	奈良・平安
103	平木C遺跡	白山市平木町・蕪城	不詳
104	平木D遺跡	白山市平木町・徳光町	弥生後期
105	徳光ジョウガチ遺跡	白山市徳光町	弥生
106	北安田北遺跡	白山市北安田町・千代野東・徳光町	縄文・平安
107	出城城跡	白山市成町	室町
108	安田三郎惟光館跡	白山市成町	不詳
109	成町遺跡	白山市成町	中世
110	松任城跡	白山市古城町	室町・安土桃山
111	中村ゴウデン遺跡	白山市村井町	弥生・平安
112	村井キヒタ遺跡	白山市村井町	平安・中世
113	中村遺跡	白山市村井町	平安
114	村井備中守館跡	白山市村井町中村	室町
115	村井北遺跡	白山市村井町	弥生・奈良～中世
116	中村井ノ手遺跡	白山市村井町	奈良・平安
117	村井遺跡	白山市村井町徳行・北馬渡	中世
118	延寿寺遺跡	白山市村井町北馬渡	不詳
119	剣崎遺跡	白山市剣崎町・村井町	平安・中世
120	剣崎館跡	白山市剣崎町	室町
121	道村遺跡	白山市宮丸町	弥生～平安
122	高島門左工門考久館跡	白山市宮丸町	室町
123	宮丸遺跡	白山市宮丸町	平安
124	法仏遺跡	白山市法仏町・千代野西・千代野東	弥生～平安
125	法仏南遺跡	白山市法仏町	弥生
126	米永シキシロ遺跡	白山市米永町	平安
127	北出遺跡	白山市米永町	平安・中世・近世
128	米永古屋敷遺跡	白山市米永町	古墳～中世
129	宮保光明寺遺跡	白山市宮保町	弥生・安土桃山
130	宮保B遺跡	白山市宮保町	不詳
131	田地古墳	白山市田地町	古墳

第3章 第1次調査の成果

第1節 調査の方法

第一次調査区は、石川郡野々市町末松（3丁目）地内南端の一角から、同清金（1丁目）地内に所在し、上清金集落に近接した西側の水田部域の標高34m代に、南北方の線形で敷設される約3,000㎡が対象地であり、同バイパス改築事業で、前年度に発掘調査された末松A遺跡とは連続的な位置関係にあるが、従前に行われている試掘分布調査によって、耕作土直下で円礫が主体の地盤となる微高地形を挟んだ、空閑的な間断状況がみられることから、別途遺跡として対応するものとなっていた区画範囲である。

第1次調査の地区割は、末松A遺跡調査区南端より延長線上の北方へ約60m離れた、改築用地幅員の中央に設けられていたSTA19杭を区割り用基準点に用い、北方側の同長軸延長線上にあったSTA18+40を視準して結んだ縦軸線に、これに平行した左右に10m間隔列で刻んで長軸方を4列区を設け、長軸基線より東側では東より西へアルファベットA・B、同じく西側では東より西へC・Dとし、長軸列に直行する短軸幅員の東西側にも10m間隔区画区分する、1区～11区としたA1区～D11区とする区画を設定して発掘を行っていった。

ただ、第1区は末松A遺跡調査区の南端から続く微高地形の北側端部にあたっていて、移植ゴテで（等でしか発掘できない）部分的発掘を試みたが耕作土5～10cm程度下は一部表面に点々と路頭状態にある円礫層となっており、これに接して土壌が幾分堆積した第2区で耕作土下より近世ないし中世頃の農業用水路と推測される遺構の存在が確認できたことにもより、第1区に対するこれ以上の発掘は時間と経費の無駄と判断し、遺構が多出している2区以北に発掘の力点を移すことにした。

長軸線上の遺構検出面の標高は、微高地形側の南端で34.72m、そこより北側へ20m毎で34.50m・34.45m・34.20m・34.05m・北端で33.90mであり、扇状地地形に則った南方から北方への緩やか傾斜にあわせ、微かに南西から北東方への傾きがある。

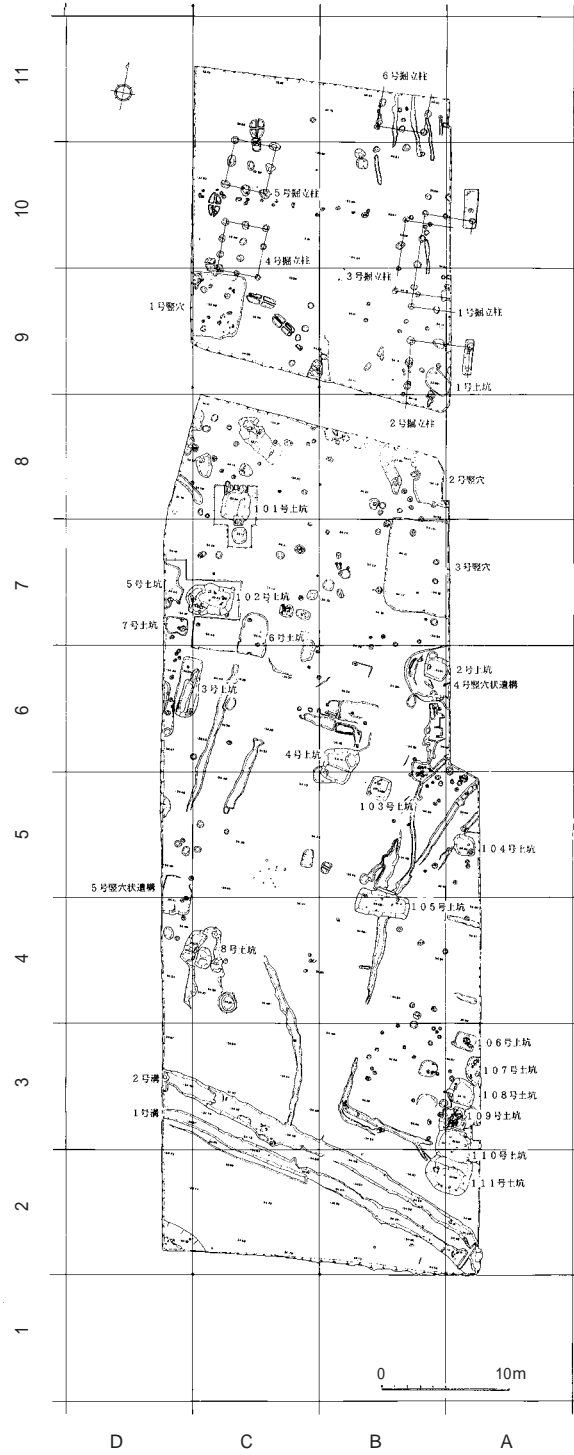
検出した遺構所在のありようの、微視的には、高所側にあたる南半部には中世から以降のものと思われる遺構がほぼ主体的であり、北半のやや低位側には古代の遺構が占めているという状況があり、当時の地勢や微地形的な側面からくる時代毎の土地利活用面での必然や制約性も幾分あったためとも思われるものであった。

第2節 基本層序

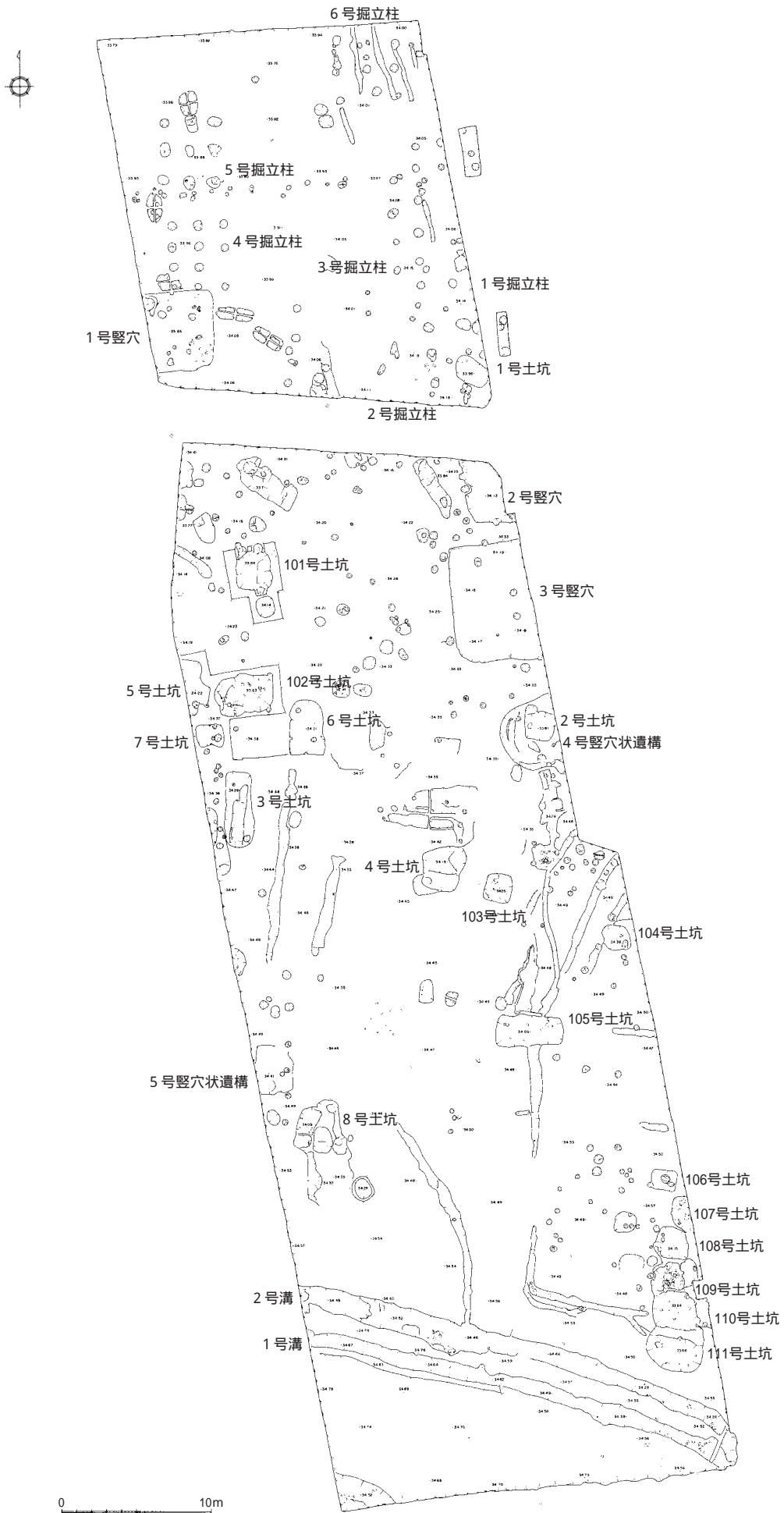
これらの遺構は結果的に大別での二時期からなっていると考えられるが、微高地端部にあたる南端側では極めて浅く、第1層の耕作土（床土を含む）の約15cm前後下で円礫が主体となり赤黄褐色を挟む層をベースとして、灰色系の覆土をもつ溝状遺構が見え始め、これをよりどころとして掘削を押し進め、北東方にしたがって徐々に灰色系の遺構様のものが追認できた。

若干の傾斜が伴う北側にしたがっては、徐々に小円礫に淡黄褐色が薄く乗る形質から淡黄色土ベースとした層面へと変化があった。

第2層の淡茶褐色砂質系土は約0～20cmと、途中部分から北側にかけて層として認識できるものと



第3图 第1次調査 調査区區割図 (S=1/600)



第4图 第1次調査 空中写真測量図 (S=1/400)

なり、第3層は暗黄褐色砂質土約0～5cmで、小円礫のほか土器等を若干包み、遺物包含層または地山前位層に相当する。

また、灰色系の覆土をもつ遺構様痕が途絶えるようになった北側調査区では、地山土形質の異なりと共に、茶色系染みの遺構様のものが前者に替わって認められるようになり、この地区の下部層（地山）のありようも、礫を含まない黄色系砂質土の厚い堆積層が基盤となっていた。

したがって、遺構の検出にあたっては、ほぼ一面的・一連的に把握した。

発見できた主たる遺構では、微高地部際の南端に東西方に横断した、農業用水路と思われる2条の溝跡や、これに近接的に東壁際部で溝に直行方向に5基の連結状に穿たれていた深みのある大型土坑群のほか、調査区域内農道（農作業機械通行路で未掘に）より南に点在的にある方形ないし長方形の大型土坑などの、主として灰色系の内覆土をもつ群で、概して遺物の出土にも乏しいものがあり、個別的に時代的な特定は難しいが表層面から比較的浅いところに在ったことも含め、中世から以降に穿たれた遺構であろうと推測している。

一方、主として茶色系内覆土をもつ遺構では、図面整理過程で気づき得たものも含んで推定復元した、古代の竪穴建物跡3棟（他に可能性のあるもの有り）と、掘立柱建物跡6棟（倉庫様の小型総柱建物3と、一部重複の住居様建物3）棟や、大型土坑2基他・畝状溝数条などがある。

なお、今回の発掘対象区域外となっていた、調査区北端～路線延長部に数カ所の試掘坑を入れて、遺構の有無や遺物包含層の延び等の状況把握作業を行ってみたが、STA18+00付近から調査区内でみられた黄色砂質系の締まった地山の連続性が追認できない様相となり、替わって、湿潤性も伴うためか軟弱感のある淡赤茶褐色の弱粘質土が厚く存在し、建物等を配する居住域とは考えにくく、遺物包含層的土層の存在も認められない状況があり、対象区域外として調整されてきた経緯が理解できるものであった。

単なる可能性としては、古代の水田部等の耕地を連想させるが、その根拠性にも乏しくて、当初からの対象地区間の発掘で終了した。

第3節 調査成果

検出遺構

竪穴建物

竪穴建物1（第5図）

C9区で検出した。検出面から南北方で5m、現況で確認できた東西方では4.2mであるが6m前後となる、平面形は長方形にちかいものが推測される。竪穴部の深さは約0.2mと浅く、幾分削平を被っているのかもしれない。主軸は南北方向（座標南北＝以下同じ）から、西に約3°振っている。床面はほぼ平坦で、支柱穴のピットは竪穴部北側に2穴確認できるが、竪穴部壁方位と若干のずれがある。

その他、竪穴部北東隅側に径約0.4m・深さ約0.3mの貯蔵穴的な小坑があり、未調査部分となった隣接した北西隅にカマドが付帯されているのかも知れない。

出土遺物は1の須恵器杯と2の同じく須恵器小甕の2点があった。概ね - 2ないし - 3期内に位置づけられる。

竪穴建物2 (第5図)

B 8区で、極部分を検出した。竪穴部の深さは約0.2mで、埋土は地山土が微かに濁った程度の淡黄茶色で、竪穴部の壁面の立ち上がりも判りづらく、細かく畦を残しつつ断面観察によって辛うじて検出し得た。部分的なため明確ではないが、主軸は南北方から西へ約10°振っている。床面は平坦で、壁際に柱穴状ピットがみられることから壁立ちの建物であるかも知れない。出土遺物は3の須恵器高台付杯一点のみだが、 - 3期頃と考えられる。

竪穴建物3 (第6図)

B 7区で検出した。南北方で幅約7.4m、深さ0.1~0.15mと非常に浅く、かなり削平を受けているものと思われる。軸方向は南北方より西へ約5°振っており、床面は平坦で中央部あたりに径0.4m弱のピット二穴があり、その南側で床面が微かに焼けた痕跡(点線で示した部分。ただし輪郭は明瞭ではなく、おおよその範囲である。)が認められ、また、北西隅方向側を主として細砂系地山面の上に、黄色粘性土が粒状に薄く広がっていた部分も観察され、貼床をおこなっていた建物と考えられる。なお、当調査区中最もおおきな竪穴となるが内部にはしっかりとて上屋全体を支える程の柱穴は無く、側柱が主となった壁立ちの建物ではなかろうか。

内部からの遺物は4~14が出土し、小片であるものが多い。4・5の須恵器杯蓋2片と6の無台杯・7~9の台付杯・壺の口縁部と思われる10と、内外面にミガキ調整後に赤彩を施した土師器椀11・ミニチュア品であろうか壺形の12・口縁部を大きくて「の」字状に外反(湾)させた甕形土器13の他に、14の椀形鍛冶滓が1点ある。炉あるいは炉壁と思われるものの出土はないが、竪穴床面の焼けた痕跡部分との、何がしかの関係があるかもしれない。これらは概ね - 3期頃か、降っても 期内に納まるものと思われる。

竪穴状遺構4・土坑2 (第7図)

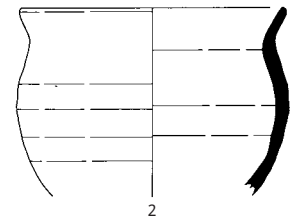
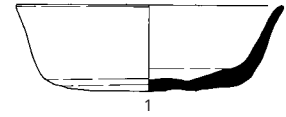
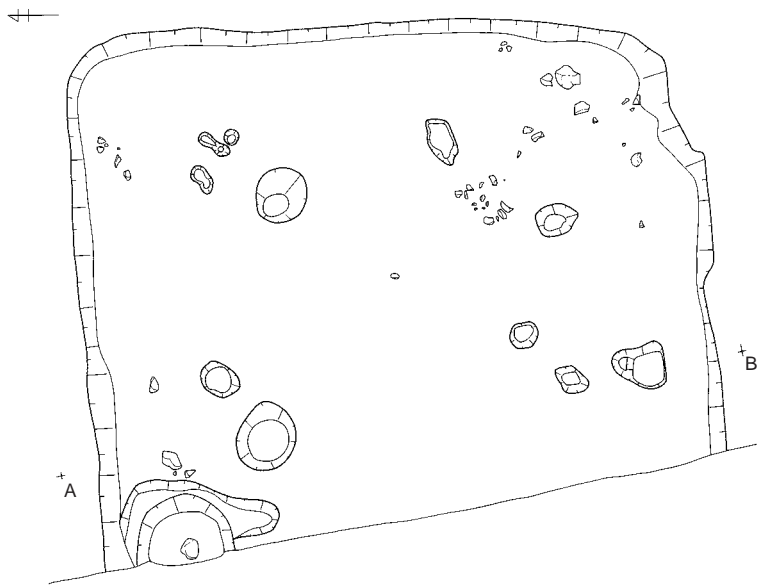
B 6区で検出した。竪穴状遺構は東西方向に長軸をもつ楕円形状の平面形態になるものと思われ、南北方幅約4m・発掘区域内で把握できる東西方では約3.6mである。弧状にある西側壁(縁)より内側においても弧とした周溝的な3条程の浅い痕跡がある。柱穴的な痕跡は溝状混に接した3点があるが、いずれも痕跡程度の極浅いもので定かではない。検出面から床面までの深さは約0.1m程であり、かなり削平されているように思われる。短軸線方向は、南北方向より西へ約25°振っている。時期の特定ができない遺構である。

第2号土坑は、この竪穴状遺構の内部にあって検出時には竪穴に伴うものかどうか判然としなかったが、土層観察用畦による確認により、明らかに竪穴埋土を切って穿たれた後出の土坑であることが判った。平面形は方形にちかい約1.7m×1.8m・深さ約0.6mで、軸方向は南北方向より東へ約5°振っている。形状的には後述の土坑103などに類似する中世土坑の可能性も全く否定できないが、中世坑は概して礫石を多く内包して青色系埋土が主体的となっており、この土坑の埋土は黄色~茶色系であることと、完好遺物ではないが古代の須恵器杯17・18の2点、土師器甕19の1点の出土があり、混入とも考えにくい。これらの遺物は概ね - 3~ 期頃に比定でき、この頃の土坑としておきたい。

なお、上記竪穴状遺構が土坑2のありかたに相応して遡るとすれば、数点のみであるが遺物包含層より出土した第15図~16図弥生時代頃と思われる大型の打製石斧46や古墳時代前期後半頃の高杯脚部48などがあり、いずれかの可能性はある。

竪穴状遺構5 (第7図)

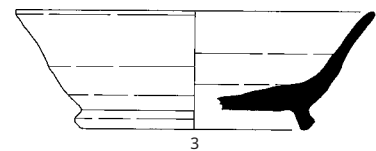
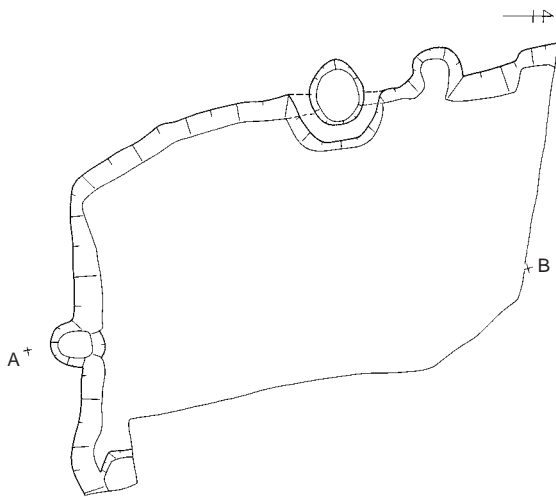
D 4~5区にまたがって検出した。規模・構造内容等から住居を想定することはできないが、臨時的な休憩小屋的なものを推測すれば遺構として成立するかもしれない。また非常に浅く、痕跡を拾っ



豎穴建物 1 出土遺物 S = 1/3



豎穴建物 1 S = 1/60



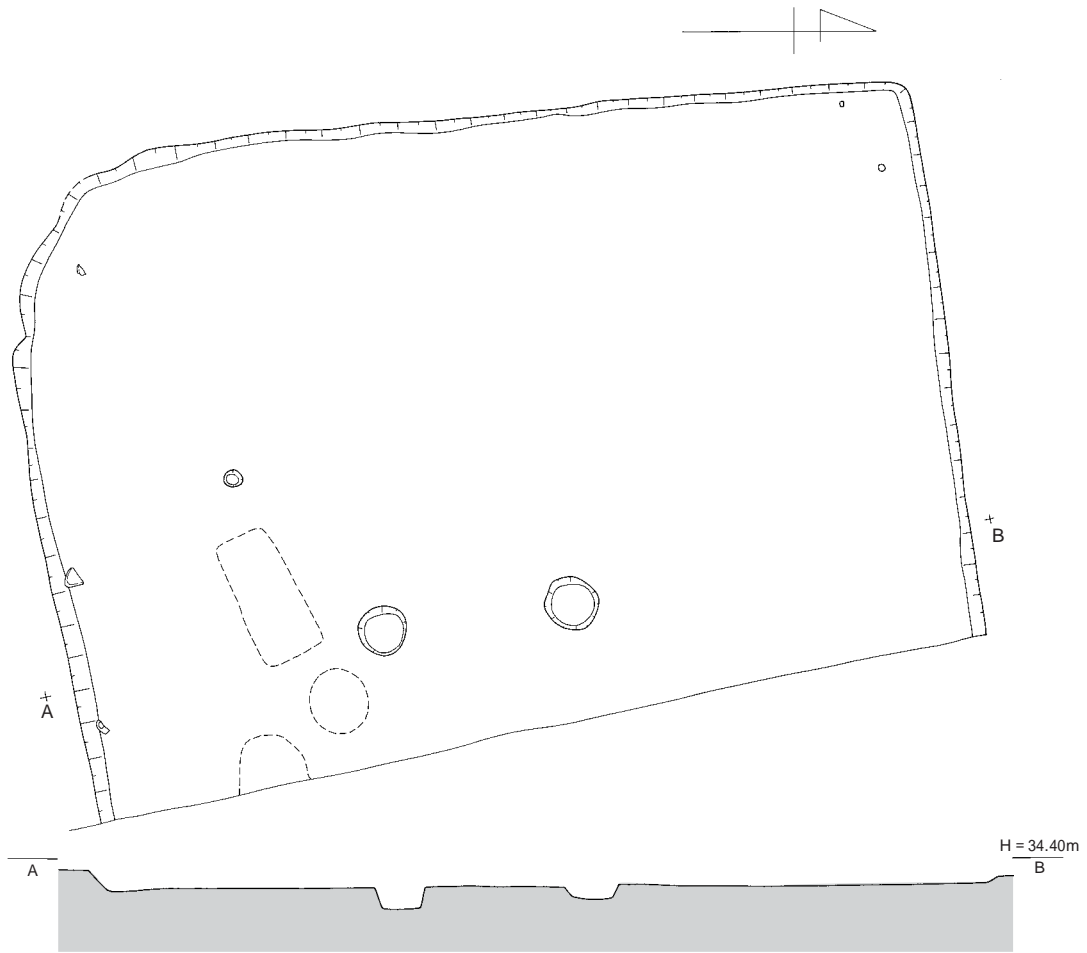
豎穴建物 2 出土遺物 S = 1/3



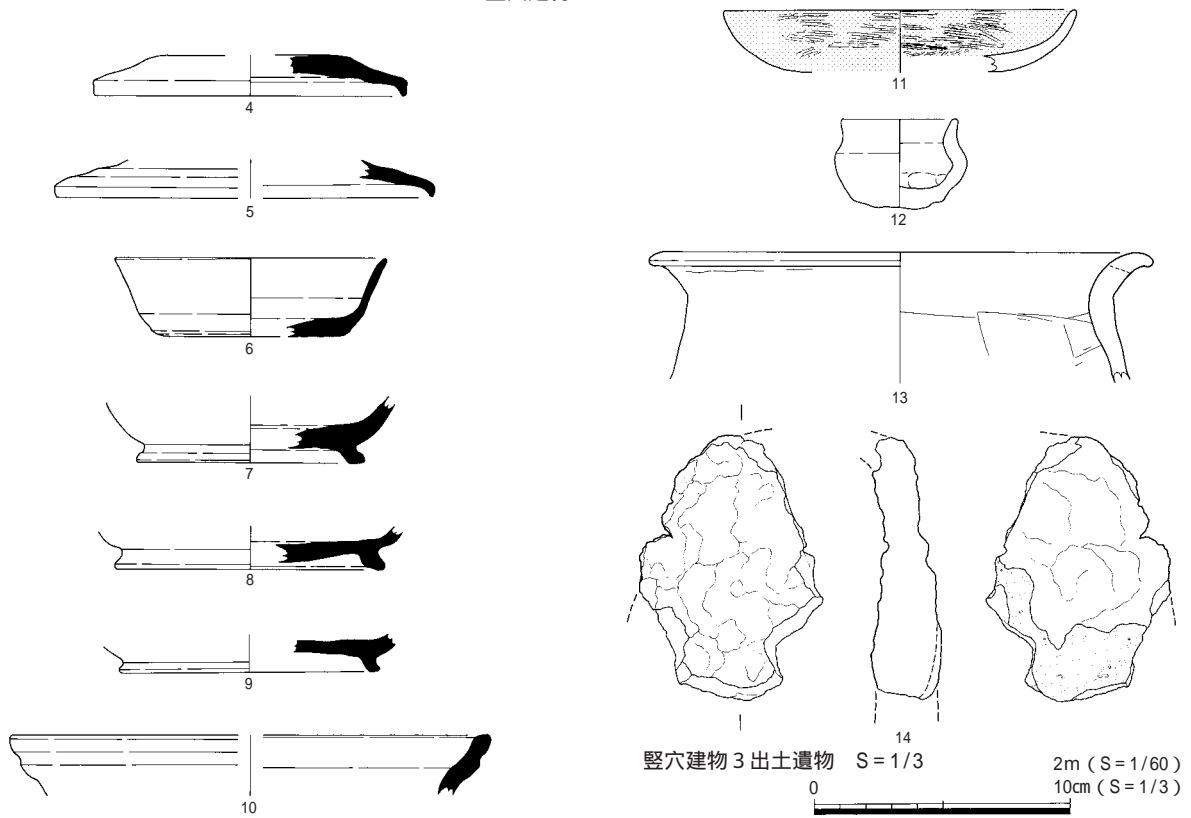
豎穴建物 2 S = 1/60



第 5 図 第 1 次調査 豎穴建物 1・2 遺構遺物実測図



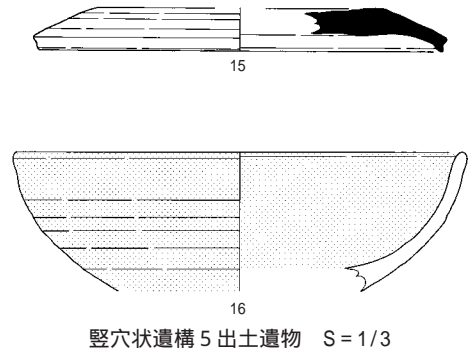
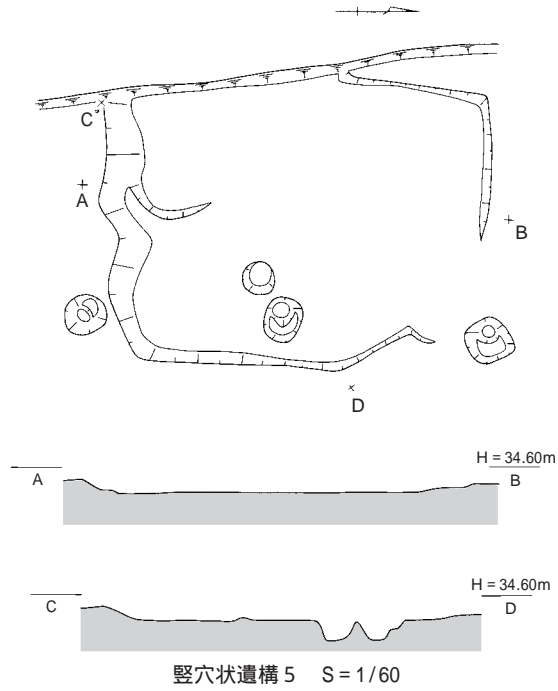
竪穴建物 3 S = 1/60



竪穴建物 3 出土遺物 S = 1/3

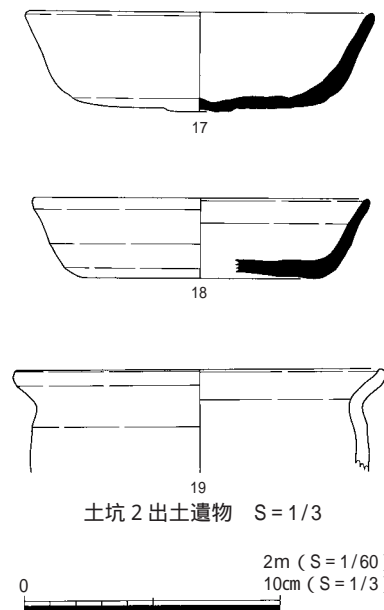
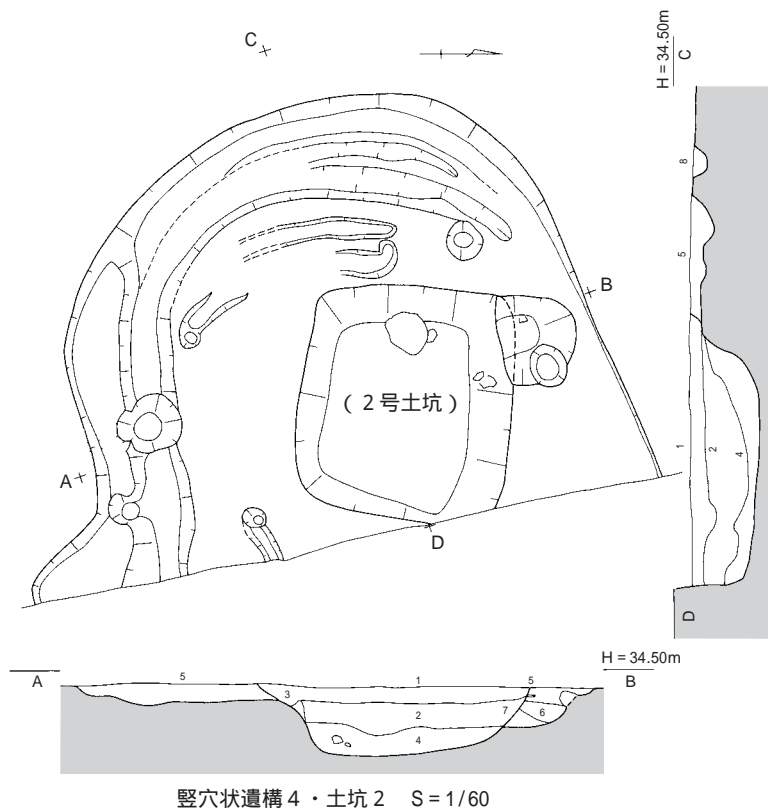
2m (S = 1/60)
10cm (S = 1/3)

第 6 図 第 1 次調査 竪穴建物 3 遺構遺物実測図

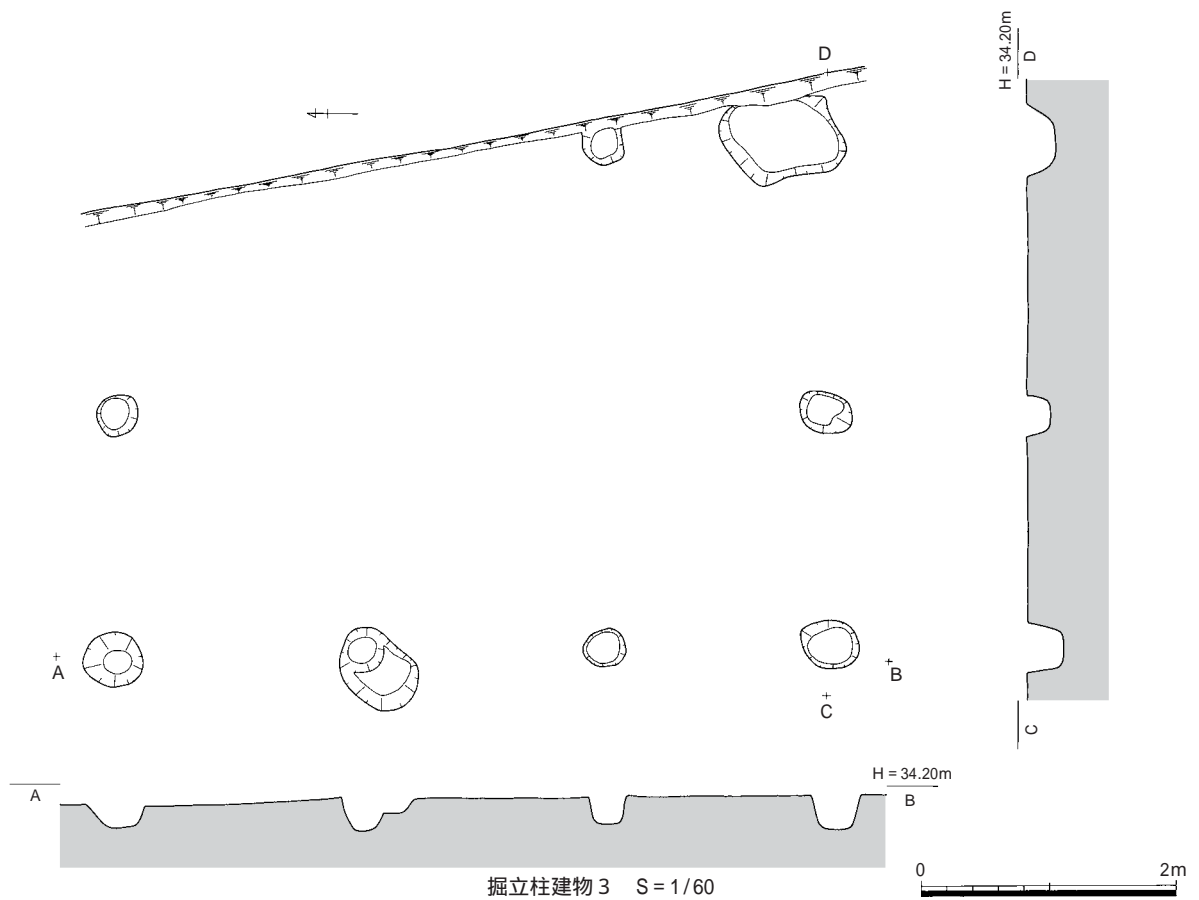
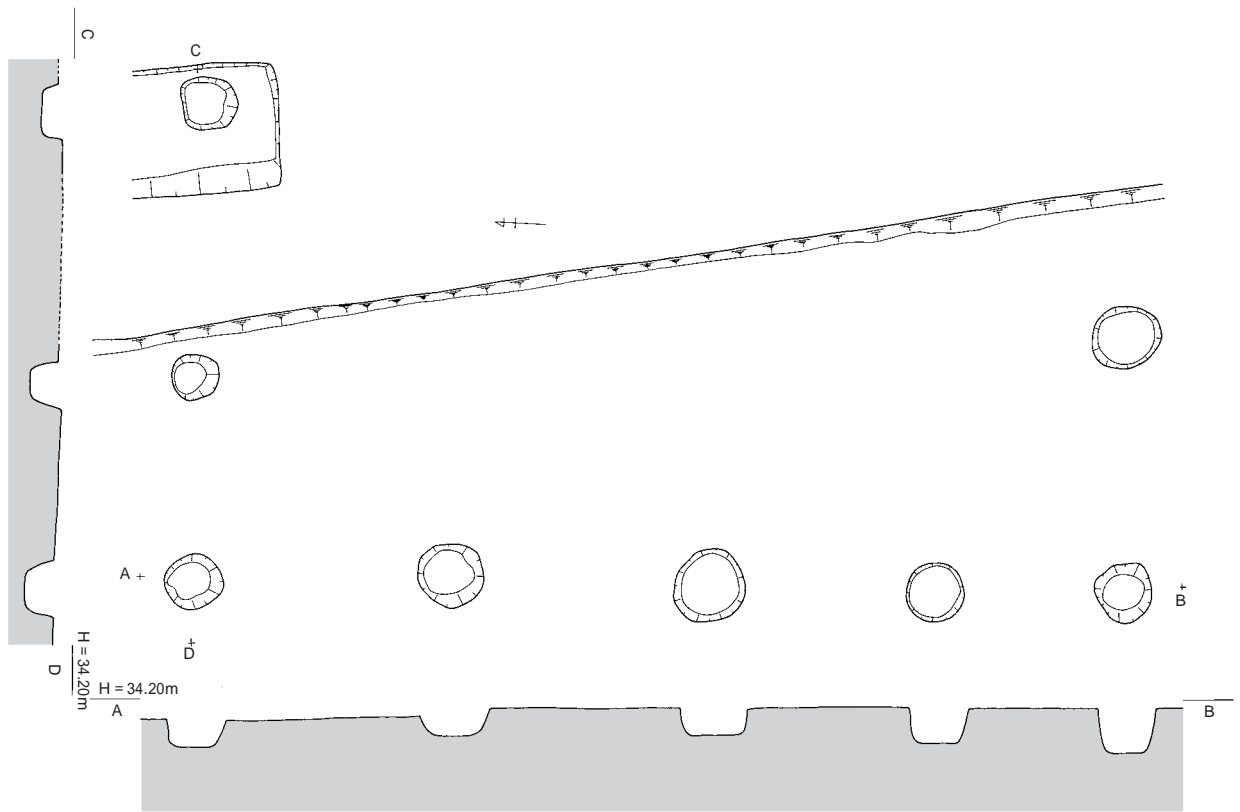


第 4 号豎穴状遺構・第 2 号土坑土層序

- 1 茶褐色土
- 2 茶褐色土に黄茶褐色粒混土
- 3 黄褐色土
- 4 暗茶褐色粘質土
- 5 茶褐色砂質土
- 6 淡茶褐色砂質土
- 7 褐色砂質土
- 8 茶褐色土



第 7 図 第 1 次調査 豎穴建物 4 土坑 2 遺構遺物実測図



第8図 第1次調査 掘立柱建物1・3遺構遺物実測図

たという程度であるが、南北方約3.2m×東西方約2.2m・深さ約0.1mで、付随したものが確認はないが東側の竪穴内部に柱穴様の一穴とその南北にそれぞれ1.6m間隔となる上面径で0.4m弱である直列の3穴があり、ほぼ座標南北方向を向いている。この竪穴内埋土から15の、口縁の上面端を突出気味仕上げた須恵器蓋と内外面を赤彩した深みのある土師器椀ないし鉢状の16が出土した。 - 2 ~ 3 期頃のものと考えられる。

掘立柱建物他

掘立柱建物 1 (第 8 図)

B 9 ~ 10区にかけて検出した。また、北側柱列の西から第 3 番目は A 10区 (現況で生かされていた水路) で、止水時に合わせた発掘坑で検出した。南北棟の建物で、2 間× 4 間の側柱建物と推定される。梁行は約3.8m、桁行は約6.2mで平面積は約23㎡となる。主軸は西に約 3 振っている。

掘立柱建物 2 ・土坑 1 (第 9 図)

B 8 ~ 9 区にかけて検出した。また、掘立柱建物 1 と同様に北側柱列の西から第 3 番目は A 9 区で検出し、現況の営農による農道の未確認部分となった南側に延びているはこと確認され、掘立柱建物 1 と同じく南北棟であることから、2 間× 4 間の側柱建物が推測される。梁行は約4.7m、桁行は確認できた 2 間分が約3.5mであり、4 間だとしたら 7 m となり、梁行はもとより桁行も掘立柱建物 1 より一回り大きくなる建物と推測される。軸方向は西に約 5 振っている。

土坑 1 は、この掘立柱建物内部となる場所で柱穴群と同一的に検出したが、建物に付随した遺構であるかは定かでない。どちらかといえば、建物の中央部と推定される位置であり、方位的にもずれがあるのでそれぞれ個別の遺構と考える。長軸方約2.2m×短軸方約1.5mの隅円長形状をして、深さ約0.2mの中央部が微かに窪んでいる。埋土は地山土が若干暗む淡黄茶色をなし、長軸方向は南北方向より西へ約67 振っている。なお、土坑周辺の小ピットとの関係もよく判らない。

遺物はこの土坑内より 7 点出土した。20・21は須恵器杯・高台付杯で22~26が土師器甕である。概ね 期頃のものと思われるが、あるいは20は - 2 ~ 3 期、25・26は ~ - 1 期頃かもしれない若干の幅をもつ可能性もある。

掘立柱建物 3 (第 8 図)

B 9 ~ 10区で第 1 号掘立と大半が重なりあう関係位置で検出した。ただし、柱穴の切り合い関係は無く、南北棟の 2 間× 3 間の側柱建物とみられる。梁行は約 4 m、桁行は約5.6mで、軸方向は、第 1 号掘立と全く同様の西に 3 振っていて、平面積は約22㎡となる。

掘立柱建物 4 (第10図)

C 9 ~ 10区で検出した。第 1 号竪穴建物と接しており、南側柱列の中央柱穴が微かに竪穴肩部分を切りかすめており、これに後出した南北棟の 2 間× 3 間の総柱建物となる。東西方向の梁行側は約3.2 m、南北方向の桁行側約3.9mの平面積は約12㎡である。主軸は南北方より西へ約 3 振っている。なお、北側柱列の南から第 2 番目の柱位置部分には近現代頃の土取りの攪乱坑で消失している。

掘立柱建物 5 (第10図)

B 10区で検出した。第 4 号総柱建物のすぐ北にあり、約 2 m の間隔を挟んで、南北棟の 2 間× 2 間の総柱建物である。東西方梁行は約3.2m、南北方の桁行は約3.6mで平面積は約11㎡である。軸方向はほぼ南北方向に向いている。

掘立柱建物 6 (第11図)

B 10 ~ 11区で検出した。調査時には建物跡との意識はなかったが、図面整理過程で認識した。調査

区画外の北側にも延びる南北棟の建物と推測され、梁行にあたる南側柱列 2 間の幅は約3.7mであり、総柱建物の梁行では 5号・6号とも約3.2mであるので、側柱の住居建物が考えられる。2間×3間程の建物ではなかろうか。軸方向は南北方向より東側に約 2° 振っている。なお、この地点には数条の浅い畝状溝があり、柱穴は一箇所であるが溝を切っている。

土坑

土坑 1・土坑 2 については建物とのかかわりで上述したのでその他の土坑を順に記述する。なお、それぞれに遺物の出土が無くて所属時期の特定が困難なものもあるが、埋土の状況や形態的類縁性などから推定して分別したものもあり、前以って容赦願っておきたい。また、中世から以降とみられる土坑については、記号として 10 (いちまる) を付し、101号からの番号を用いている。

土坑 3 (第11図)

C・D 6区で検出した。墓坑的な様相がある二段状に掘り込まれている長方形の土坑で、上段部の規模は南北方長約4.6m、東西方幅約1.6~1.8m、深さ約0.2mで、ほぼ南北方に軸線をとっている。

下段部は、上段南壁から直に掘り下がり、長軸方北側の途中までで留めた、一回り小さい長方形の掘り込みで、長さ約2.8m・幅約0.7m、一段目からの深さは約0.2m強であり、幅方向の底面は円味をもっている。軸方向では上段部の方向と若干違っており、東側へ約 6° の振れがある。遺物は、須恵器高台付杯の27と土師器甕28・29があり、供献的でもなく、破片として出土した。甕には口縁部を内湾気味とするものと、外反して口唇部上端を先細りさせる二種があり、調整ではどちらも体外面は縦方向のハケ・内面は横方向のナデである。 - 3 ~ 期頃と思われる。なお、土坑 3 に似たものがすぐ西側に接して存在しているように思われる。ごく片隅部分だけなので明確でなく、特別な図示はしていないので、遺構全体図を参照願いたい。

土坑 4 (第12図)

主として B 5・6区にまたがり検出した。長方形土坑の 2~3基の重なったものか明らかでない。3基と仮定して北側から南側坑へと規模面を示すと、Aは長さ約2.7m・幅約1.6m・深さ約0.27m、Bは長さ約2.2m・幅約1.2m・深さ約0.2m、Cは幅約1.25m・深さ約0.05mである。遺物はA B坑内より須恵器壺の口縁部分30と高台付杯の31が出土した。底部から体部への立ち上がりに円味があるが、高台部はやや角ばって短く、当調査中出土の杯群のなかでは新しい様相のもので、 期 ~ 期頃であろうか。

土坑 5 (第12図)

D 7区で検出した。幅約3.3m・深さ約0.3mの方形様の掘り込みに、東側で突起様の突出部分がある。軸方向は、南北方向より東へ約 7° 振っている。出土遺物は無い。

土坑 6 (第12図)

C 6~7区にまたがって検出した。南北方約3.4m・東西方約1.2m・深さ約0.1m。底面は平らで、軸方向はほぼ南北にむいている。出土遺物は無い。

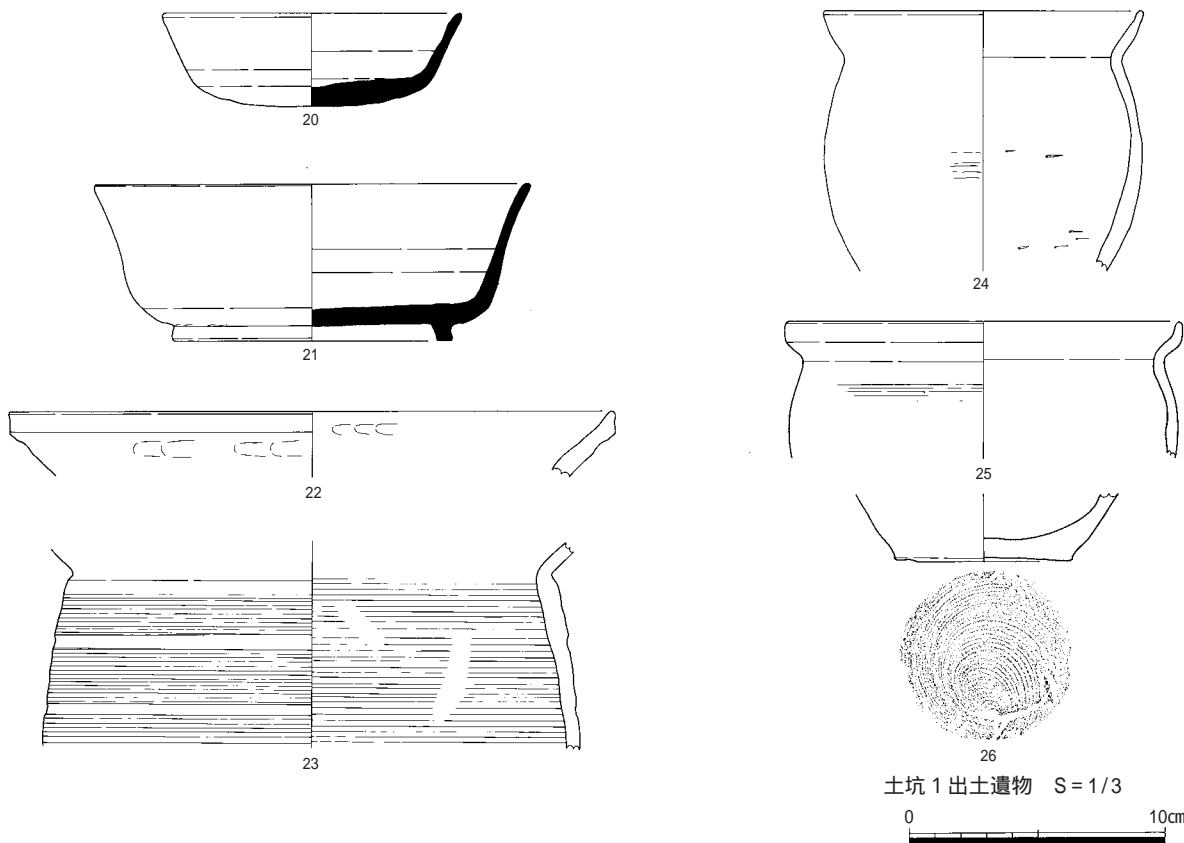
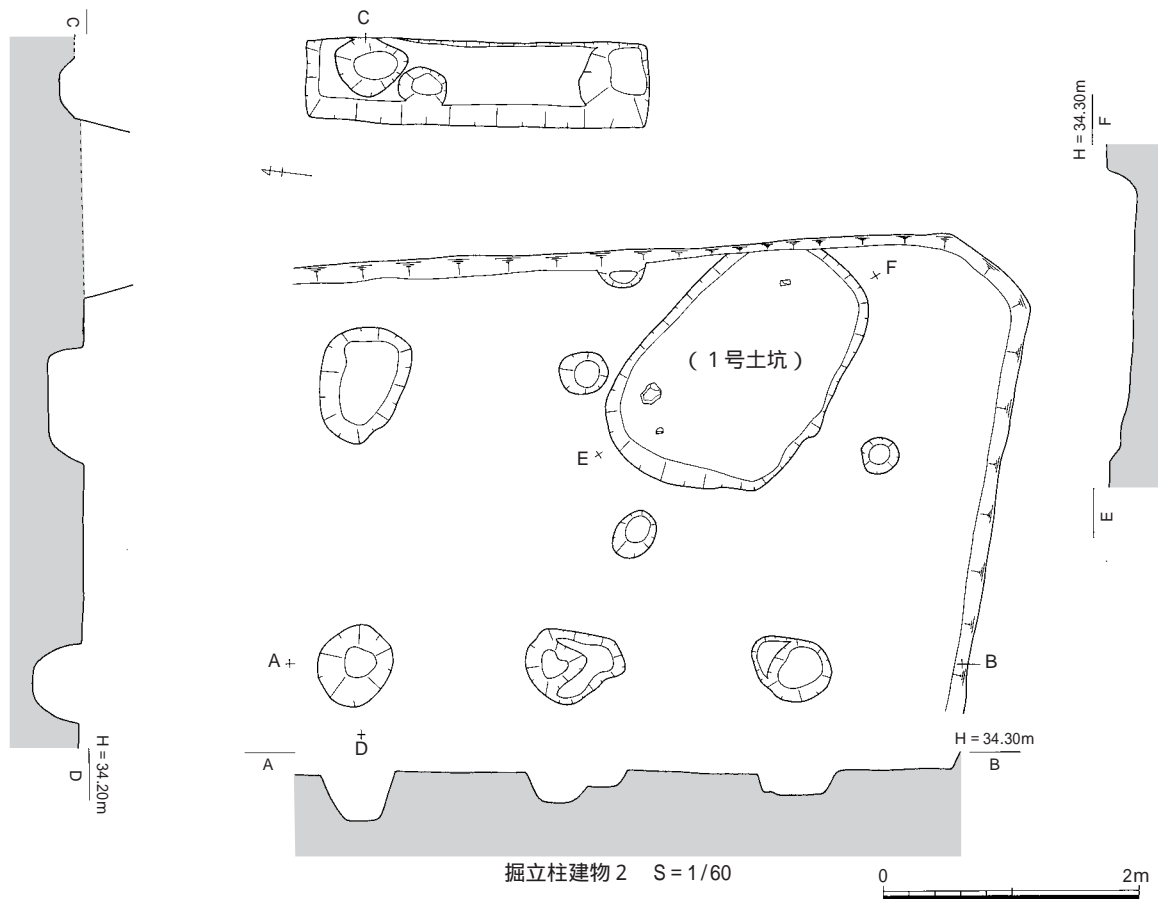
土坑 7 (第12図)

D 7区で検出した。長軸方の東西方で約1.7m・南北方約1.2mの平面形体は方形にちかい長方形。深さ約0.1mで、軸方向は南北方向より東へ約 3° 振っている。出土遺物は無い。

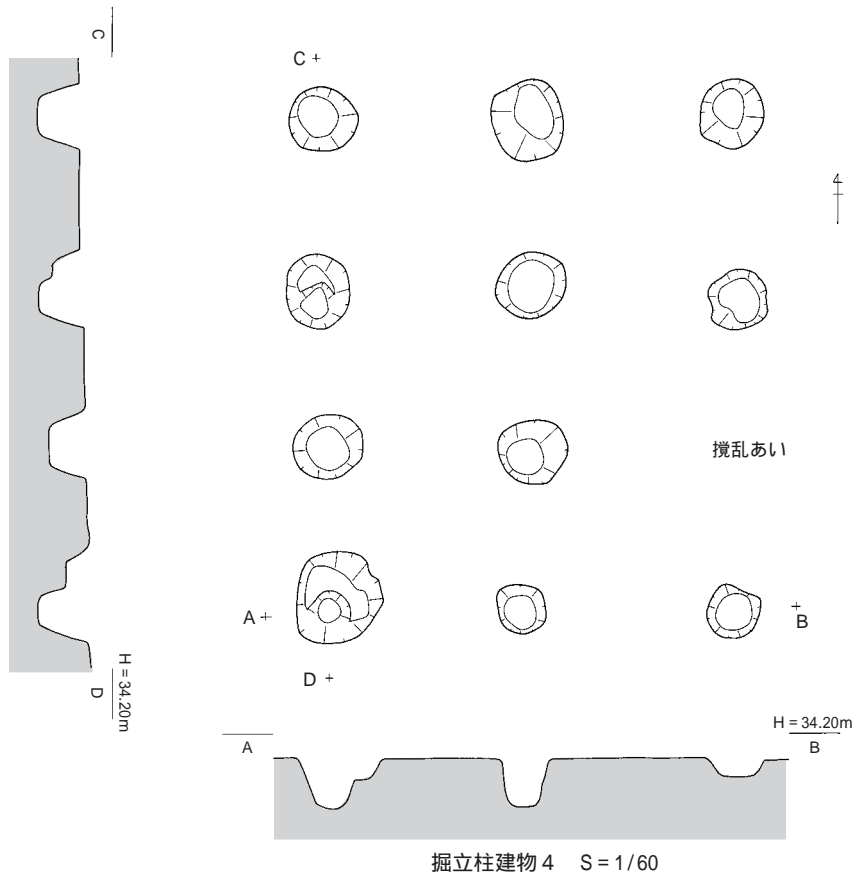
土坑 8 (第12図)

C 4区で検出した。数基の小土坑の集合体的なもので、出土遺物は無い。

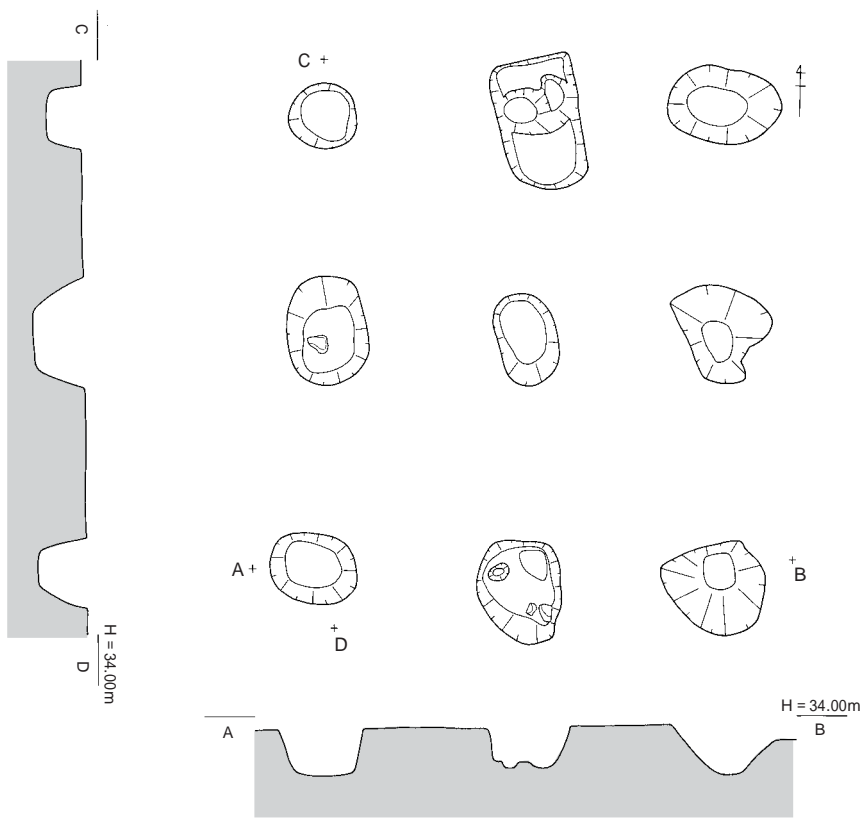
土坑101 (第13図)



第9図 第1次調査 掘立柱建物 2・土坑 1 遺構遺物実測図



掘立柱建物 4 S = 1/60



掘立柱建物 5 S = 1/60



第10図 第1次調査 掘立柱建物4・5遺構遺物実測図

C 7・8区で検出した。南北方約2.35m・東西方約2.2m、深さ約0.5mで、平面形体は隅円の方角をして底面はほぼ平坦となるが、東西方側に一段掘り窪めた長方形の深まりがあり、長さ約1.4m・幅約0.4～0.5m・主坑部の底面より約0.1mである。坑中には約0.2m長前後大の礫が多く含まれていて、底面より幾分浮いた位置から第2層中までにわたっている。方形坑の軸方向は、南北方より西へ約9°振っている。

土坑102 (第13図)

C 7区で検出した。上面では長軸の東西方が約3.6m・短軸方約2.2mのずんぐりとした隅円長方形をなすが、下面部では東側に偏在する方形状(約2×2.2m)坑に、0.8m程の方形小突起部分を加えたような形態となっている。検出面からの深さは約0.7mで、底面部は長軸・短軸方ともに円みをもっている。上面部分の軸方向はほぼ東西方を向いている。坑内から礫に混じって32の凝灰岩製のナカ砥石1点が出土した。四面使用で両端部が欠損している。熊本県の天草砥石とおもわれ、鎌と腰刀等の平刃物を研いだ様な摩り跡がみられる。15世紀頃のもののか。

土坑103 (第13図)

B 5区で検出した。南北方約1.7m・東西方約1.7mの正方形にちかく、深さ約0.1mである。軸方向は南北方向より東へ約8°振っている。底面はほぼ平坦で、礫を少量ふくんでいる他は出土遺物は無い。

土坑104 (第13図)

A 5区で検出した。長軸の東西方は約1.6m・南北方は約1.5m、ややいびつであるが方形にちかいものがある。深さ約0.1m強で、軸方向は南北方向より西に約6°振っている。

土坑105 (第13図)

B 4～5区で検出した。長軸の東西方は約4.2m(下端約3.5m)・南北方の幅は約1.8m(下端約1.2m)の平面形は長方形となる。深さは約0.4mで、底面は平坦であるが、壁への立ち上がり部分が長軸・短軸方ともに円みをもっている。軸方向はほぼ東西方に向いている。出土遺物は、33の13世紀後半頃の鎚連弁の龍泉窯青磁椀と34の古瀬戸後期 かの14世紀末～15世紀前半にあたる灰釉卸皿と同卸目付三足盤小片があった。

土坑106 (第13図)

A 3区で検出した。長軸の東西方が約1.6m・南北方が約1.2mの、平面形態は方形にちかい長方形である。深さ約0.1m強で、坑底に径約0.5mの小円坑があり、据え置いたような礫を内包している。軸方向は南北方より、西へ82°(短軸東へ8°)振っている。

土坑107～111 (第14図)

A・B 2～3区の、調査区東壁際で5基が南北方に直列的並んで検出された。検出前の上面部分では、周辺部まで広く灰色土で覆われていて、池的な大きな窪地でもあるのかと思わせる地区であった。結果的に、底部をそれぞれに持つ連結的な坑の集合体であったことが判ったが、灰色土が厚(深)く埋積していて隣接する坑と坑間の肩部にあたる本来の基盤土も取り払われているのか、かなり下がった底部にちかい位置で残されていたこともあり、これらの坑の切り合いや前後関係などは全くつかめていない。埋土は上層部に灰色シルト質土があり、徐々に下部にしたがって暗みが増し、湿潤性ととも粘性があった。

それぞれ規模面の概略では、土坑107が長さ約2m・深さ約0.3m、土坑108が約1.8×1.8m・深さ0.35m、土坑109が約1.9×1.6m・深さ約0.4～0.7mの北側が浅く南側への傾斜があり、多量の円礫も底面に接するものは少なく、北側から南側へ流れ込んだような状況であった。土坑110は約2.5×2.3m・深

さ約0.65m、土坑111は約3.5×3m・深さ約0.9mで、二段状の掘り込みとなっている部分では約0.6mの深さである。

遺物は、35の細粒砂岩製の鎌用かと思われる弧状の擦り痕が顕著な砥石と、40の珠洲 期の15世紀後葉頃の播鉢が出土しているが、土坑109、110の掘り下げ途中に取り上げてしまい、どちらに帰属するか判らないが底面より幾分浮いた位置からの出土であった。

その他の遺構・遺物

溝1・溝2（区割図・遺構全体図・第3・4図参照）

D3区からA2区に向けた平行的にある2条の溝で、南側にあたる溝1は北側の2号溝より自然地形上の高所にあり、検出面で幅約1m・深さ約0.18m、2号溝もほぼ同様に幅約1～1.6m・深さ約0.1～0.2mと浅く、両溝とも耕作土除去下で灰色埋土を以って検出された。農業用水路と考えられ、西側から東側に若干勾配がある。かなり削平されていると思われる、土層序的な構築の前後関係の把握は無理であったが、出土遺物が37の平瓦片（近郊に7世紀末葉頃の末松廃寺があり、その使用瓦断片が。A2区の二溝合接的部分出土）を除いて、陶磁器類片が第2号溝に内包されており、確証はないが機能低下などにより1号溝へと改築されているように思われる。出土の陶磁器類は38～41の龍泉窯系青磁碗があり、39・40の15世紀前半代のもの、38・41の15世紀後半ないし16世紀初頃に相当している。44は古瀬戸灰釉鉢と思われる、内面はハケ塗りの釉がのり、14世紀後半～末頃のものと思われる。43も古瀬戸後期の灰釉卸し皿で15世紀中頃。42は天目茶碗で瀬戸大窯1製品と思われるもので16世紀前半にあたる。45は珠洲播鉢で目がほとんど磨り減って平滑となっている。珠洲 ～ 期頃の15世紀後半～16世紀初のものと思われる。ここでの資料は大まかに、14世紀後葉～15世紀中頃までのものと、15世紀後半～16世紀前半の二群があり、溝2（用水路）の始まりと終焉の時期を、大略で示すものと思われる。

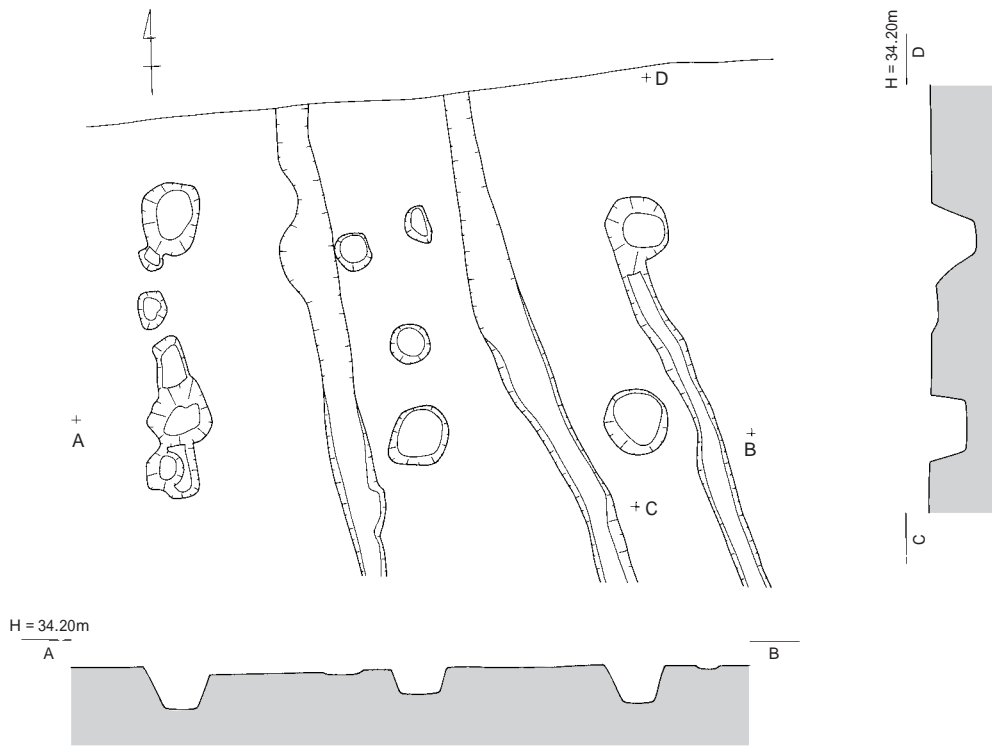
L字状屈曲溝（区割図・遺構全体図・第3・4図参照）

B3区で検出した小溝で、何らかの区画・境界などを示した遺構のように思われるが、明らかでない。溝幅は約0.3～0.5m・深さ約0.1m、南側にある東西向溝の軸方向は南北方から西へ約76°（東へ104°）で、屈曲して北方に延びる溝では南北方より東へ約3°振っている。埋土は淡灰色のシルト質土で、中世遺構を推測させる要素をもつが、溝内より第16図58の内面黒色で外面に赤彩の土師器1点の出土もあり、古代 期頃の遺構かもしれない。

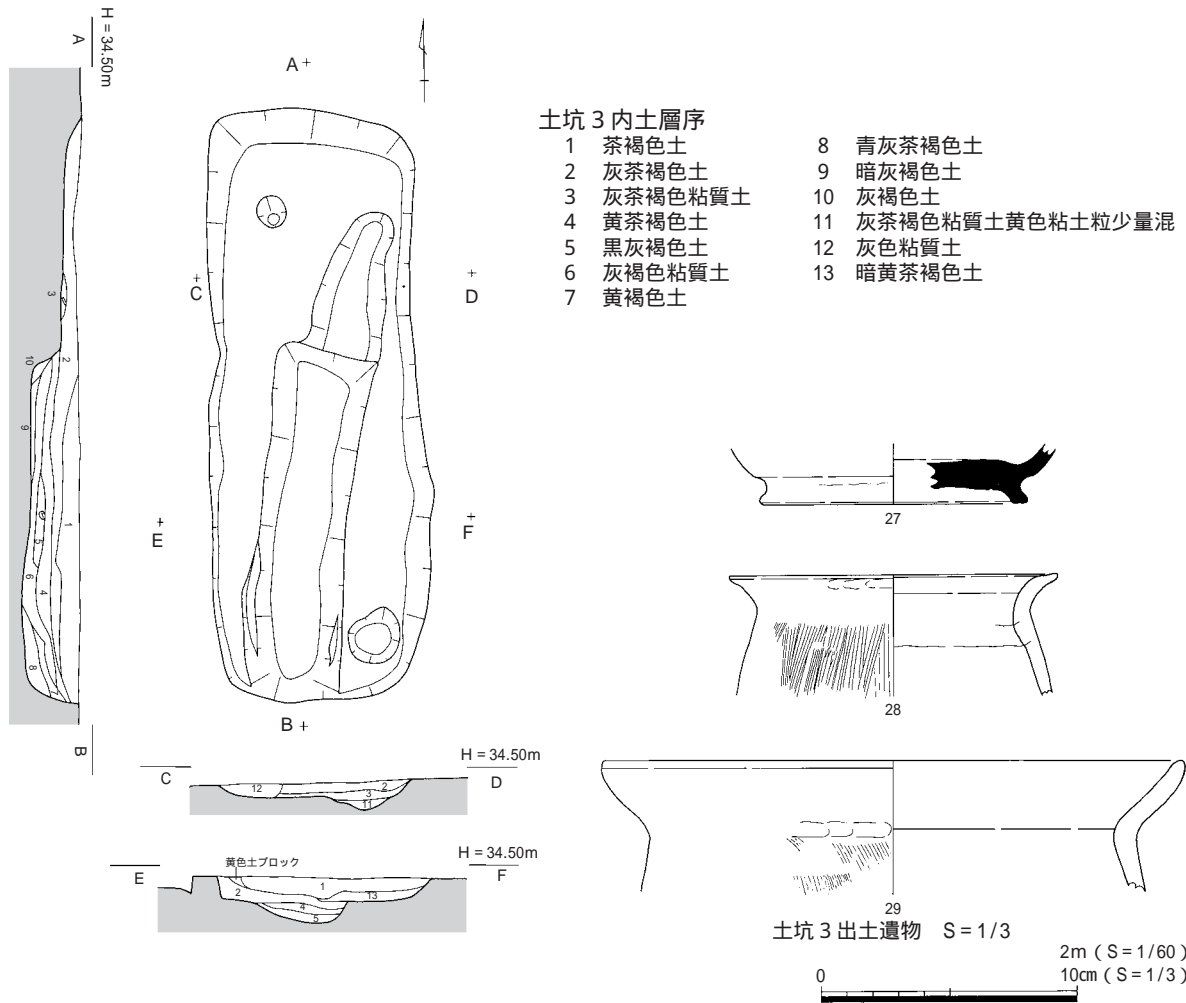
その他、調査区で点的に出土した遺物は第15・16図で包含層出土遺物として掲げた。

古代の遺構内出土遺物は概ね - 2期～ 期頃が主体的であるが、これに後続すると考えられる時期の遺物も数点程度の極少ながら出土している。 - 2期頃におもわれる51の須恵器杯蓋・53の杯（？）や、60の、土師器体外面を格子状・内面が同心円状叩き目を留めて口縁端部が円味をもった甕などがある。若干の空白をもって、その後の 期に比定されるものではC2区の1号溝の南の傍らよりの57と58（上記L字状溝出土）程度の出土が、ここでの古代の最終時期的資料となっている。

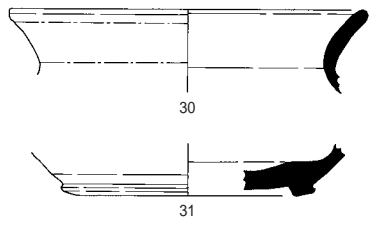
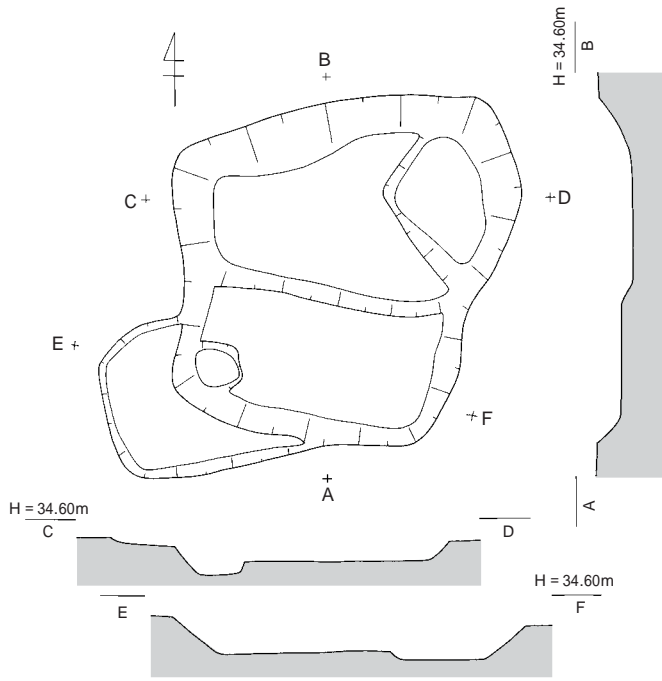
中世遺物では、61の土師器小皿があり、灯明用に用いられている油痕がある。14世紀末か15世紀前半頃のものでなかろうか。62は龍泉窯端ぞり碗で15世紀前半代頃と思われる。63は背絵を斜め格子として三連の菊花押印がある加賀焼の甕で、窯資料でこの押印一致するもの（2005『中世日本海域の土器・陶磁器流通』財団法人石川県埋蔵文化財センター）の発見はまだ無いが ないし 期頃の13世紀末～14世紀前半代の製品の可能性がある。64は珠洲焼播鉢 期頃にあたるものである。65は火鉢であるが、調査区外に接する小水路壁にうまっていたもので、17～18世紀代頃のものではなかろうか。



掘立柱建物 6 S = 1/60

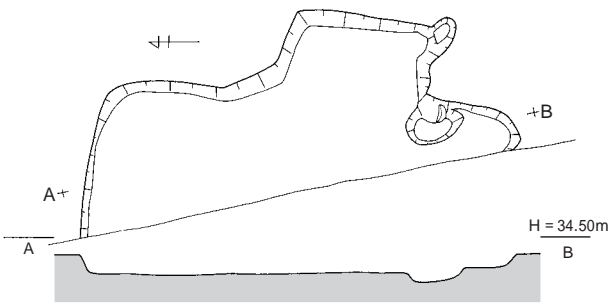


第11図 第1次調査 掘立柱建物 6・土坑 3 遺構遺物実測図

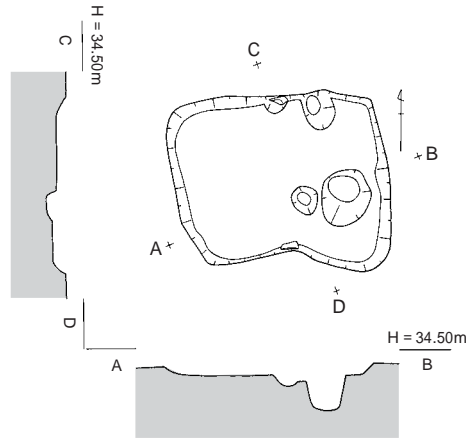


土坑4 出土遺物 S=1/3

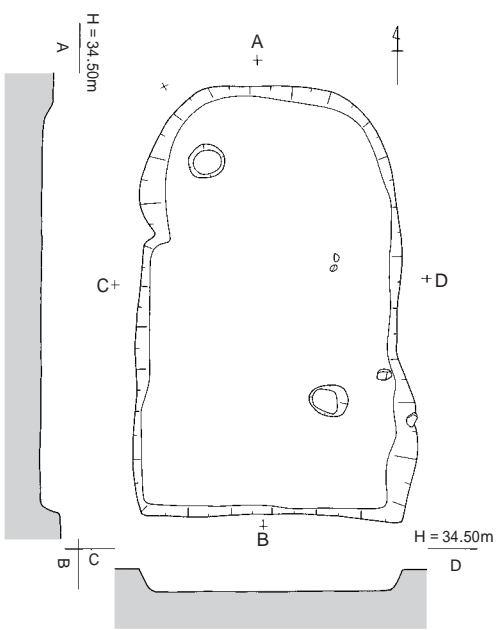
土坑4 S=1/60



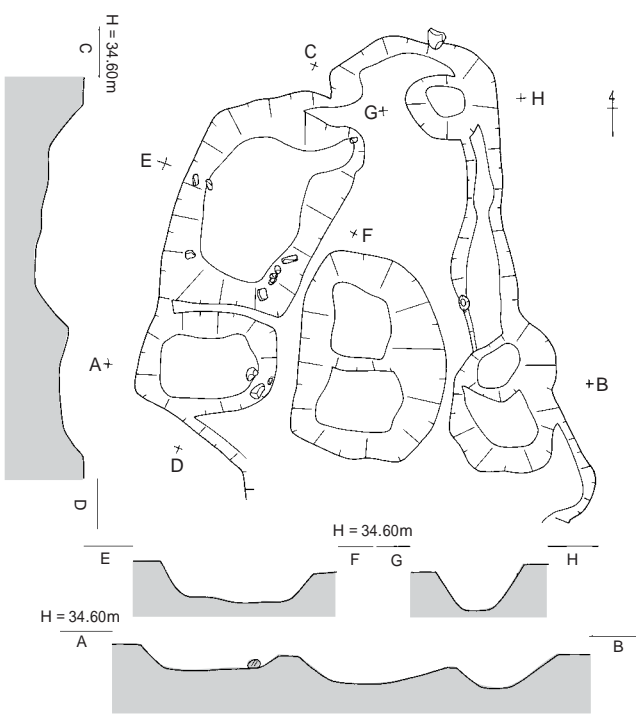
土坑5 S=1/60



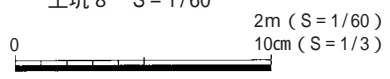
土坑7 S=1/60



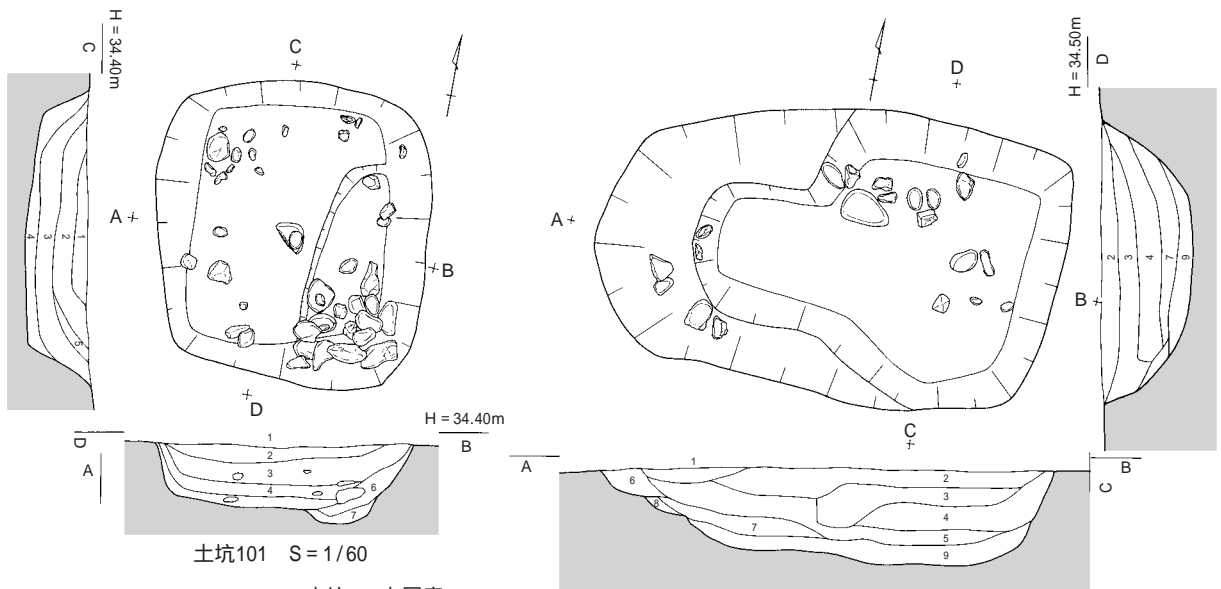
土坑6 S=1/60



土坑8 S=1/60



第12図 第1次調査 土坑4・5・6・7・8 遺構遺物実測図



土坑101 S=1/60

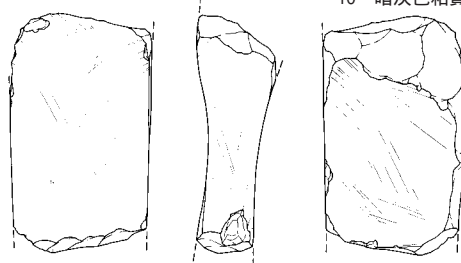
土坑102 S=1/60

土坑101土層序

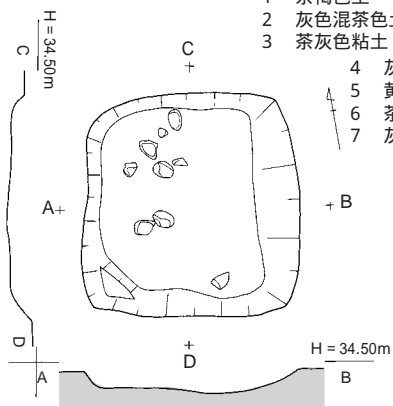
- 1 茶褐色土
- 2 灰色混茶色土
- 3 茶灰色粘土
- 4 灰色粘土
- 5 黄灰色砂質土
- 6 茶灰色砂質土
- 7 灰色粘質土

土坑102内土層序

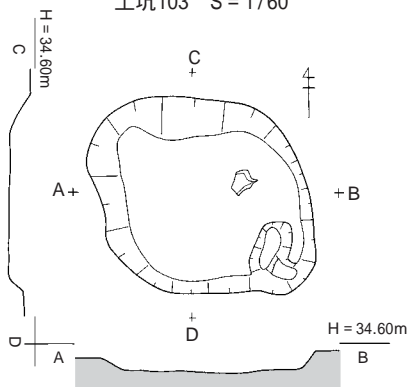
- 1 灰色土
- 2 灰褐色土
- 3 茶褐色土
- 4 淡茶灰色土
- 5 暗灰褐色土
- 6 灰色混黄灰色土
- 7 暗灰色混黄灰色土
- 8 淡灰褐色粘質土
- 9 灰色粘土
- 10 暗灰色粘質土



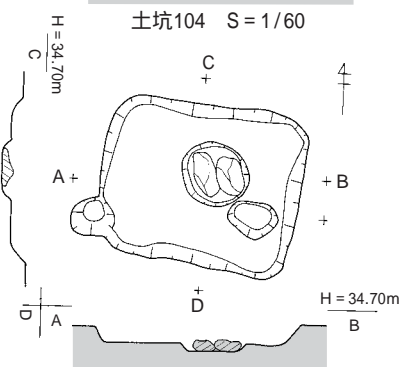
土坑103出土遺物 S=1/3



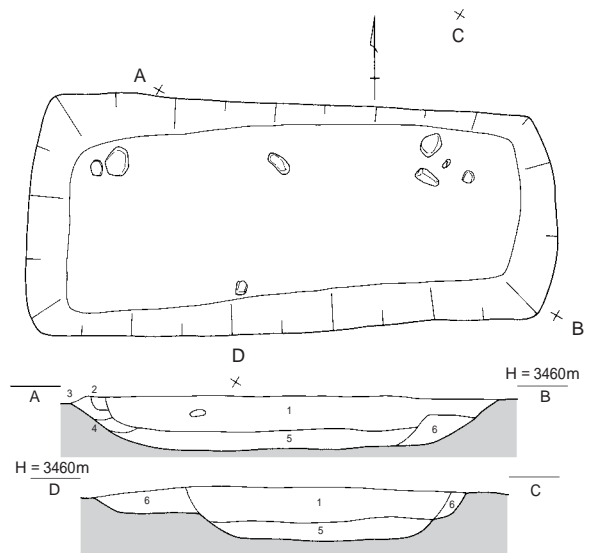
土坑103 S=1/60



土坑104 S=1/60



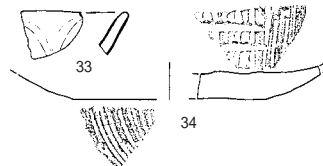
土坑105 S=1/60



土坑106 S=1/60

第105号土坑内土層序

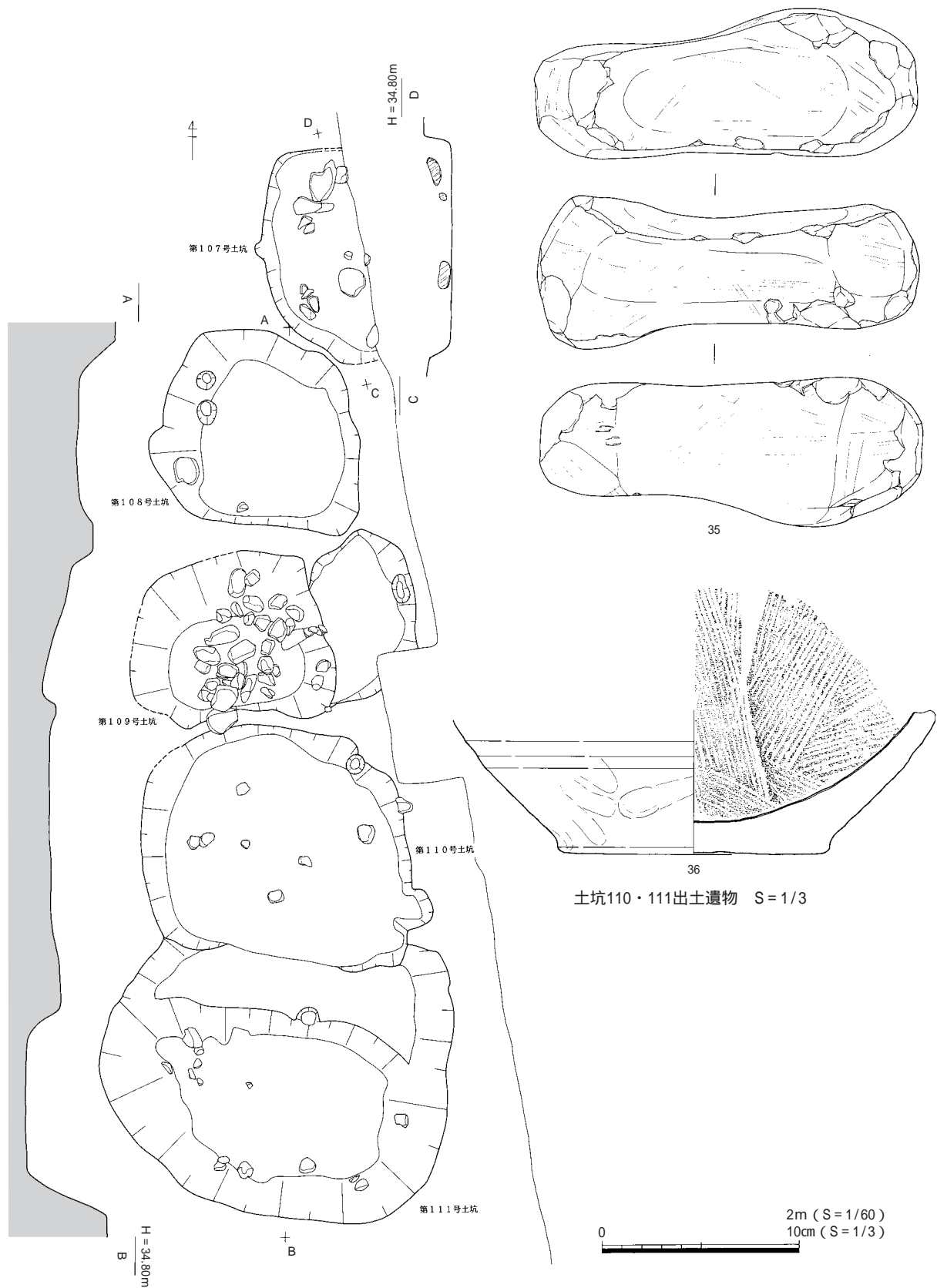
- 1 灰褐色土
- 2 黄茶灰褐色土
- 3 暗黄茶褐色土
- 4 黄茶褐色土
- 5 暗灰色土に乳白色土混



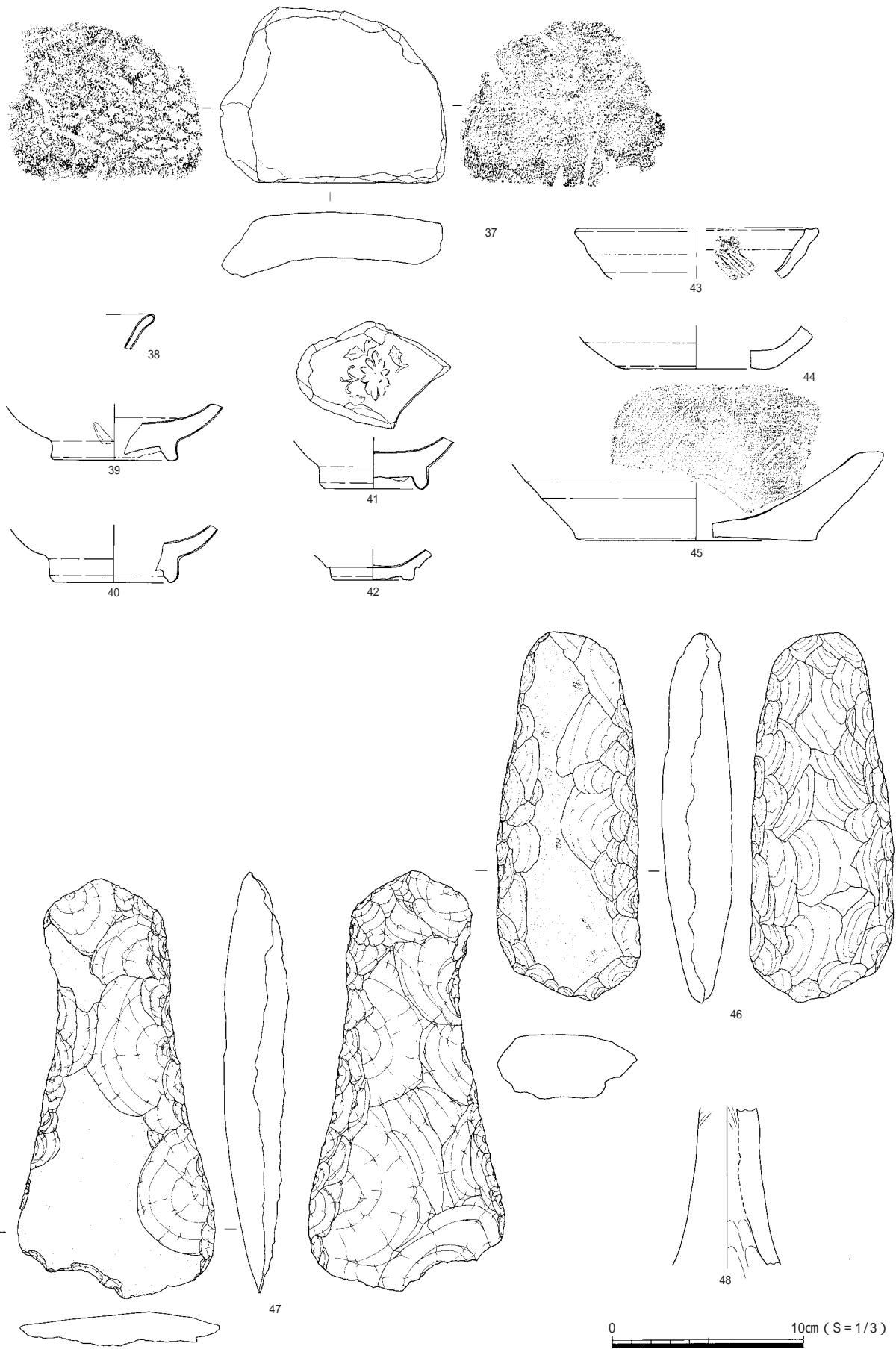
土坑105出土遺物 S=1/3



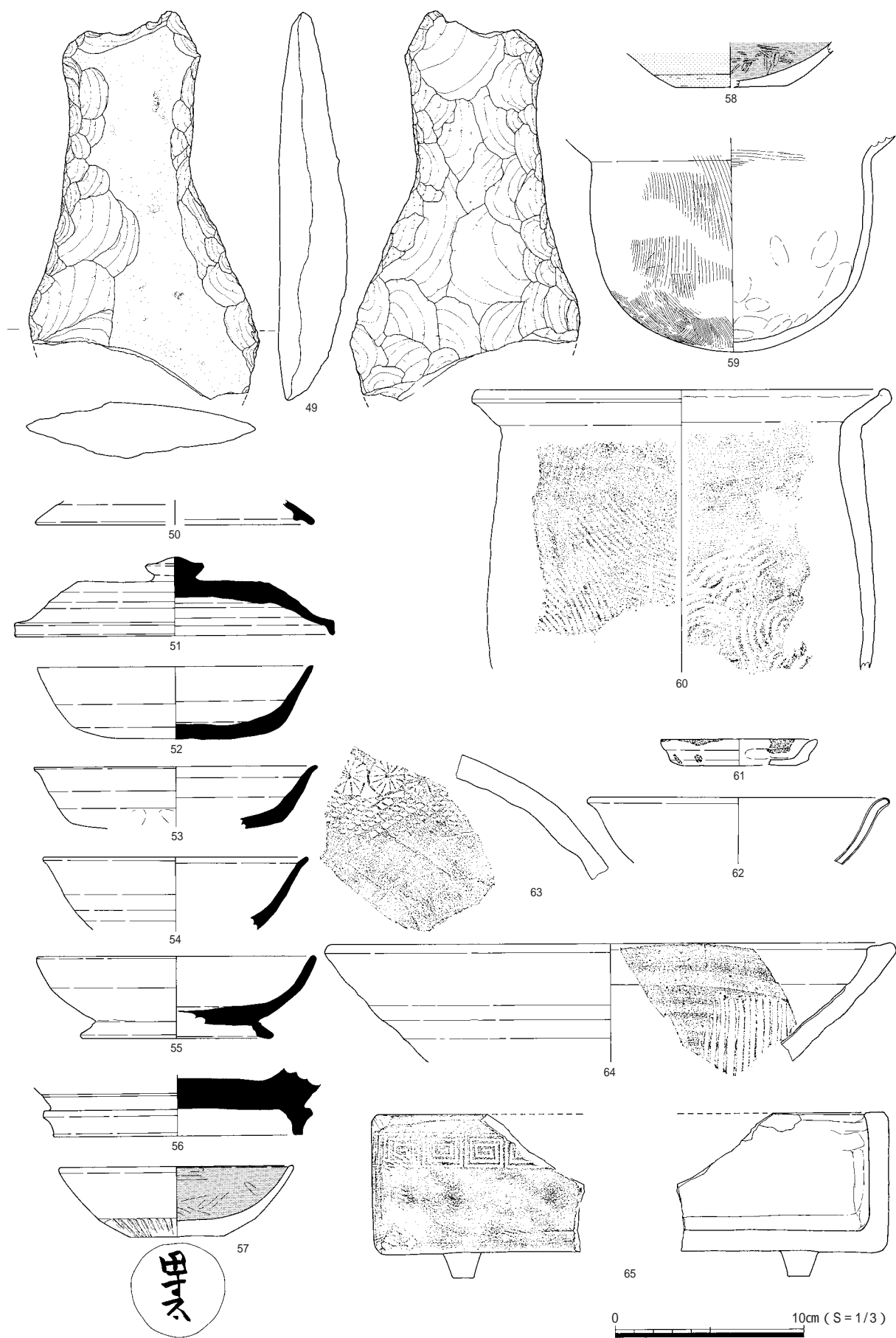
第13図 第1次調査 土坑101・102・103・104・105・106遺構遺物実測図



第14図 第1次調査 土坑107・108・109・110・111遺構遺物実測図



第15図 第1次調査 溝2・包含層出土遺物実測図 (上段 溝2・下段 包含層)



第16図 第1次調査 包含層出土遺物実測図

第4節 まとめ

清金アガトウ遺跡第1次調査区は、その前年度に調査された末松A遺跡北縁の第3次調査区（2005 野々市町 末松遺跡）とは、約50m程北側にあたる至近の位置にあり、古代の主となる遺構の時期もかなり似通ったものがある。同バイパスに係る末松A遺跡では7世紀第3四半期頃からにあたる - 2期から - 3期頃までを中心とした、近江系の土器とともに壁柱をもつ側柱建物が含まれる数棟を単位とした竪穴建物群が、それぞれ若干の間隔を保ちながらの5群が顕現されており、アガトウ遺跡第1次調査区の竪穴建物群も - 3期頃には顕在化しているが一部 - 2期頃とみられる遺物も散見され、いわばほぼ同期にスタートした第6群目とも言えそうである。また、末松では - 3期頃から掘立柱建物が竪穴建物等にかわって出現して、単位的集団としては概ね 期頃に終焉となっている。

清金では掘立柱建物への変節の細部は明確にはなし得ないが、土坑内出土遺物や包含層出土の古代土器群総体の中からある程度の推測は可能であり、この建物群継続集団とは年代的な間断を挟んだ期頃に相当する内面黒色土師器2点を除いては、 - 1～2期頃となる土器群が下限をなしており、末松遺跡の動向に近い、 - 3期後半頃か遅くとも 期の初めには掘立柱建物への移行と、 期中での建て替えが行われているものと考えられ、八世紀後葉頃に終焉したものとみられる。出土土器器種のなかには末松遺跡 - 2期の近江系甕の名残を留めたともとれる - 3期頃に相当すると考える、口縁部を内湾気味として体部外面に縦方向のハケ調整として、体内部は横方向のナデ調整とした遺物はあるが、囲溝とともに壁柱をもつ近江系譜をとれる竪穴建物やほぼ一律的に東南隅にカマドを配置している末松遺跡事例とは幾分ことになっており、微かではあるが相対的に末松遺跡に後出した時期からの展開であるのかも知れない。これらの古代の竪穴および掘立柱建物の軸線方位（座標北より）では、部分的な発掘で曖昧さが残る竪穴2は西へ約10°、6号掘立柱建物は東へ約3°の例外的な方位をとるもの以外では、ほぼ北を示す5号竪穴状遺構・5号掘立柱建物と、その他の建物では西に約3°～5°にあり、南北棟を意識したもののように思われる。

上述の末松遺跡報文では、出土遺物・住居内容等から、7世紀後葉に出現した畿内外縁部（近江・丹波）から直接的に移住した人々と渡来系の次世代の人々の移住で形成された集落で、同時期頃に建立されている末松廃寺とに着目して、国家的政策による手取扇状地の開発と、開発地・労力の精神的支柱ともなる寺院の建立・維持に従事した集団である可能性を提起された。この7世紀第3四半期頃の政治社会的状況に、唐と新羅による百濟征討にたいし救援軍の派遣～663年に大敗を喫して、飛鳥より近江大津に遷都した中大兄皇子（天智天皇）の死後、天智長子と天智同母弟の対立から支援の豪族を巻き込んだ内乱（壬申の乱）を経て、権力を掌握した大海人皇子（天武天皇）は673年飛鳥浄御原で即位して律令支配体制を急速に進めていくこととなり、天武天皇のあとを承た持統天皇は694年に本格的都城（藤原京）を営み、ここでやがて大宝律令が選定され701年に制度的完成とともに国制の基本として施行に至ったことは周知のことであるが、第3四半期のもつ在地の展開がどのように推進されていったのかという重要な問題が潜んでいて、開発地への人民の移植という面からは、国家的土地所有への移行が一定度進展している段階と推測されるが、開発地の選定やその主導に際して、労働力の編成のありかたや指揮命令権・経済的負担なども含めて、在地豪族層の協力を無縁としていたのかどうかという問題が当然存在し、扇状地の開発と同時期における末松廃寺建立というあり方からすれば、多分に協力・支援なしには成立し得ないものと思われ、当時の国家あるいは国衙の財政状況を知らないが、自らの財政支出を以って積極的に建立を推進したとは考えにくく、国・国衙の求める

主たるところは未開地的空間に公水の開設とそれによって潤う耕地の拡大を本質とし、きたるべく口分田の班給地の拡大と併せ税収入の増大を図ることが唯一のものであったと思われるのである。

第2表 第1次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		実測 番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 (旧番号)	種類 器種	法量 (cm)	色調		調整		焼成	胎土	備考
	図版	写真 図版							内	外	外面	内面			
1	5	14	3	88	C-9区	第1号竪穴	須恵器 杯	口径10.6 器高 7.4 底径 3.4	灰	灰	ロクロナ デ、ナデ、 ヘラ切り	ロクロ ナデ	良	礫微	
2	5	14	4	88	C-9区	第1号竪穴	須恵器 小型壺	口径10.4 底径 (7.4)	浅黄橙	鈍い黄 橙	ロクロナ デ	ロクロ ナデ	良		
3	5	14	14	88	B-8区	第2号竪穴	須恵器 有台杯	口径14.2 器高 9.0 底径 4.7	灰白	浅黄、 灰黄	ロクロナ デ ヘラ切り	ロクロ ナデ	良	粗砂少	
4	6	14	15	88	B-7区	第3号竪穴	須恵器 蓋	口径12.2 底径 (1.6)	灰	オリ ブ灰	ロクロナ デ	ロクロ ナデ	良	粗砂少	
5	6	14	19	88	B-7区	第3号竪穴	須恵器 蓋	口径18.8 底径 1.5	灰	灰 オリ ブ	ロクロナ デ	ロクロ ナデ	良	細砂多	自然釉かか る
6	6	14	22	88	B-7区	第3号竪穴	須恵器 杯	口径10.7 器高 7.4 底径 3.1	灰	灰	ロクロナ デ、ナデ	ロクロ ナデ、 ロクロ ナデの ちナデ	良	粗砂、 細砂	
7	6		20	88	B-7区	第3号竪穴	須恵器 有台杯	器高 8.9 底径 2.7	灰白	灰白、 灰	ロクロナ デ、ナデ	ロクロ ナデ	良	細砂多	
8	6		17	88	B-7区	第3号竪穴 (床)	須恵器 有台杯	器高10.6 底径 1.7	灰	暗灰	ロクロナ デ、回転 ヘラケズ リ	ロクロ ナデ	良	礫微	堅緻
9	6		16	88	B-7区	第3号竪穴	須恵器 有台杯	器高10.2 底径 (1.1)	灰	灰	ロクロナ デ	ロクロ ナデ	良	細砂多	
10	6		21	88	B-7区	第3号竪穴	須恵器	口径18.8 器高 底径 (2.4)	灰	灰、暗 灰	ロクロナ デ	ロクロ ナデ	良	粗砂、 細砂	自然釉かか る
11	6	14	18	88	B-7区	第3号竪穴 (床)	土師器 皿	口径13.9 底径 (2.5)	赤褐	赤褐	ミガキ	ミガキ	良		内外面赤彩
12	6	14	23	88	B-7区	第3号竪穴	土師器 小型土 器	口径 4.6 器高 1.9 底径 3.5	浅黄橙、 橙	浅黄橙、 橙	ロクロナ デ、回転 ヘラ切り	ロクロ ナデ、 指ナデ	やや 良	粗砂多	
13	6	14	24	88	B-7区	第3号竪穴	土師器 甕	口径20.0 器高 底径 (5.2)	鈍い橙	鈍い橙	ヨコナ デ、 ナデ	ヨコナ デ、 ナ デ	良	粗砂、 細砂共 に多	
14	6	14	S4	88	B-7区	3号竪穴	鉄滓 椀形滓	最大長 7.3 最大幅 10.5 最大厚 2.8	(重量) 235g						
15	7	14	1	88	D-4,5区	第5号竪穴 状跡	須恵器 蓋	口径16.0 器高 底径 (1.7)	灰白	灰	回転ヘ ラケズ リ、 ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	良	粗砂、 細砂	堅緻
16	7	14	2	88	D-4,5区	第5号竪穴 状跡	土師器 杯	口径17.8 底径 (5.5)	明赤褐 浅黄橙	明赤褐 にふい 橙	ロクロ ナ デ		良	細砂	内外面赤彩
17	7	14	32	88	B-6区	第2号土坑	須恵器 無台杯	口径 (13.6) 器高 (10.1) 底径 (4.0)	灰白	灰	ロクロ ナ デ、ヘ ラ切 り	ロクロ ナ デ、 ナ デ	良	粗砂多	降灰
18	7	14	30	88	B-6区	第2号土坑	須恵器 無台杯	口径13.2 器高 9.7 底径 3.2	灰	灰	ロクロ ナ デ、ヘ ラ切 り	ロクロ ナ デ	良		

第3表 第1次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		実測 番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 ()は旧番号	種類 器種	法量 (cm)	色調		調整		焼成	胎土	備考
	図版	写真 図版							内	外	外面	内面			
19	7		29	88	B-6区	第2号土坑	土師器 壺	口径14.6 底径 4.1	鈍い橙	鈍い褐	ヨコナデ	ヨコナ デ	良		
20	9	14	11	88	B-9区	第1号土坑	須恵器 無台杯	口径10.8 器高 3.7	灰黄	灰黄	ロクロナ デ、ヘラ 切り	ロクロ ナデ	良	細砂少	
21	9		10	88	B-9区	第1号土坑	須恵器 有台杯	口径17.2 器高11.0 底径 6.2	灰白	灰白、 黄灰	ロクロナ デ、ヘラ 切り	ロクロ ナデ	良	粗砂少	
22	9		13	88	B-9区	第1号土坑	土師器 甕	口径24.0 底径 2.6	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ、 指ナデ	ヨコナ デ、指 ナデ	良	粗砂多	
23	9		56	88	B-9区	第1号土坑	土師器 甕	底径 (8.2)	鈍い褐	浅黄橙	ロクロナ デ、カキ 目	ロクロ ナデ、カ キ目、 指ナデ	良	粗砂多	
24	9	14	12	88	B-9区	第1号土坑	土師器 甕	口径12.6 底径10.3	鈍い橙	鈍い橙 ~浅黄 橙	ヨコナデ、 八ケ	ヨコナ デ、ケ ズリの ちナデ	やや 良	礫、粗 砂共に 多	
25	9	14	57	88	B-9区	第1号土坑	土師器 甕	口径 (15.5) 底径 (5.4)	灰白	浅黄橙	ロクロナ デ、カキ 目	ロクロ ナデ	良	粗砂多	
26	9		58	88	B-9区	第1号土坑	土師器	器高 7.1 底径 (2.7)	灰黄褐	鈍い黄 橙	ロクロナ デ、回転 糸切り	ロクロ ナデ	良		
27	11	14	59	88	D-6区	第3号土坑	須恵器 有台杯	器高10.4 底径 (2.4)	灰	暗灰	ロクロナ デ、ナデ	ロクロ ナデ	良	粗砂、 細砂共 に多	
28	11	14	31	88	C-6,7区	第3号土坑	土師器 壺	口径13.0 底径 (4.7)	鈍い黄 褐、鈍 い黄橙	鈍い黄 褐	指ナデ、 ヨコナデ、 八ケ	ヨコナ デ、ナ デ	良	粗砂、 細砂共 に多	接合痕
29	11	14	6	88	C-6,7区	第3号土坑	土師器 壺	口径23.0 底径 (5.2)	浅黄橙	浅黄橙 ~鈍い 橙	指ナデ、 八ケ、ヨ コナデ	ヨコナ デ、ナ デ	良	粗砂、 細砂共 に多	
30	12	14	52	88	B-5,6区	第4号土坑	須恵器 壺	口径14.0 底径 (3.3)	灰白	灰白、 灰	ヨコナデ	ヨコナ デ	良	細砂多	
31	12	14	53	88	B-5,6区	第4号土坑	須恵器 有台杯	器高 8.5 底径 (2.1)	灰白	灰白	ロクロナ デ	ロクロ ナデ	良	細砂少	
32	13	14	S5	88	B-7区	102号土坑	砥石 凝灰岩	最大長 9.4 最大幅 5.6 最大厚 2.9	(重量) 189g						
33	13		34	88	B-4区	105号土坑	青磁椀	底径 1.5							(素地) 灰 白、堅緻 (釉) やや 緑青がか った透明
34	13	14	35	88	B-4区	105号土坑	瀬戸 おろし 皿	器高 (7.6) 底径 (1.0)							(素地) 灰 白、堅緻 (釉) オリー ブ黄、(遺 存度) 底径 の1/12
35	14		S6	88	A・B-3 区	中世土坑 (109-110)	砥石細 粒砂岩	最大長 19.8 最大幅 7.6 最大厚 7.9	(重量) 1517g						

第4表 第1次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		実測 番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 ()は旧番号	種類 器種	法量 (cm)	色調		調整		焼成	胎土	備考
	図版	写真 図版							内	外	外面	内面			
36	14	14	43	88	A, B・2, 3区	中世土坑 (109~110)	珠洲焼 すり鉢	器高 (13.3) 底径 (7.3)	灰	灰	ロクロナ デ、ヘラ 切り、指 頭圧痕	おろし 目	良	粗砂多	
37	15		51	88	A・2区	中近世溝 (1号~2号)	平瓦			灰					最大長9.4、 最大幅12.0 最大厚2.6
38	15	14	45	88	B・2区	第2号溝	青磁椀	底径 (1.9)							(素地) 灰 白、緻密、 堅緻 (釉) 緑釉、 内外ともに 貫入荒
39	15	14	49	88	B・2区	第2号溝	青磁椀	器高 (6.4) 底径 (3.0)							(素地) 灰 白、緻密、 堅緻 (釉) 緑釉
40	15	14	50	88	B・2区	第2号溝	青磁椀	器高 (6.2) 底径 (3.1)							(素地) 灰 白、緻密、 堅緻 (釉) 緑釉、 外面貫入荒
41	15	14	41	88	C, D・3区	第2号溝	青磁椀	器高 (5.2) 底径 (2.8)							(素地) 白、 堅緻 (釉) 緑釉、 内外とも貫 入荒
42	15		48	88	B・2区	第2号溝	瀬戸 天目椀	器高 (4.0) 底径 (1.7)	黒	暗赤灰					(素地) 薄 黄灰白、気 泡少、堅緻 (釉) 内一 黒っぽい透 明、やや厚 /外一暗赤 灰色、ごく 薄
43	15	14	47	88	B・2区	第2号溝	瀬戸 おろし 皿	口径 (12.6) 底径 (2.7)							(素地) 薄 黄灰白、気 泡有、堅緻 (釉) 透明、 薄、貫入微
44	15		46	88	B・2区	第2号溝	瀬戸鉢	器高 (7.6) 底径 (2.3)						粗砂少	(素地) 橙 かかった灰 白、堅緻 (釉) 透明
45	15		37	88	C, D・3区	第2号溝	珠洲焼 すり鉢	器高 (12.8) 底径 (4.7)	灰	灰	ロクロナ デ、ヘラ 切り	ロクロナ デ、お ろし目	やや 良		海綿骨針含 む
46	15		S2	88	C・7区	包含層	打製石 斧	最大長 19.5 最大幅 7.7 最大厚 3.8	(重量) 687g						
47	15		S3	88	C・10, 11 区	包含層	打製石 斧	最大長 22.3 最大幅 10.5 最大厚 3.0	(重量) 695g						
48	15	14	55	88	B・9区 第3層中	包含層	土師器 高杯	底径 (8.3)	浅黄	浅黄	ハケ、ヨ コナデ	ケズリ、 指ナデ、 ヨコナデ	やや 良	細砂少	
49			S1	88	A・D9.10 区	包含層	打製石 斧	最大長 20.8 最大幅 12.5 最大厚 3.7	(重量) 804g						

第5表 第1次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		実測 番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 ()は旧番号	種類 器種	法量 (cm)	色調		調整		焼成	胎土	備考
	図版	写真 図版							内	外	外面	内面			
50	16		60	88	C・7.8区	包含層	須恵器 蓋	口径14.7 底径 (1.3)	灰	灰	ロクロナ デ	ロクロ ナデ	良		自然釉かか る
51	16		36	88	C・D・8区 第2～ 3層	包含層	須恵器 蓋	口径17.2 底径 4.3	灰白、 灰黄	灰白、 灰	ロクロナ デ、回転 ケズリ	ロクロ ナデ	良		つまみ径 3.1
52	16		26	88	C・7区 北西端	包含層	須恵器 有台杯	口径14.8 器高 6.4 底径 3.9	灰	灰	ロクロナ デ、ヘラ 切り	ロクロ ナデ	良		粗砂、 細砂共 に多
53	16		8	88	C・9区	小ピット	須恵器 無台杯	口径15.2 底径 3.3	灰白	灰白	ロクロナ デ、指頭 圧痕、ヘ ラ切り	ロクロ ナデ	やや 良		細砂多
54	16		7	88	C・9区	小ピット	須恵器 杯	口径14.2 底径 3.9	灰、灰 白	灰	ロクロナ デ	ロクロ ナデ	良		粗砂、 細砂共 に多
55	16	14	25	88	C・7区 中央部	包含層	須恵器 有台杯	口径14.9 器高10.1 底径 4.4	赤灰	赤灰	ロクロナ デ、ナデ	ロクロ ナデ、 ナデ	良		粗砂微
56	16		54	88	B・6区	包含層	須恵器 有台杯	器高13.4 底径 2.7	灰白	灰白、 灰	ロクロナ デ	ロクロ ナデ、 ナデ	やや 良		細砂多
57	16	14	27	88	C、D・2区	包含層	土師器 無台杯	口径12.4 器高 5.0 底径 3.8	黒	橙	ロクロナ デ、ケズ リ回転ヘ ラケズリ	ミガキ	良		底部墨書、 内黒土師器
58	16		28	88	B・3区	L字状溝	土師器 杯	器高 6.0 底径 (2.4)	黒	鈍い橙	ロクロナ デ、ナデ、 回転ヘラ ケズリ	ミガキ	良		粗砂微 内面内黒、 外面赤彩
59	16		5	88	C・9区	小ピット	土師器 甕	底径 (12.5)	鈍い黄 橙	鈍い橙	ハケ、ミ ガキ	ハケ、 ナデ、 指頭圧 痕	良		粗砂多
60	16		9	88	C・7区	包含層	土師器 広口甕	口径22.0 底径 (15.1)	鈍い黄 橙	鈍い黄 橙、橙	ヨコナデ、 タタキ、 カキ目	ヨコナ デ、タ タキ、 カキ目	良		粗砂多
61	16	14	33	88	B・3.4区 第2～ 3層	包含層	土師器 灯明皿	口径 8.4 底径 (1.4)	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ	指ナデ、 ヨコナ デ	やや 良		粗砂微 灯明痕
62	16	14	40	88	C・D・2区	包含層	青磁椀	口径 (15.7) 器高 底径 (3.6)							(素地) 灰 白、緻密、 堅緻 (釉) 緑釉
63	16	14	38	88	D・3区 第2～ 3層	包含層	加賀焼 甕	口径 器高 底径 (6.7)	灰白	灰	押印、ヘ ラナデ	ロクロ ナデ、 指頭圧 痕	良		粗砂
64	16		42	88	A区中	包含層	珠洲焼 すり鉢	口径 (29.8) 底径 (6.4)	灰	灰	ロクロナ デ	ロクロ ナデ、 おろし 目	良		海綿骨針含 む
65	16		44	88	A、B・2 ～8区 東半側	表面採集		底径 (8.3)	暗灰	暗灰		工具に よるナ デ	良		礫少 (素地) 灰 色
66			39	88	C、D・2区	包含層	白磁杯	器高 (3.6) 底径 (1.1)							(素地) 灰 白、気泡少、 堅緻 (釉) 透明、 内外とも貴 入細

第4章 第2次調査の成果

第1節 調査方法

第2次調査での調査方法

本事業は国道157号線バイパスの改修工事に係る事前調査である。本体工事が半永久的な構築物であるため、地山（無遺物層）までを調査対象として発掘調査を実施した。

調査区は南北に伸びる、長方形を範囲としている。地区割は改修工事設計図上の道路幅員中央を軸として任意にグリットを設定した。縦軸は南から北へ順に0Y～230Y、横軸は西から東へ順に0～40Xとして、10m間隔にグリット杭を打設した。なお、国土座標（旧）北から任意グリット南北軸線は西に11°振れる。

現地調査においては、遺構面を確実に抑えられる深度まで機械による掘削を行った。地山をT.P. + 32.9～33.9mで確認した後に、人力による平面での調査を行った。そして、調査区壁面での土層観察、平面での遺構検出を行った。遺構面数は1面のみとなる。調査終了後は、機械によって埋め戻し作業を行い、調査を完了した。

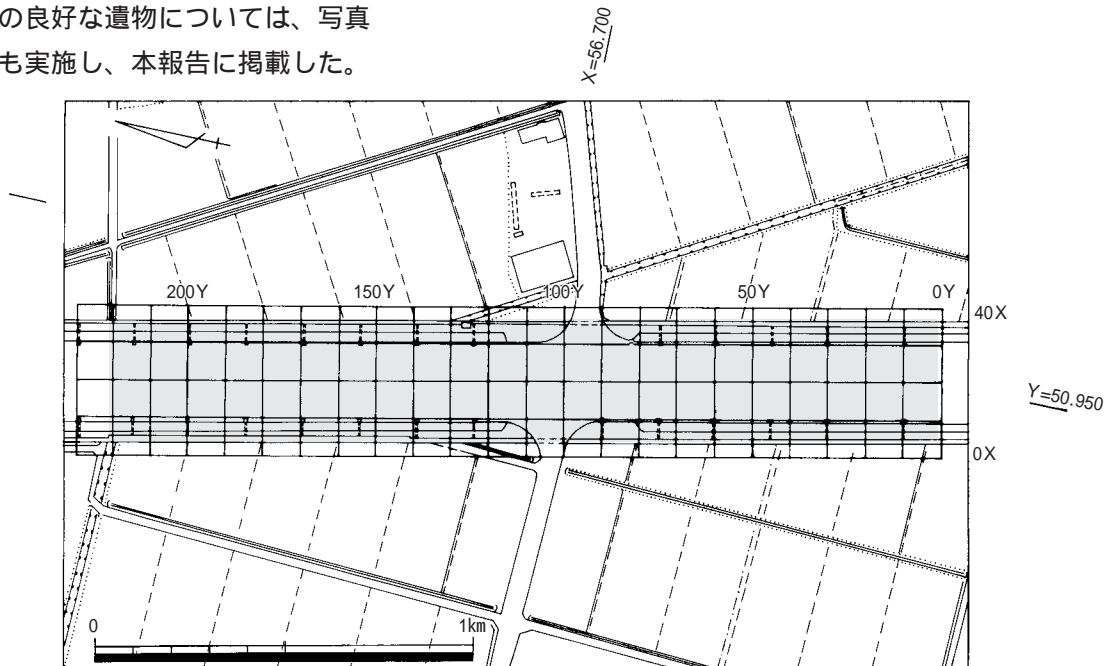
本年度の調査成果によって、既存の遺跡範囲が広がる可能性が高いため、調査区北端より420mまでの道路改修工事予定地を対象に試掘調査を行った結果、遺跡の存在を確認し、来年度に調査する予定となった。

遺構番号は遺構の種類により、各々順に付けた（旧番号）。後に、整理・検討して本報告に至る。

土層断面は、基本層序となる箇所にて図化記録を行った。また、遺構検出面全体では、空中写真測量での図化作業を行った。個々の遺構や遺物出土状況等は適宜スケールを決定している。

遺構面、個々の遺構、土層断面等は、35mmカメラ・ブローニー判カメラによるモノクロ、リバーサルでの撮影を行った。また、ネガカラー、ストロボカメラを適宜使用した。

出土遺物は調査区・グリット別・層位・遺構ごとに分類の上、選別作業を経て、実測を行った。遺存状態の良好な遺物については、写真撮影をも実施し、本報告に掲載した。



第17図 第2次調査区位置図

第2節 基本層序

基本層序

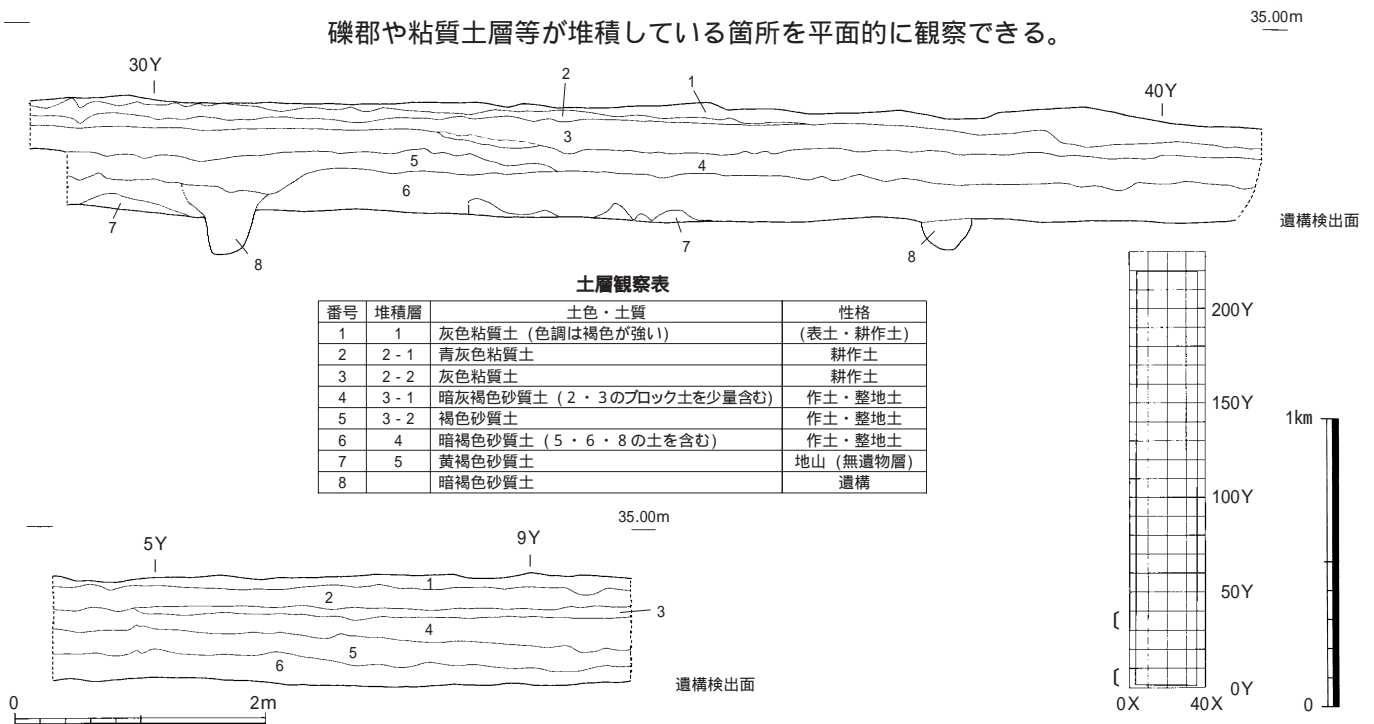
調査区周辺は、手取川の扇状地に立地し、標高が東南方向から北西方向に向かって低くなっていく。また、微高地や微低地といった複雑な地形を形成していたことが窺える。

基本層序は大別して5層となり、細分が可能なものは行った。1～2層では水田に伴う耕作土である。3・4層は作土であるが、整地層の可能性がある。遺物出土量は多い。5層は地山（無意物層）である。調査時では5層上面を遺構検出面として認識し、平面調査に移った。なお、本調査は西壁面での2箇所（30Yと40Y）の堆積状況が基本層序となる。

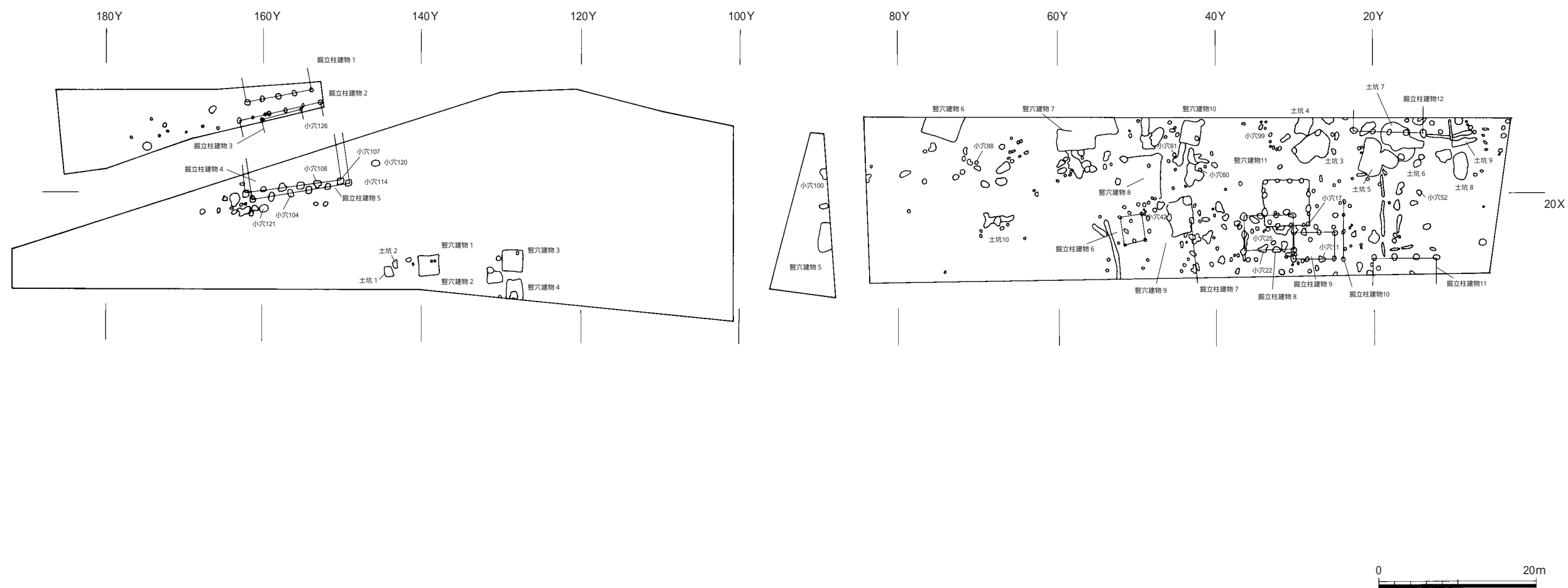
基本層序

層（細分層）

- 1層 (1) 層厚は約10cm。褐色粘土で、褐色が強く、やや粘性に富む。表土である。
- 2層 (2-1) 層厚約15cm。青灰色粘土である。耕作土である。
- (2-2) 層厚約15cm。青灰色粘土である。下部に鉄分の沈着が著しく、床土の可能性がある。耕作土と考える。
- 3層 (3-1) 層厚約20cm。暗灰褐色砂である。2層の堆積土がブロック状に少量含んでおり、上層からの攪拌を部分的にうけていると考えられる。作土であるが、整地層の可能性も考えられる。
- (3-2) 層厚約20cm。褐色砂であり、古代の遺物が多く包含する。作土と考えられるが、整地層の可能性もある。
- 4層 層厚約30cm。暗褐色砂であり、遺物も出土する。作土の可能性はある。
- 5層 黄褐色砂である。地山として認識した。約T.P.+33.5mである。他の箇所では、礫層や粘質土層等が堆積している箇所を平面的に観察できる。



第18図 第2次調査 4Y～10Y, 29Y～41Y 土層図



第19図 第2次調査 遺構配置図

第3節 調査成果

調査成果概要

当該調査において、竪穴建物11棟、掘建柱建物12棟、土坑、小穴等を検出した。これらの時期は主に7世紀後半～10世紀前半頃に比定される。また、13世紀前半頃の土坑も検出している。ただし、時期が推定できないものもある。

検出遺構

竪穴建物1 (第20図)

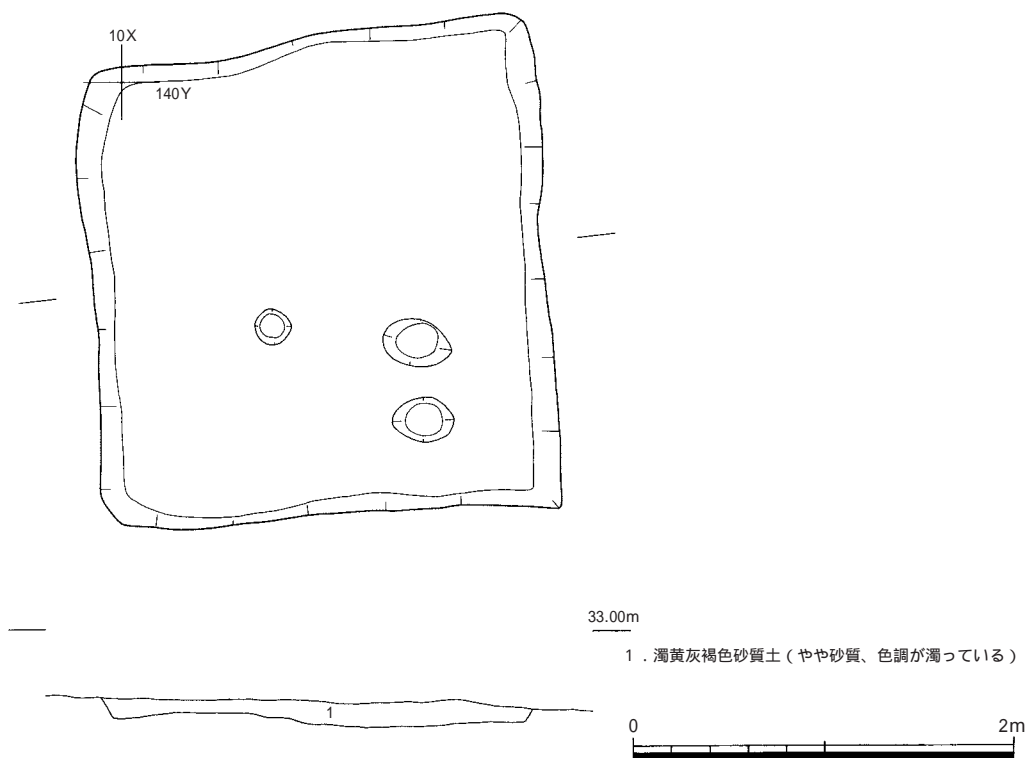
T.P. + 31.0mで検出した。11X、139Yに位置する。南北軸2.5m、東西軸2.4m、深さ0.1mである。平面形は一辺2.5mの方形を呈する。床面積は6.2㎡である。埋土は濁黄灰褐色砂質土で、短期間に埋められた可能性がある。遺構内には柱穴がないことから、壁立ちの竪穴建物を想定する。遺物は土師器の甕(1、2、3)が出土した。(1、3)は2次焼成を受けており、使用していたことが窺える。時期は8世紀前半に属する。

竪穴建物2 (第21図)

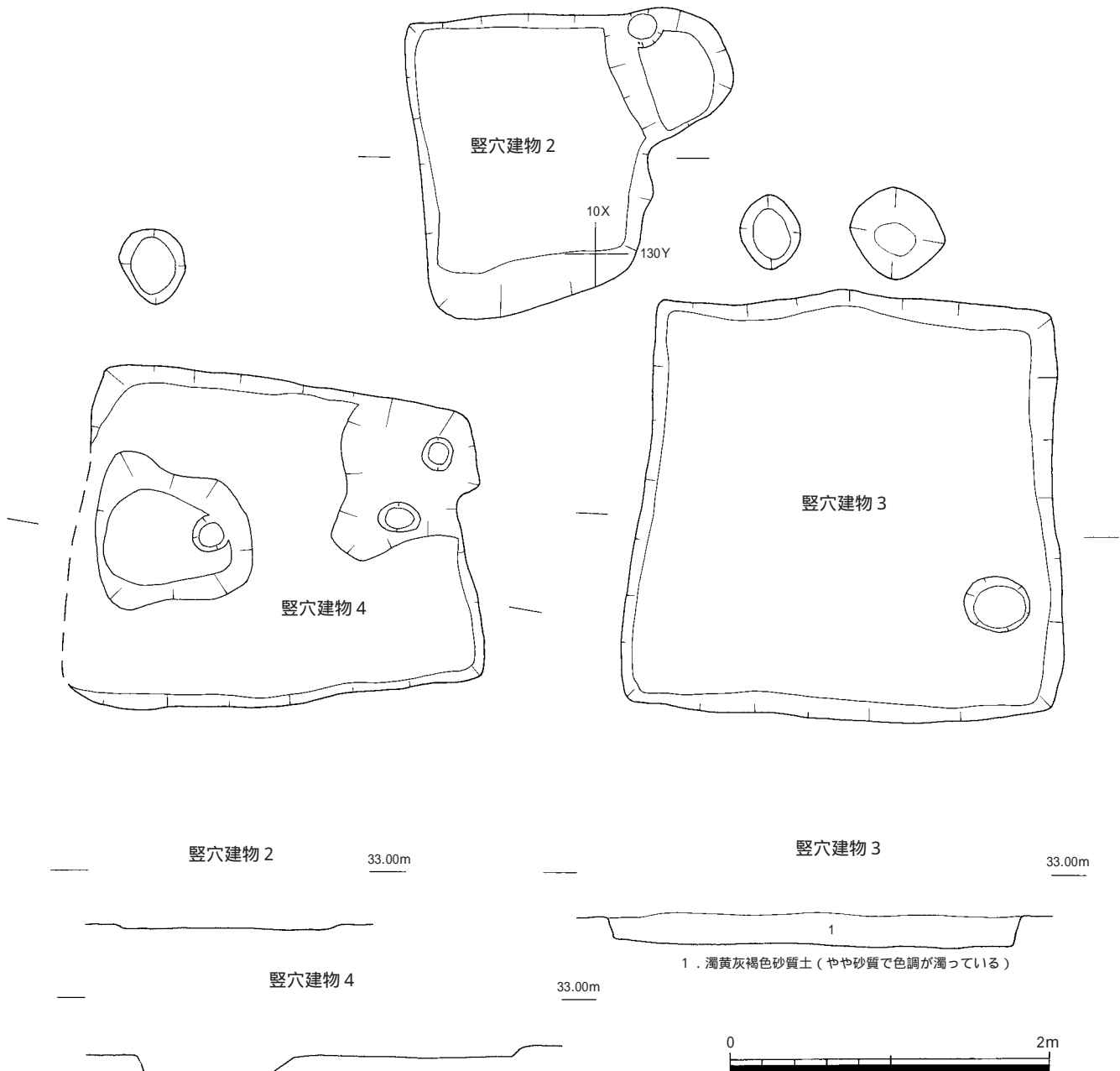
T.P. + 32.7mで検出した。10X、131Yに位置する。南北軸1.9m、東西軸2.1m、深さ0.03mである。検出してから深度は極めて浅いが、床面と考えられる。平面形は長方形で、一部張り出した箇所があり、床面から約0.1m落ち込む。遺物はなし。

竪穴建物3 (第21図)

T.P. + 32.7mで検出した。12X、128Yに位置する。南北軸2.7m、東西軸2.6m、深さ0.2mである。



第20図 第2次調査 竪穴建物1 平面・断面図



第21図 第2次調査 縦穴建物2・3・4 平面・断面図

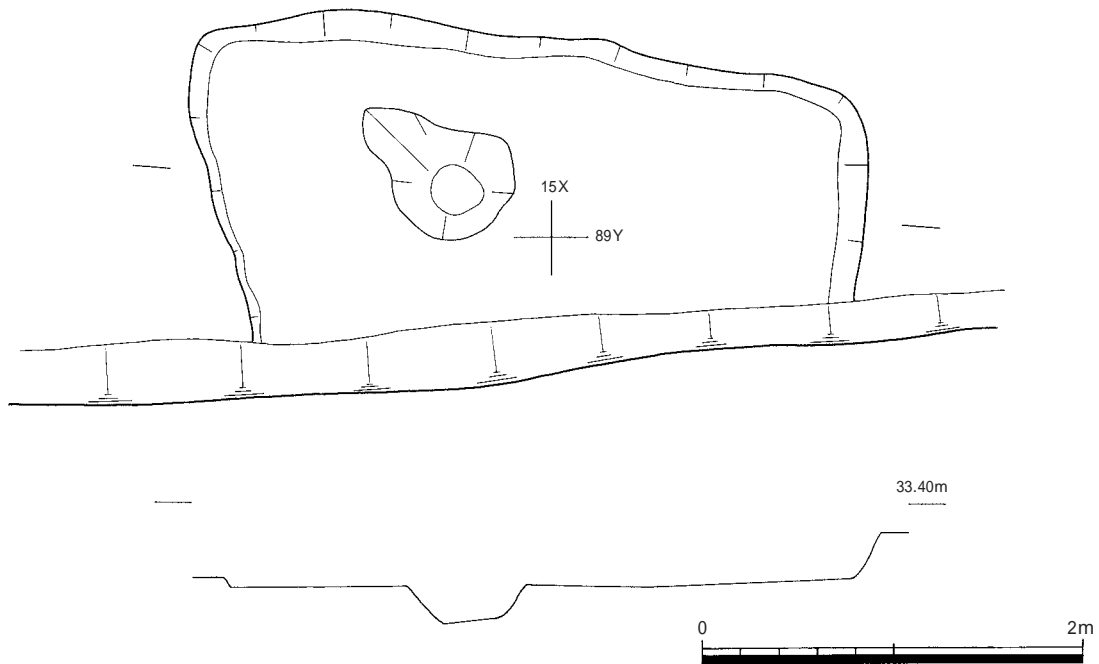
平面形は一辺2.5mの方形を呈する。床面積は6.3m²である。埋土は濁黄灰褐色砂質土で、短期間に埋められたと考える。壁立ちの縦穴建物を想定する。遺物は須恵器の無台杯身(4)、土師器の小型甕(5、6)が出土した。(4)は2次焼成を受け、(6)は外面に煤が付着し、2次焼成を受けていることから、使用していたと考えられる。また、鉄製刀子(7)も出土している。南東に深さ約0.4mの小穴がある。時期は8世紀前半。

縦穴建物4 (第21図)

T.P. + 32.7mで検出した。8X、128Yに位置する。南北軸2m、東西軸2.5m、深さ0.1mである。平面形は長方形を呈する。床面から約0.1m落ち込む箇所があるが、性格は不明。遺物はなし。

縦穴建物5 (第22図)

T.P. + 33.2mで検出した。15X、89Yに位置する。東西軸3.5m、深さ0.2mである。平面形は想定で



第22図 第2次調査 竪穴建物5 平面・断面図

一辺3.5mの方形を呈する。床面から約0.2m落ち込む箇所がある。建物内には柱穴がないことから、壁立ちの竪穴建物の可能性がある。遺物はなし。

竪穴建物6 (第23図)

T.P. + 33.4mで検出した。29X、75Yに位置する。南北軸4.5m、深さ0.2mである。平面形は推定で一辺4.5mの方形を呈する。建物内には床面から約0.2~0.3m深い小穴を多数検出している。柱穴の可能性を考えた場合、柱間の復元が困難なため、上層の遺構の可能性もある。壁立ちの竪穴建物と考える。遺物はなし。

竪穴建物7 (第24図)

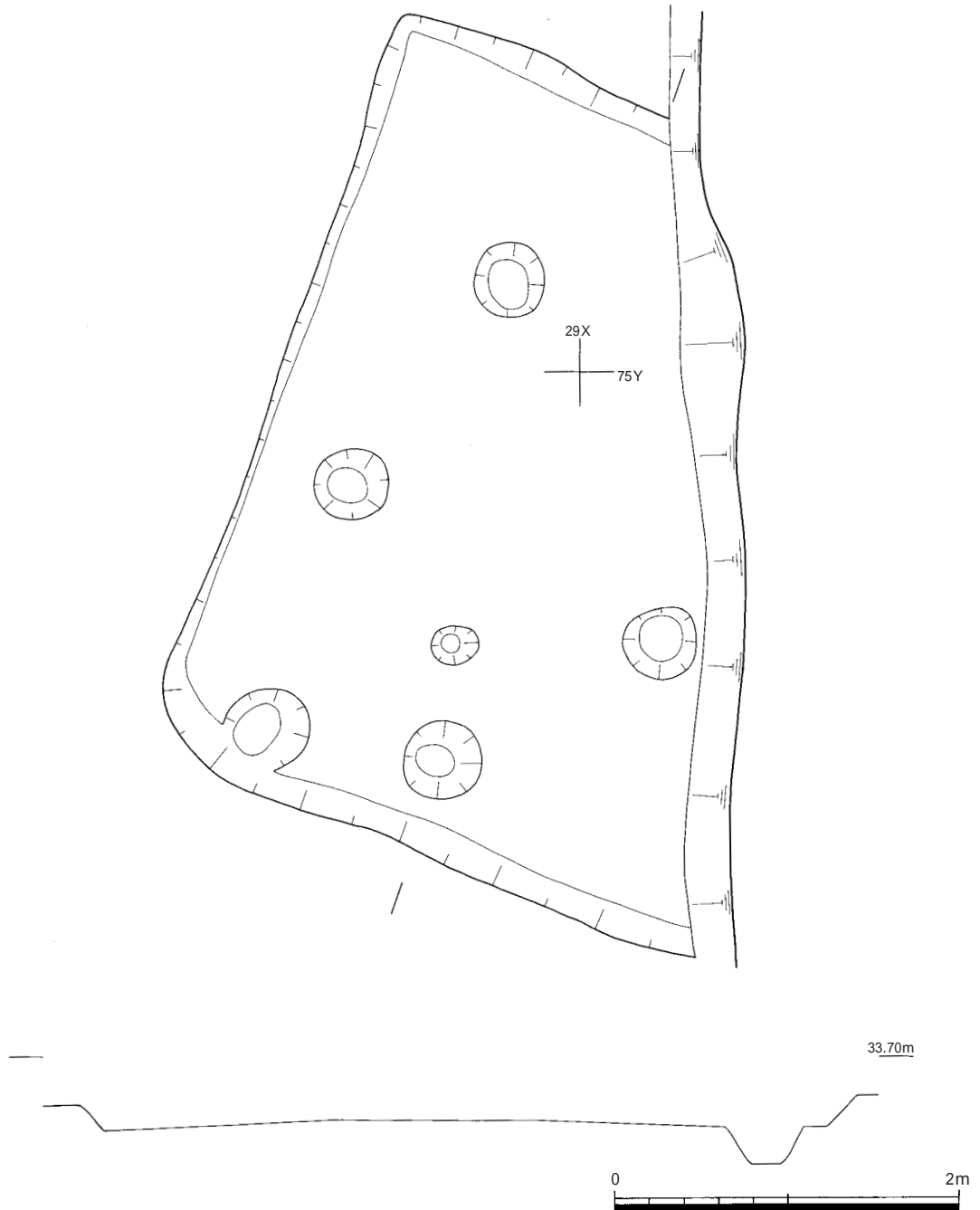
T.P. + 33.4mで検出した。27X、57Yに位置する。東西軸2.4m、深さ0.2mである。平面形は南北に長い長方形を呈する。一部、南に伸び東に振れるため、遺構の広がり認められたが、東側周辺の検出はできなかった。仮にこの広がりを竪穴建物とすると、重複している可能性があるかもしれないが、本報告では落ち込みと考えた。なお、建物中央で検出レベルに近い高さから須恵器の杯蓋(8~10)、土師器の外面に煤が付着している長胴甕(11)が出土している。時期は7世紀後半。

竪穴建物8 (第25図)

T.P. + 33.5mで検出した。22X、50Yに位置する。東西軸5.3m、深さ0.2mである。建物の北辺、西辺は検出できなかった。建物内には焼土が広がっている状況で検出できた。また、床面より深さ約0.2mの小穴を検出しているが性格は不明である。壁立ちの竪穴建物と考える。遺物は須恵器杯身(12)、土師器の長胴甕(13)、鉄製釘(14)が出土している。時期は7世紀後半~8世紀後半に属する。

竪穴建物9 (第25図)

T.P. + 33.5mで検出した。18X、45Yに位置する。南北軸3.2m、東西軸4.1m、深さは0.1~0.2mである。平面形は東西に長い長方形を呈する。建物内には床面から約0.2m深い小穴等を検出しているが、柱穴の可能性は低い。床面積は13.1²mである。埋土は濁黄灰褐色砂質土で、短期間に埋められたと推定する。壁立ちの竪穴建物と考える。遺物は須恵器の杯蓋(15、16)、土師器の長胴甕(17、18)が出土しており、(17)は外面に煤が付着している。時期は8世紀前半と考える。



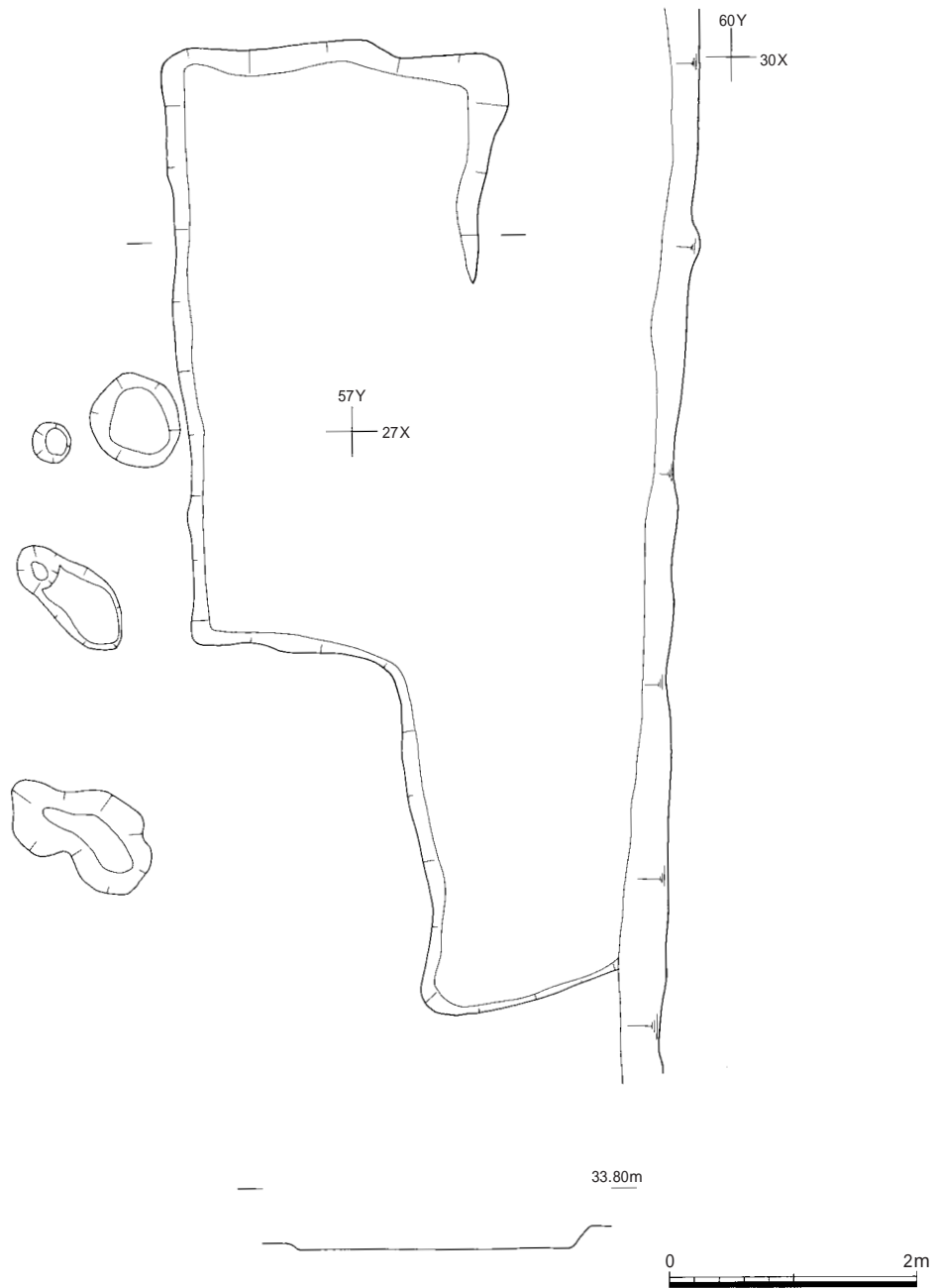
第23図 第2次調査 竪穴建物6 平面・断面図

竪穴建物10 (第26図)

T.P. + 33.6mで検出した。28X、43Yに位置する。南北軸2.5m、東西軸2.8m、深さ0.1mである。埋土は濁黄灰褐色砂質土で、短期間に埋められたと推定する。平面形は方形で、一部、南東に張り出した箇所がある。建物内に床面から約0.2m落ち込む小穴を検出したが、性格は不明である。床面積は7㎡である。壁立ちの竪穴建物と考える。遺物はなし。

竪穴建物11 (第27図)

T.P. + 33.6mで検出した。20X、30Yに位置する。南北軸5.6m、東西軸5.6m、深さ0.1mである。平面は一辺5.6mの方形を呈する。東西辺は1.7m間隔で柱穴が配置されている。その内2本は北側と南側とで対称となっており、比較的径が大きい(径0.6m)のが特徴である。南北辺でも1.5mごとに配



第24図 第2次調査 竪穴建物7 平面・断面図

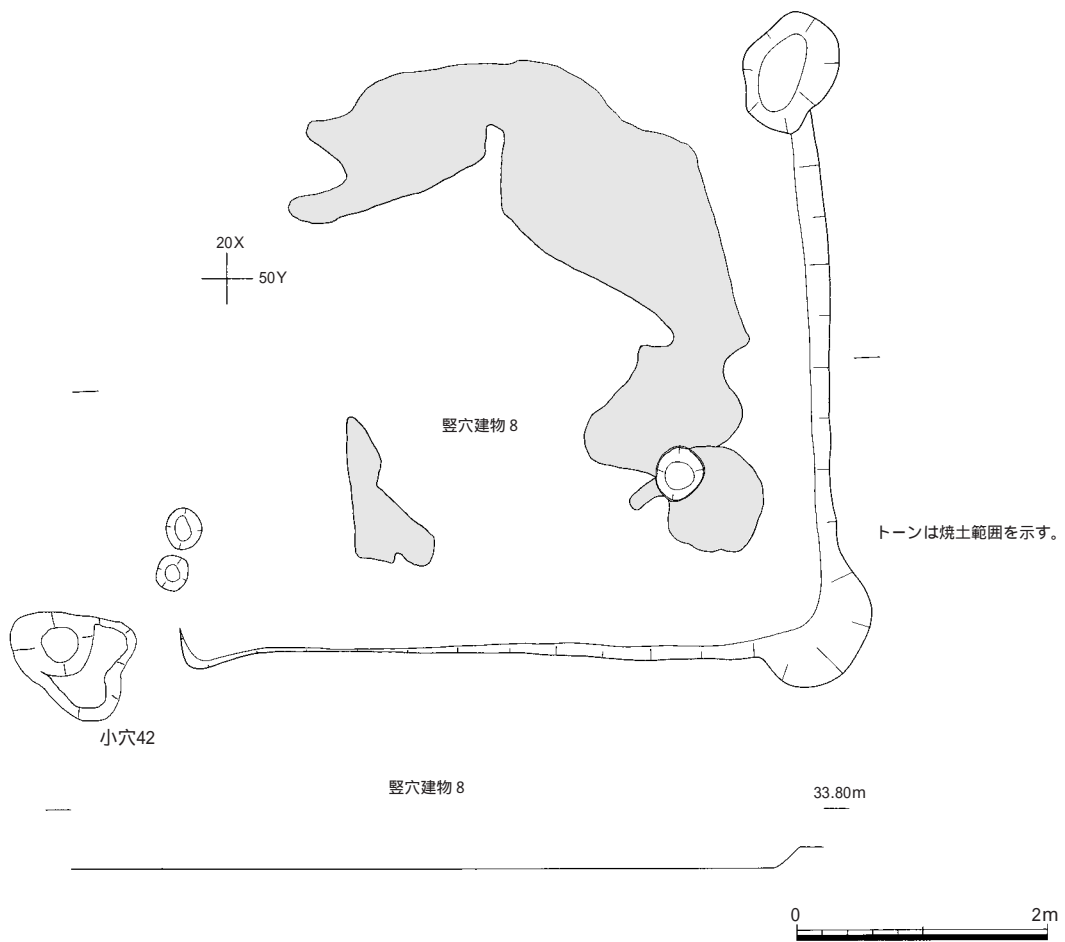
置された規則性のある小穴群（径0.3m）を検出した。前者は、床面より深さ0.35～0.5m、後者で0.2mである。建物内では、粘土が広がっている状況で検出できた。ただし、床面から約0.2m深い小穴等があるが、柱穴にはならない。床面積は31.3㎡である。これらは壁立ちの竪穴建物と考える。4辺にある小穴群は壁の中に柱を組み込ませた構造であったと推定する。遺物はなし。

掘建柱建物1（第28図）

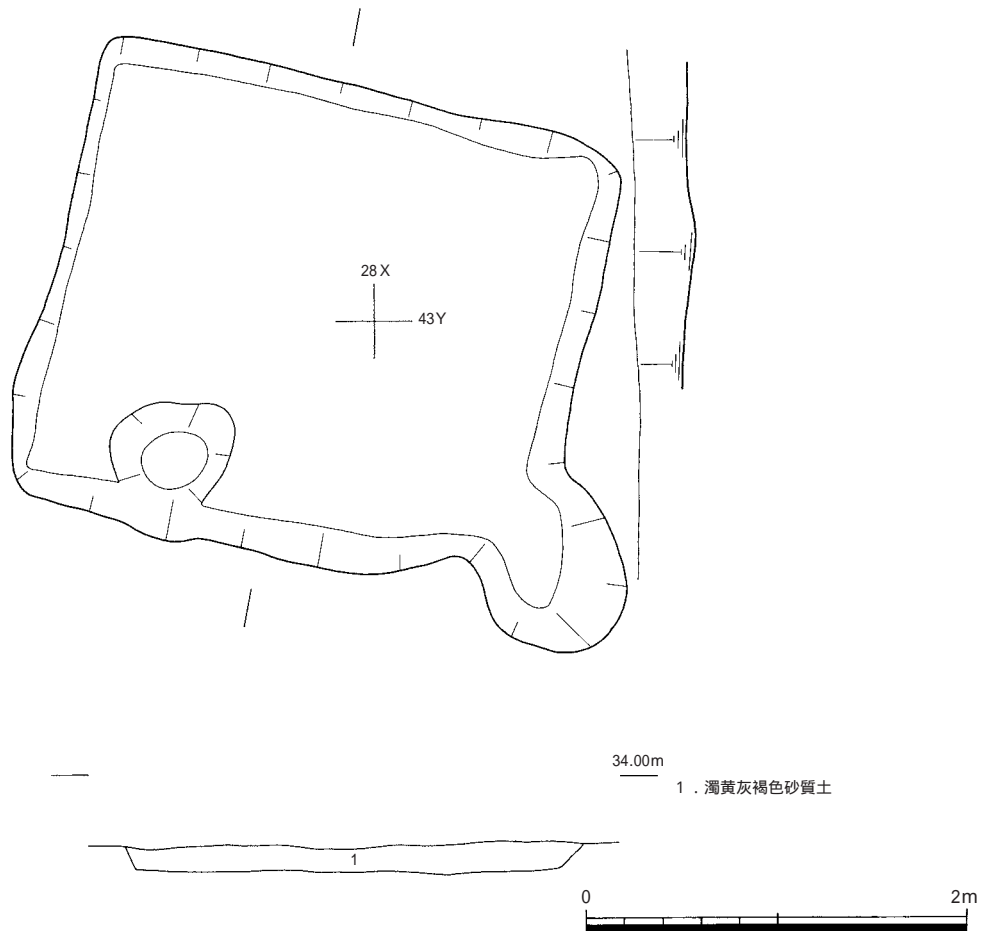
T.P. + 32.3mで検出した。33X、155Yに位置する。主軸は、座標北より西へ22°に振る。南北方向で梁間4間が認められたが、東西方向の梁間は調査区外に伸びる可能性が高い。柱間は北から2m、2.2m、2.0m、2.2mを測る。遺物はなし。

掘建柱建物2（第28図）

T.P. + 32.3mで検出した。30X、60Yに位置する。主軸は座標北より西へ24°に振る。南北方向で梁間



第25図 第2次調査 縦穴建物8・9 平面・断面図



第26図 第2次調査 竪穴建物10 平面・断面図

5間が認められたが、東西方向の梁間は調査区外に伸びる可能性が高い。柱間は北から1.8m、2.1m、2.2m、2.2m、2.4mを測る。小穴126より須恵器の有台杯身(106)が出土している。時期は9世紀後半～10世紀前半に比定する。

掘建柱建物3 (第28図)

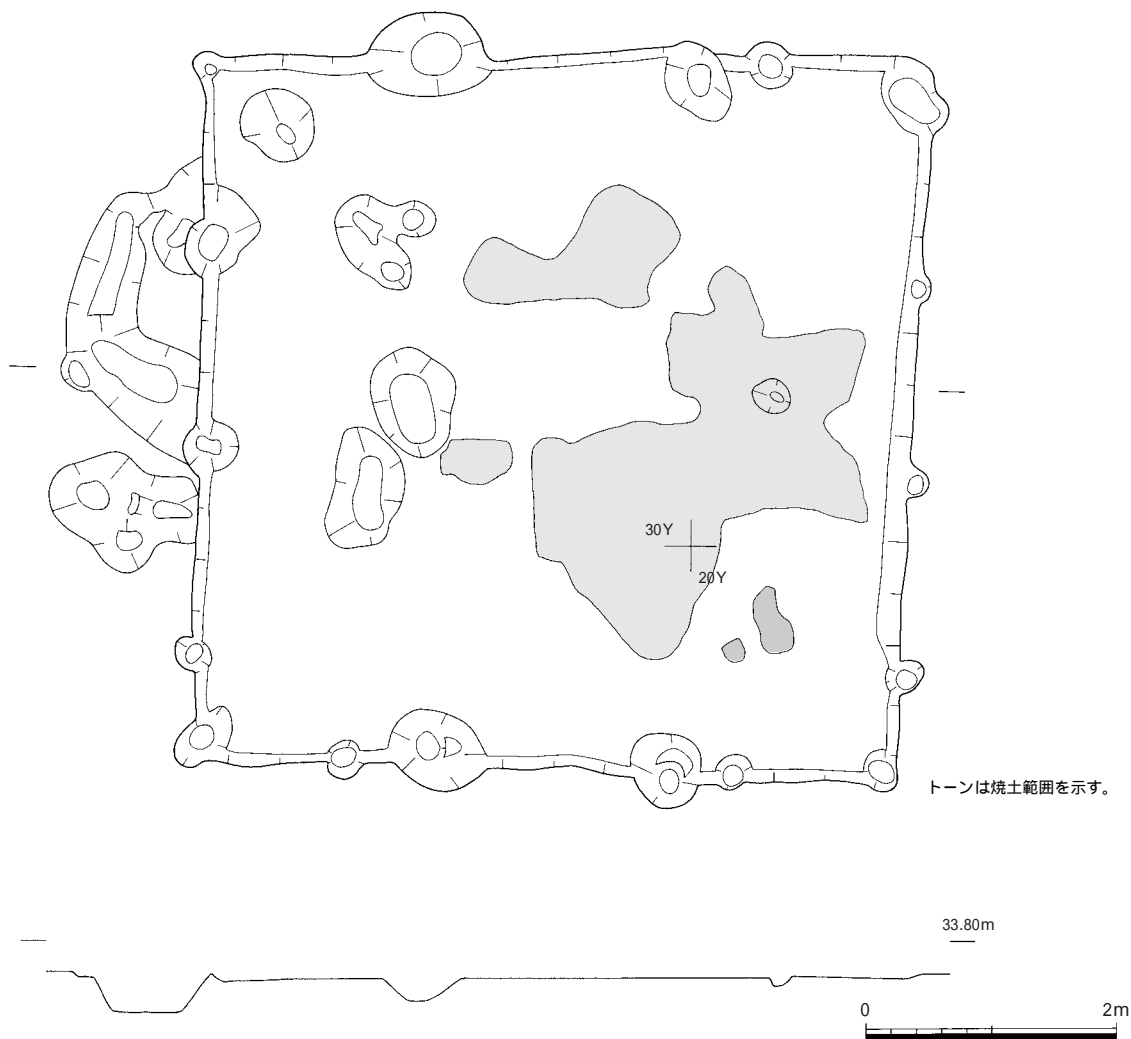
T.P. + 32.3mで検出した。30X、157Yに位置する。主軸は、座標北より西へ26°振る。南北方向で梁間2間が認められたが、東西方向の梁間は調査区外に伸びる可能性が高い。柱間は北から2.6m、2.7mを測る。遺物はなし。

掘建柱建物4 (第28図)

T.P. + 32.4mで検出した。22X、155Yに位置する。主軸は、座標北より西へ18°振る。南北方向で梁間5間が認められたが、東西方向の梁間は調査区外に伸びる可能性が高い。柱間は北から2.3m、2.7m、2.1m、2.1m、3.2mを測る。小穴107では、時期が8世後半～10世紀前半に属する須恵器の杯蓋(94、95)、有台杯身(96)は大甕(97、98)、瓶(100)や内面黒色の土師器の椀(99)が出土している。一方、小穴108では須恵器の鉢(102)、内面黒色の土師器の皿(101)が出土している。時期は10世紀前半に属する。

掘建柱建物5 (第28図)

T.P. + 32.4mで検出した。21X、154Yに位置する。主軸は、座標北より西へ21°に振る。南北方向で梁間5間が認められたが、東西方向の梁間は調査区外に伸びる可能性が高い。柱間は北から2.4m、2.6m、2.4m、2.4m、2.7mを測る。小穴104では赤彩土器の椀(93)が出土した。時期は8世紀前半



第27図 第2次調査 竪穴建物11 平面・断面図

と考える。

掘建柱建物 6 (第29図)

T.P. + 33.4mで検出した。16X、50Yに位置する。主軸は、座標北より西へ19°振る。南北方向で梁間1間、東西方向で梁間1間が認められる。前者西側の柱間は2.7m、東側は2.8mである。後者は北側が3.5m、南側は3.2mとなる。面積は約8.6㎡。遺物はなし。

掘建柱建物 (柵) 7 (第29図)

T.P. + 33.6mで検出した。13X、43Yに位置する。東西方向に並ぶ梁間3間が認められた。東から2.2m、2.0m、2.2mである。調査区外に柱穴が伸びる可能性があるため、正確には何間か不明である。柱穴からの遺物はなし。東端の柱穴は8世紀前半に比定している竪穴建物9と重複関係にあり、新旧関係は当該遺構が新しいと考える。

掘建柱建物 8 (第30図)

T.P. + 33.6mで検出した。14X、32Yに位置する。主軸は、座標北より西へ22°振る。南北方向で梁間3間、東西方向で梁間2間が認められる。前者西側の柱間は北から1.1m、1.05m、1.1m、東側は10.5m、0.95m、1.2mである。後者は北側が東から1.1m、1.0m、南側は1.05m、1.15mである。面積は約6.8㎡となる。遺物はなし。竪穴建物11と重複関係にあるが、当該遺構が新しいと考える。

掘建柱建物9とは重複関係にあり、建て替えがあった。ただし、1つの柱穴が同様の位置で認めら

れるが、平面・断面での切り合い関係が確認できなかったので、新旧関係は不明である。時期は古代の範疇で捉える。

掘建柱建物 9 (第30図)

T.P. + 33.6mで検出した。14X、29Yに位置する。主軸は、座標北より西へ22°振る。南北方向で梁間3間、東西方向で梁間1間が認められた。前者西側の柱間は北から0.85m、1.0m、0.75m、東側は0.6m、0.95m、1.1mである。後者は北側が1.7m、南側は1.6mである。面積は約4.4m²となる。柱穴からの遺物は小穴11からは打製石斧(石鏃)(81)が出土しているが、混入と考える。また、小穴17から鉄製刀子(82)が出土している。柱を抜きとった際に埋めたのか埋まったのかは不明であるが、建物の廃棄に伴う祭祀に関係する可能性がある。時期は古代の範疇で捉える。

掘建柱建物(柵) 10 (第30図)

T.P. + 33.6mで検出した。14X、24Yに位置する。東西方向に並ぶ梁間3間が認められた。柱間は東から1.6m、2.1m、3.5mである。この並びにわずかに南にずれる小穴(深さは約0.2m)があるが、一連のものとする。柱穴からの遺物はなし。

掘建柱建物11 (第31図)

T.P. + 33.7mで検出した。11X、16Yに位置する。主軸は、座標北より西へ11°振る。南北方向で梁間3間が認められたが、東西方向の梁間は調査区外に伸びる可能性が高い。柱間は北から2.6m、2.7m、2.6mである。柱穴からの遺物はなし。

掘建柱建物12 (第31図)

T.P. + 33.9mで検出した。29X、20Yに位置する。主軸は、座標北より西へ10°振る。南北方向で梁間4間が認められたが、東西方向の梁間は調査区外に伸びる可能性が高い。柱間は北から2.4m、2.1m、2.2m、2.1mである。柱穴からの遺物はなし。

土坑 1 (第32図)

T.P. + 32.7mで検出した。10X、142Yに位置する。南北軸0.95m、東西軸1.4m、深さ0.1~0.2mである。平面は長方形を呈する。遺構内の底面では一段下がって落ち込む。遺物は須恵器の無台杯身(20)、外面に煤が付着している土師器の甕(19)が出土している。時期は9世紀前半に属する。

土坑 2 (第32図)

T.P. + 32.7mで検出した。11X、141Yに位置する。南北軸0.65m、東西軸1m、深さ0.1mである。平面は楕円形を呈する。遺物は須恵器で有台杯身(21、22)が出土している。時期は8世紀前半に属する。

土坑 3 (第33図)

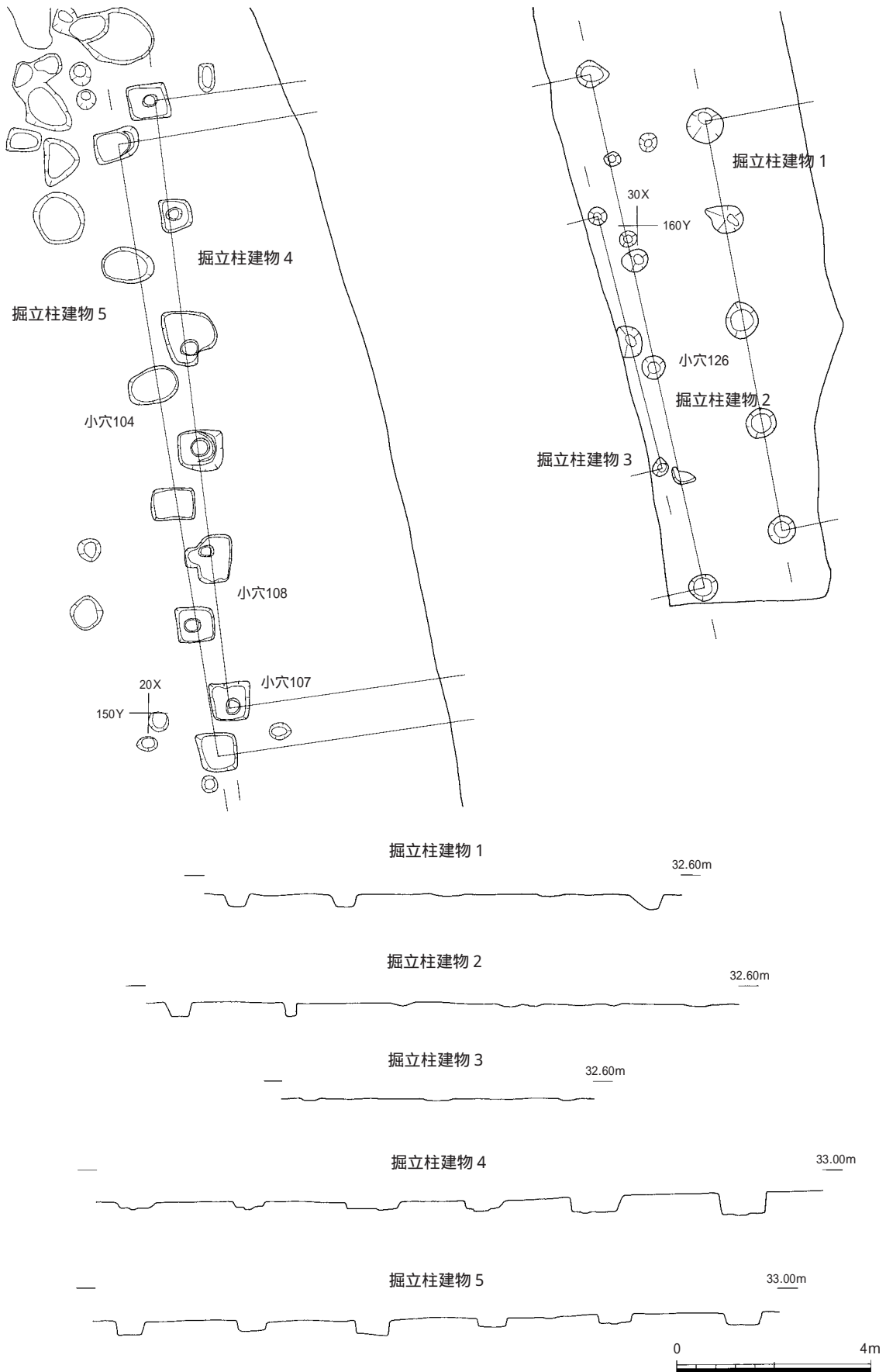
T.P. + 33.8mで検出した。36X、28Yに位置する。北西~南東軸4.7m、北東~南西軸2.7m、深さ0.2mである。平面は長方形に一部膨みをもつ。埋土は濁黄灰褐色砂質土で、短期間に埋められたと推定する。遺物は須恵器の杯蓋(23)、丹波・若狭地域の製作技術に類似している土師器の甕(24)が出土している。なお、打製石斧(石鏃)(25)も出土しているが、混入と考える。時期は7世紀後半。

土坑 4 (第33図)

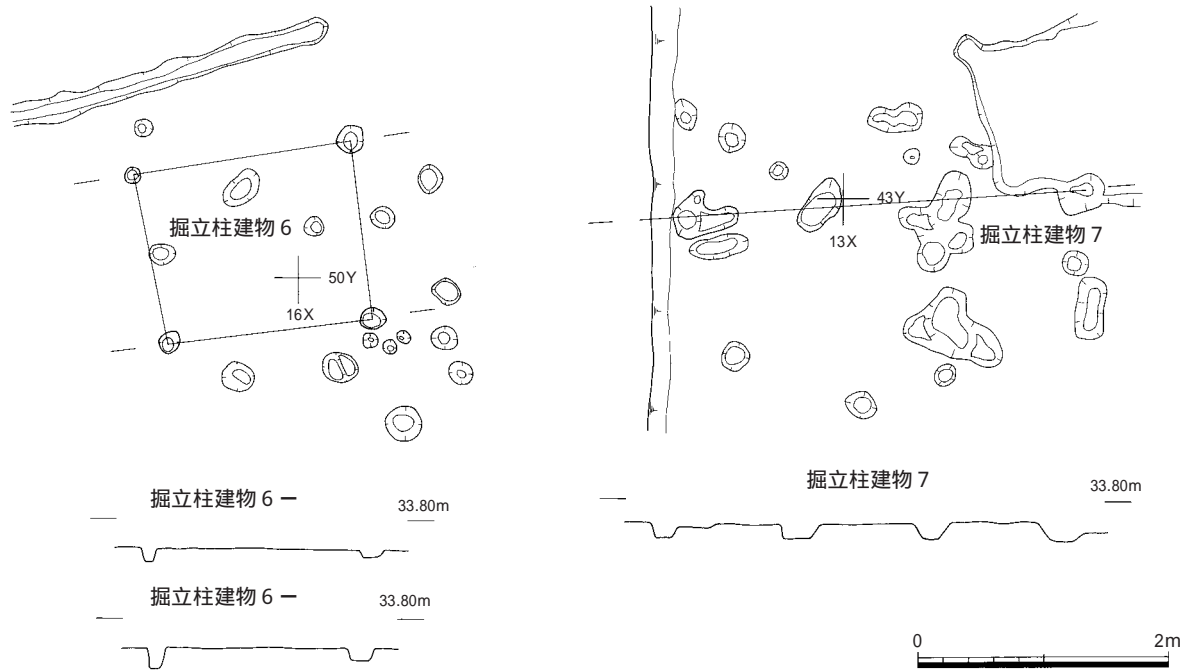
T.P. + 33.8mで検出した。38X、29Yに位置する。南北軸1.9m、深さ0.1mである。平面は長方形に近い形状を呈する。遺物はなし。

土坑 5 (第34図)

T.P. + 33.8mで検出した。25X、20Yに位置する。南北軸2.8m、東西軸4.6m、深さ0.2mである。平面は長方形に近い形状を呈する。遺物はなし。土坑6と近接しているが、調査時ではこれらを一連の



第28図 第2次調査 掘立柱建物1・2・3・4・5 平面・断面図



第29図 第2次調査 掘立柱建物6・7 平面・断面図

遺構として認識した。断面観察でも埋土が同一層であるからである。しかし、後になって平面・断面での再検証を行った結果、遺構（土坑）が重複していると考えた。ただし、新旧関係は不明である。当該遺構からは、須恵器の杯蓋（26～29）、有台杯身（30～32）が出土している。また、土師器の甕（33～38）も出土しており、中でも2次焼成を受けるもの（34、37）や内面に煤が付着（35、38）、外面に煤が付着（36）しているものも見られた。さらに、用途、機能が不明の板状鉄製品（39）も出土している。時期は7世紀後半～8世紀前半に属する。

土坑6（第29図）

T.P. + 33.8mで検出した。24X、18Yに位置する。東西軸2m、深さ0.2mである。平面は楕円形を呈する。土坑5との新旧関係は不明である。遺物はなし。

土坑7（第34図）

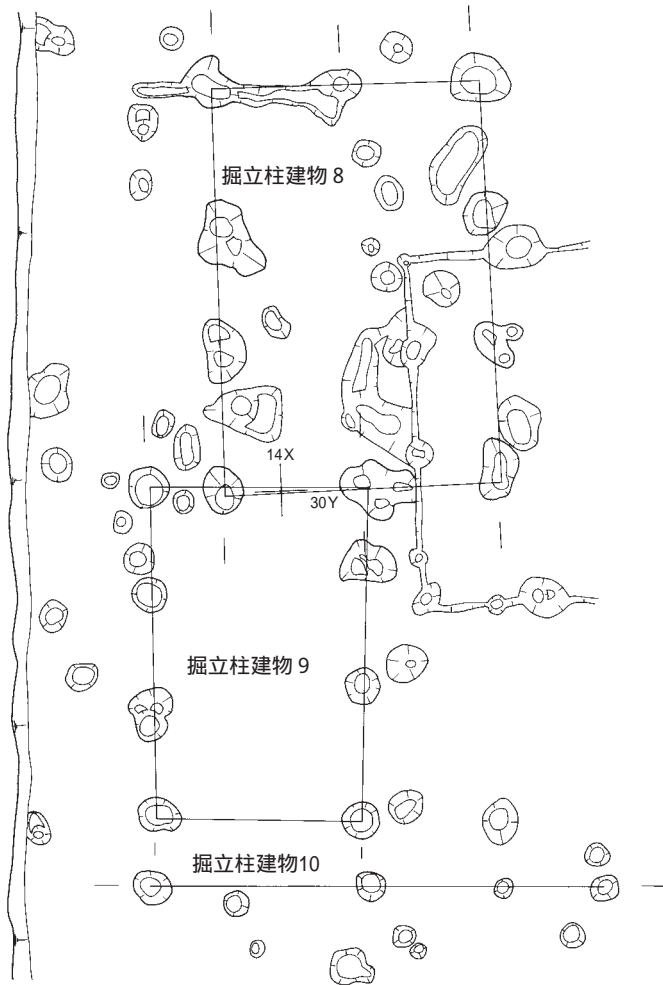
T.P. + 33.9mで検出した。27X、22Yに位置する。南北軸5.6m、東西軸3.4m、深さ0.1～0.3mである。平面は不整正円で南に伸びた形状を呈する。出土遺物は須恵器の蓋（40～42）有台杯身（43）無台杯身（44）、鍋（45）須恵器の壺もしくは瓶（47）、須恵器の大甕（48）、土師器鍋（46）、土師器の甕（49～52）がある。中でも、（49、51）は外面に煤が付着している。（50）は2次焼成を受ける。時期は7世紀後半～8世紀前半に属する。

土坑8（第35図）

T.P. + 33.9mで検出した。23X、9Yに位置する。南北軸1.8m、東西軸3.4m、深さ0.1mである。平面は楕円形を呈する。土坑内にある小穴は当該遺構に伴う可能性が低い。遺物は須恵器の杯蓋（53、54）、有台杯身（55）、無台杯身（56）高杯（58）が出土している。また、赤彩土師器の盤（57）や土師器の鍋（59、60）、甕（61、62）が出土している。時期は8世紀前半と考える。

土坑9（第35図）

T.P. + 33.9mで検出した。26X、9Yに位置する。南北軸3.1m、東西軸0.8m、深さ0.1mである。平面は楕円形を呈する。遺構内にある小穴は約0.3mの深さである。遺物は土師器の長胴甕（63）が出土している。時期は7世紀後半～8世紀前半に属する。なお、打製石斧（石鋤）（64）も出土している



掘立柱建物 8 - 34.20m



掘立柱建物 8 - 34.20m



掘立柱建物 8 - 34.20m



掘立柱建物 9 - 34.20m



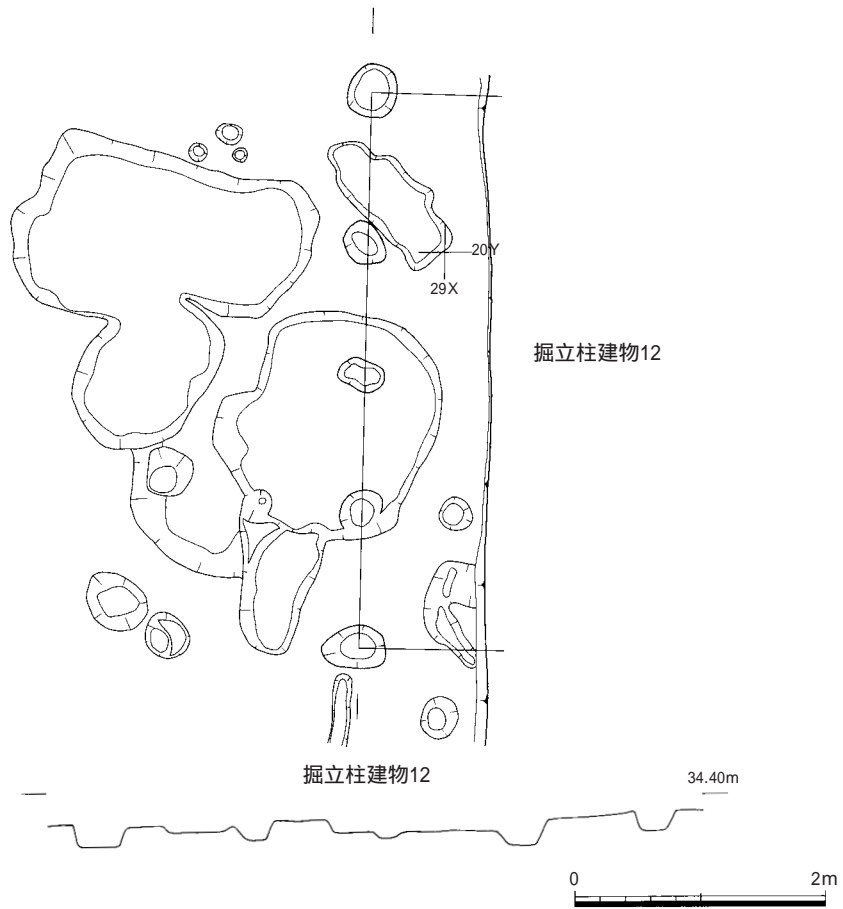
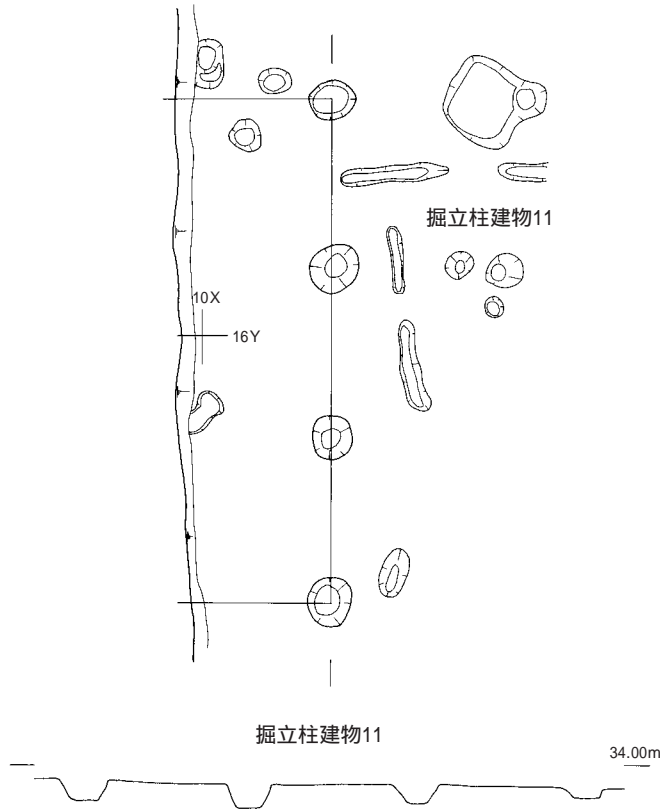
掘立柱建物 9 - 34.20m



掘立柱建物 10 34.20m



第30図 第2次調査 掘立柱建物 8・9・10 平面・断面図



第31図 第2次調査 掘立柱建物11・12 平面・断面図

が、混入と考える。

土坑10 (第35図)

T.P. + 33.5mで検出した。79X、15Yに位置する。この土坑の周囲は攪乱が著しく、明確な遺構の範囲を確定するのが困難であったため、平面では北東側のみおさえることができた。地形的に南西に向かって落ち込む。出土遺物の土師皿はT.P. + 33.45 ~ 33.5mでまとめて二十数個出土しており、正位のものが多い。それらの下には炭化物が薄く広がっていた。炭化物は植物質が炭化したものである。特筆すべきは、土師皿群の上から鉄製犁先^{からす}が出土したことである。出土時には鉄製犁先に藁の炭化物が付着していた。ただし、詳細な位置関係は不明である。遺物は土師器皿 (65 ~ 79)、鉄製犁 (80) が出土している。時期は13世紀前半である。図化できた遺物は15点あり、その中で土師器皿が2次焼成を受けているのは15点中9点で約60%を占めていることは、出土状況などを勘案しても、同一遺構内で火を受けていた可能性が高い。当該遺構は少なくとも土を掘り込み、埋め、斜面の一部分で何らかの植物を積み、その上に土師皿を並べてから一度に燃焼したと推測する。ただし、鉄製犁先を置いてから火をつけた可能性もある。さらに、犁先に藁のような植物の炭化物があることからその上に何らかの植物質がのっていた可能性がある。このような状況から、何らかの祭祀に関与した可能性が考えられる。

小穴25 (第36図)

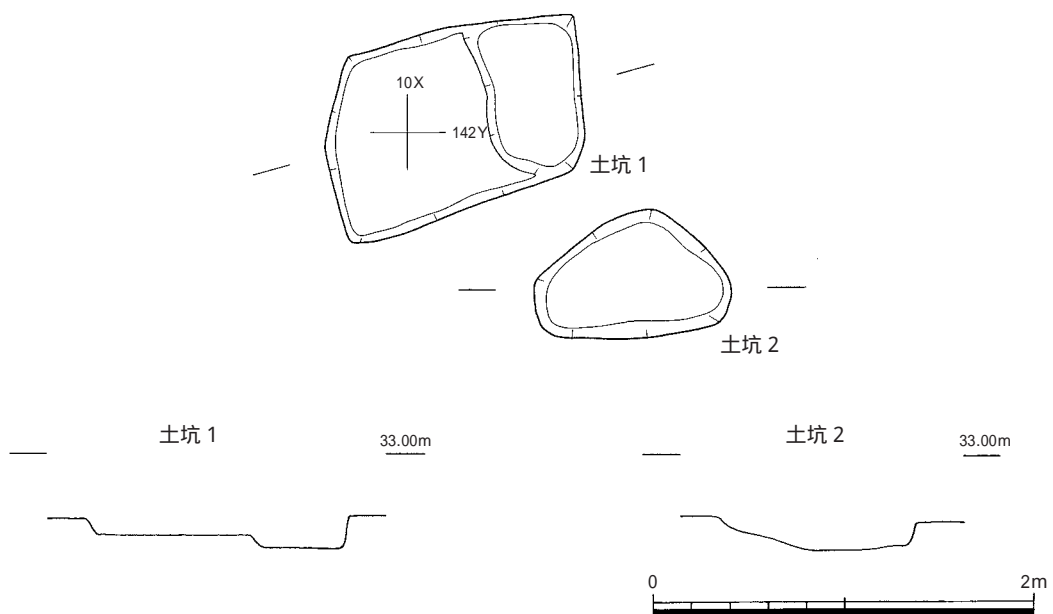
T.P. + 33.6mで検出した。16X、33Yに位置する。掘立柱建物8内と竪穴建物11付近にあり、関連する可能性がある。南北軸0.45m、東西軸0.5m、深さ0.15mである。平面は円形を呈する。遺物は土師器の甕 (85) が出土している。時期は7世紀後半 ~ 8世紀前半と考える。

小穴52 (第36図)

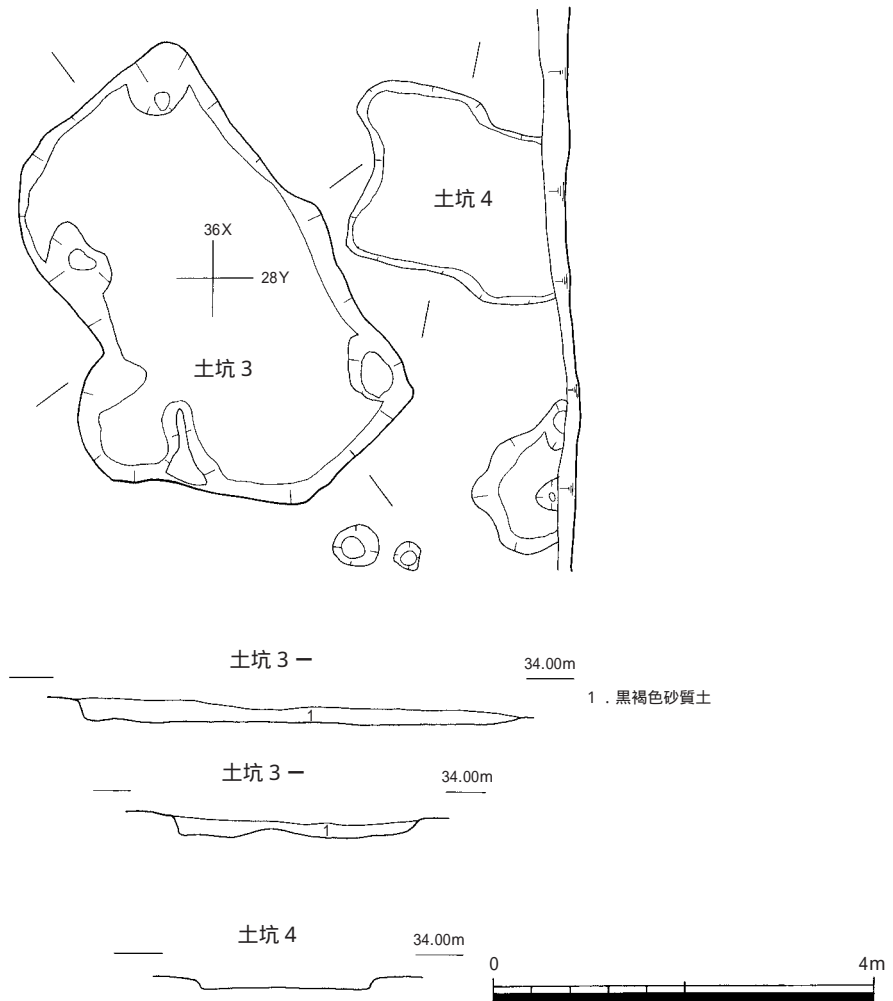
T.P. + 33.8mで検出した。21X、15Yに位置する。南北軸0.65m、東西軸0.8m、深さ0.35mである。平面は不整形円形を呈する。遺物は須恵器の杯蓋 (87) が出土している。時期は8世紀前半と考える。西側に近接して小穴があるが、切り合い関係は抑えられなかった。

小穴60 (第36図)

T.P. + 33.6mで検出した。23X、42Yに位置する。南北軸0.4m、東西軸0.45m、深さ0.3mである。



第32図 第2次調査 土坑1・2 平面・断面図



第33図 第2次調査 土坑3・4 平面・断面図

平面は円形を呈する。遺物は土師器の甕 (88) が出土している。時期は8世紀前半と考える。

小穴61 (第36図)

T.P. + 33.6mで検出した。25X、45Yに位置する。南北軸0.45m、東西軸0.55m、深さ0.15mである。平面は不整形円形を呈する。遺物は土師器の鍋 (89) が出土している。時期は8世紀前半と考える。

小穴88 (第36図)

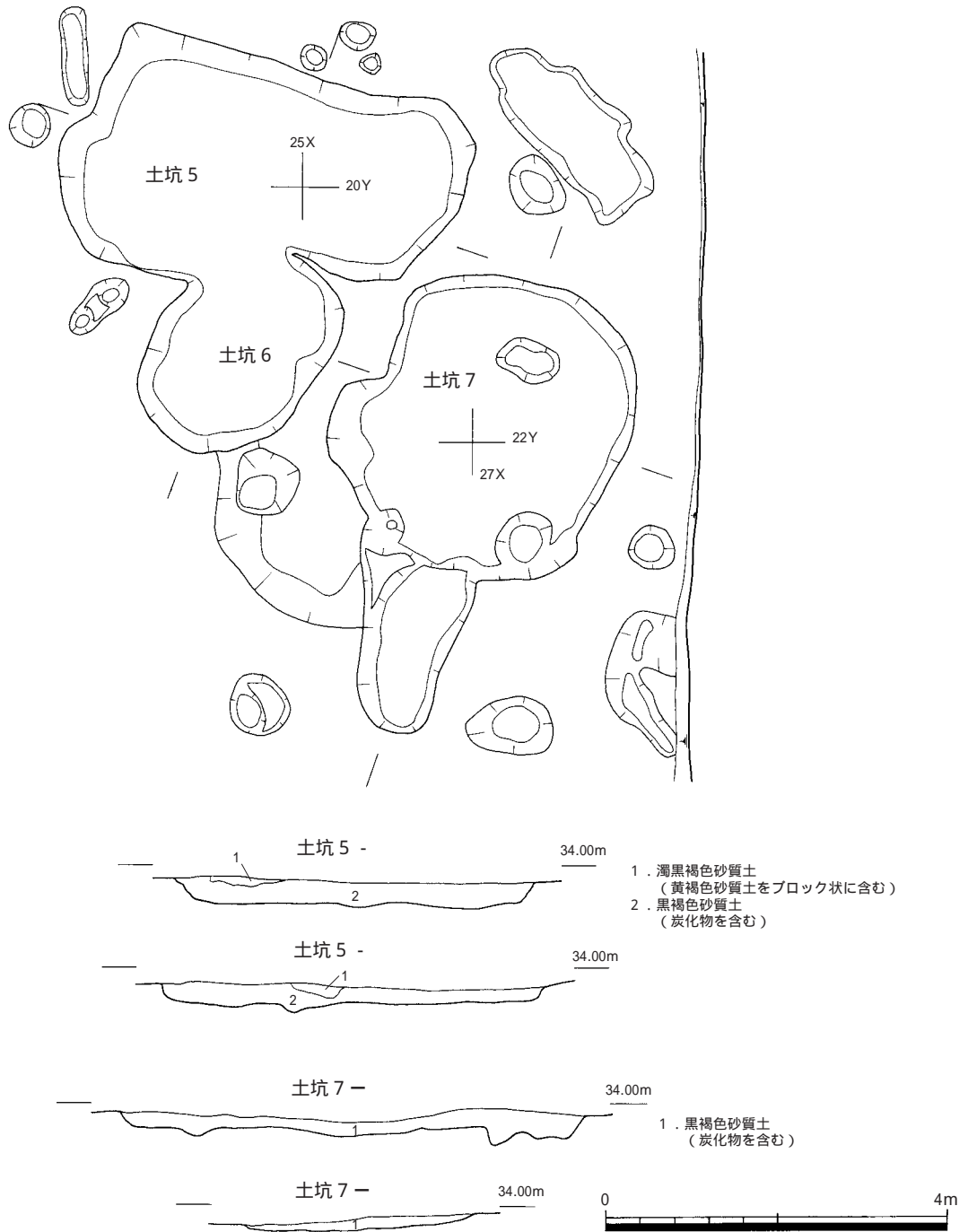
T.P. + 33.4mで検出した。24X、71Yに位置する。東西軸0.75m、深さ0.35mである。平面は楕円形に一部張り出したように落ち込みがある。須恵器の杯身 (90) が出土している。時期は9世紀前半と考える。

小穴99 (第36図)

T.P. + 33.6mで検出した。28X、34Yに位置する。南北軸0.35m、東西軸0.65m、深さ0.1mである。平面は楕円形を呈する。遺物は須恵器の杯蓋 (91) が出土している。時期は9世紀前半と考える。

小穴100 (第36図)

T.P. + 33.0mで検出した。23X、89Yに位置する。東西軸0.5m、深さ0.2mである。平面は不整形円形を呈する。須恵器の杯身 (92) が出土している。時期は7世紀後半～8世紀前半と考える。東側に近接して小穴があるが、切り合い関係を抑えられなかった。



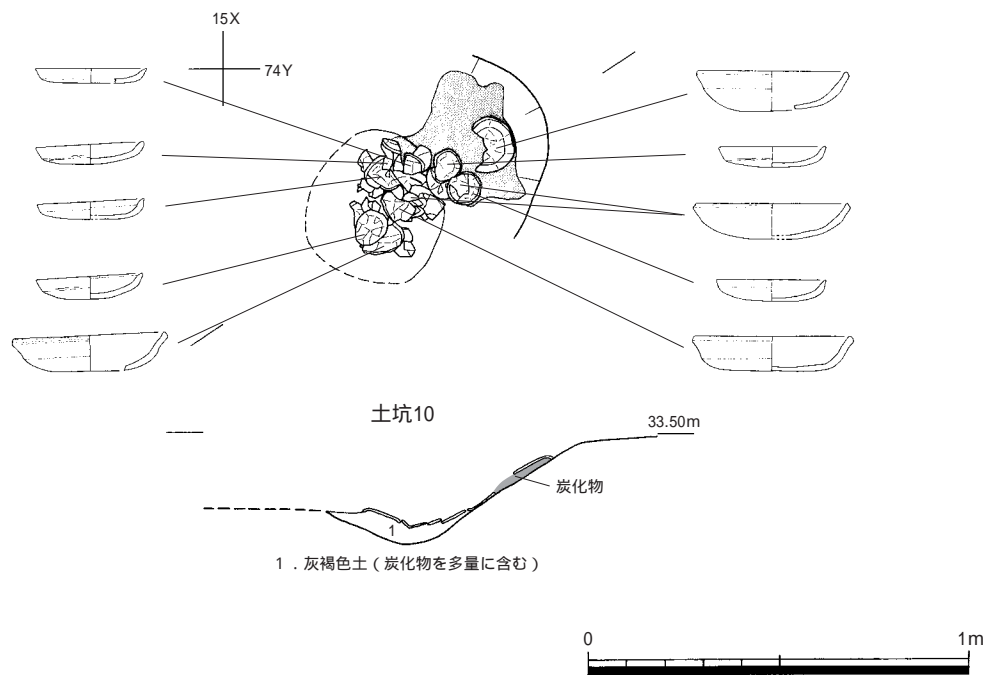
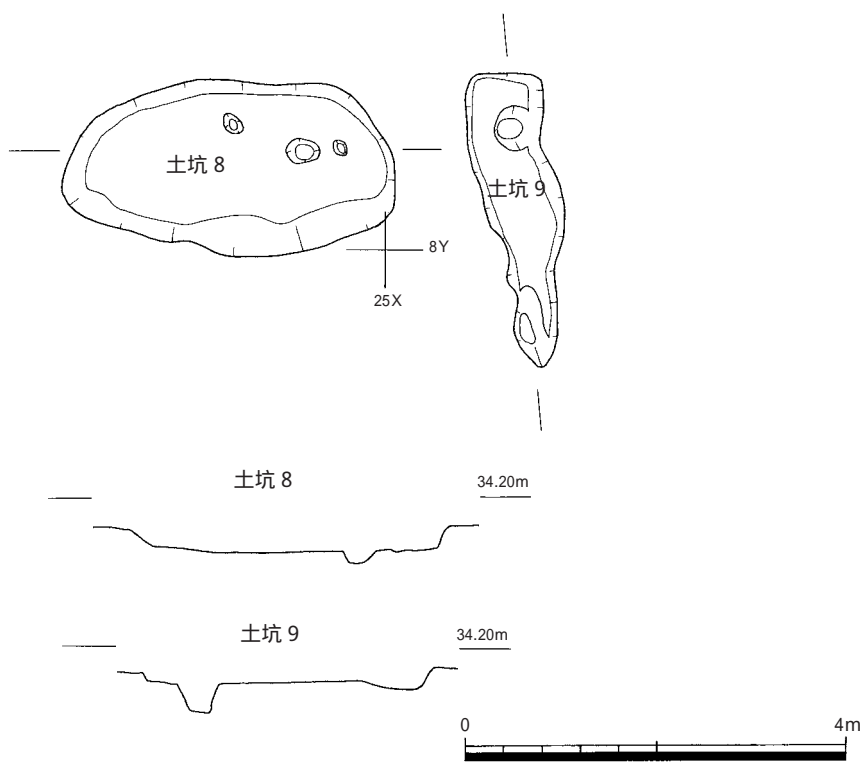
第34図 第2次調査 土坑5・6・7 平面・断面図

小穴114 (第36図)

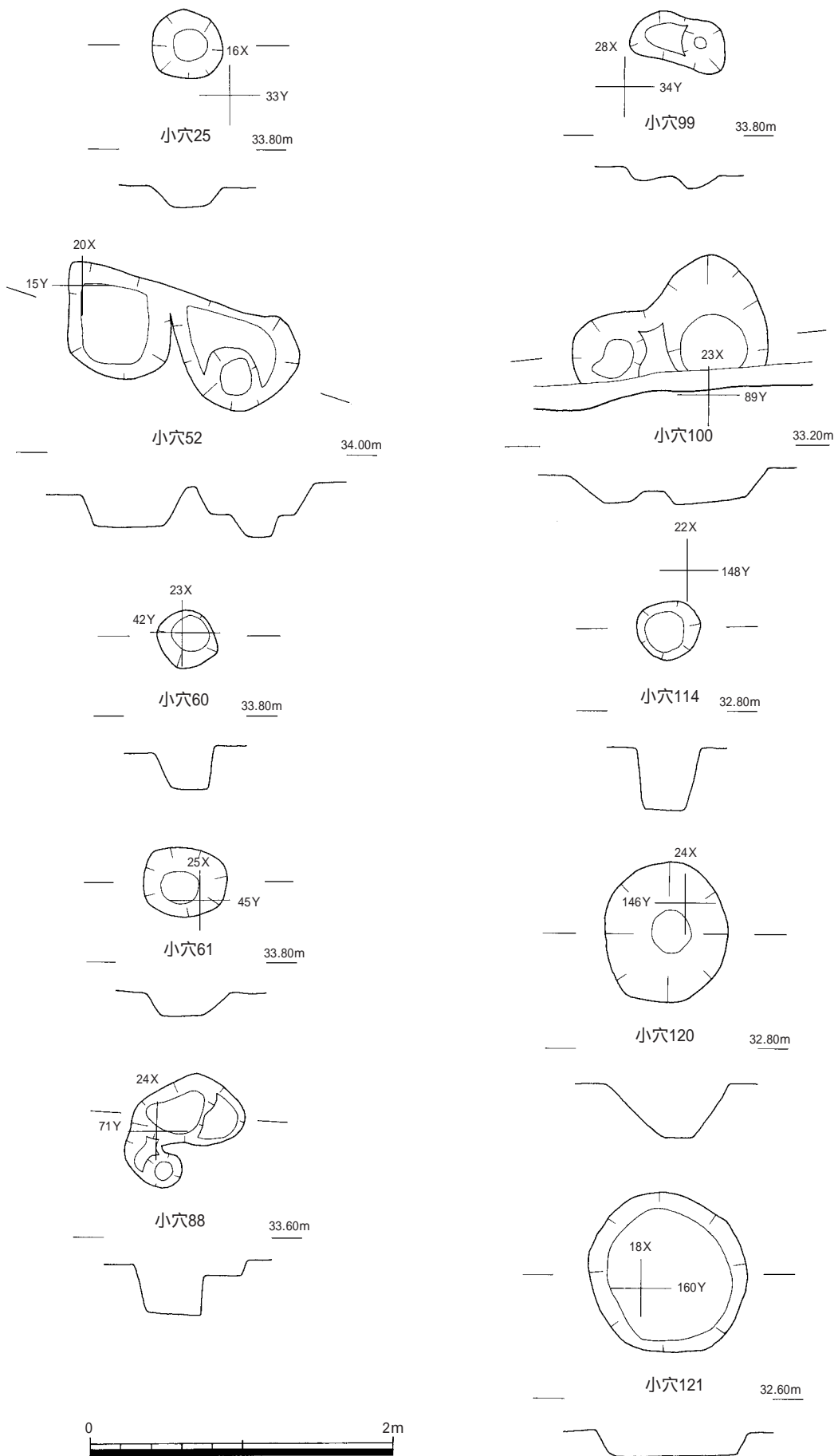
T.P. + 32.5mで検出した。22X、148Yに位置する。南北軸0.4m、東西軸0.4m、深さ0.4mである。平面は円形を呈する。遺物は須恵器の杯蓋 (103) が出土している。時期は8世紀前半と考える。

小穴120 (第36図)

T.P. + 32.5mで検出した。24X、146Yに位置する。南北軸0.85m、東西軸0.8m、深さ0.4mである。平面は円形を呈する。遺物は須恵器の大甕 (104) が出土している。時期は9世紀後半～10世紀前半と考える。



第35図 第2次調査 土坑8・9・10 平面・断面図



第36図 第2次調査 小穴25・52・60・61・88・99・100・114・120・121 平面・断面図

小穴121 (第36図)

T.P.+32.4mで検出した。18X、160Yに位置する。南北軸10.5m、東西軸10.5m、深さ0.15mである。平面は円形を呈する。遺物は須恵器の有台杯身(105)が出土している。時期は8世紀前半と考える。

- 出土遺物 -

本調査では多くの土器が出土しているが、遺構出土の遺物から報告していく。なお、図化、報告するのはその一部であることをあらかじめ断っておきたい。

小穴に関しては、土器を含むものが多数であるが、ここでは他の遺構との関係性が強いものを抽出して報告している。所属時期については、時期の推定の証左とするには慎重に検討する必要があるものも含まれる。また、出土遺物のほとんどは包含層出土であり、時代、器種ごとにまとめて報告したい。なお、遺物観察表を作成したため、それとあわせて参照されたい。

竪穴建物1

1、2、3は土師器の甕である。1、2が長胴甕。3が小型甕である。なお、1、3は2次焼成を受けている。これらの時期は8世紀前半に属する。

竪穴建物3

4は須恵器の無台杯身である。2次焼成を受ける。5、6は土師器の小型甕である。6は外面に煤が付着し、2次焼成を受けている。7は鉄製刀子である。時期は8世紀前半。

竪穴建物7

8～10は須恵器の杯蓋である。8は7世紀前半に属し、他の遺物より古い様相を示す。11は土師器で長胴甕である。外面に煤が付着している。在地の製作技法を有している。時期は7世紀後半。

竪穴建物8

12は須恵器の無台の杯身。13は土師器で長胴甕と考える。胎土には海綿骨針を少量含む。14は鉄製釘で頭部を欠損しているがそれ以外は残存している。時期は7世紀後半～8世紀後半と考える。

竪穴建物9

15、16は須恵器の杯蓋である。17、18は土師器の甕で、いずれも長胴甕である。17は外面に煤が付着している。時期は8世紀前半に属する。

土坑1

19は土師器の甕である。外面に煤が付着している。20は須恵器の無台杯身である。時期は9世紀前半に属する。

土坑2

21、22は須恵器で有台の杯身である。いずれも時期は8世紀前半に属する。

土坑3

23は須恵器の杯蓋である。内面に使用痕あり。24は土師器の甕で、丹波・若狭地域の製作技術に類似している。色調は暗赤褐色で、口縁部は上外方に伸び、さらに外方に伸びるのを特徴とする。時期は7世紀後半。なお、25は打製石斧(石鍬)であるが、混入と考える。

土坑5

26～32は須恵器である。26～29は杯蓋である。26、27の内面には使用痕がある。30～32は有台の杯身である。30の内面には使用痕がある。33～38は土師器の甕である。34、37は2次焼成を受ける。35、38は内面に煤が付着し、36は外面に煤が付着している。39は板状鉄製品で用途、機能は不明である。時期は7世紀後半～8世紀前半に属する。

土坑 7

40～42は須恵器の蓋である。42は生やけである。43～44は須恵器の杯身で、43は有台である。44は無台である。45、46は鍋で、前者が須恵器。後者が土師器である。47は須恵器の壺もしくは瓶と考える。48は須恵器の大甕。49～52は土師器の甕となる。49、51は外面に煤が付着している。50は2次焼成を受ける。時期は7世紀後半～8世紀前半に属する。

土坑 8

53、54は須恵器の杯蓋である。53は内面に使用痕がある。55、56は須恵器の杯身で、55は有台、内面に使用痕がある。56は無台。57は赤彩土器の盤である。内外面ともに赤彩を塗布している。また、口縁部にそって煤が付着している。58は須恵器の高杯で、杯部内面に使用痕あり。製作技法に関して、杯部と脚部を別に作って貼り付けていたことが認められる。59、60は土師器の鍋である。60には外面に煤が付着している。61、62は土師器の甕である。62の外面に煤が付着。時期は8世紀前半と考える。

土坑 9

63は土師器で、長胴甕である。時期は7世紀後半～8世紀前半に属する。64は石鍬（打製石斧）である。これも土坑3で出土した打製石斧（石鍬）同様混入であると考ええる。

土坑10

65～79は、土師器の皿である。65～75は小皿で、そのうち2次焼成を受けているのは65～69、73である。76～79は中皿で、2次焼成を受けているのは76、77、79である。さらに、74は内・外面に煤が付着。75は外面に煤が付着している。これらの他にも同様の皿は出土しているが、ほぼ完形なものを図化しているため少なくとも15点はある。確実に土師器皿が2次焼成を受けているのは15点中、9点で約60%を占めている。なお、2次焼成を受けている小皿は11点中6点、約55%を占める。また中皿は4点中3点、約75%を占める。これらの時期は13世紀前半に属する。80は鉄製の^{から}犁である。既往概要報告では、2点の出土とされていたが、その後2点は接合できたため、1点の出土と訂正する。刃部はほぼ完形であり、北陸地域はおろか凡日本的に見ても希少な農具である。内側の部分に木質が残っていることから、実際に使用していたと推測できる。犁自体からは時期が判断できないが、共伴資料から時期を13世紀前半と考える。

小穴11

掘立柱建物9を構成する柱穴であり、そこから81の打製石斧（石鍬）が出土した。埋土からの出土であり、混入と考える。遺物の所属時期については竪穴建物から出土した打製石斧石鍬が混入した事例もあることから、当該遺構の時期については縄文時代後期頃～弥生時代時期として帰属させるのに疑問があったため、古代に下らせた。

小穴17

82は鉄製刀子である。ほぼ完形である。時期は古代と想定する。

小穴22

83は須恵器の杯身で有台である。84は土師器の鍋である。外面に煤が付着している。時期は7世紀後半～8世紀前半に属する。掘立柱建物8を構成する柱穴と考えている。

小穴25

85は土師器の甕である。時期は7世紀後半～8世紀前半と考える。

小穴42

86は須恵器の杯蓋である。時期は8世紀前半と考える。

小穴52

87は須恵器の杯蓋である。時期は8世紀前半と考える。

小穴60

88は土師器の甕である。時期は8世紀前半と考える。

小穴61

89は土師器の鍋である。時期は8世紀前半と考える。

小穴88

90は須恵器の杯身である。内面に墨痕が残っている。時期は9世紀前半と考える。

小穴99

91は須恵器の杯蓋である。時期は9世紀前半と考える。

小穴100

92は須恵器の杯身である。時期は7世紀後半～8世紀前半と考える。

小穴104

93は赤彩土器の椀である。内外面ともにヘラミガキを施し、赤彩を塗布している。時期は8世紀前半と考える。

小穴107

94、95は須恵器の杯蓋である。96は杯身で有台。97、98は大甕である。99は土師器の椀で内面はヘラミガキで調整しており黒色に燻されている。100は瓶で、頸部外面に2条の沈線を廻らしている。時期は8世紀後半～10世紀前半に属する。

小穴108

101は土師器の皿で、口縁は外方へ伸びる形態である。内面はヘラミガキで調整され、黒色に燻されている。102は須恵器の鉢である。時期は10世紀前半に属する。

小穴114

103は須恵器の杯蓋である。時期は8世紀前半と考える。

小穴120

104は須恵器の大甕である。時期は9世紀後半～10世紀前半と考える。

小穴121

105は須恵器の杯身で有台である。時期は8世紀前半と考える。

小穴126

106は須恵器の杯身で有台である。時期は9世紀前半～10世紀前半と考える。

包含層

包含層からの出土遺物は多く、縄文時代～近世までの土器が認められる。古代の土器が多量に出土しており、概ね7世紀後半～10世紀前半に時期がおさまる。

107、108は縄文土器である。107は細い縄文でL-Rに施文されたのち、文様を施す。2次焼成を受けている。108は磨いた後に沈線で文様を施す。これらの時期は御経塚式新段階～中屋式（古段階）と考える。109～138は須恵器の蓋である。109～128までは、宝珠摘み部を有していた。109は内面に線刻「=」、135は内面に「×」、114は外面に線刻「-」がある。112、113、は内・外面に使用痕跡あり。120、122、123、127、130、131は内面に使用痕がある。139～218は須恵器の杯身で、139～184が有台、185～218が無台となる。140は外面に線刻「」」、142は線刻「-」、157は線刻「//」、174は線

刻「-」、175は線刻「=」、177は線刻「//」がある。143、144、146、155、159、167、181、184、187、210、215は内面に使用痕がある。183は外面に使用痕がある。148、181、208、212は酸化焰焼成で、いわゆる「生焼け」である。195は外面に煤が付着している。219は須恵器の椀で有台。246は須恵器の稜椀。220～235、302は土師器の椀である。221～223、228、233、234は内面黒色。224は内面が黒色に燻されているが、外面は赤彩が塗布されている。225、227は赤彩土器。229は底部外面に線刻「卍」がある。231は外面に煤が付着。232は内面黒色で2次焼成を受ける。235は内面に放射状に暗文が施されており、畿内の影響があることが窺える。236、237の盤、238は赤彩土器の盤。239～243は須恵器の皿。244、245は赤彩土器の皿で、後者は螺旋状の暗文が施されており畿内の影響が示唆される。247～250は須恵器の高杯。251は赤彩土器の高杯である。252は須恵器のつき鉢と考える。254は須恵器の鍋。253、255～271は土師器の鍋である。262は外面に煤が付着し、2次焼成を受ける。また267は2次焼成を受ける。271は外面に煤が付着。272、273は須恵器の横瓶である。274は、土師器の横瓶もしくは、甕。275は須恵器の提瓶。276～299は壺もしくは瓶。300、301は土師器の壺で、300の外面には煤が付着。301は内面に煤が付着し、2次焼成を受ける。302は内面黒色である。303～382は須恵器の大甕。340は外面に2次焼成を受ける。383～389～452は土師器の甕。384、388、390、400、411、413、415、420、426、427、430、433、437、443、446は外面に煤が付着。387、396、398、399、407、447、450、452は2次焼成を受ける。409は丹波・若狭地域を中心とした製作技法でもって作られている。外面が煤付着している412は内・外面に煤が付着し、2次焼成を受ける。416、417、419、421は内面に煤が付着している。431は内面が黒色で煤の可能性がある。439は内・外面に煤が付着。440は内面に水平に煤が付着している。453は須恵器の円面硯で長方形透かし孔が復元で10箇所穿たれていると考える。454は中国産の青磁椀で外面には蓮華文を廻らす。時期は15世紀末～16世紀初頭頃。455は龍泉窯の青磁椀で外面に引花文が施されている。2次焼成を受ける。時期は15世紀代。456は龍泉窯の青磁椀で外面に蓮弁文が廻る。時期は14世紀。457は土師器の小皿。時期は15世紀後半頃。458は龍泉窯の青磁盤で、外面に引花文が施される。2次焼成を受ける。時期は14世紀代。459は染付けの椀で、高台外面に圏線が1条廻る。見込みに染付け絵が描かれている。時期は15世紀後半に属する。

石器

460～493は打製石斧（石鋏）。実測図では刃部と思われる部位を下に位置づけており、(i) 平面形で逆三角形460～473、(ii) 緩やかに湾曲しているもの474～478、(iii) 直線状になるもの479～486の3つに大別分類した。(i)(ii)は縄文時代中期～弥生時代に連綿と継続して存在しているようであり、(iii)の形態は弥生時代後期頃に散見されるようである。時期の否定は難しく、本報告では縄文時代後期～弥生時代後期の範疇で捉える。494～496は叩き石。それぞれ敲打痕がある。497～498は砥石。499は石盤で、近代における尋常小学校の教材として使用されていたものである。

第4節 まとめ

本調査の成果では、以下の点を指摘してまとめとしたい。

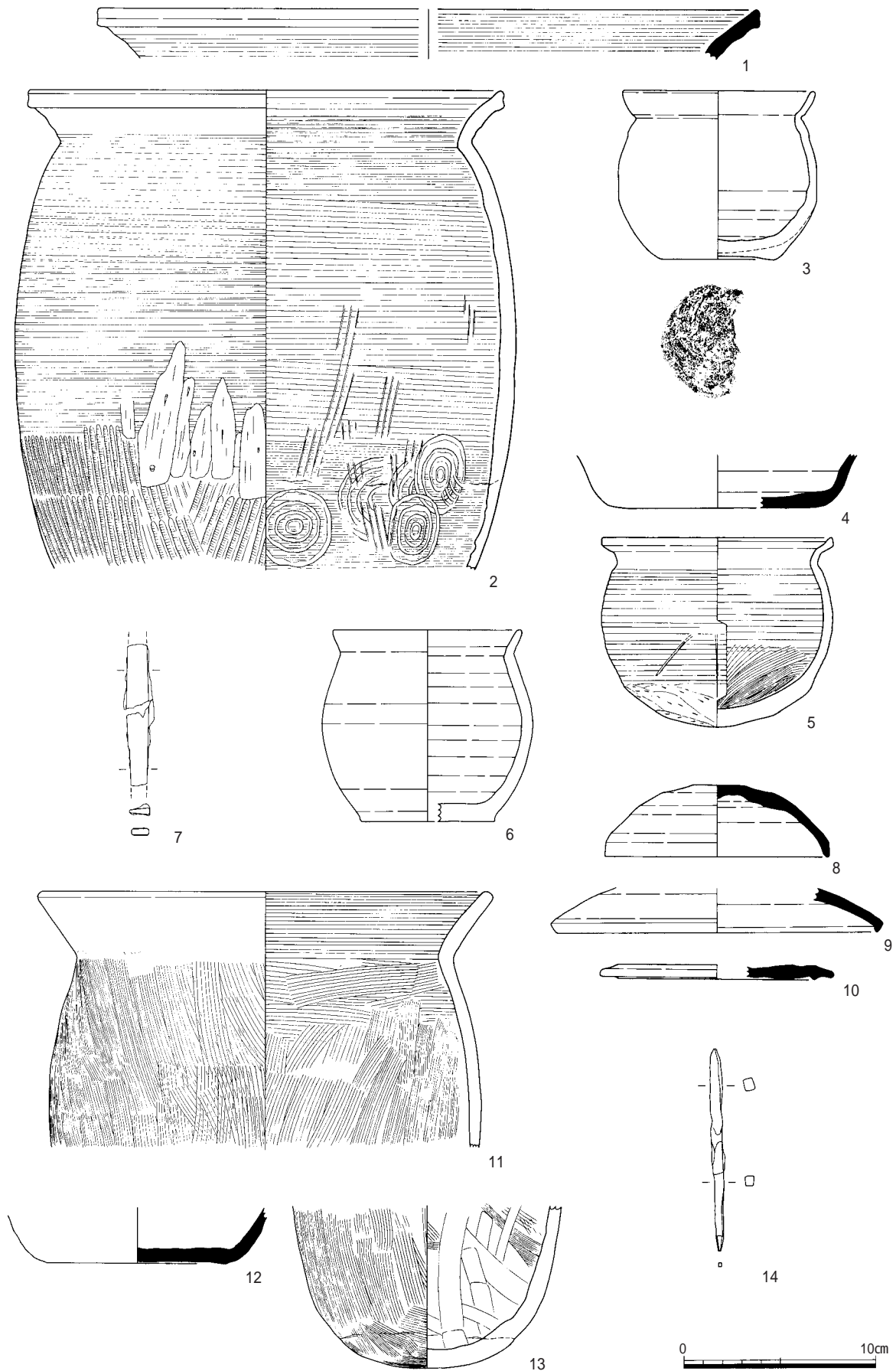
- ・ 縄文晩期頃の土器片が包含層から出土していることから、該当時期に人が周辺で活動していたことが窺え、手取川扇状地での人の活動領域であったことが追認できる。なお、打製石斧（石鋤）については、縄文時代後期～弥生時代に連綿と継続して存在しているようであるが、当地域において流通領域があったことが窺える。
- ・ 7世紀後半には、竪穴建物7や土坑が確認され、明確に土地利用の変化が起きようになる。中でも土坑3に丹波・若狭地域の技法でもって製作された土師器の甕が出土したことは、当該地域に居住した集団の中にそれらの地域から移動してきたことを示唆する。8世紀前半になると、竪穴建物1・3・9、掘立柱建物5、土坑、小穴等が確認された。竪穴建物1・3は近隣に建てられたが、9は少し離れた場所に位置していることから、建物が集合した集落形態をとっていないことが看取される。なお、掘立柱建物（柵）7は竪穴建物9が廃棄された後に構築されたと考えられ、当該時期のなかで生活環境や居住域の再編が行われたと考える。8世紀後半では空白となり、生産域として土地利用がなされていたと予想される。9世紀前半になって土坑等が見つかることから、周辺に集落が営まれていたと考えるが、9世紀後半には生活痕跡が見つからないため、9世紀代は生産域であった可能性がある。10世紀前半になると掘立柱建物2・4が構築される。しかし、建物の位置が密接していることから建替えがあった可能性が高く、さらに当該地に何度も建替えが行われたことが看取される。今後は、周辺地域で建物等の存在を確認し、建物の空間的な検討を行う必要性が求められる。他には、遺物がないため時期を推定するのに困難な竪穴建物や掘立柱建物があるが、堆積層の見解や他の検出遺構等の状況から勘案して時期を古代と想定する。包含層からは、7世紀後半～10世紀前半の範疇におさまる土器が多量に出土しており、当該遺跡の盛行した時期と理解することができよう。
- ・ 13世紀前半になると正位の土師皿二十数個と土師皿群の上から鉄製犁先が出土した土坑10を検出した。当該遺構は一度に火を受けていた可能性が高く、何らかの祭祀に関係したと考えられる。単独でこのような遺構があることは考えがたく、周辺に集落があったと予想される。
- ・ 中世になると、14世紀～16世紀初頭に属する中国産輸入陶磁器等が包含層から散発的に出土しており、周辺に人が生活していたことが窺えるが、以降は生産域であったと考える。

補遺

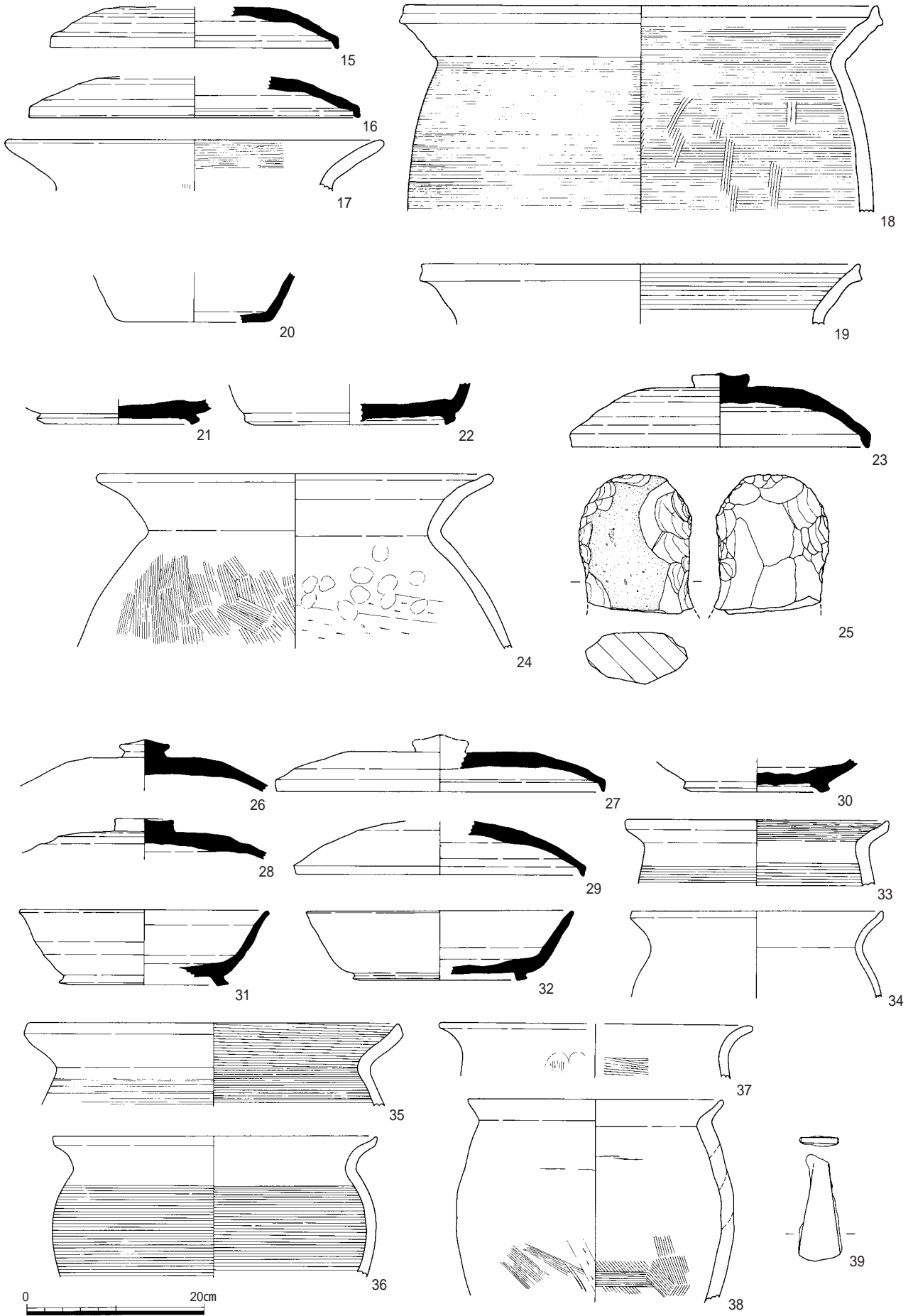
- ・ 当該遺跡では、包含層（10 - 20X、70 - 80Y）から土師質の土馬の脚部が出土している。指による調整を行っており、脚底は平らである。直径2.6cm、残存高5.9cmを測る。また、瓦片が包含層（10 - 20X、40 - 50Y）から出土した。厚さ2.2cm。凹面に布目痕、凸面に格子状叩き痕がある。辰口町能美窯跡群の湯屋窯跡を産地と考えられ、末松廃寺出土瓦と類似している。



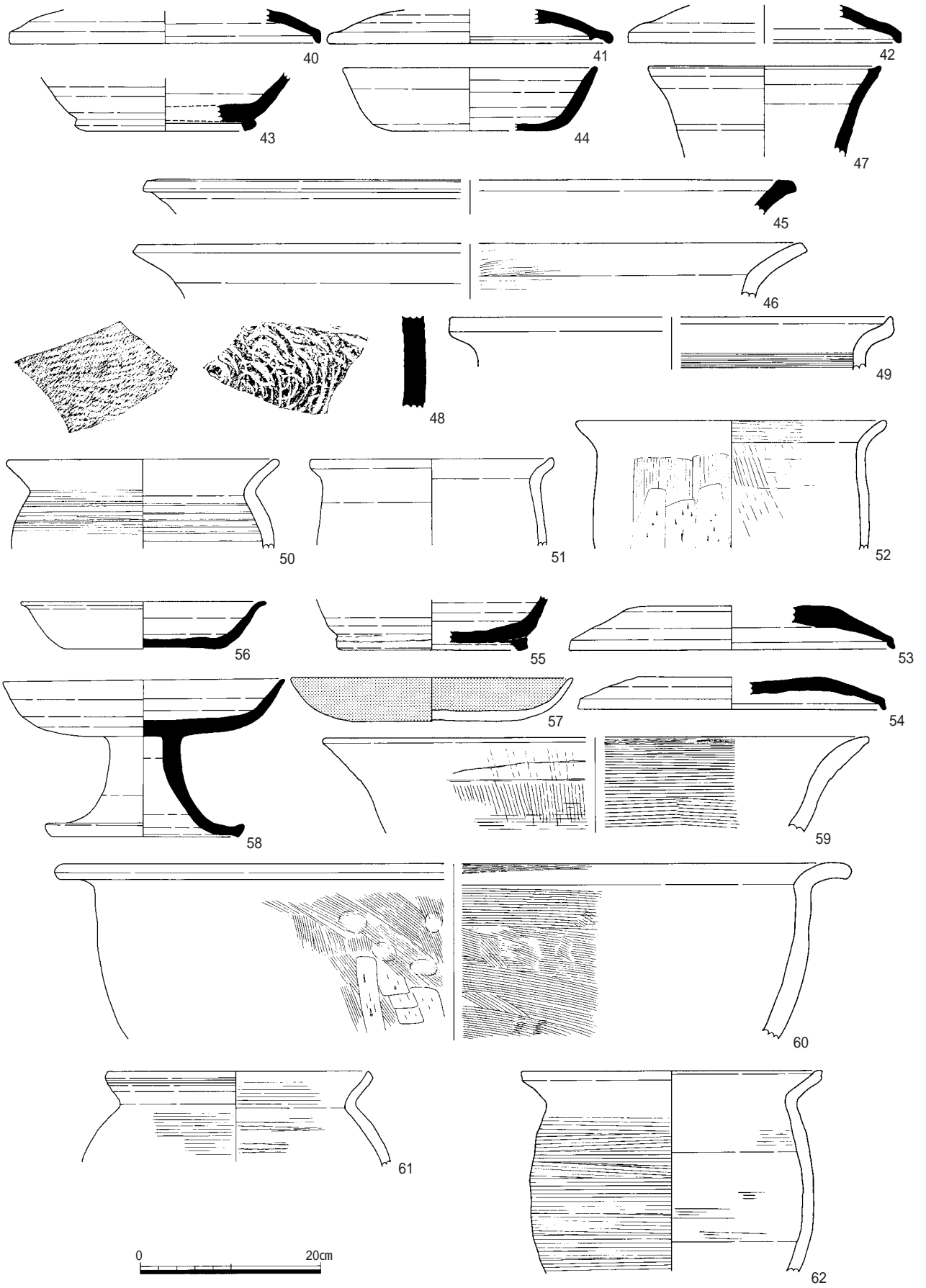
図版1 土馬脚部（左）、瓦片（右）



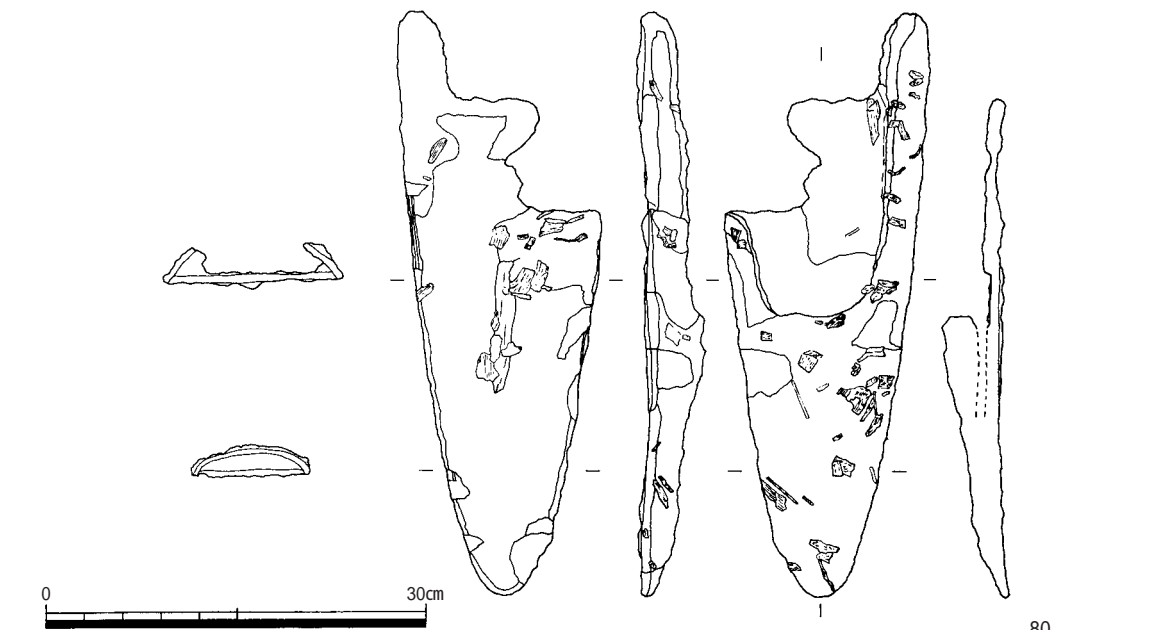
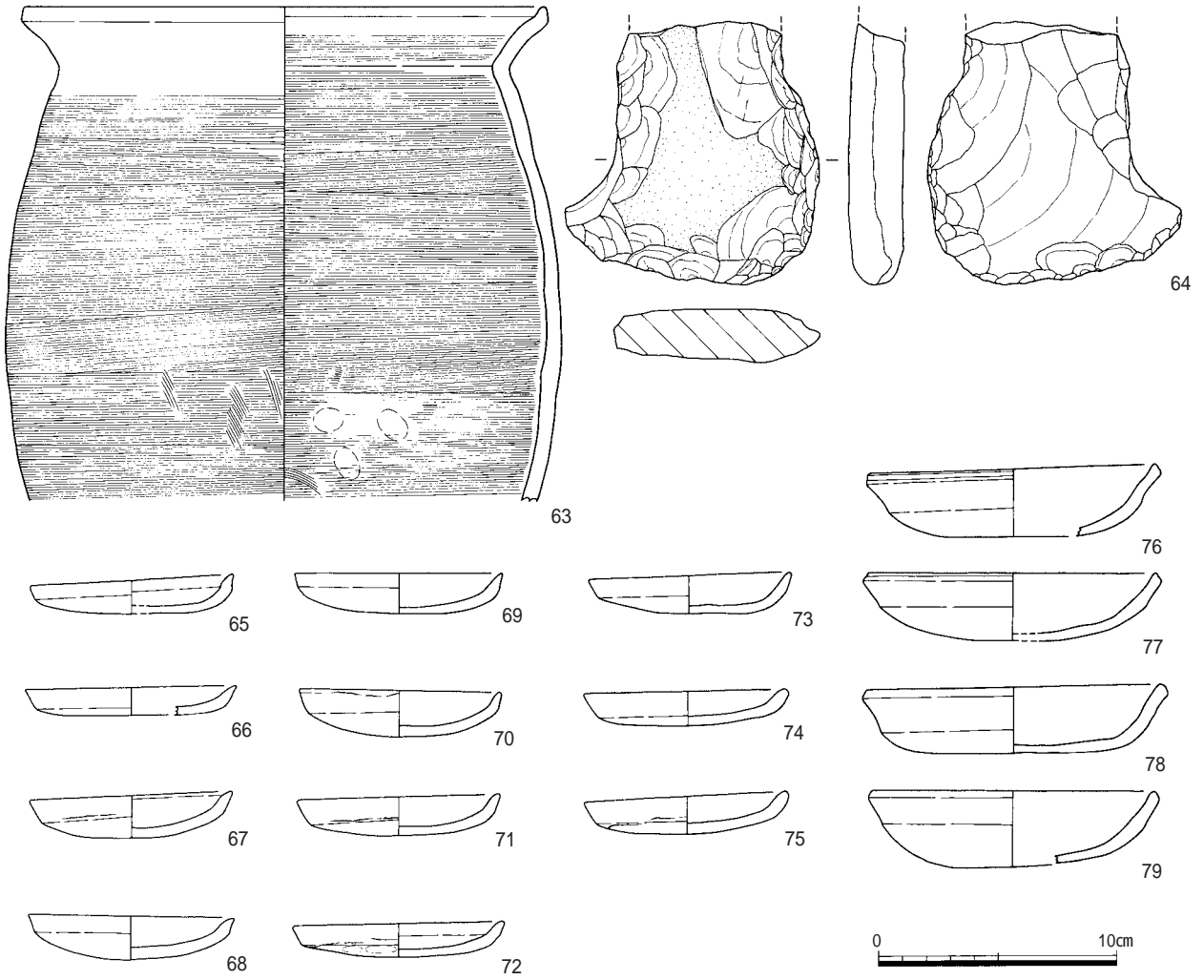
第37図 第2次調査 出土遺物実測図1



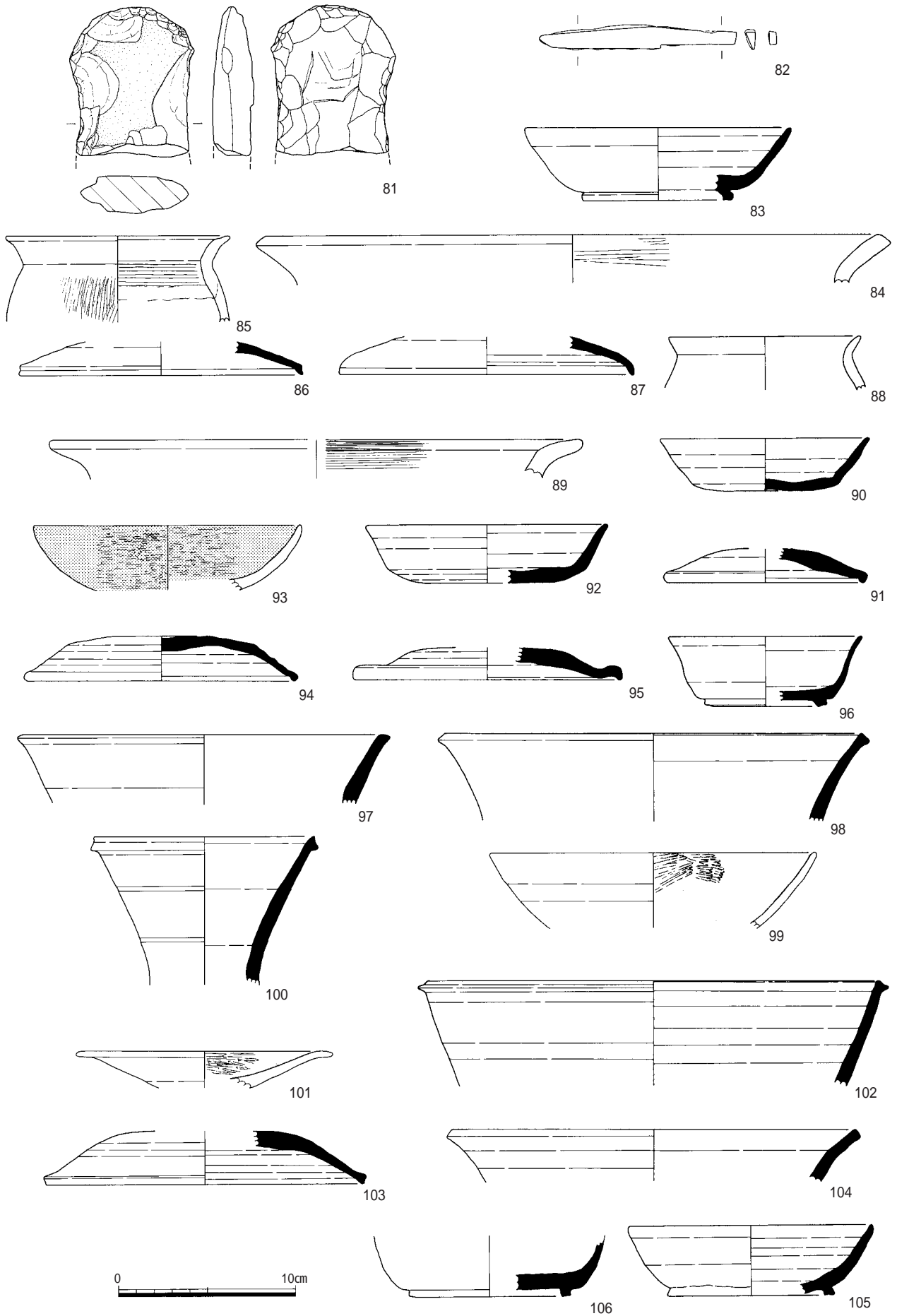
第38図 第2次調査 出土遺物実測図2



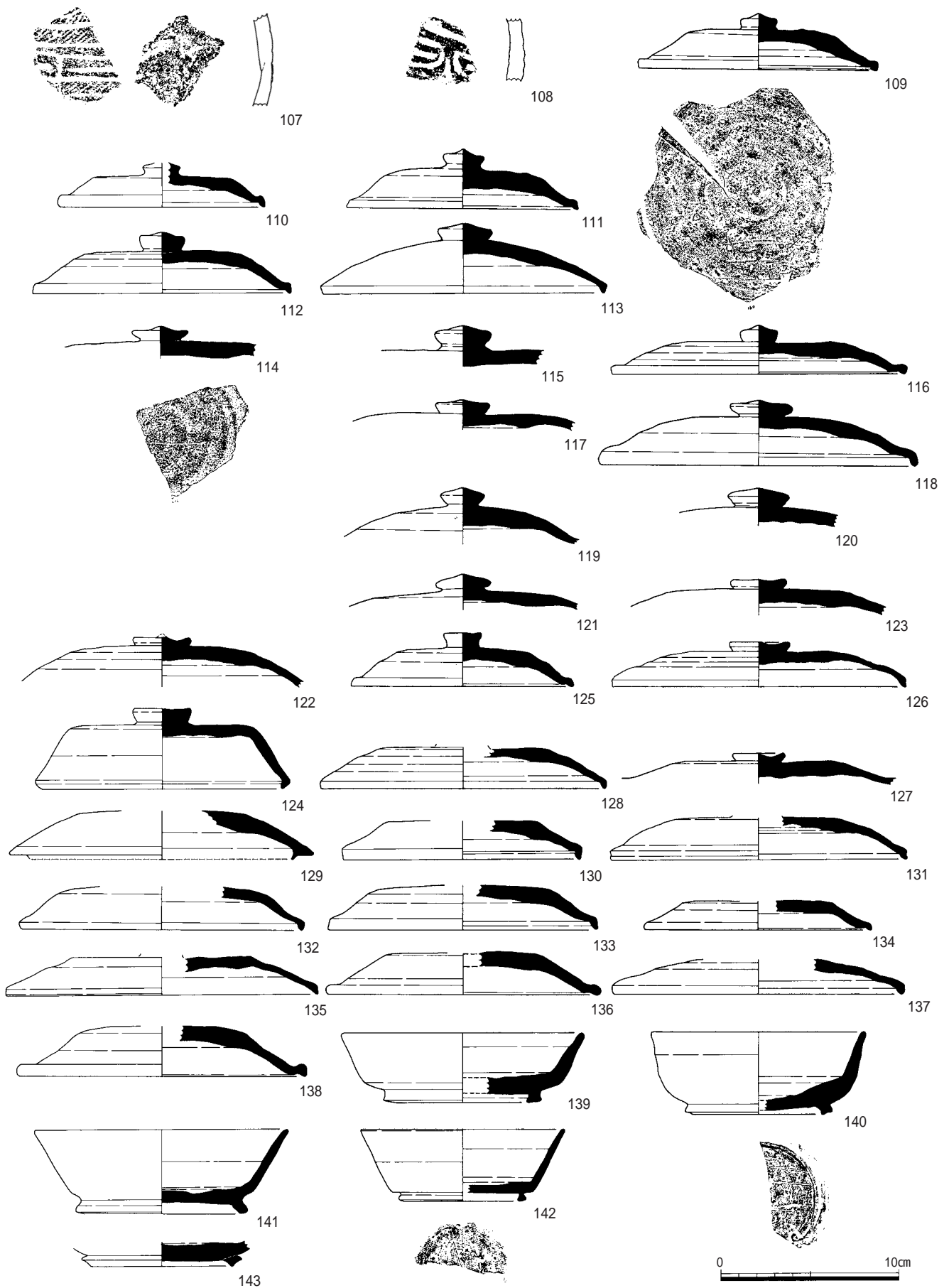
第39図 第2次調査 出土遺物実測図3



第40図 第2次調査 出土遺物実測図4



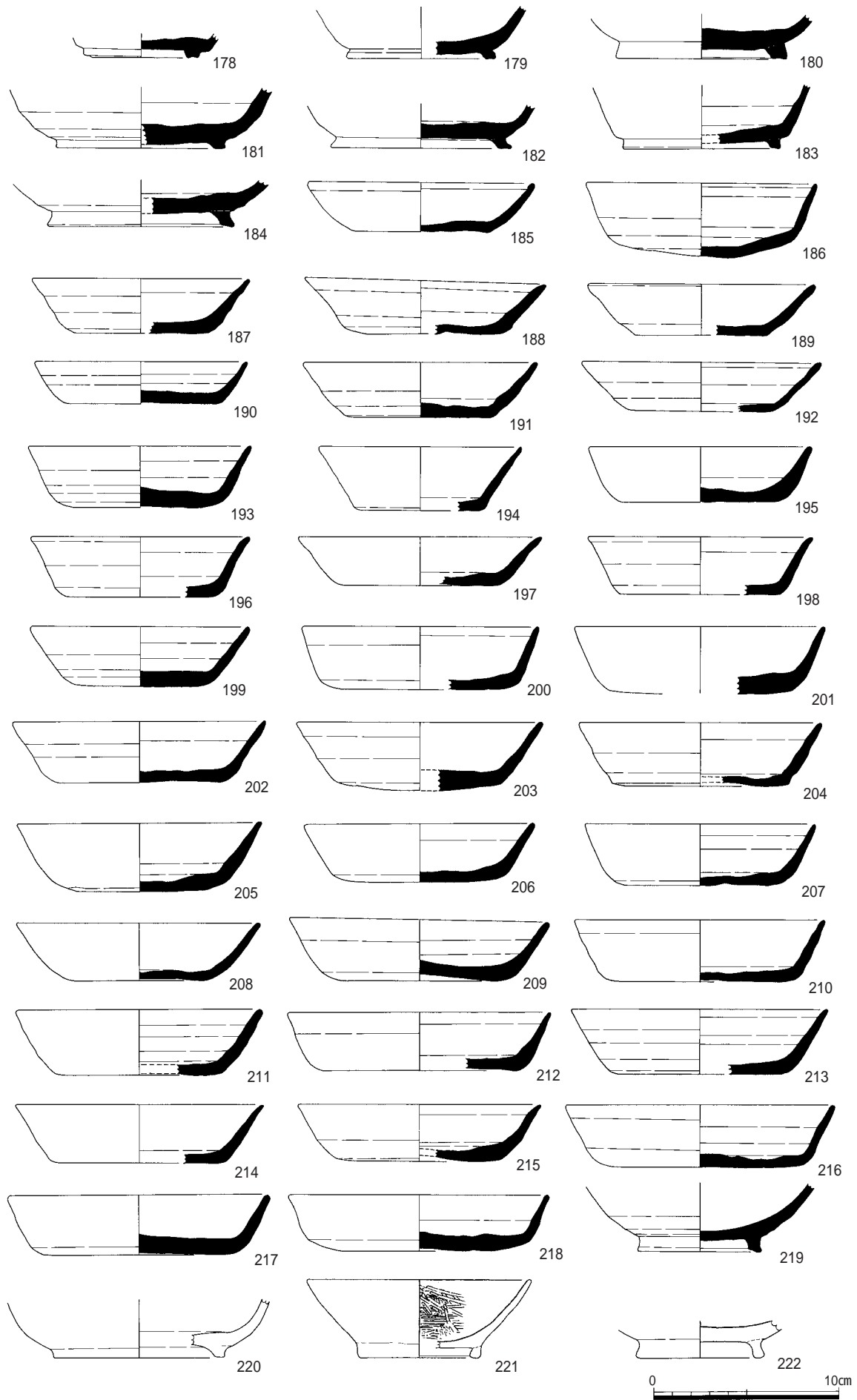
第41図 第2次調査 出土遺物実測図5



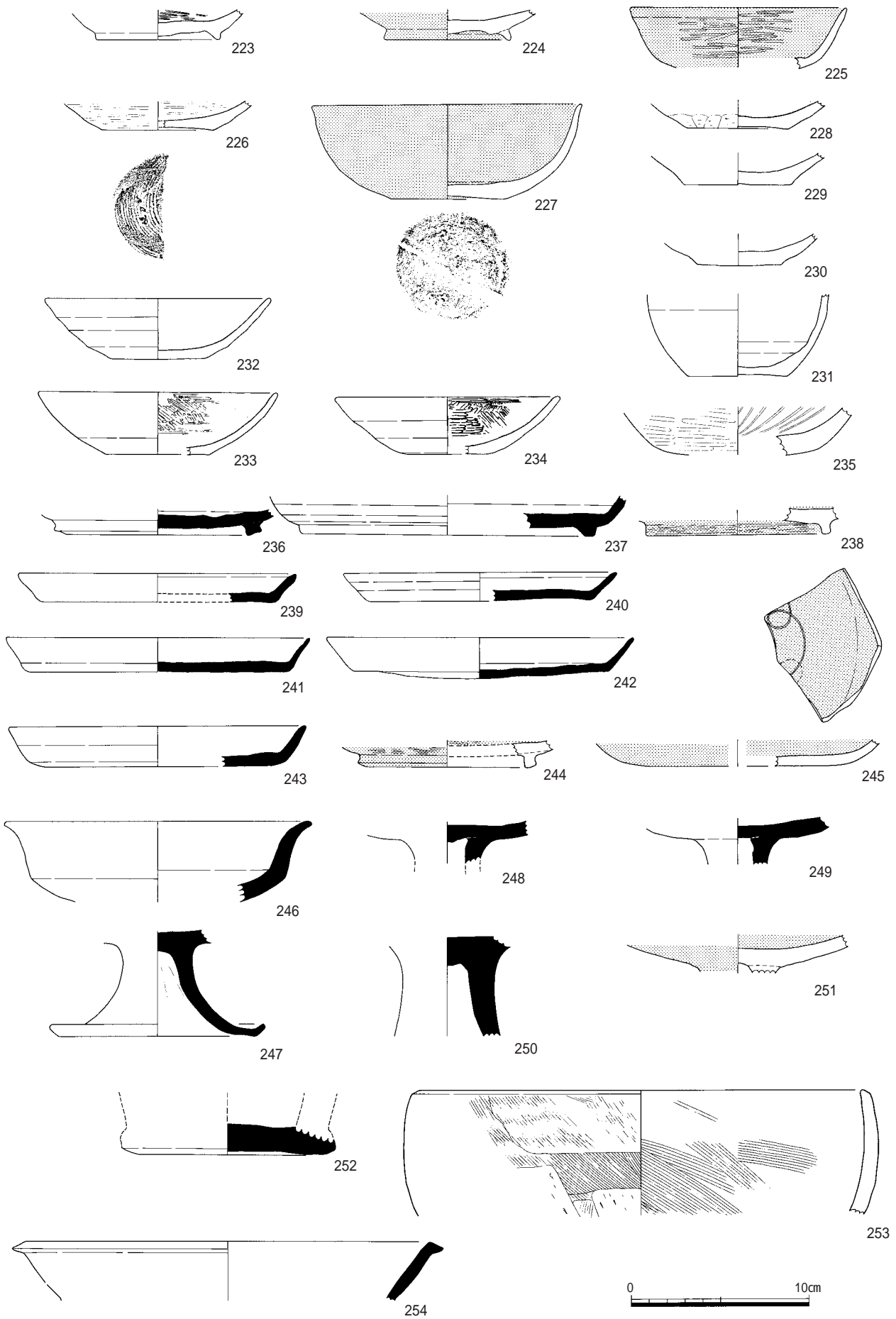
第42図 第2次調査 出土遺物実測図6



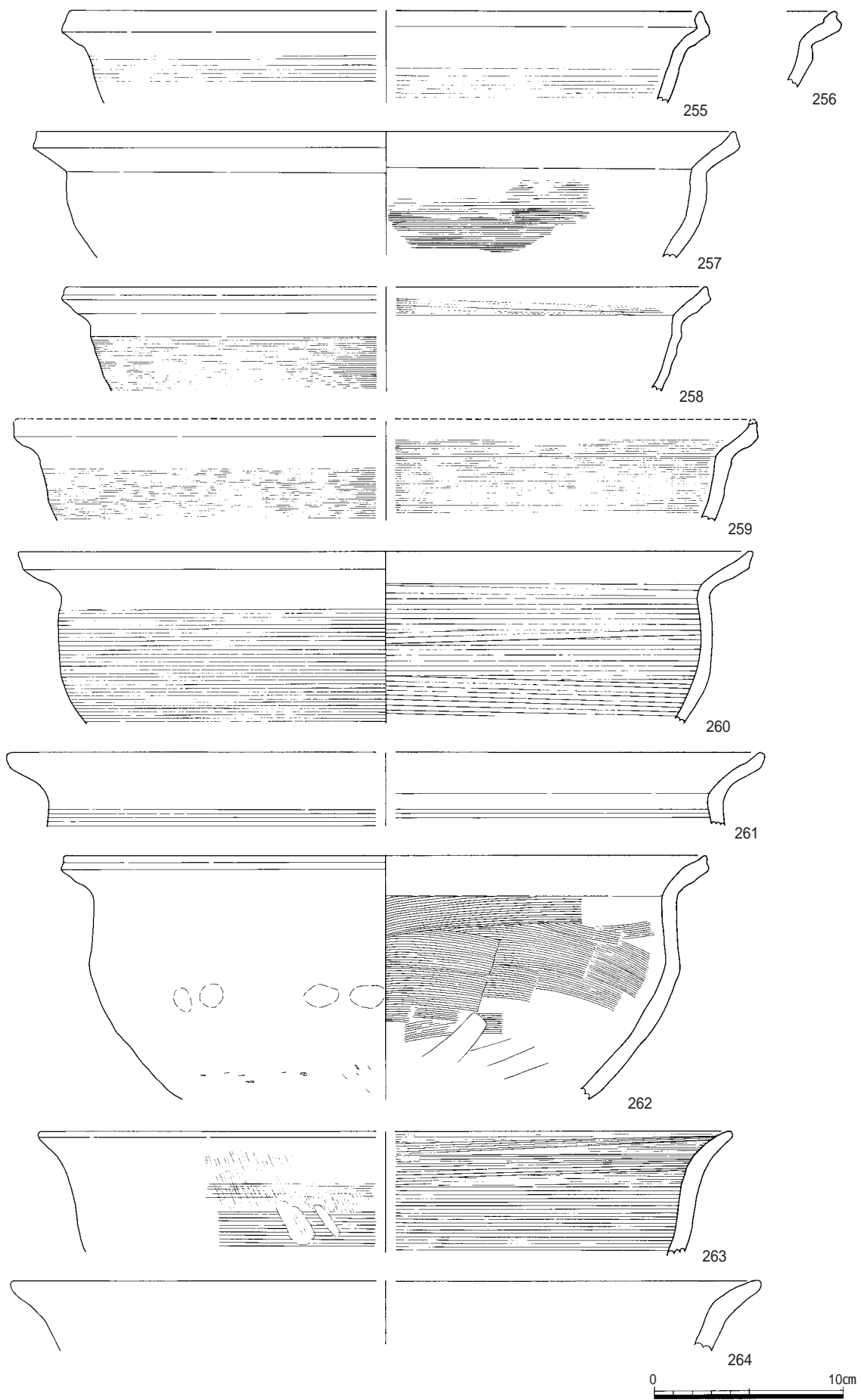
第43図 第2次調査 出土遺物実測図7



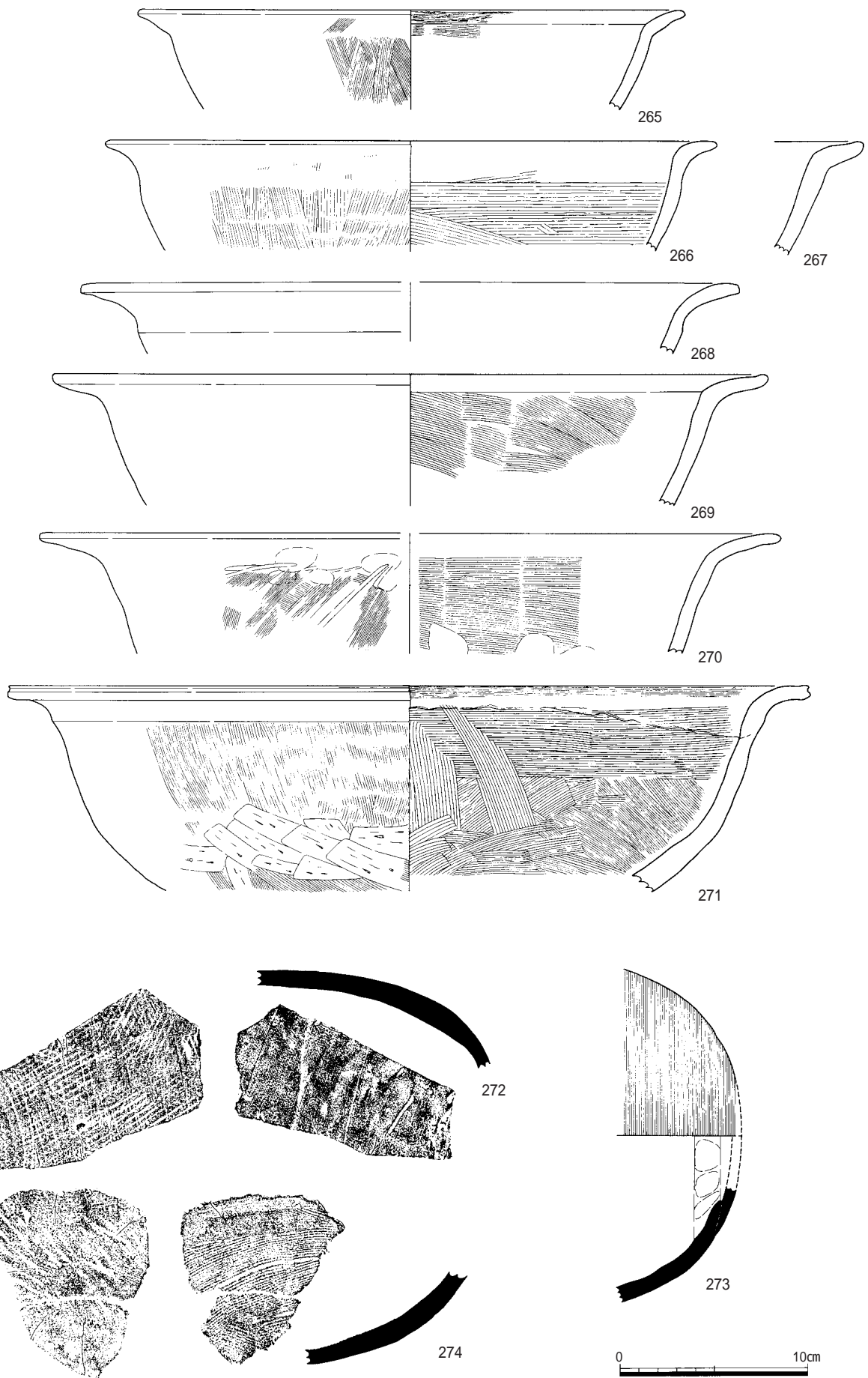
第44図 第2次調査 出土遺物実測図8



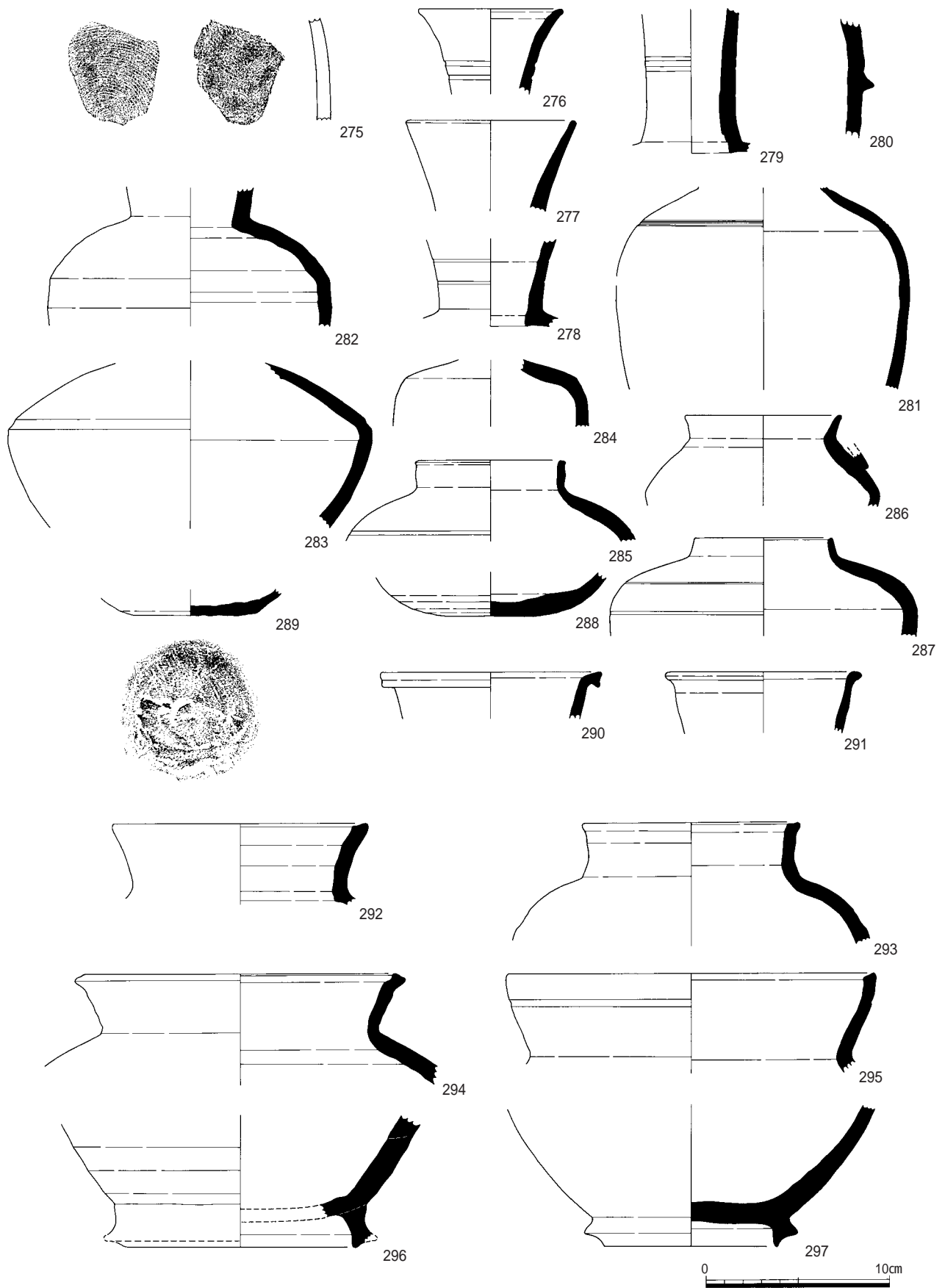
第45図 第2次調査 出土遺物実測図9



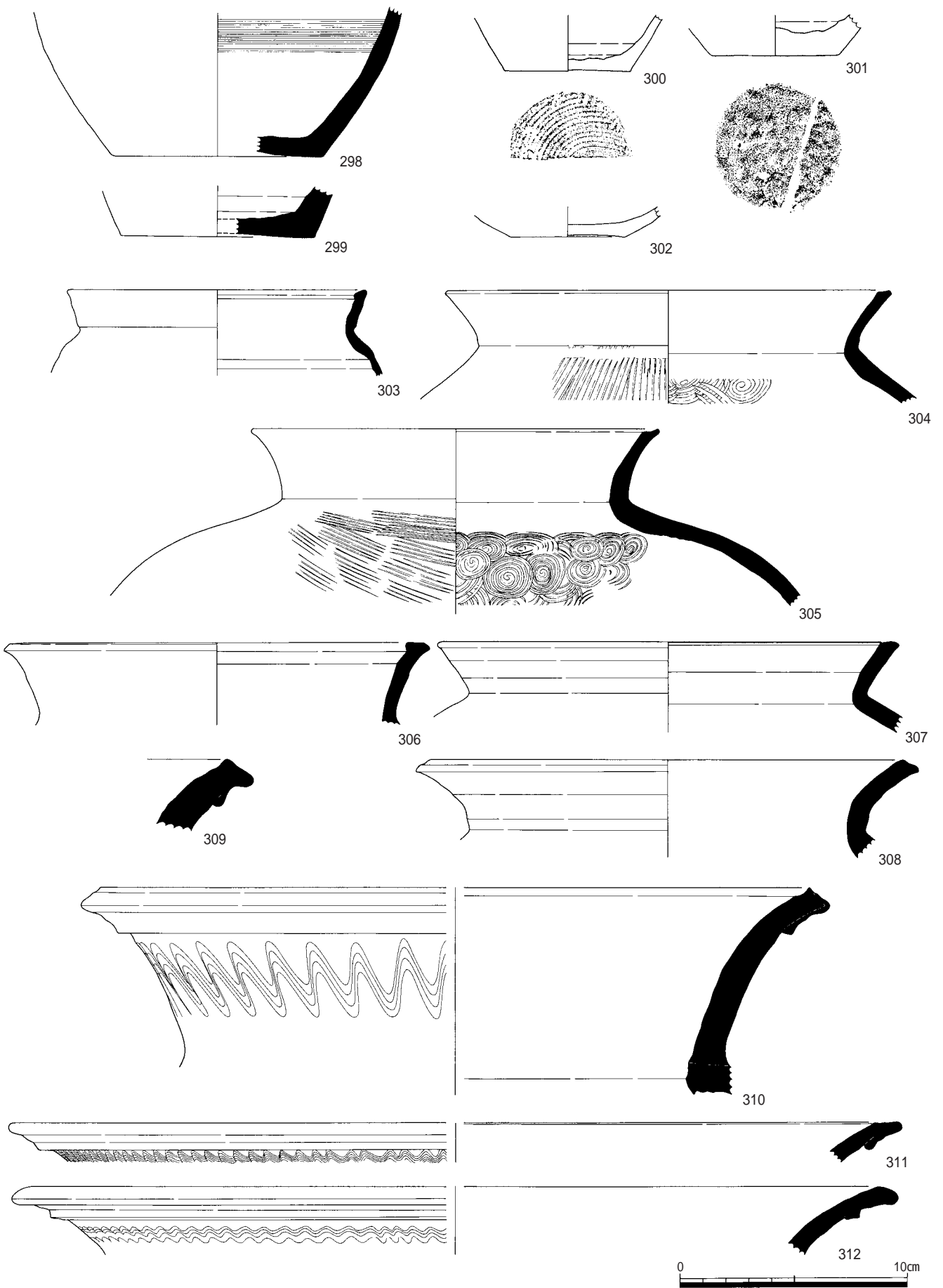
第46図 第2次調査 出土遺物実測図10



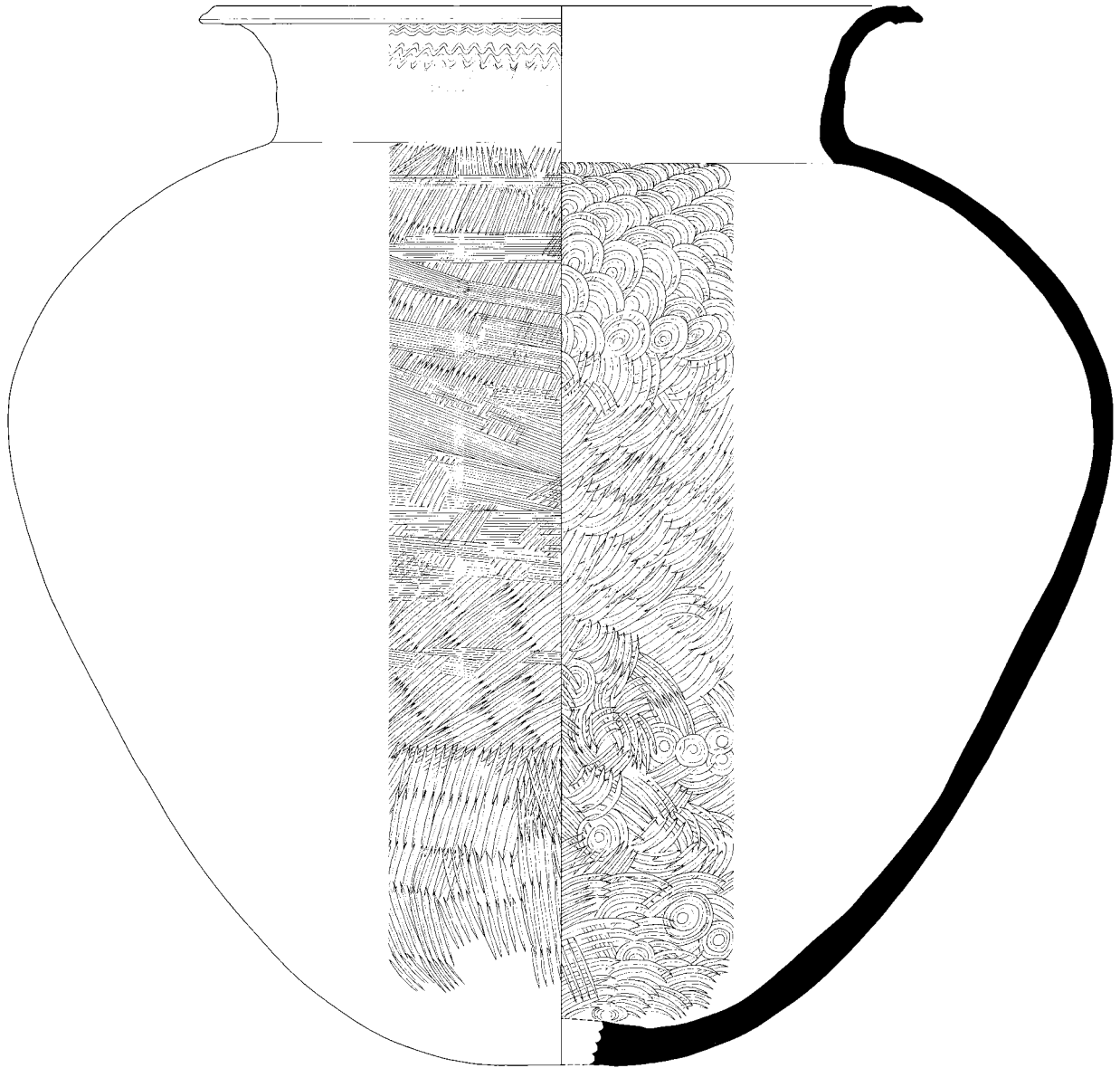
第47図 第2次調査 出土遺物実測図11



第48図 第2次調査 出土遺物実測図12



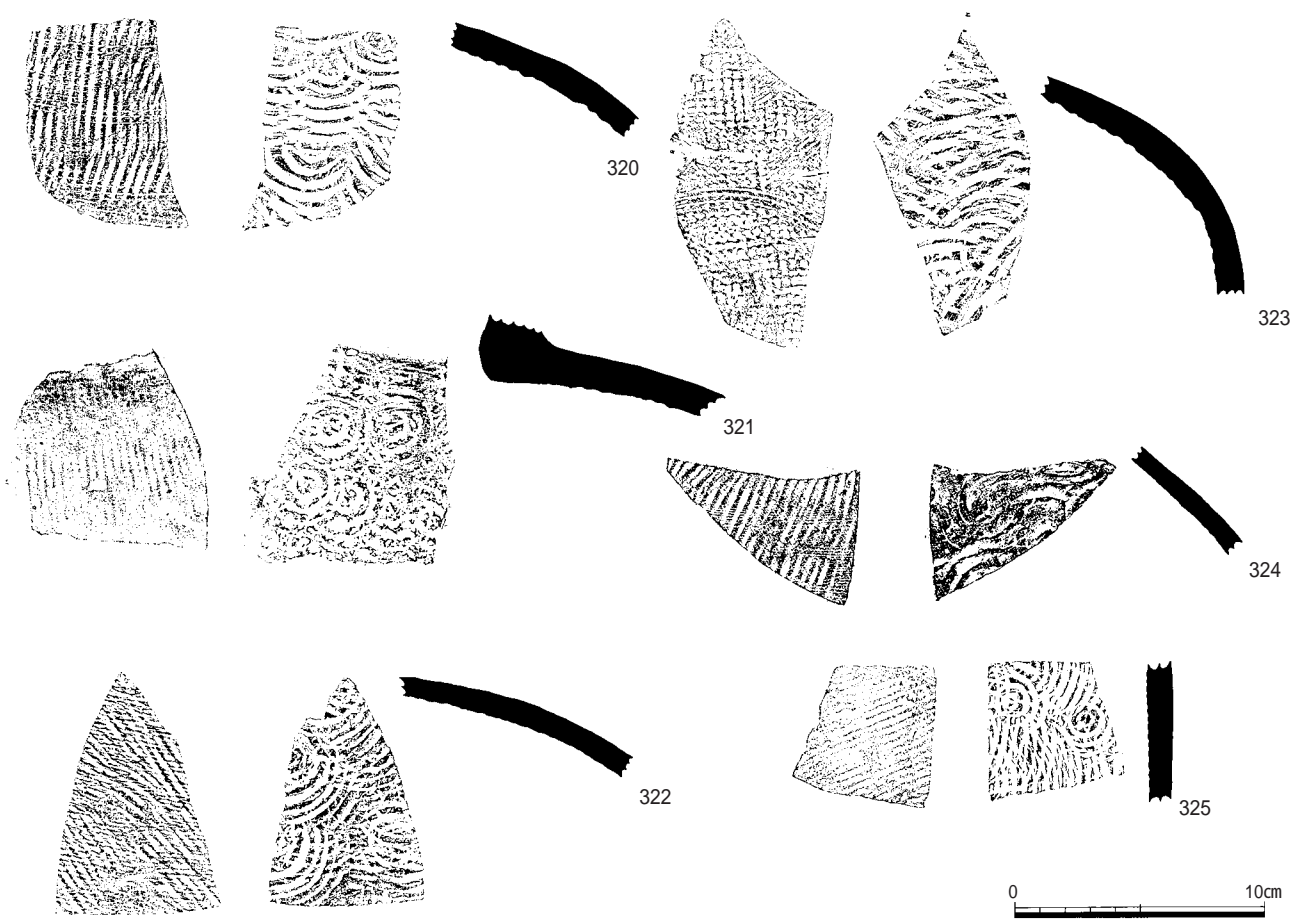
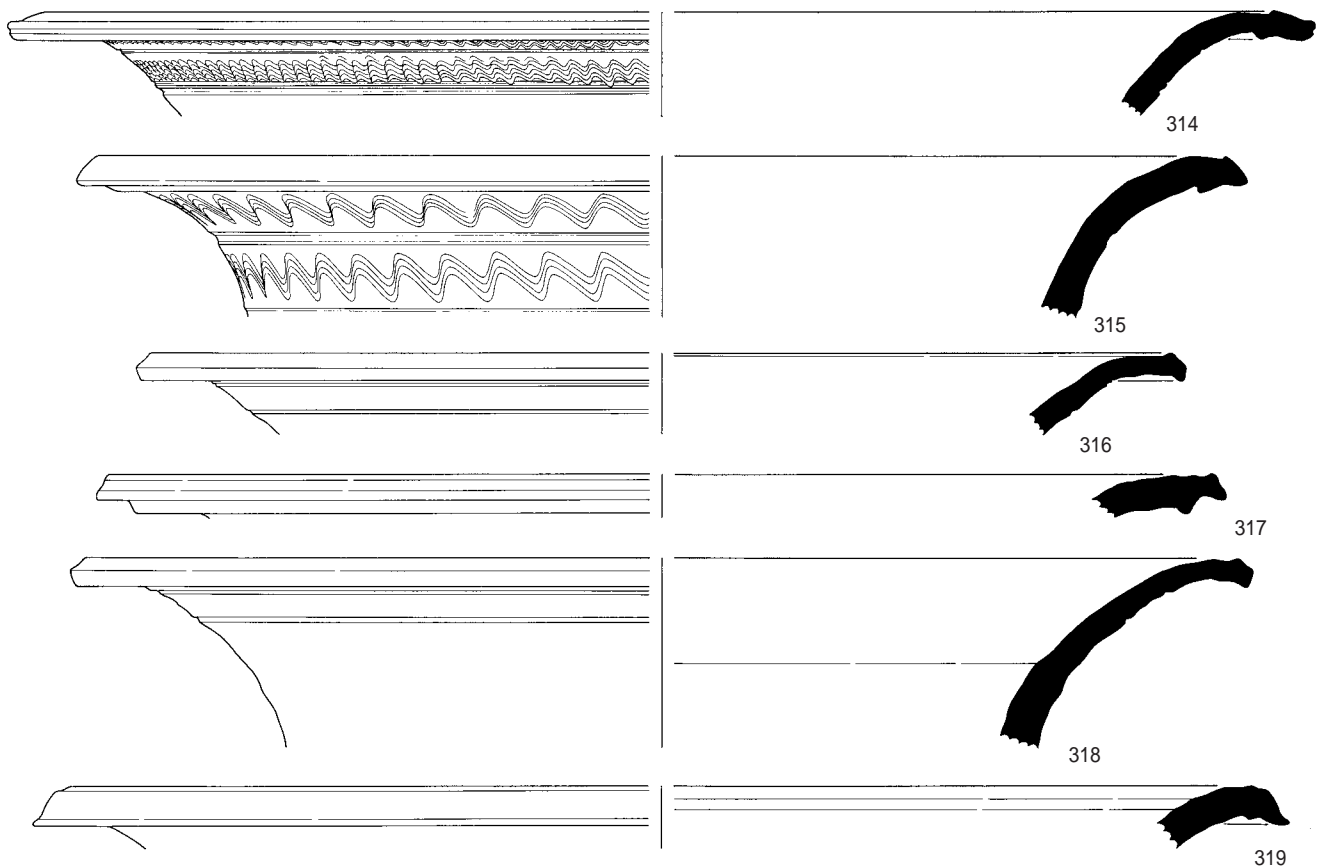
第49図 第2次調査 出土遺物実測図13



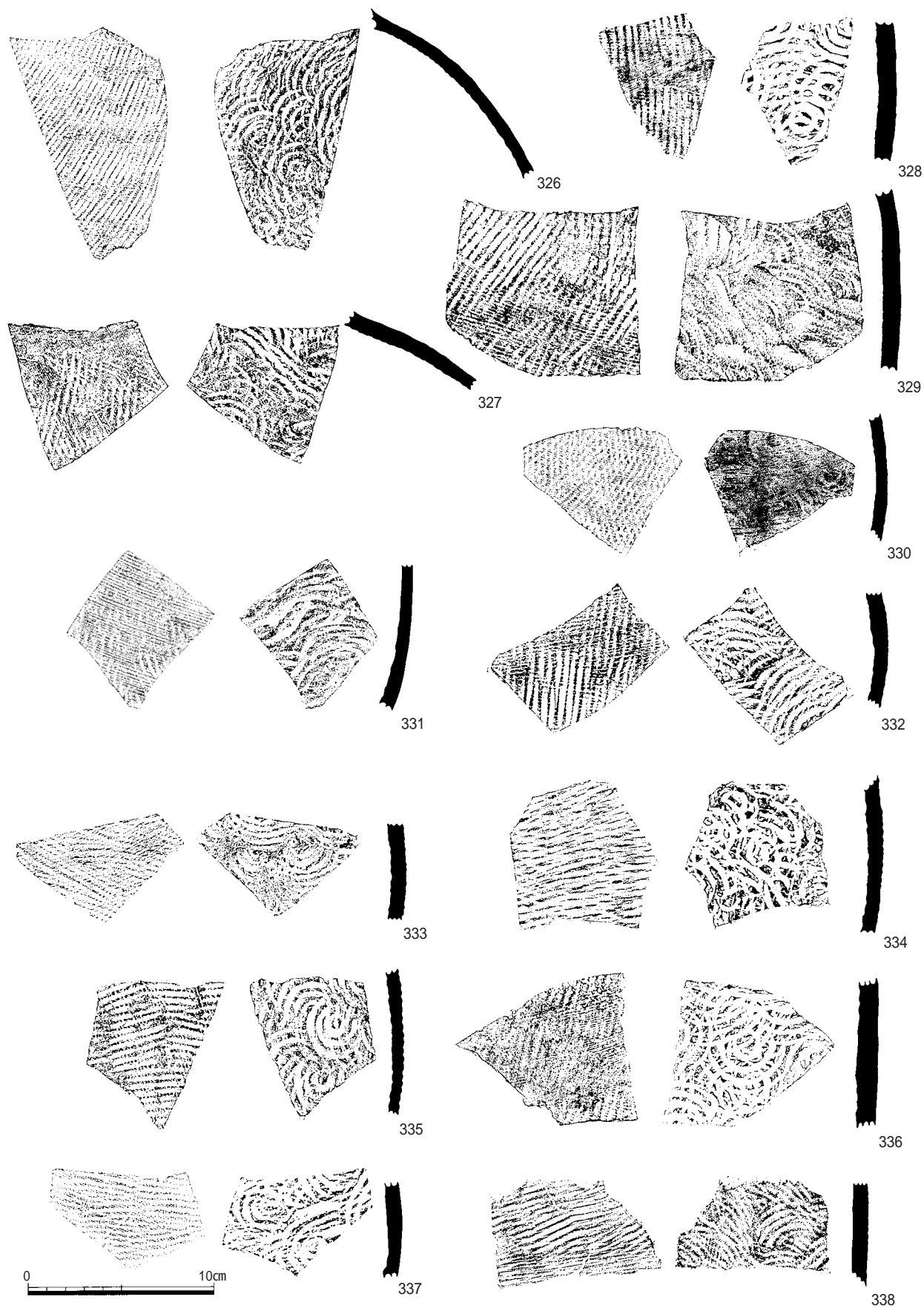
313

0 10cm

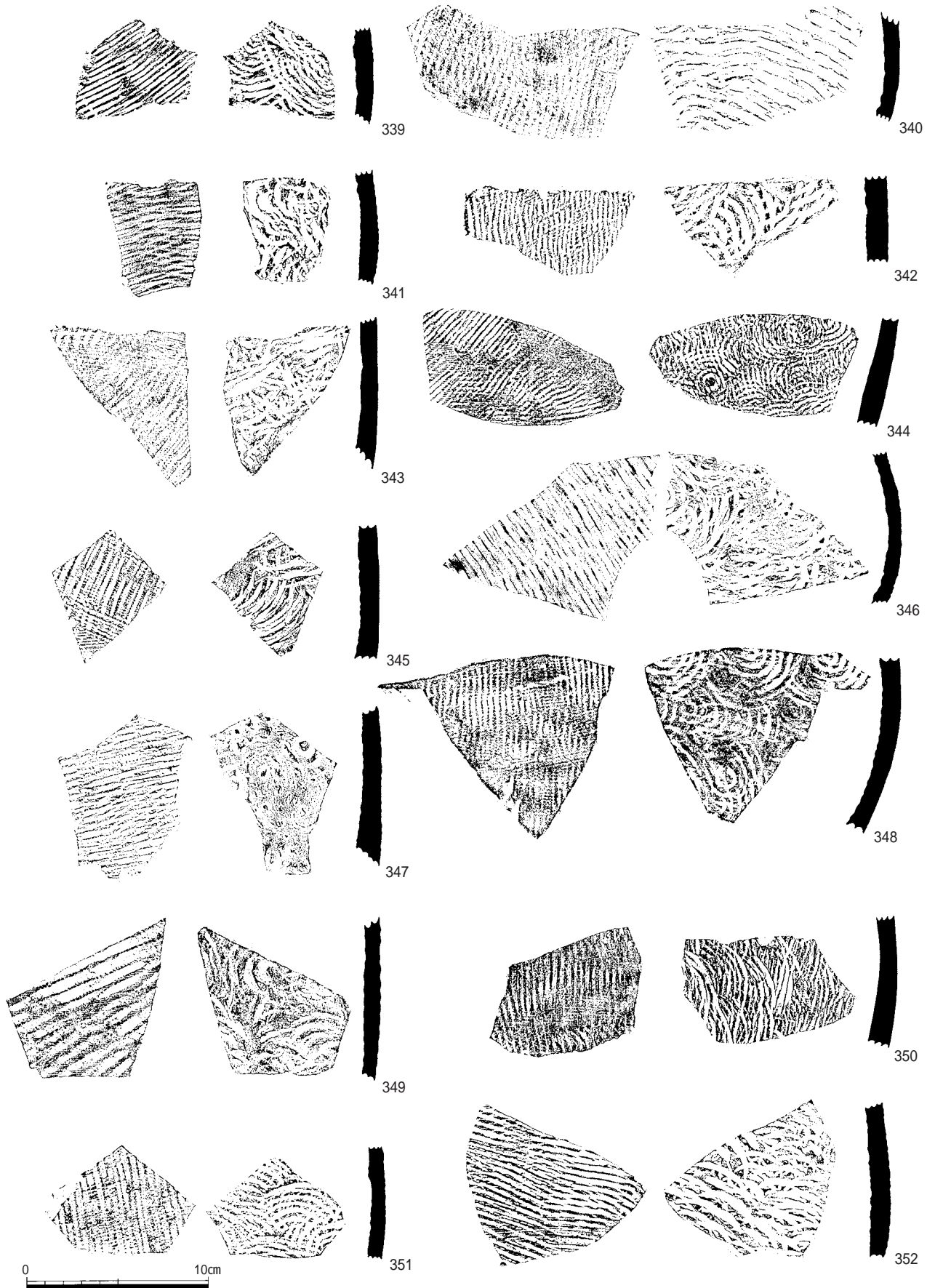
第50図 第2次調査 出土遺物実測図14



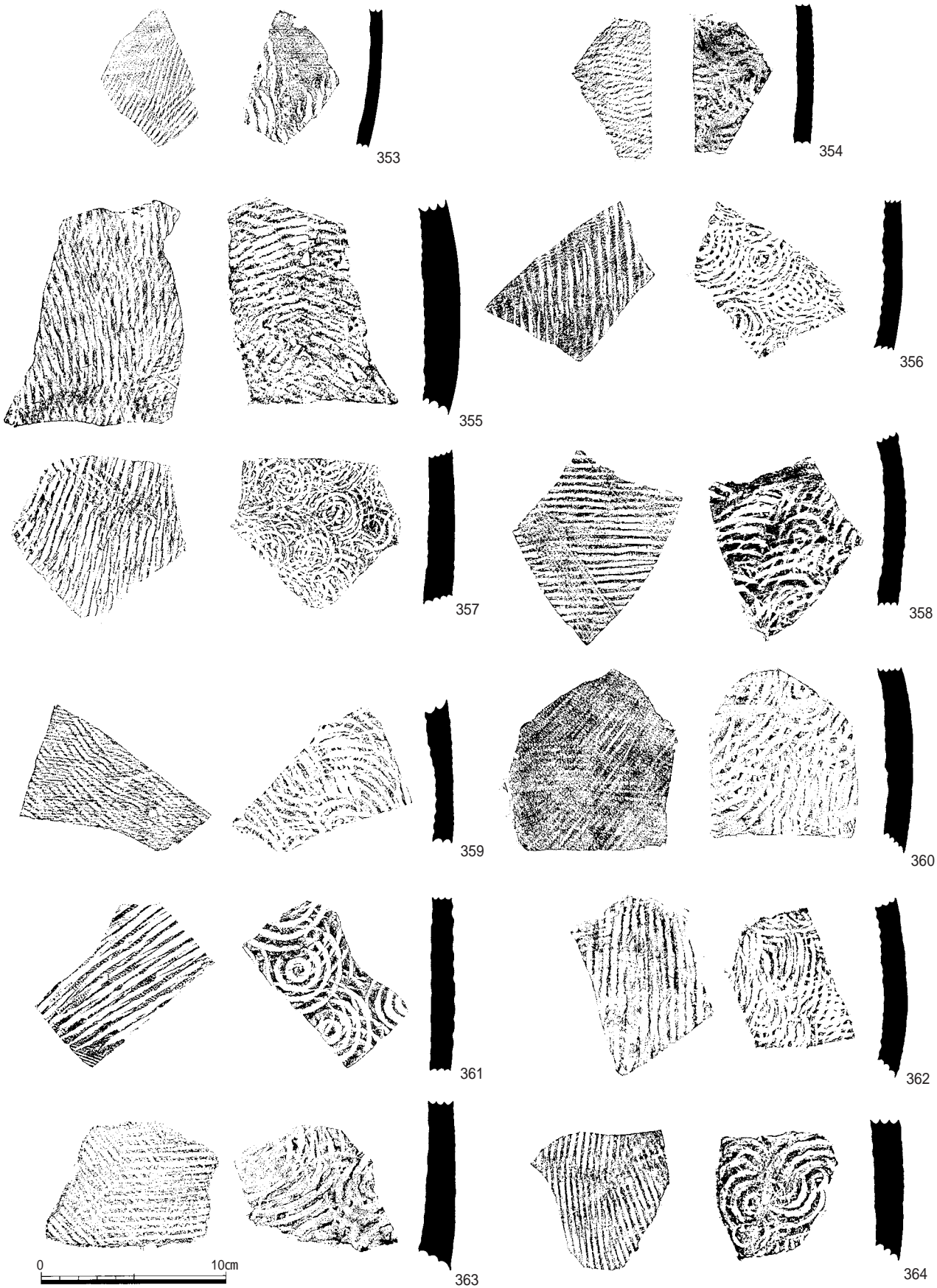
第51図 第2次調査 出土遺物実測図15



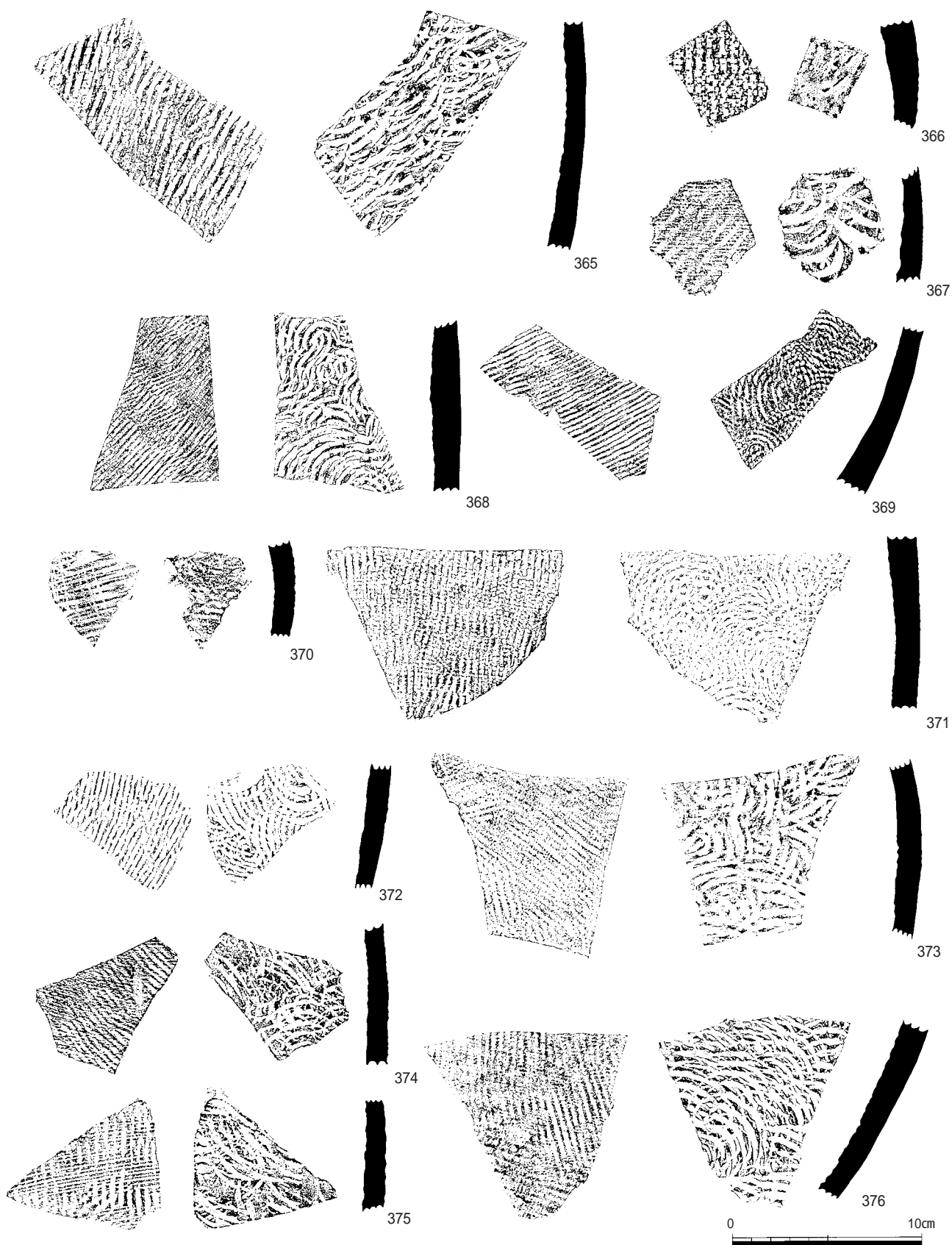
第52図 第2次調査 出土遺物実測図16



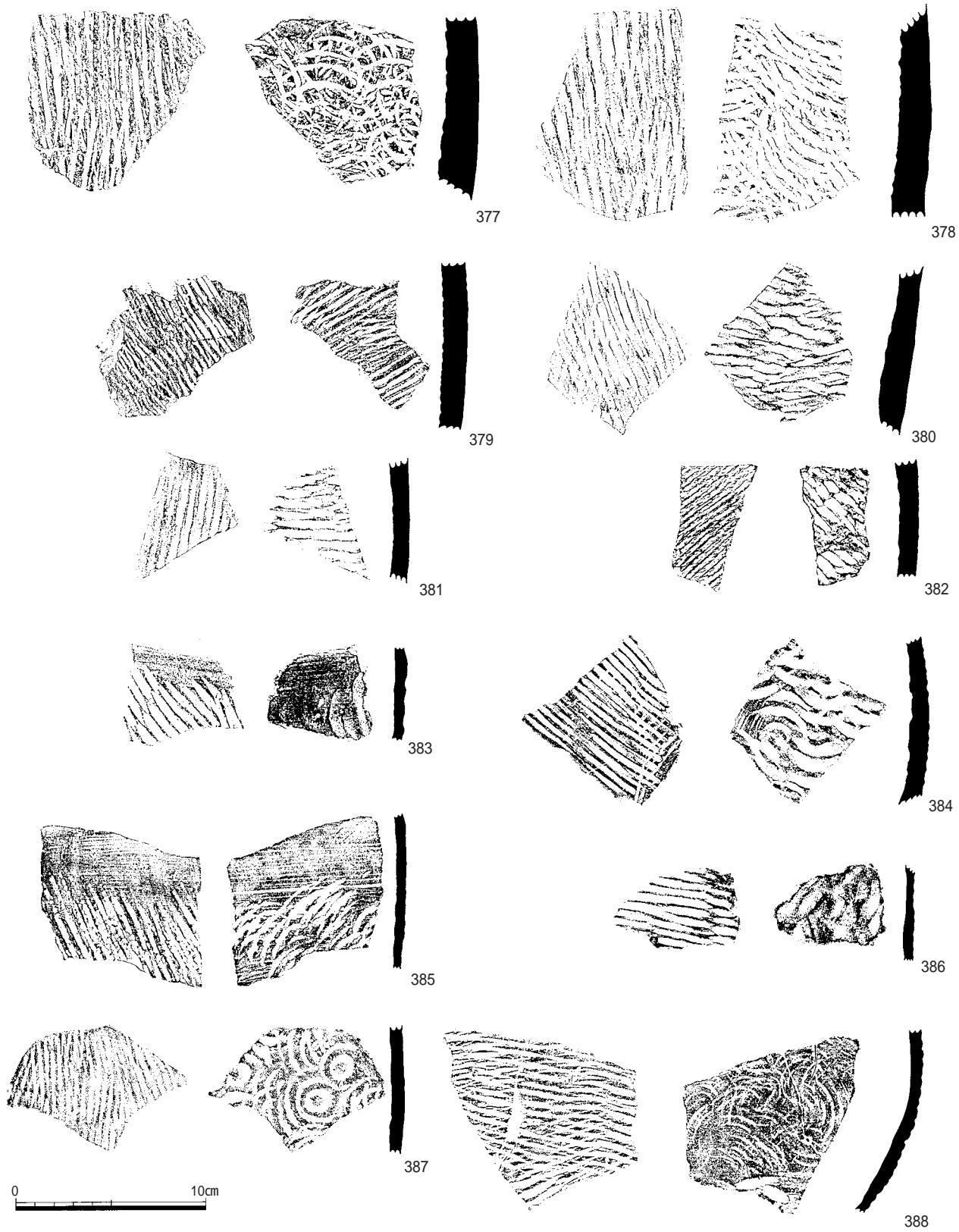
第53図 第2次調査 出土遺物実測図17



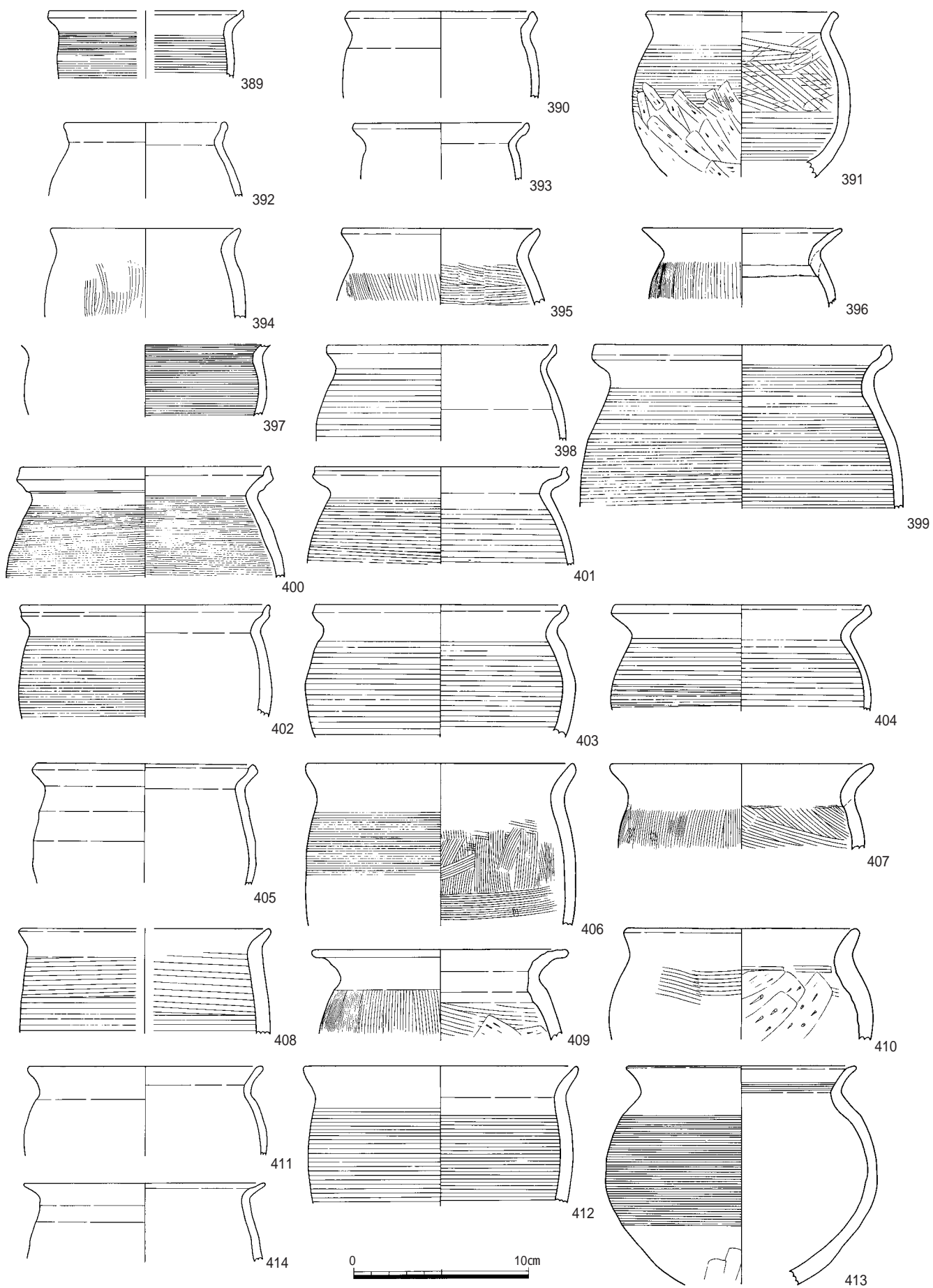
第54図 第2次調査 出土遺物実測図18



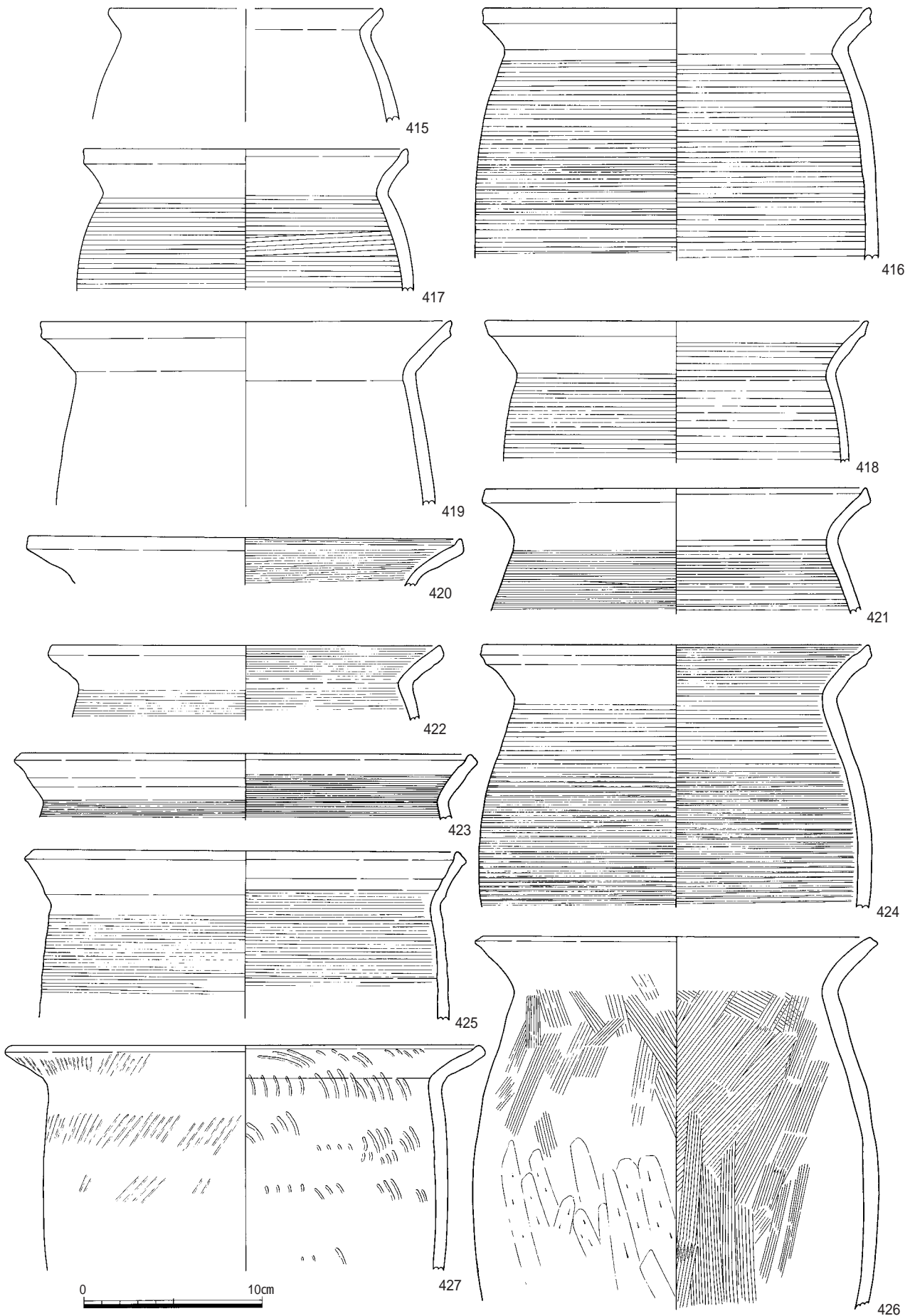
第55図 第2次調査 出土遺物実測図19



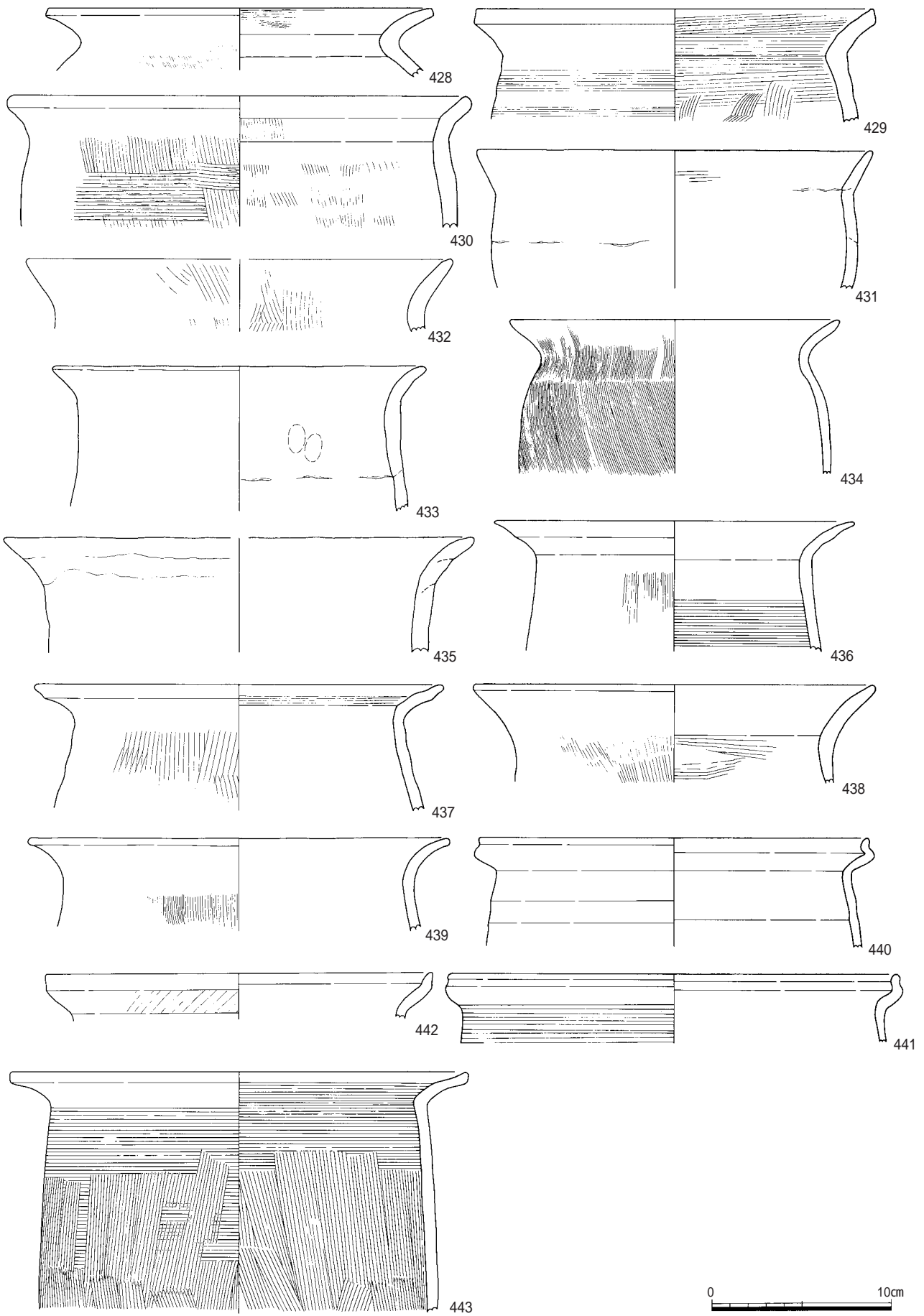
第56図 第2次調査 出土遺物実測図20



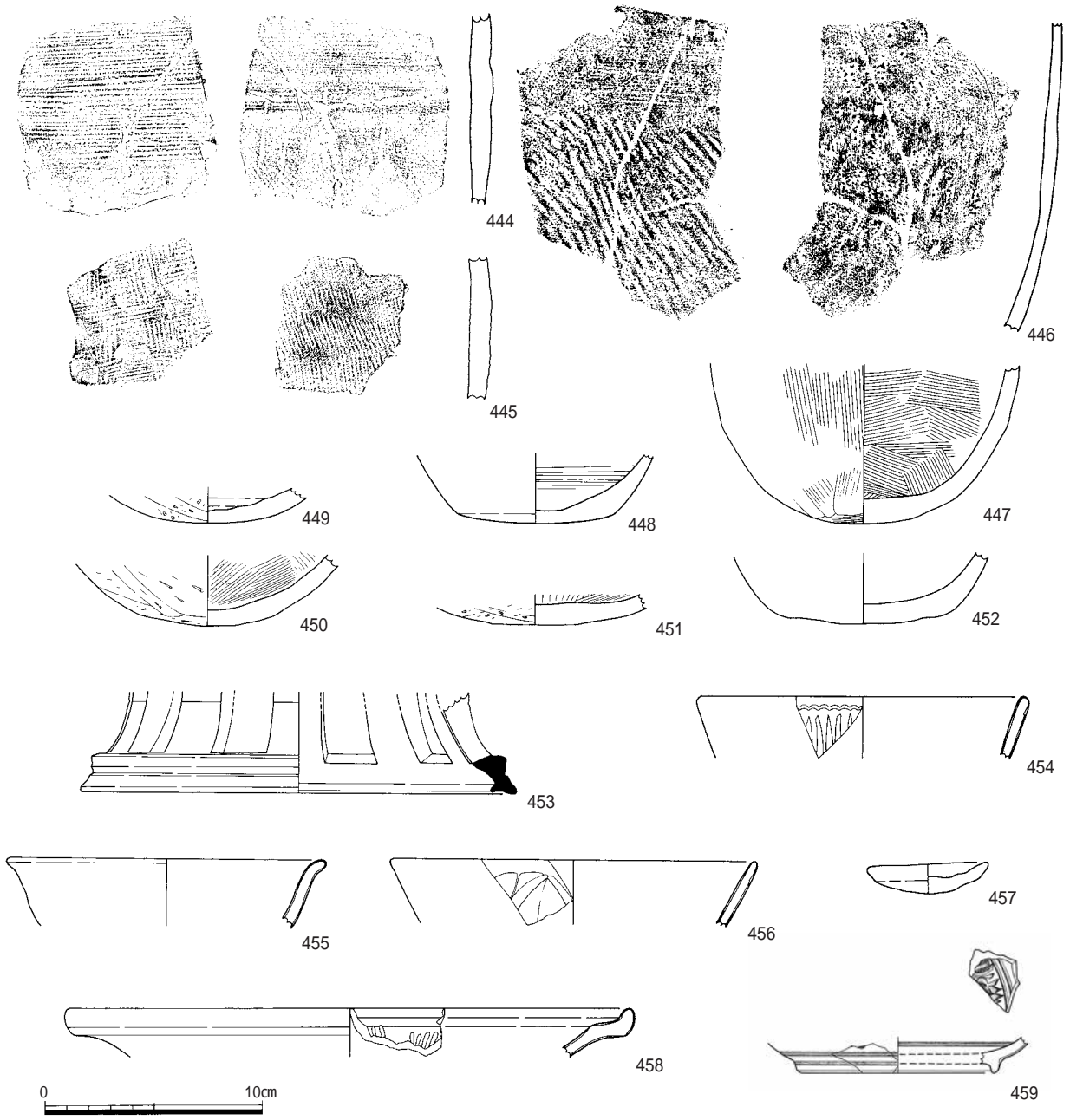
第57図 第2次調査 出土遺物実測図21



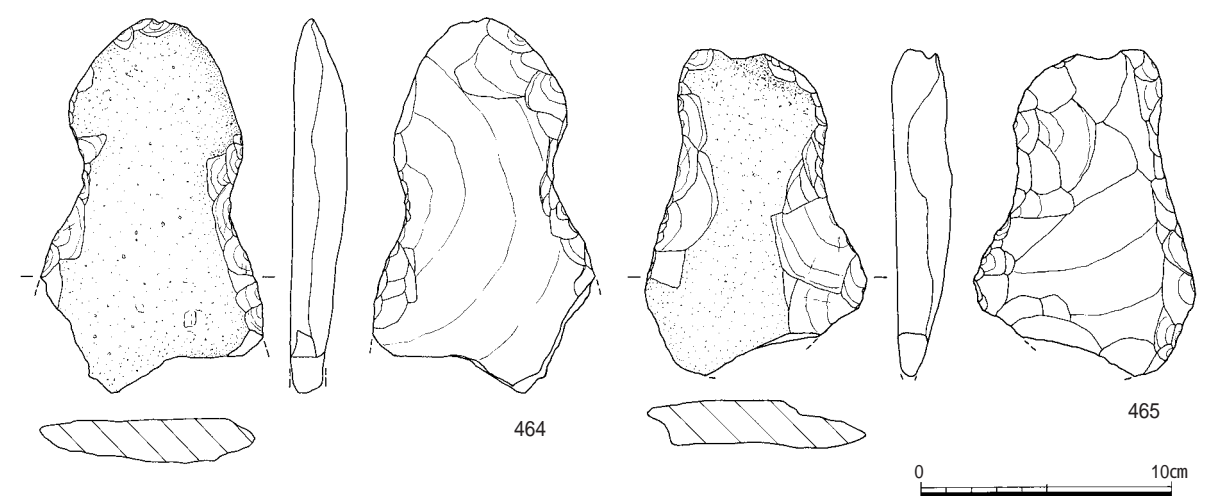
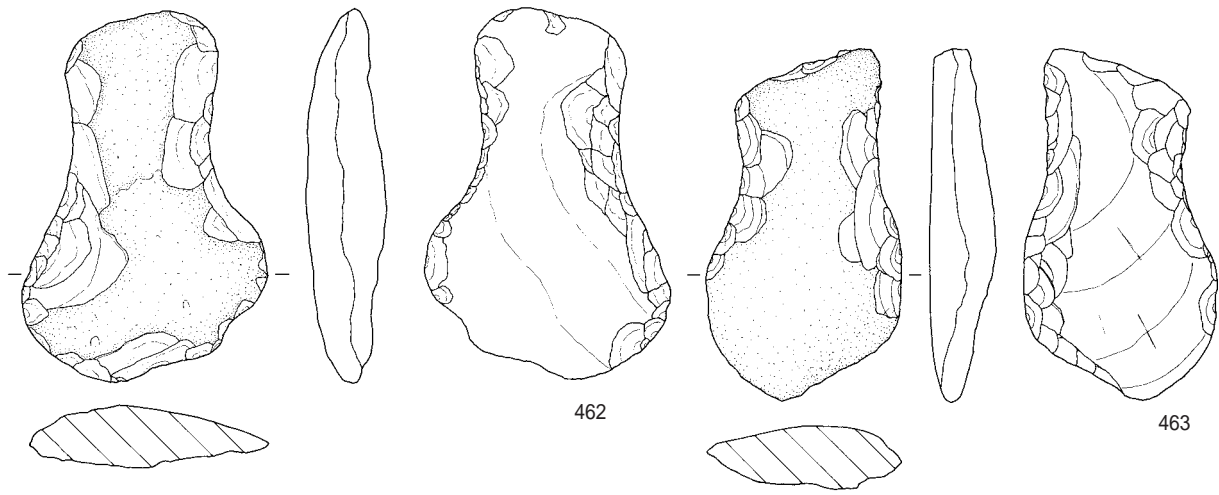
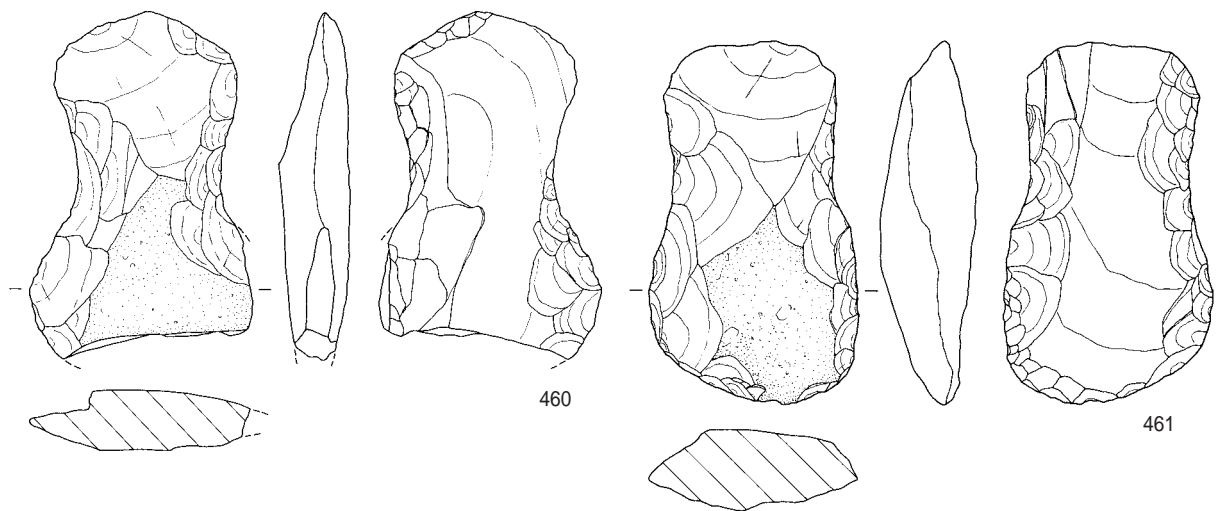
第58図 第2次調査 出土遺物実測図22



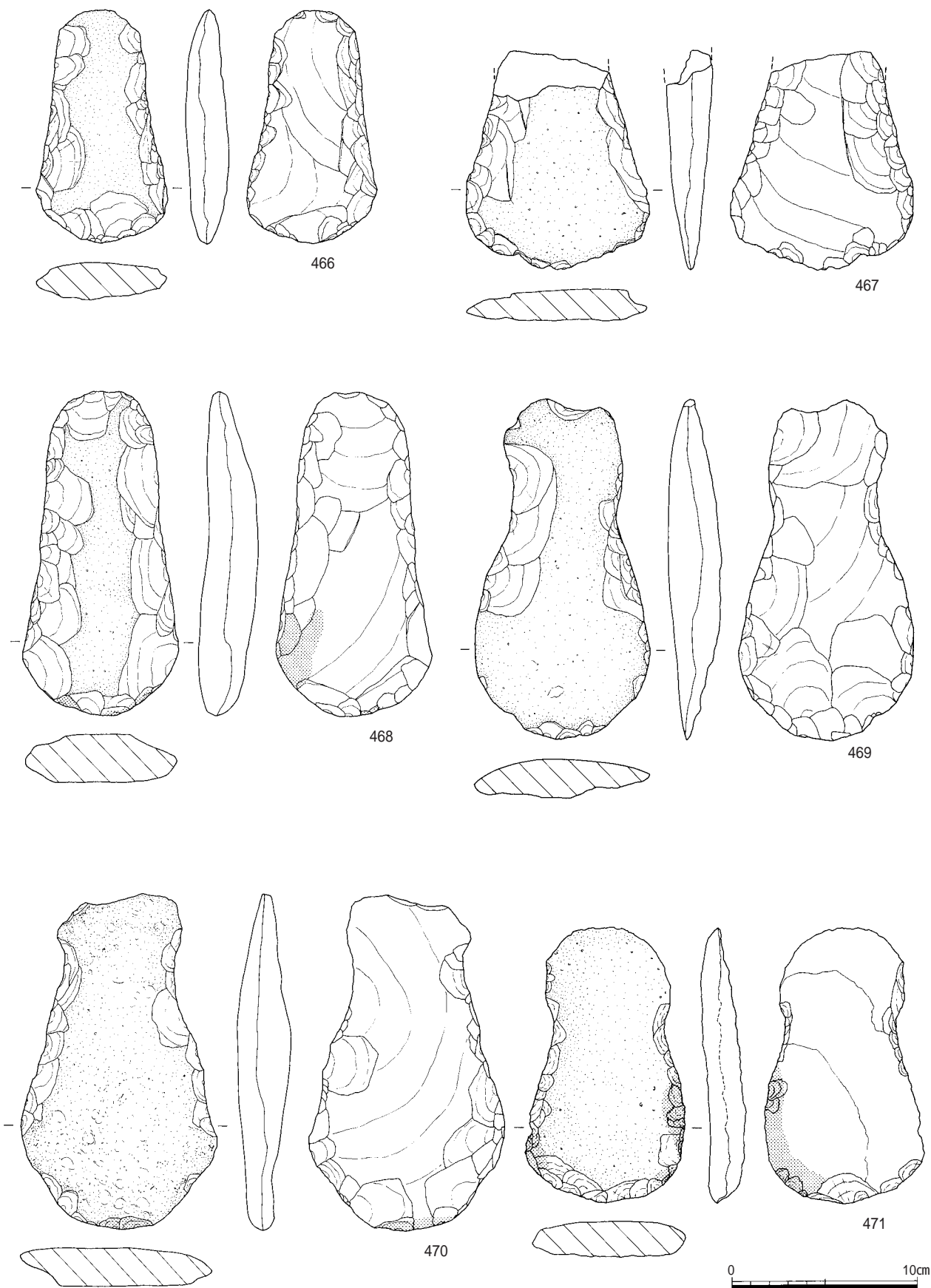
第59図 第2次調査 出土遺物実測図23



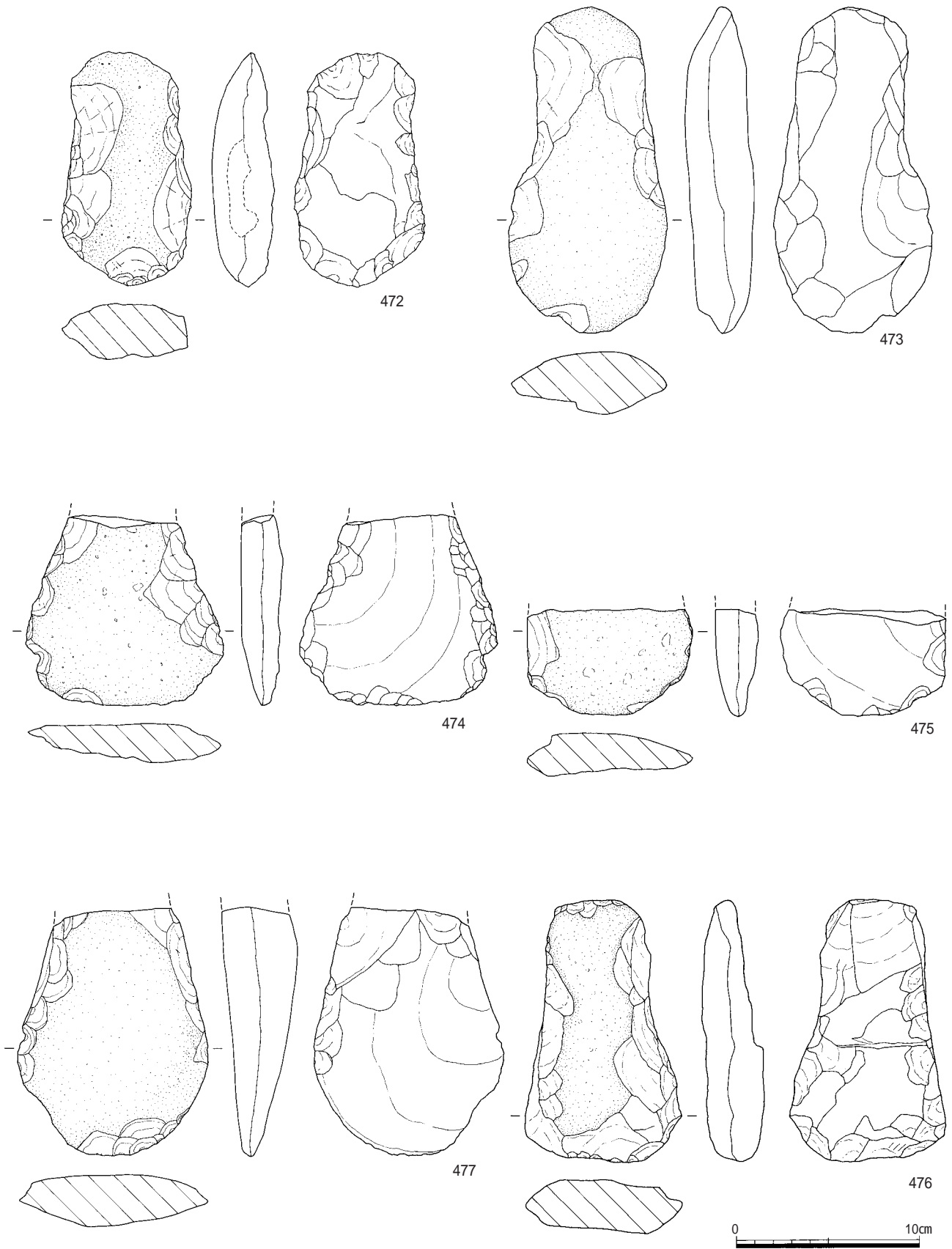
第60図 第2次調査 出土遺物実測図24



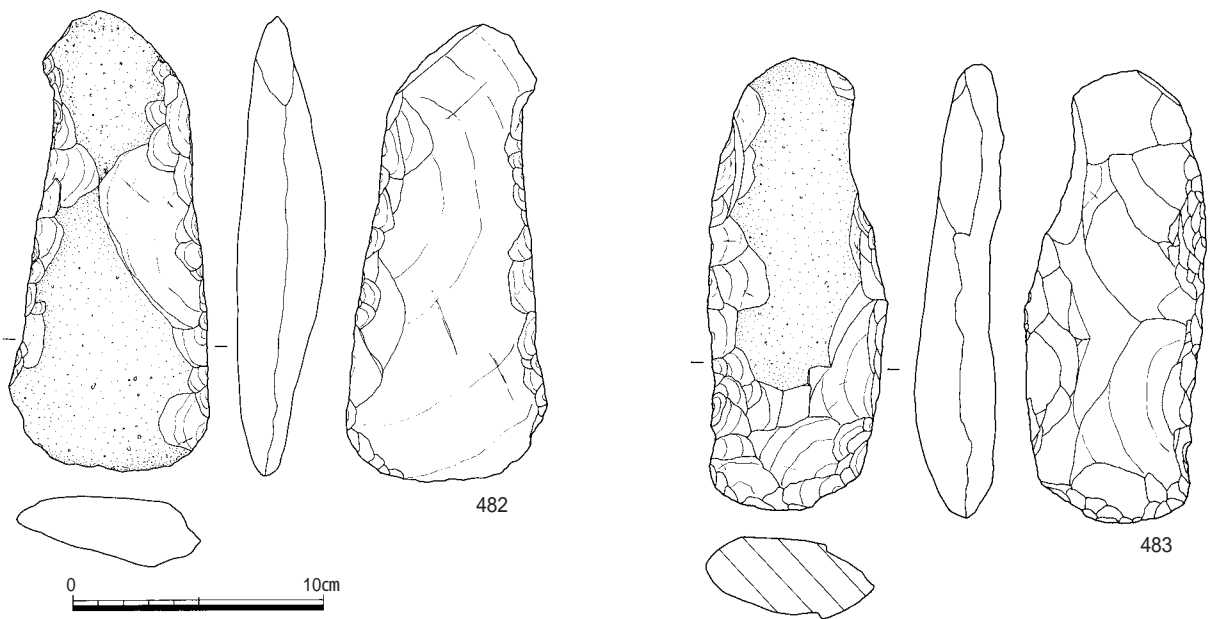
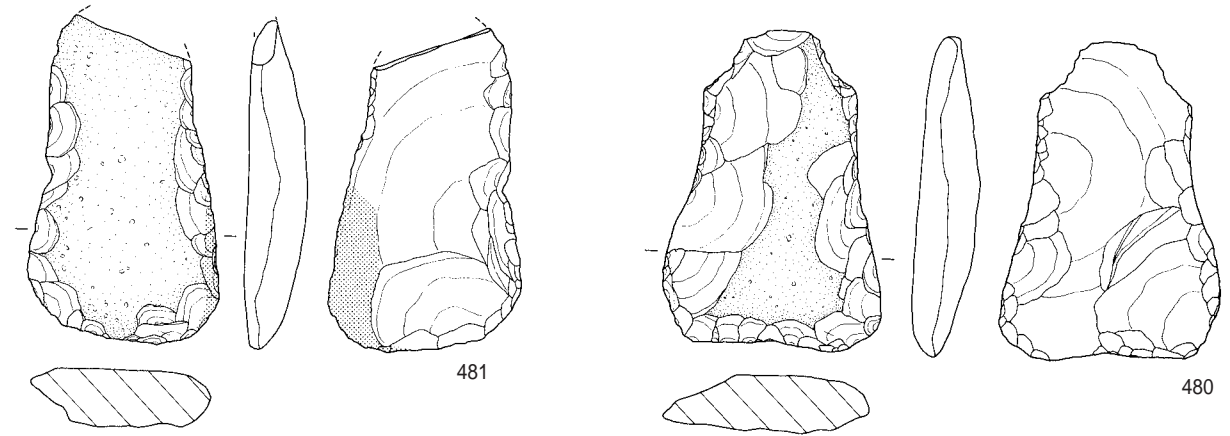
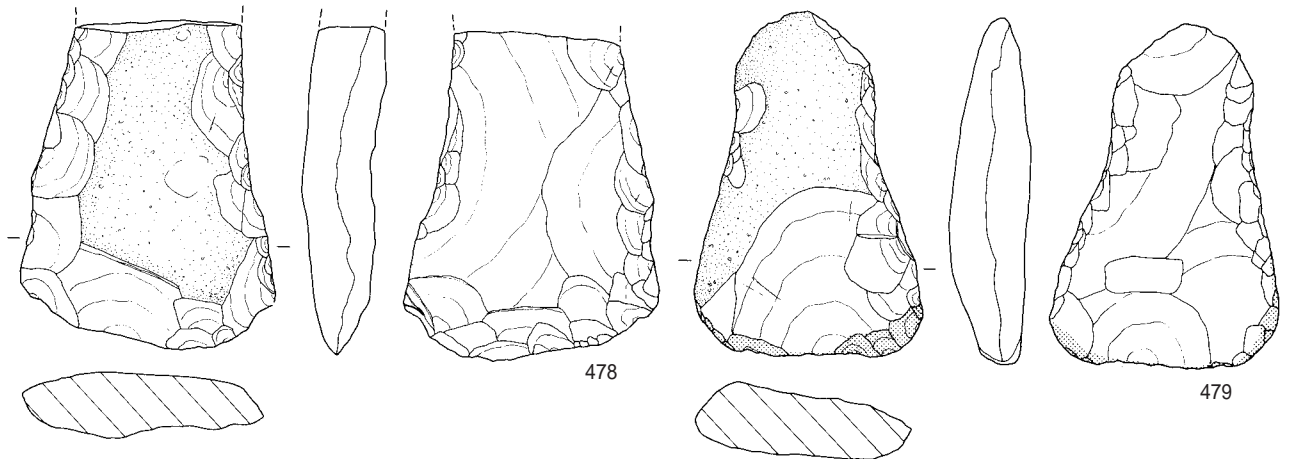
第61図 第2次調査 出土遺物実測図25



第62図 第2次調査 出土遺物実測図26

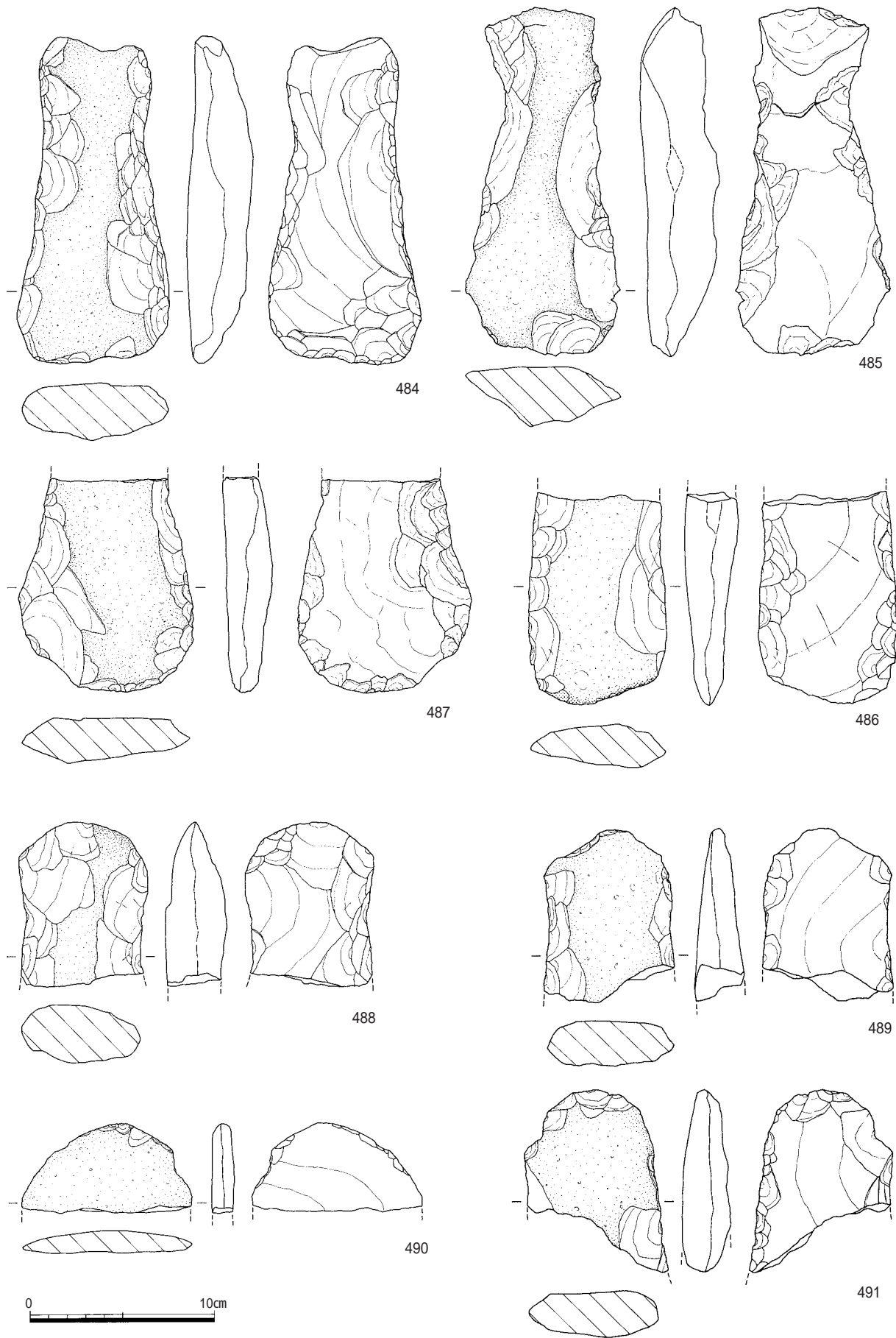


第63図 第2次調査 出土遺物実測図27

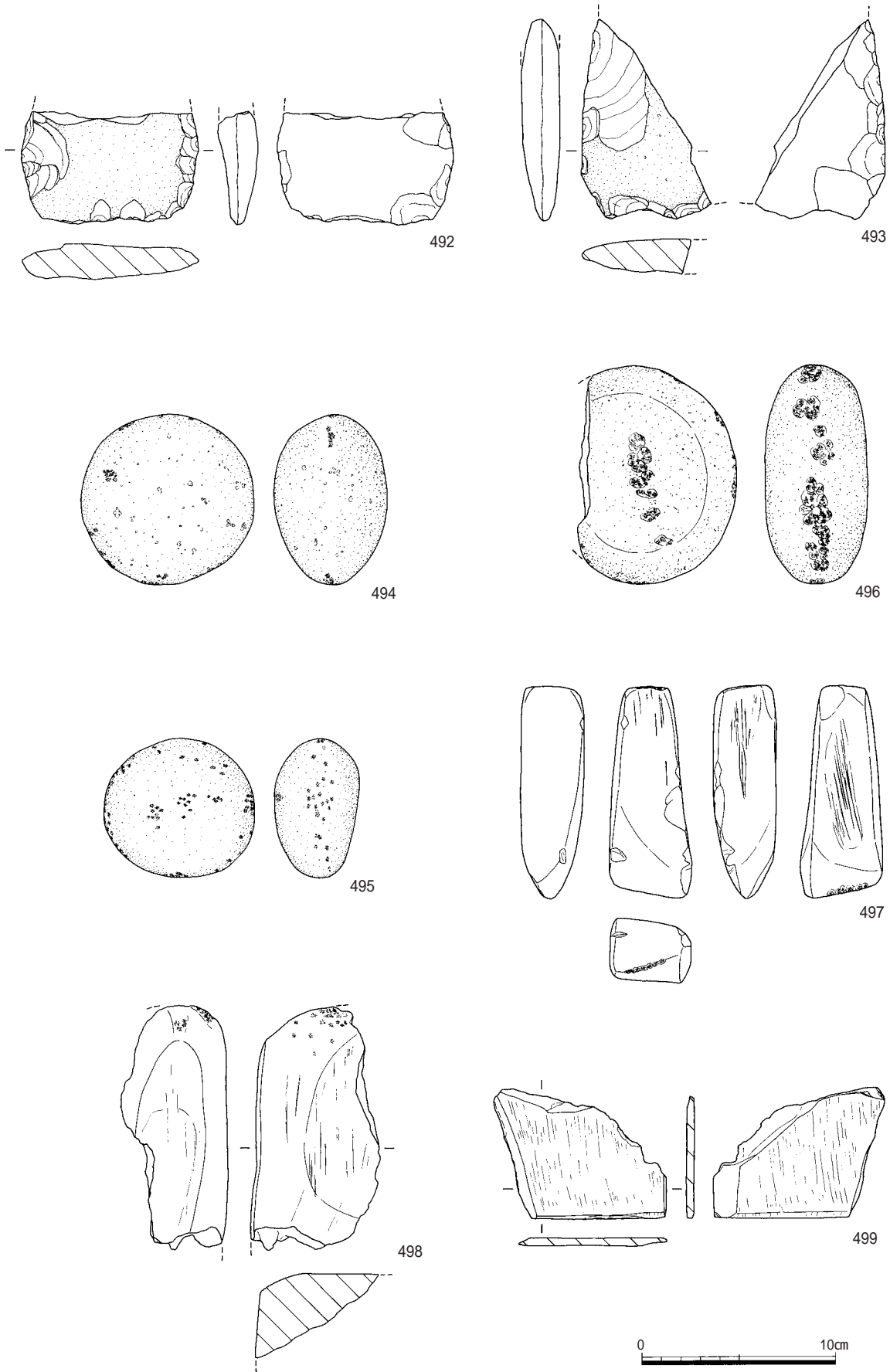


0 10cm

第64図 第2次調査 出土遺物実測図28



第65図 第2次調査 出土遺物実測図29



第66図 第2次調査 出土遺物実測図30

第6表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	器高		
1	37	62	15	89		竪穴建物1 (竪穴建物9) 南	土師器 甕	口径 34.1 器高 2.6	外) 回転ナデ、ハケ 内) 回転ナデ、ハケ	2次焼成を受ける。	
2	37	45	15	89		竪穴建物1 (竪穴建物9) 北	土師器 甕	口径 24.4 残存高 24.8	外) 回転ナデ、ナデ、タ タキ(平行)、ヘラ ケズリ 内) 回転ナデ、ナデ、当 て具(同心円)、ハ ケナデ		
3	37	61	15	89	10 - 20X 130 - 140Y	竪穴建物1 (竪穴建物9) 南	土師器 甕	口径 9.8 器高 8.7 底径 5.8	外) 回転ナデ、回転ナデ 回転系切り 内) 回転ナデ、回転ナデ	2次焼成を受ける。	
4	37	60	15	89		竪穴建物3 (竪穴建物8)	須恵器 杯身	底径 11.2 残存高 2.8	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	重ね焼き痕あり。	
5	37	58	15	89		竪穴建物3 (竪穴建物8)	土師器 甕	口径 11.8 器高 9.8	外) 回転ナデ、ヘラケズ リ、カキメ 内) 回転ナデ、ハケ、カ キメ		
6	37	57	15	89		竪穴建物3 (竪穴建物8) 北	土師器 甕	口径 9.8 器高 9.9 底径 7.0	外) 回転ナデ、回転ケズ リ、回転ナデ、回転 系切り 内) 回転ナデ、回転ナデ	外面に煤付着。 2次焼成を受ける。	
8	37	53	15	89		竪穴建物7 (竪穴建物5)	須恵器 杯蓋	口径 11.6 器高 3.7	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ		
9	37	55	15	89		竪穴建物7 (竪穴建物5) 南	須恵器 杯蓋	口径 16.6 器高 2.3	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。	
10	37	54	15	89		竪穴建物7 (竪穴建物5) 北	須恵器 杯蓋	口径 10.2 器高 0.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 葉付着。	
11	37	56	15	89		竪穴建物7 (竪穴建物5) 北	土師器 甕	口径 22.2 器高 13.2	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ハケ	外面に煤付着。	
12	37	51		89		竪穴建物8 (竪穴建物3)	須恵器 杯身	底径 9.3 残存高 2.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、ナデ		
13	37	50	15	89		竪穴建物8 (竪穴建物3)	土師器 甕	残存高 8.4	外) ハケ 内) ナデ、ハケ	海綿骨片を少 量含む。	
15	38	49	15	89		竪穴建物9 (竪穴建物2) 南西	須恵器 杯蓋	口径 16.0 残存高 2.3	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	内面に重ね焼 き痕あり。	
16	38	47	15	89		竪穴建物9 (竪穴建物2) 北東	須恵器 杯蓋	口径 18.4 残存高 2.3	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 付着。	
17	38	48		89		竪穴建物9 (竪穴建物2) 南西	土師器 長胴甕	口径 20.8 残存高 2.85	外) ヨコナデ 内) ハケ、ヨコナデ	外面に煤付着。	
18	38	46	15	89		竪穴建物9 (竪穴建物2) 北東	土師器 長胴甕	口径 26.2 残存高 11.6	外) 回転ナデ、カキメ 内) 回転ナデ、ハケ		
19	38	27	15	89		土坑1 (土坑9)	土師器 甕	口径 24.4 残存高 3.4	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ、カキメ	外面に煤付着。	
20	38	28	15	89		土坑1 (土坑9)	須恵器 杯身	底径 7.4 残存高 2.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
21	38	29	15	89		土坑2 (土坑8)	須恵器 有台杯身	底径 8.2 残存高 1.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
22	38	30	15	89		土坑2 (土坑8)	須恵器 有台杯身	底径 10.3 残存高 2.3	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
23	38	13	16	89		土坑3	須恵器 杯蓋	口径 15.4 器高 8.6 摘み部径 3.2 摘み部高 0.6	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ、ナデ	内面に使用痕 あり。 外面に降灰か かる。	

第7表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 ()は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	残存高		
24	38	14	16	89		土坑3	土師器 甕	口径 21.7 残存高 9.7	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ、ケ ズリ、指頭圧痕		
26	38	39	16	89		土坑5 (土坑10)	須恵器 杯蓋	摘み部径 2.8 摘み部高 0.9 残存高 2.8	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。 内面に使用痕 あり。	
27	38	42	16	89		土坑5 (土坑10)	須恵器 杯蓋	口径 18.2 残存高 2.2	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	内面に使用痕 あり。	
28	38	36	16	89		土坑5 (土坑10)	須恵器 杯蓋	摘み部径 3.2 摘み部高 0.7 残存高 2.3	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ		
29	38	37	16	89		土坑5 (土坑10)	須恵器 杯蓋	口径 16.0 残存高 3.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 付着。	
30	38	32	16	89		土坑5 (土坑10)	須恵器 有台杯身	底径 7.1 残存高 1.7	外) 回転ナデ、ナデ 回転ヘラ切り 内) 回転ナデ、ナデ	内面に使用痕 あり。	
31	38	38	16	89		土坑5 (土坑10)	須恵器 有台杯身	口径 13.8 器高 4.2	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
32	38	43	16	89		土坑5 (土坑10)	須恵器 有台杯身	口径 14.8 器高 3.9 底径 8.6	外) 回転ナデ、ヘラ切り 後ナデ 内) 回転ナデ		
33	38	41	16	89		土坑5 (土坑10)	土師器 甕	口径 14.4 残存高 3.6	外) ヨコナデ、カキメ 内) ヨコナデ、カキメ		
34	38	40	16	89		土坑5 (土坑10)	土師器 甕	口径 14.0 残存高 4.8	調整不明瞭	2次焼成を受 ける。	
35	38	34	16	89		土坑5 (土坑10)	土師器 甕	口径 20.6 残存高 4.6	外) 回転ナデ、カキメ 内) 回転ナデ、ハケ	内面にスス付 着。	
36	38	44	16	89		土坑5 (土坑10)	土師器 甕	口径 18.0 残存高 7.9	外) 回転ナデ、ハケ 内) 回転ナデ、ハケ	外面に煤付着。	
37	38	31	16	89		土坑5 (土坑10)	土師器 甕	口径 17.4 残存高 3.0	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ハケ	2次焼成を受 ける。	
38	38	35	16	89		土坑5 (土坑10)	土師器 甕	口径 14.0 残存高 11.0	外) ヨコナデ、ナデ、 ラケズリ 内) ヨコナデ、ハケ	外面に煤付着。	
40	39	23	17	89		土坑7 (土坑4)	須恵器 杯蓋	口径 17.0 残存高 1.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。	
41	39	25	17	89		土坑7 (土坑4)	須恵器 杯蓋	口径 15.0 残存高 1.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。	
42	39	15	17	89		土坑7 (土坑4)	土師器 杯蓋	口径 15.0 残存高 2.1	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に重ね焼 き痕あり。	
43	39	16	17	89		土坑7 (土坑4)	須恵器 有台杯身	底径 8.7 残存高 2.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
44	39	18	17	89		土坑7 (土坑4)	須恵器 杯身	口径 14.0 器高 3.5 底径 10.8	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。	
45	39	24	17	89		土坑7 (土坑4)	須恵器 鍋	口径 35.6 残存高 1.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に降灰か かる。	
46	39	22	17	89		土坑7 (土坑4)	土師器 鍋	口径 36.3 残存高 3.0	外) ハケ 内) ハケ		
47	39	17	17	89		土坑7 (土坑4)	須恵器 壺	口径 12.8 残存高 5.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
48	39	569	17	89		土坑7 (土坑4)	須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具痕 (同心円)		
49	39	20	17	89		土坑7 (土坑4)	土師器 甕	口径 24.2 残存高 2.9	外) ナデ 内) ナデ、ハケ	外面にスス付 着。	
50	39	19	17	89		土坑7 (土坑4)	土師器 甕	口径 15.0 残存高 4.9	外) ナデ、ナデ 内) ナデ、カキメ	2次焼成を受 ける。	
51	39	21	17	89		土坑7 (土坑4)	土師器 甕	口径 13.4 残存高 4.7	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ、ナデ	外面にスス付 着。	

第8表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	残存高		
52	39	26	17	89		土坑7 (土坑4)	土師器 甕	口径 17.0	残存高 7.0	外) ヨコナデ、ハケ、ケ ズリ 内) ヨコナデ、ナデ	
53	39	7	17	89		土坑9 (土坑2)	須恵器 杯蓋	口径 17.8	器高 2.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。 内面に使用痕 あり。
54	39	6		89		土坑9 (土坑2)	須恵器 杯蓋	口径 16.8	残存 1.8	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。
55	39	8		89		土坑9 (土坑2)	須恵器 有台杯身	底径 9.4	残存高 2.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に使用痕 あり。
56	39	5	17	89		土坑9 (土坑2)	須恵器 杯	口径 13.4	器高 2.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	
57	39	1	17	89		土坑9 (土坑2)	赤彩土器 盤	口径 15.6	器高 2.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外内面赤彩塗 布。 口縁部内・外面に煤付着。
58	39	12	17	89		土坑9 (土坑2)	須恵器 高杯	口径 15.4	器高 8.6 底径 10.6	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	内面に使用痕 あり。
59	39	3	18	89		土坑9 (土坑2)	土師器 鍋	口径 30.0	残存高 5.2	外) ヨコナデ、ナデ、ハ ケ 内) ヨコナデ、ハケ	
60	39	10	18	89		土坑9 (土坑2)	土師器 甕	口径 43.0	残存高 9.7	外) ヨコナデ、ハケ、へ ラケズリ 内) ヨコナデ、ハケ	外面に煤付着。
61	39	4	18	89		土坑9 (土坑2)	土師器 甕	口径 14.6	残存高 5.0	外) 回転ナデ、ナデ 内) 回転ナデ、ナデ	
62	39	9	18	89		土坑9 (土坑2)	土師器 甕	口径 16.6	残存高 11.0	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	外面に煤付着。
63	40	11	18	89	20 - 30X 0 - 10Y	土坑9 (土坑2)	土師器 甕	口径 21.6	残存高 20.5	外) 回転ナデ、ナデ 内) 回転ナデ、ナデ、指 頭圧痕	
65	40	142	18	89		土坑10 (中世土坑1) 8	土師器 皿	口径 8.3	器高 1.6	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成を受 ける。
66	40	143	18	89		土坑10 (中世土坑1) 7	土師器 皿	口径 8.6	器高 1.2	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成を受 ける。
67	40	138	18	89		土坑10 (中世土坑1) 2	土師器 皿	口径 8.3	器高 2.0	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成を受 ける。
68	40	148	18	89	10 - 20X 70 - 80Y	土坑10 (中世土坑1) 17	土師器 皿	口径 8.5	器高 1.9	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成を受 ける。
69	40	135	18	89		土坑10 (中世土坑1) 5	土師器 皿	口径 8.6	器高 1.75	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	口縁に黒色物 付着。 2次焼成を受 ける。
70	40	134	18	89		土坑10 (中世土坑1) 16	土師器 皿	口径 8.3	器高 2.0	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	
71	40	140	18	89		土坑10 (中世土坑1) 3	土師器 皿	口径 8.3	器高 1.75	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	
72	40	137	18	89		土坑10 (中世土坑1) 20	土師器 皿	口径 8.7	器高 1.5	外) ヨコナデ、ナデ、指 頭圧痕 内) ヨコナデ、ナデ	
73	40	136	18	89		土坑10 (中世土坑1) 15・20・22	土師器 皿	口径 8.3	器高 1.8	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成を受 ける。
74	40	141	18	89	10 - 20X 70 - 80Y	土坑10 (中世土坑1)	土師器 皿	口径 8.3	器高 1.5	外) ヨコナデ、ナデ、指 頭圧痕 内) ヨコナデ、ナデ	内・外面に煤 付着。

第9表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	器高		
75	40	139	18	89	10 - 20X 70 - 80Y	土坑10 (中世土坑 1) 6	土師器 皿	口径 器高	8.4 1.8	外) ヨコナデ、ナデ、指 頭圧痕 内) ヨコナデ、ナデ	外面に煤付着。
76	40	146	18	89		土坑10 (中世土坑 1) 10	土師器 皿	口径 器高	7.7 2.8	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成を受ける。
77	40	144	18	89		土坑10 (中世土坑 1) 4・9	土師器 皿	口径 器高	12.0 2.8	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成を受ける。
78	40	145	19	89	10 - 20X 70 - 80Y	土坑10 (中世土坑 1) 14・21	土師器 皿	口径 器高	12.1 2.9	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	
79	40	147	19	89	10 - 20X 70 - 80Y	土坑10 (中世土坑 1) 1	土師器 皿	口径 器高	11.7 3.2	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成を受ける。
83	41	64	19	89		掘立柱建物 8 小穴22	須恵器 有台杯身	口径 器高 底径	14.8 4.1 8.3	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
84	41	63		89		掘立柱建物 8 小穴22	土師器 鍋	口径 器高	34.2 2.7	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、ナデ	外面に煤付着。
85	41	65	19	89		小穴25	土師器 甕	口径 残存高	12.4 4.8	外) ヨコナデ、八ケ 内) ヨコナデ、ナデ	
86	41	66		89		小穴42	須恵器 杯蓋	口径 残存高	16.0 2.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
87	41	67	19	89		小穴52	須恵器 杯蓋	口径 残存高	16.4 2.1	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。
88	41	69		89		小穴60	土師器 甕	口径 残存高	10.8 3.0	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ	
89	41	68		89		小穴61	土師器 甕	口径 残存高	29.6 2.0	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ、八ケ	
90	41	86	19	89		小穴88	須恵器 杯身	口径 器高 底径	11.6 5.3 7.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	内面に墨痕あ り。
91	41	85		89		小穴99	須恵器 杯蓋	口径 残存高	11.0 1.9	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	
92	41	84		89		小穴100	須恵器 椀	口径 器高 底径	13.4 3.2 7.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	
93	41	83	19	89		小穴104	赤彩土器 椀	口径 残存高	14.8 3.7	外) ヘラミガキ 内) ヘラミガキ	内外面に赤彩 塗布。
94	41	76	19	89		小穴107	須恵器 杯蓋	口径 器高	15.0 2.5	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	
95	41	78	19	89		小穴107	須恵器 杯蓋	口径 残存高	14.8 1.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。
96	41	80	19	89		小穴107	須恵器 有台杯身	口径 器高 底径	10.8 3.9 6.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	
97	41	79	19	89		小穴107	須恵器 甕	口径 残存高	20.0 3.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 あり。
98	41	81	19	89		小穴107	須恵器 甕	口径 残存高	23.4 4.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 かかる。
99	41	82	19	89		小穴107	土師器 椀	口径 残存高	18.4 3.5	外) ヨコナデ、回転ケズ リ 内) ヘラミガキ	内面は黒色で ある。
100	41	77	19	89		小穴107	須恵器 瓶	口径 残存高	12.4 8.3	外) 回転ナデ、沈線 (2 条) 内) 回転ナデ	内・外面に自 然釉付着。
101	41	71	19	89		小穴108	土師器 皿	口径 残存高	13.0 2.1	外) ヨコナデ 内) ヘラミガキ	内面は黒色で ある。
102	41	70	19	89		小穴108	須恵器 鉢	口径 残存高	25.3 5.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	

第10表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)	調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版							
103	41	72	19	89		小穴114	須恵器 杯蓋	口径 17.8 残存高 3.0	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	
104	41	75		89		小穴120	須恵器 甕	口径 22.8 残存高 2.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内・外面に降灰かかる。
105	41	74	20	89		小穴121	須恵器 有台杯身	口径 13.6 器高 3.9 底径 9.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉付着。 外面に重ね焼き痕あり。
106	41	73	20	89		小穴126	須恵器 有台杯身	底径 10.2 残存高 3.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
107	42	249	20	89	10 - 20X 50 - 60Y		縄文土器 鉢	測定不能	外) 沈線、縄文 (L - R) 内) ナデ	2次焼成受ける。 実測図の向きが逆の可能性あり。
108	42	531	20	89	水路農道 北側調査区		縄文土器 鉢	測定不能	外) ミガキ 内) ミガキ	
109	42	160	20	89	20 - 40X 150 - 190Y		須恵器 杯蓋	口径 13.3 器高 3.1 摘み部 2.0	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	内面に線刻「=」あり。
110	42	337		89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯蓋	口径 11.4 残存高 2.5 摘み部径 2.5	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	
111	42	210	20	89	13 - 35X 40.10Y		須恵器 杯蓋	口径 12.8 器高 3.3 摘み部径 1.3	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼き痕あり。
112	42	362	20	89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 杯蓋	口径 14.3 器高 3.4 摘み部径 1.5	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	内・外面に使用痕あり。
113	42	157	20	89	10 - 20X 70 - 80Y		須恵器 杯蓋	口径 15.6 器高 3.0	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	内・外面に使用痕あり。
114	42	286		89	20 - 30X 30 - 40Y		須恵器 杯蓋	残存高 1.8 摘み部径 3.2	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ、ナデ	外面に線刻「-」あり。
115	42	252	20	89	10 - 20X 80 - 90Y		須恵器 杯蓋	残存高 2.2 摘み部径 3.2	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、回転ケズリ	
116	42	315	20	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 杯蓋	口径 16.4 器高 2.7 摘み部径 2.1	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼き痕あり。
117	42	445	20	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 杯蓋	摘み部径 3.1	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	外面に自然釉付着。
118	42	199	20	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 杯蓋	口径 17.9 器高 3.6 摘み部径 3.5	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	外面に降灰かかる。
119	42	318	20	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 杯蓋	残存高 3.1 摘み部径 2.5	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	
120	42	181	20	89	20 - 30X 10 - 20Y		須恵器 杯蓋	摘み部径 3.4 摘み部高 1.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に使用痕あり。
121	42	248	20	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 杯蓋	残存高 2.0 摘み部径 3.1	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	
122	42	338		89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯蓋	残存高 2.6 摘み部径 3.2	外) 回転ナデ、回転ケズリ、ナデ 内) 回転ナデ	内面に使用痕あり。
123	42	179	20	89	20 - 30X 10 - 20Y		須恵器 杯蓋	摘み部径 3.1 摘み部高 0.55	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	内面に使用痕あり。
124	42	333	20	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯蓋	口径 13.4 器高 4.5 摘み部高 3.3	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	

第11表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)	調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版							
125	42	264	20	89	20 - 30X 70 - 80Y		須恵器 杯蓋	口径 12.3 器高 3.0 摘み部径 2.1	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼き痕あり。
126	42	190	20	89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 杯蓋	口径 16.4 器高 2.5 摘み部径 3.4	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	外面に降灰かかる。
127	42	250	21	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 杯蓋	残存高 1.7 摘み部径 2.9	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	外面に自然釉付着。 内面に使用痕あり。
128	42	387	21	89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 杯蓋	口径 16.8 残存高 2.7	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉付着。
129	42	358		89	10 - 20X 70 - 80Y		須恵器 杯蓋	口径 15.8 残存高 2.3	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	
130	42	360	21	89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 杯蓋	口径 13.1 残存高 2.1	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	外面に降灰かかる。 内面に使用痕あり。
131	42	336	21	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯蓋	口径 16.6 残存高 2.3	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	外面に降灰かかる。 内面に使用痕あり。
132	42	427	21	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 杯蓋	口径 15.6 残存高 2.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に降灰かかる。 内面に重ね焼き痕あり。
133	42	282	21	89	20 - 30X 30 - 40Y		須恵器 杯蓋	口径 14.8 残存高 2.5	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ、ナデ	内面に煤付着。
134	42	371		89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 杯蓋	口径 12.6 残存高 10.6	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	内・外面に重ね焼き痕あり。
135	42	325	21	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 杯蓋	口径 17.4 残存高 2.1	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	外面に自然釉付着。 内面に線刻「×」あり。
136	42	268		89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 杯蓋	口径 15.2 残存高 2.3	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
137	42	321	21	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 杯蓋	口径 16.4 残存高 1.9	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	
138	42	584		89	20 - 30X 30 - 40Y		須恵器 杯蓋	口径 16.0 残存高 2.8	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	外面に降灰かかる。
139	42	254	21	89	10 - 20X 80 - 90Y		須恵器 有台杯身	口径 13.4 器高 4.9 底径 6.7	外) 回転ナデ、ナデ 内) 回転ナデ	
140	42	303	21	89	10 - 20X 10 - 20Y		須恵器 有台杯身	口径 11.8 器高 8.2 底径 4.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に線刻「三」あり。
141	42	316	21	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 有台杯身	口径 14.1 器高 8.7 底径 4.7	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	
142	42	329	21	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 有台杯身	口径 11.4 器高 4.0 底径 7.1	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に線刻「-」あり。
143	42	373	21	89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 有台杯身	残存高 1.4 底径 8.9	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	内面に使用痕あり。
144	43	198	21	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 有台杯身	口径 12.6 器高 4.0 底径 8.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	内面に使用痕あり。
145	43	340	21	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 有台杯身	口径 9.8 器高 3.7 底径 7.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に降灰かかる。

第12表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	器高 底径		
146	43	197	21	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 有台杯身	口径 11.2 器高 3.8 底径 7.7	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	内面に使用痕 あり。	
147	43	168	21	89	20 - 30X 150 - 160Y		須恵器 有台杯身	口径 10.8 器高 4.35 底径 7.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
148	43	194	21	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 有台杯身	口径 11.4 器高 4.15 底径 7.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	酸化焰焼成	
149	43	214	21	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 有台杯身	口径 9.4 器高 4.2 底径 7.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
150	43	365	21	89	10 - 20X 70 - 80Y		須恵器 有台杯身	口径 10.6 器高 4.5 底径 5.8	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。	
151	43	369	21	89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 有台杯身	残存高 3.0 底径 5.9	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
152	43	366	21	89	10 - 20X 70 - 80Y		須恵器 有台杯身	残存高 2.0 底径 6.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
153	43	339	21	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 有台杯身	残存高 2.7 底径 6.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
154	43	417		89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 杯身	口径 16.4 残存高 5.0	外) 回転ナデ、沈線 (1 条) 内) 回転ナデ		
155	43	196		89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 有台杯身	口径 14.3 器高 5.5 底径 8.9	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	内面に使用痕 あり。 外面に自然釉 薬附着。	
156	43	255	21	89	10 - 20X 90 - 100Y		須恵器 有台杯身	口径 14.9 器高 4.5 底径 9.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
157	43	211	21	89	13 - 35X 40.10Y		須恵器 有台杯身	口径 15.4 器高 5.8 底径 10.2	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	外面に線刻 「//」あり。	
158	43	422	21	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 有台杯身	残存高 5.5 底径 12.2	外) 回転ナデ、沈線 (1 条) 内) 回転ナデ		
159	43	278		89	20 - 30X 40 - 50Y		須恵器 有台杯身	口径 15.4 器高 3.8 底径 9.6	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ、ナデ	内面に使用痕 あり。	
160	43	372	21	89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 有台杯身	口径 15.0 器高 3.8 底径 11.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 薬附着。	
161	43	152	21	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 有台杯身	口径 14.9 器高 4.0 底径 9.3	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
162	43	292	21	89	10 - 20X 160Y ~		須恵器 有台杯身	口径 15.0 器高 4.1 底径 8.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
163	43	178		89	20 - 30X 20 - 30Y		須恵器 有台杯身	口径 15.8 器高 9.6 底径 8.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
164	43	183	22	89	20 - 30X 0 - 10Y		須恵器 有台杯身	口径 15.4 器高 4.3 底径 9.8	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
165	43	319	22	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 有台杯身	残存高 2.5 底径 7.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
166	43	370	22	89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 瓶	残存高 1.5 底径 0.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
167	43	341		89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 有台杯身	残存高 1.3 底径 11.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	内面に使用痕 あり。	

第13表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	器高 底径		
168	43	244	22	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 有台杯身	底径 11.8 残存高 1.7	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
169	43	465	22	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 有台杯身	口径 11.2 器高 3.5 底径 7.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
170	43	470	22	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 有台杯身	口径 10.9 器高 4.1 底径 7.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
171	43	291	22	89	10 - 20X 150 - 160Y		須恵器 有台杯身	口径 12.8 器高 3.3 底径 8.2	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。	
172	43	331	22	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 有台杯身	口径 12.3 器高 4.4 底径 7.3	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
173	43	279	22	89	20 - 30X 40 - 50Y		須恵器 有台杯身	口径 14.9 器高 4.1 底径 10.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。	
174	43	159	22	89	10 - 20X 120 - 130Y		須恵器 有台杯身	口径 13.8 器高 4.0 底径 8.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 薬附着。 内面に線刻「」 あり。	
175	43	195	22	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 有台杯身	口径 12.6 器高 4.0 底径 8.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	外面に線刻 「=」あり。	
176	43	304	22	89	10 - 20X 10 - 20Y		須恵器 有台杯身	口径 14.0 器高 9.3 底径 4.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
177	43	489	22	89	20 - 30X 30 - 40Y		須恵器 有台杯身	残存高 1.2 底径 7.5	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	外面に線刻 「//」あり。	
178	44	367	22	89	10 - 20X 70 - 80Y		須恵器 有台杯身	残存高 1.3 底径 5.2	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
179	44	452	22	89	20 - 30X 20 - 30Y		須恵器 有台杯身	残存高 2.8 底径 8.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
180	44	269	22	89	20 - 30X 50 - 60Y		須恵器 有台杯身	残存高 2.4 底径 5.0	外) 回転ナデ、ナデ 内) 回転ナデ		
181	44	271	22	89	20 - 30X 50 - 60Y		須恵器 有台杯身	残存高 3.3 底径 4.8	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ、ナデ	酸化焙焼成 内面に使用痕 あり。	
182	44	396	22	89	20 - 30X 10 - 20Y		須恵器 有台杯身	残存高 2.4 底径 9.3	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
183	44	398	22	89	20 - 30X 150 - 160Y		須恵器 有台杯身	残存高 3.4 底径 8.3	外) 回転ナデ、ナデ 内) 回転ナデ	外面に使用痕 あり。	
184	44	361	22	89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 有台杯身	残存高 2.5 底径 9.8	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	内面に使用痕 あり。	
185	44	327	22	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 杯身	口径 12.0 器高 2.2 底径 7.4	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
186	44	212	22	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯身	口径 12.2 器高 4.9	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。	
187	44	368	22	89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 杯身	口径 13.6 器高 2.95 底径 7.2	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	内面に使用痕 あり。	
188	44	364	22	89	10 - 20X 70 - 80Y		須恵器 杯身	口径 12.8 器高 2.8 底径 5.9	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。	
189	44	386	22	89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 杯身	口径 12.0 器高 2.75 底径 7.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		

第14表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	器高 底径		
190	44	328	22	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 杯身	口径 11.4 器高 2.3 底径 8.2	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	内面に重ね焼き痕あり。	
191	44	263	23	89	20 - 30X 70 - 80Y		須恵器 杯身	口径 12.2 器高 3.0 底径 7.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
192	44	265	23	89	20 - 30X 60 - 70Y		須恵器 杯身	口径 12.8 器高 2.6 底径 7.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
193	44	213	23	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯身	口径 11.8 器高 3.3 底径 6.8	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
194	44	606	23	89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 杯身	口径 10.8 器高 3.4 底径 3.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
195	44	469	23	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 杯身	口径 11.9 器高 3.0 底径 8.4	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	外面に煤付着。	
196	44	330	23	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯身	口径 11.6 器高 3.2 底径 8.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼き痕あり。	
197	44	586	23	89	20 - 30X 0 - 10Y		須恵器 杯身	口径 13.0 器高 2.6 底径 8.1	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
198	44	464		89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯身	口径 12.0 器高 3.1 底径 8.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
199	44	167	23	89	20 - 30X 140 - 150Y		須恵器 杯身	口径 11.5 器高 3.2 底径 5.3	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
200	44	471	23	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯身	口径 12.5 器高 3.4 底径 10.8	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
201	44	334	23	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯身	口径 13.4 器高 3.6 底径 9.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼き痕あり。	
202	44	187	23	89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 杯身	口径 13.4 器高 3.3 底径 9.4	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
203	44	243	23	89	農道 北側調査区		須恵器 杯身	口径 13.0 器高 3.65 底径 8.7	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
204	44	274	23	89	20 - 30X 40 - 50Y		須恵器 杯身	口径 12.8 器高 3.4 底径 7.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	外面に重ね焼き痕あり。	
205	44	247	23	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 杯身	口径 13.0 器高 3.65 底径 6.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼き痕あり。	
206	44	332	23	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯身	口径 12.4 器高 3.1 底径 9.3	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
207	44	335	23	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 杯身	口径 12.2 器高 3.3 底径 7.1	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	内・外面に重ね焼き痕あり。	
208	44	267	23	89	20 - 30X 60 - 70Y		須恵器 杯身	口径 13.0 器高 3.1 底径 6.8	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	酸化焰焼成。	
209	44	153	23	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 杯身	口径 13.7 器高 3.3 底径 8.2	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	内面に重ね焼き痕あり。	
210	44	251	23	89	10 - 20X 80 - 90Y		須恵器 杯身	口径 13.2 器高 3.3 底径 8.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼き痕あり。 内面は使用痕あり。	

第15表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	器高 底径		
211	44	182	23	89	20 - 30X 10 - 20Y		須恵器 杯身	口径 12.8 器高 3.55 底径 8.9	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
212	44	324	23	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 杯身	口径 14.0 器高 3.2 底径 3.2	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	酸化焰焼成 外面に重ね焼 き痕あり。	
213	44	156	23	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 杯身	口径 13.6 器高 3.5 底径 8.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。	
214	44	595	23	89	20 - 30X 60 - 70Y		須恵器 杯身	口径 13.1 器高 3.1 底径 8.4	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。	
215	44	261	23	89	20 - 30X 70 - 80Y		須恵器 杯身	口径 12.9 器高 3.1 底径 4.8	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。 外面に降灰か かる。 内面に使用痕 あり。	
216	44	155	23	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 杯身	口径 14.2 器高 3.35 底径 8.6	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。	
217	44	290	23	89	10 - 20X 140 - 150Y		須恵器 杯身	口径 13.8 器高 3.2 底径 9.5	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。	
218	44	257	23	89	10 - 20X 120 - 130Y		須恵器 杯身	口径 13.8 器高 3.0 底径 3.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。 外面に降灰か かる。	
219	44	259	24	89	10 - 20X 120 - 130Y		須恵器 有台杯身	残存高 4.7 底径 6.5	外) 回転ナデ 内) 調整不明瞭	外面は自然釉 付着。 内面に降灰か かる。	
220	44	317		89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 有台杯身	残存高 3.1 底径 9.1	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
221	44	162	24	89	20 - 30X 110 - 120Y, 20 - 30X 140 - 150Y		土師器 有台杯身	口径 11.9 器高 4.2 底径 6.4	外) ヨコナデ、回転ナデ、 回転糸切り 内) ヘラミガキ	内面は黒色。	
222	44	375		89	10 - 20X 60 - 70Y		土師器 有台椀	残存高 2.0 底径 6.2	外) 回転ナデ 内) ヘラミガキ	内面は黒色。	
223	45	289		89	10 - 20X 100 - 110Y		土師器 有台椀	残存高 2.7 底径 6.8	外) ヨコナデ、回転ナデ、 回転糸切り 内) ヘラミガキ	内面は黒色。	
224	45	437	24	89	20 - 30X 120 - 130Y		赤彩土器 椀	残存高 1.7 底径 7.0	外) ヘラミガキ 内) 調整不明瞭	外面は赤彩塗 布。 内面は黒色。	
225	45	357		89	10 - 20X 70 - 80Y		土師器 椀	口径 12.0 残存高 3.4	外) ヘラミガキ 内) ヘラミガキ	内外面に赤彩 塗布。	
226	45	200		89	10 - 20X 0 - 10Y		土師器 椀	底径 6.1 残存高 1.6	外) ヘラミガキ 内) ヘラミガキ	底部外面に糸 切り痕あり。	
227	45	421	24	89	10 - 20X 40 - 50Y		赤彩土器 椀	口径 14.8 器高 5.3 底径 6.3	外) ヨコナデ、回転ナデ、 回転糸切り 内) ヨコナデ	内・外面とも に赤彩塗布。	
228	45	166		89	20 - 30X 70 - 80Y		土師器 椀	底径 5.7 残存高 1.6	外) ナデ、ケズリ 内) ヘラミガキ	内面は黒色。	
229	45	613		89	20 - 30X 50 - 60Y		土師器 椀	残存高 1.8 底径 6.0	外) 回転ナデ、回転糸切 り 内) 回転ナデ	底部外面に線 刻「王」あり。	
230	45	376		89	10 - 20X 60 - 70Y		土師器 椀	残存高 1.8 底径 4.6	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) ナデ		
231	45	468	24	89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 甕	残存高 4.6 底径 5.6	外) 回転ナデ、回転糸切 り 内) 回転ナデ	外面に煤付着。	

第16表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号 図版	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号						口径	高さ		
232	45	401	24	89	10 - 20X 90 - 100Y		土師器 椀	口径 12.5 器高 3.4 底径 5.3	外) ヨコナデ、回転ケズ リ 内) ヨコナデ	2次焼成受ける。 内面は黒色。	
233	45	443		89	20 - 30X 140 - 150Y		土師器 椀	口径 13.3 器高 3.5 底径 5.8	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) ヘラミガキ	内面は黒色。	
234	45	161	24	89	20 - 30X 140 - 150Y		土師器 椀	口径 12.1 器高 4.1 底径 3.2	外) ヨコナデ、回転ケズ リ 内) ヘラミガキ	内面は黒色。	
235	45	556		89	20 - 30X 50 - 60Y		土師器 椀	測定不能	外) ヘラミガキ 内) ヘラミガキ	内面に放射状 の暗文あり。	
236	45	305	24	89	10 - 20X 0 - 10Y		須恵器 盤	残存高 1.5 底径 11.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
237	45	323		89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 盤	残存高 2.3 底径 16.4	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ		
238	45	191	24	89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 盤	底径 10.4 残存高 1.4	外) ヘラミガキ 内) ナデ	内外面に赤彩 塗布。	
239	45	175	24	89	20 - 30X 40 - 50Y		須恵器 皿	口径 15.4 器高 1.6 底径 13.1	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、回転ケズ リ	内面に降灰か かる。	
240	45	322		89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 皿	口径 15.2 器高 1.6 底径 12.2	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	内面に降灰か かる。 外面に重ね焼 き痕あり。	
241	45	326	24	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 皿	口径 16.8 器高 1.9 底径 14.8	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ		
242	45	320	24	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 皿	口径 19.2 器高 2.3 底径 14.5	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	内面に重ね焼 き痕あり。	
243	45	449	24	89	20 - 30X 20 - 30Y		須恵器 皿	口径 17.5 器高 2.25 底径 14.4	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。	
244	45	550	24	89	20 - 30X 10 - 20Y		赤彩土器 皿	残存高 1.5 底径 10.0	外) ヘラミガキ 内) ヘラミガキ	内・外面に赤 彩塗布。	
245	45	380	24	89	10 - 20X 60 - 70Y		赤彩土器 椀	残存高 1.3 底径 14.8	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ	内外に赤彩塗 布。 内面に暗文あ り。	
246	45	359	24	89	10 - 20X 70 - 80Y		須恵器 稜椀	口径 16.8 残存高 4.5	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ		
247	45	388	24	89	10 - 20X 0 - 10Y		須恵器 高杯	残存高 5.9 底径 11.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、ナデ		
248	45	253	24	89	10 - 20X 80 - 90Y		須恵器 高杯	残存高 2.4 脚柱部径 3.7	外) 調整不明瞭 内) 調整不明瞭		
249	45	389	24	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 高杯	測定不能	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
250	45	390	24	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 高杯	測定不能	外) 調整不明瞭 内) 調整不明瞭		
251	45	302	24	89	10 - 20X 0 - 90Y		赤彩土器 高杯	脚部基部径 4.6	外) ヘラミガキ 内) ヘラミガキ	内・外面とも に赤彩塗布。	
252	45	246		89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 鉢	底径 11.9 残存高 1.7	外) 回転ナデ 内) ナデ		
253	45	529	25	89	20 - 30X 80 - 90Y		土師器 鍋		外) ヨコナデ、八ケ 内) ヨコナデ、八ケ		
254	45	90	25	89	10 - 20X 0 - 10Y		須恵器 甕	口径 22.4 残存高 3.3	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼 き痕あり。	
255	46	438		89	20 - 30X 120 - 130Y		土師器 鍋	口径 33.0 残存高 5.1	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ		
256	46	379		89	10 - 20X 60 - 70Y		土師器 鍋	測定不能	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ		

第17表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	器高		
257	46	188	25	89	10 - 20X 20 - 30Y		土師器 鍋	口径 36.6 器高 6.6	外) 調整不明瞭 内) ヨコナデ、ハケ		
258	46	429		89	20 - 30X 40 - 50Y		土師器 鍋	口径 33.6 残存高 5.5	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ		
259	46	403		89	10 - 20X 80 - 90Y		土師器 鍋	口径 (38.4) 残存高 5.2	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ		
260	46	296		89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 鍋	口径 38.4 残存高 9.0	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ		
261	46	419	25	89	10 - 20X 50 - 60Y		土師器 甕	口径 (39.8) 残存高 3.8	外) 回転ナデ、ナデ 内) 回転ナデ、ナデ		
262	46	193	25	89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 鍋	口径 33.6 残存高 12.7	外) ヨコナデ、ナデ、指 頭圧痕 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成を受け る。 外面に煤付着。	
263	46	184		89	20 - 30X 0 - 10Y		土師器 鍋	口径 36.2 器高 6.3	外) 回転ナデ、カキメ、 ハケ 内) 回転ナデ、カキメ		
264	46	454		89	10 - 20X 20 - 30Y		土師器 甕	口径 39.2 残存高 3.3	外) ナデ 内) ナデ		
265	47	400		89	10 - 20X 90 - 100Y		土師器 鍋	口径 28.6 残存高 5.3	外) ヨコナデ、ハケ 内) ハケ、ナデ		
266	47	451	25	89	20 - 30X 20 - 30Y		土師器 鍋	口径 32.4 残存高 5.9	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ハケ		
267	47	314	25	89	10 - 20X 40 - 50Y		土師器 鍋	残存高 6.0	外) 調整不明瞭 内) 調整不明瞭	2次焼成を受け る。	
268	47	466		89	10 - 20X 40 - 50Y		土師器 鍋	口径 35.9 残存高 3.7	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ、ハケ		
269	47	201		89	10 - 20X 0 - 10Y		土師器 鍋	口径 37.7 残存高 6.9	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ、ハケ		
270	47	275	25	89	20 - 30X 40 - 50Y		土師器 鍋	口径 39.4 残存高 6.3	外) ヨコナデ、ハケ、ナ デ 内) ヨコナデ、ハケ、指 頭圧痕		
271	47	174		89	20 - 30X 20 - 30Y		土師器 鍋	口径 42.4 残存高 10.8	外) ヨコナデ、ハケヘラ ケズリ 内) ヨコナデ、ハケ	外面にスス付 着。	
272	47	510		89	農道北側 調査区		須恵器 横瓶	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 回転ナデ		
273	47	430	25	89	20 - 30X 50 - 60Y		須恵器 横瓶	測定不能	外) カキメ 内) 回転ナデ、ナデ、指 頭圧痕	外面に自然釉 付着。	
274	47	481		89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 横瓶	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) ハケ		
275	48	154		89	20 - 30X 40 - 50Y		須恵器 提瓶	器厚 0.7	外) カキメ 内) ハケ、ナデ		
276	48	204	25	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 長頸壺	口径 7.7 残存高 4.6	外) 回転ナデ、沈線 (2 条) 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。	
277	48	285	25	89	20 - 30X 30 - 40Y		須恵器 壺	口径 8.8 残存高 4.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内・外面に自 然釉付着。	
278	48	424	25	89	20 - 30X 150 - 160Y		須恵器 壺	測定不能	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 付着。	
279	48	106	25	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 長頸壺	頸部径 5.4	外) 回転ナデ、沈線 (2 条) 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。	
280	48	455	25	89	20 - 30X 150 - 160Y		須恵器 瓶	測定不能	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	断面三角形の 突帯つく。	
281	48	92	25	89	0 - 10X 150 - 160Y		須恵器 壺	残存高 10.8	外) 回転ナデ、沈線 (2 条) 内) 回転ナデ		

第18表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版								
282	48	206	25	89	0 - 10X 110 - 120Y		須恵器 長頸瓶	体部径 15.1 残存高 7.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 付着。	
283	48	105	25	89	10 - 20X 0 - 90Y		須恵器 瓶	肩部径 19.6	外) 回転ナデ、回転ケズ リ、沈線 (1条) 内) 回転ナデ	外面に自然釉 付着。	
284	48	129	25	89	水路北側 調査区		須恵器 壺	肩部径 9.3	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。	
285	48	93	25	89	10 - 20X 20 - 30Y、 10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 壺	口径 7.8 残存高 4.3	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。 肩部に1条の 凹線をめぐる。	
286	48	205	25	89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 短頸壺	口径 8.3 残存高 4.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に溶着あ り。 外面に自然釉 付着。	
287	48	382	25	89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 短頸壺	口径 7.4 残存高 5.3	外) 回転ナデ、回転ケズ リ、沈線 (1条) 内) 回転ナデ	外面に自然釉 付着。	
288	48	418		89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 壺	測定不能	外) 回転ナデ、回転ケズ リ、ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 付着。	
289	48	582	26	89	20 - 30X 50 - 60Y		須恵器 杯身	残存高 1.4 底径 8.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ		
290	48	425	26	89	10 - 20X 90 - 100Y		須恵器 壺	口径 11.8 残存高 2.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に自然釉 付着。	
291	48	363	26	89	10 - 20X 70 - 80Y		須恵器 鉢?	口径 9.7 残存高 3.3	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内・外面に自 然釉付着。	
292	48	426	26	89	20 - 30X 110 - 120Y		須恵器 瓶	口径 13.6 残存高 4.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に自然釉 付着。	
293	48	94		89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 壺	口径 11.4 残存高 6.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
294	48	165		89	20 - 30X 70 - 80Y		須恵器 甕	口径 16.8 残存高 6.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内・外面に降 灰かかる。	
295	48	151	26	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	口径 19.8 残存高 5.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
296	48	260	26	89	20 - 30X 70 - 80Y		須恵器 有台瓶	残存高 6.8 底径 12.4	外) 回転ケズリ、回転ナ デ 内) 回転ナデ、ナデ	内外面に自然 釉付着。	
297	48	104	26	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 有台瓶	底径 9.3 残存高 7.4	外) 回転ナデ、回転ケズ リ、回転ヘラ切り 内) 回転ナデ	内面に自然釉 付着。	
298	49	350	26	89	0 - 20X 50 - 60Y		須恵器 瓶	残存高 8.1 底径 12.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、ハケ	内面に自然釉 付着 底部に溶着あ り。	
299	49	352	26	89	小路農道 北側調査区		須恵器 双耳瓶	残存高 2.9 底径 10.8	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	内面に降灰か かる。	
300	49	423	26	89	20 - 30X 140 - 150Y		土師器 甕	残存高 3.0 底径 7.0	外) 回転ナデ、回転糸切 り 内) 回転ナデ	外面に煤付着。	
301	49	395	26	89	20 - 30X 20 - 30Y		土師器 壺	残存高 2.3 底径 7.0	外) 回転ナデ、回転糸切 り 内) 回転ナデ	2次焼成受け る。 内面に煤付着。	
302	49	374		89	10 - 20X 60 - 70Y		土師器 椀	残存高 1.7 底径 6.4	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	内面は黒色。	
303	49	428	26	89	20 - 30X 140 - 150Y		須恵器 甕	口径 16.4 残存高 4.85	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		
304	49	89	26	89	10 - 20X 0 - 10Y		須恵器 甕	口径 25.0 残存高 6.1	外) 回転ナデ、叩き (平 行) 内) 回転ナデ、あて具 (同心円)	内面に降灰か かる。	

第19表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)	調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版							
305	49	95	26	89	10 - 20X 120 - 130Y		須恵器 甕	器厚 1.3	外) 回転ナデ、叩き (平行) 内) 当て具 (同心円)	
306	49	91	26	89	10 - 20X 80 - 90Y		須恵器 甕	口径 24.0 残存高 4.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に降灰かかる。
307	49	203	26	89	水路、農道 北側調査区		須恵器 甕	口径 25.0 残存高 5.1	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、当て具 (同心円)	外面に自然釉付着。
308	49	280		89	20 - 30X 40 - 50Y		須恵器 甕	口径 26.6 残存高 5.5	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉付着。
309	49	102	27	89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 甕		外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
310	49	97	26	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	口径 40.2 残存高 11.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
311	49	98	27	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 甕	口径 50.2 残存高 2.2	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
312	49	96	27	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 甕	口径 48.0 残存高 3.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
313	50	349	27	89	0 - 20X 140 - 150Y		須恵器 甕	口径 40.0 器高 61.2	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) タタキ (同心円状)、 回転ナデ	
314	51	101	27	89	10 - 20X 40 - 50Y		須恵器 甕	口径 51.8 残存高 4.1	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
315	51	100	27	89	10 - 20X 60 - 70Y		須恵器 甕	口径 44.9 残存高 6.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
316	51	270	27	89	20 - 30X 50 - 60Y		須恵器 甕	口径 40.5 残存高 3.2	外) 回転ナデ、沈線 (3 条) 内) 回転ナデ	内外面に自然釉付着。
317	51	103	27	89	10 - 20X 0 - 10Y		須恵器 甕	口径 43.9 残存高 1.7	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉付着。
318	51	180	27	89	20 - 30X 10 - 20Y		須恵器 甕	口径 46.0 器高 7.5	外) 回転ナデ、沈線 (3 条) 内) 回転ナデ	内外面に降灰かかる。
319	51	99	27	89	10 - 20X 0 - 10Y		須恵器 甕	口径 50.0 残存高 2.5	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に降灰かかる。
320	51	507	27	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	外面に降灰かかる。
321	51	605	27	89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 回転ナデ、当て具 (同心円)	
322	51	547	27	89	20 - 30X 10 - 20Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
323	51	439	28	89	10 - 20X 90 - 100Y		須恵器 横瓶	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 当て具 (同心円)	
324	51	492		89	20 - 30X 40 - 60Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	
325	51	483	28	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 当て具 (同心円)	
326	52	491		89	20 - 30X 0 - 10Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	
327	52	490	28	89	20 - 30X 20 - 30Y		須恵器 甕	測定不能	外) 回転ナデ 内) 当て具 (同心円)	
328	52	607	28	89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	

第20表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号		年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)	調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版	図版							
329	52	509	28	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 当て具 (同心円)、 ナデ		
330	52	593	28	89	20 - 30X 70 - 80Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)、 回転ナデ		
331	52	498	28	89	10 - 20X 90 - 100Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 当て具 (同心円)		
332	52	581	28	89	20 - 30X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)		
333	52	585		89	20 - 80X 10 - 20Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 当て具 (同心円)		
334	52	598	28	89	20 - 30X 60 - 70Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)		
335	52	485	28	89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 甕	測定不能	外) 回転ナデ、タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	外面に自然釉 付着。	
336	52	505	28	89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)		
337	52	504		89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)		
338	52	565		89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、カ キメ 内) 当て具 (同心円)		
339	53	589		89	20 - 40X 150 - 190Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 当て具 (同心円)		
340	53	442	28	89	20 - 30X 150 - 160Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	外面に2次焼 成を受ける。 内面に降灰か かる。	
341	53	592	28	89	20 - 30X 100 - 110Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)		
342	53	594		89	20 - 30X 80 - 90Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)		
343	53	487		89	20 - 30X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)		
344	53	555	29	89	20 - 30X 80 - 90Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	外面に自然釉 薬付着。	
345	53	497	29	89	10 - 20X 90 - 100Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)、 ナデ		
346	53	596	29	89	20 - 30X 60 - 70Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)		
347	53	591	29	89	20 - 30X 140 - 150Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)		
348	53	548		89	20 - 30X 30 - 40Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)、 ナデ		
349	53	494		89	20 - 30X 0 - 10Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)		
350	53	502		89	10 - 20X 90 - 100Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 当て具 (同心円)		

第21表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号		年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)	調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版	図版							
351	53	506			89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	外面に自然釉 薬付着。
352	53	588	29		89	20 - 30X 150 - 190Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	
353	54	499	29		89	10 - 20X 90 - 100Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 当て具 (同心円)、 ナデ	
354	54	603	29		89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
355	54	522			89	農道北側 調査区		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (平行か同心 円)	
356	54	512	29		89	水路北側 調査区		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
357	54	612	29		89	農道北側 調査区		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
358	54	601	29		89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 当て具 (同心円)、 ナデ	
359	54	486			89	10 - 20X 20 - 30Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
360	54	600	30		89	10 - 20X 30 - 40Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 当て具 (同心円)	
361	54	444	29		89	20 - 30X 70 - 80Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
362	54	597	29		89	20 - 30X 60 - 70Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ 内) 当て具 (同心円)	
363	54	583	30		89	20 - 30X 40 - 50Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	内面に自然釉 付着。
364	54	608	30		89	20 - 30X 40 - 50Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)、 ナデ	
365	55	501	30		89	10 - 20X 90 - 100Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	外面に自然釉 薬付着。
366	55	590	30		89	20 - 30X 150 - 160Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	内面に自然釉 付着。
367	55	549	30		89	20 - 30X 20 - 30Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	
368	55	448	30		89	20 - 30X 10 - 20Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
369	55	503	30		89	10 - 20X 90 - 100Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
370	55	587			89	20 - 30X 0 - 10Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	外面に自然釉 薬付着。
371	55	567	30		89	10 - 20X 120 - 130Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
372	55	441	30		89	10 - 20X 150 - 160Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
373	55	554	30		89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)、 ナデ	外面に降灰か かる。
374	55	495			89	20 - 30X 0 - 10Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
375	55	566			89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	

第22表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版								
376	55	446		89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能		外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
377	56	496	31	89	10 - 20X 80 - 90Y		須恵器 甕	測定不能		外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	外面に自然釉 葉付着。
378	56	508		89	10 - 20X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能		外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
379	56	500	31	89	10 - 20X 90 - 100Y		須恵器 甕	測定不能		外) タタキ (平行) 内) 当て具 (平行)	内外面に自然 釉葉付着。
380	56	436	31	89	20 - 30X 150 - 180Y		須恵器 甕	測定不能		外) タタキ (平行) 内) 当て具 (平行)	
381	56	553	31	89			須恵器 甕	測定不能		外) タタキ (平行) 内) 当て具 (平行)	
382	56	493	31	89	20 - 30X 50 - 60Y		須恵器 甕	測定不能		外) タタキ (平行) 内) 当て具 (平行)	
383	56	611	31	89	水路農道 北側調査区		土師器 甕	測定不能		外) 回転ナデ、タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)、 ナデ	
384	56	477		89	10 - 20X 80 - 90Y		土師器 甕	測定不能		外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	外面に煤付着。
385	56	488	31	89	20 - 30X 30 - 40Y		須恵器 甕	測定不能		外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	
386	56	532	31	89	水路農道 北側調査区		須恵器 甕	測定不能		外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)、 ナデ	
387	56	482	31	89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 甕	測定不能		外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	2次焼成を受 ける。
388	56	475	31	89	10 - 20X 90 - 100Y		土師器 甕	測定不能		外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)、 ナデ	外面に煤付着。
389	57	311	31	89	10 - 20X 40 - 50Y		土師器 甕	口径 11.0 残存高 3.8		外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ	
390	57	258	31	89	10 - 20X 120 - 130Y		土師器 甕	口径 10.4 残存高 4.9		外) ヨコナデ 内) ヨコナデ	外面に煤付着。
391	57	392	31	89	20 - 30X 50 - 60Y		土師器 甕	口径 10.6 残存高 9.4		外) ヨコナデ、ハケ、へ ラケズリ 内) ヨコナデ、ナデ、ハ ケ	
392	57	599	31	89	20 - 30X 60 - 70Y		土師器 壺	口径 9.0 残存高 4.2		外) ヨコナデ 内) ヨコナデ	
393	57	277	31	89	20 - 30X 40 - 50Y		土師器 甕	口径 9.9 残存高 3.2		外) ヨコナデ、指頭圧痕 内) ヨコナデ、ナデ	
394	57	354		89	10 - 20X 70 - 80Y		土師器 甕	口径 10.6 残存高 5.1		外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ	
395	57	456	31	89	20 - 30X 20 - 30Y		須恵器 甕	口径 11.2 残存高 4.3		外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ハケ	
396	57	293	31	89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 甕	口径 11.4 残存高 4.5		外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成受け る。
397	57	399		89	20 - 30X 0 - 10Y		土師器 甕	測定不能		外) 調整不明瞭 内) カキメ	
398	57	294	31	89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 甕	口径 13.0 残存高 5.5		外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成受け る。
399	57	308	31	89	10 - 20X 40 - 50Y		土師器 甕	口径 16.8 残存高 9.2		外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成受け る。
400	57	287		89	10 - 20X 130 - 140Y		土師器 甕	口径 14.0 残存高 6.3		外) ヨコナデ、カキメ 内) ヨコナデ、カキメ	外面に煤付着。
401	57	356		89	10 - 20X 70 - 80Y		土師器 甕	口径 14.2 残存高 5.6		外) ヨコナデ、カキメ 内) ヨコナデ、カキメ	
402	57	306		89	10 - 20X 40 - 50Y		土師器 甕	口径 15.1 残存高 6.3		外) ヨコナデ、カキメ 内) ヨコナデ	

第23表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	残存高		
403	57	307	31	89	10 - 20X 40 - 50Y		土師器 甕	口径 14.2 残存高 7.5	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ		
404	57	353	32	89	10 - 20X 70 - 80Y		土師器 甕	口径 14.0 残存高 6.0	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ		
405	57	377	32	89	10 - 20X 60 - 70Y		土師器 甕	口径 12.4 残存高 6.7	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ		
406	57	276	32	89	10 - 20X 0 - 10Y		須恵器 高杯	残存高 5.9 底径 11.0	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ハケ		
407	57	450	32	89	20 - 30X 20 - 30Y		土師器 甕	口径 14.8 残存高 4.8	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ	2次焼成受ける。	
408	57	355		89	10 - 20X 70 - 80Y		土師器 甕	口径 13.9 残存高 6.0	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ		
409	57	173		89	20 - 30X 20 - 30Y		土師器 甕	口径 14.4 残存高 5.2	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ、ケ ズリ	外面に煤付着。 丹波系。	
410	57	164	32	89	20 - 30X 100 - 110Y		土師器 甕	口径 13.0 残存高 6.3	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ、ケ ズリ		
411	57	299	32	89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 甕	口径 13.2 残存高 5.1	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ	外面に煤付着。	
412	57	381	32	89	10 - 20X 60 - 70Y		土師器 甕	口径 15.4 残存高 7.8	外) ヨコナデ、カキメ 内) ヨコナデ、カキメ	2次焼成受ける。 内・外面に煤 付着。	
413	57	281	32	89	20 - 30X 80 - 90Y		土師器 甕	口径 12.8 残存高 12.4	外) ヨコナデ、ナデ、ケ ズリ 内) ヨコナデ、ナデ	外面に煤付着。	
414	57	192	32	89	10 - 20X 20 - 30Y		土師器 甕	口径 13.6 残存高 4.3	外) 調整不明瞭 内) 調整不明瞭		
415	58	301	32	89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 甕	口径 15.1 残存高 6.3	外) 調整不明瞭 内) 調整不明瞭	外面煤付着。	
416	58	295	32	89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 甕	口径 21.3 残存高 14.0	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	内面煤付着。	
417	58	300	32	89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 甕	口径 17.9 残存高 7.9	外) ヨコナデ、カキメ 内) ヨコナデ、ナデ	内面煤付着。	
418	58	297		89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 甕	口径 21.3 残存高 7.9	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ		
419	58	298	32	89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 甕	口径 22.9 残存高 10.2	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	内面煤付着。	
420	58	440	32	89	20 - 30X 10 - 20Y		土師器 甕	口径 24.0 残存高 2.65	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ、ナデ	外面煤付着。	
421	58	266	32	89	20 - 30X 60 - 70Y		土師器 甕	口径 21.2 残存高 7.0	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ	外面煤付着。	
422	58	402	32	89	10 - 20X 90 - 100Y		土師器 甕	口径 21.6 残存高 2.2	外) ヨコナデ、カキメ 内) ヨコナデ、カキメ		
423	58	284		89	20 - 30X 30 - 40Y		土師器 甕	口径 25.0 残存高 3.6	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ハケ		
424	58	158	32	89	10 - 20X 120 - 130Y		土師器 甕	口径 21.4 残存高 14.6	外) ヨコナデ、カキメ 内) ヨコナデ、カキメ		
425	58	256	32	89	10 - 20X 90 - 100Y		土師器 甕	口径 23.6 残存高 9.4	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ハケ		
426	58	149	33	89	10 - 20X 50 - 60Y		土師器 甕	口径 21.6 残存高 18.0	外) ヨコナデ、ハケ、ケ ズリ 内) ヨコナデ、ハケ	外面に煤付着。	
427	58	171	33	89	20 - 30X 20 - 30Y		土師器 長胴甕	口径 26.0 残存高 12.5	外) ヨコナデ、ナデ、叩 き (平行) 内) ヨコナデ、ナデ、当 て具 (同心円)	外面に煤付着。	
428	59	383	33	89	20 - 30X 60 - 70Y		土師器 甕	口径 21.2 残存高 3.4	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ		

第24表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	残存高		
429	59	272	33	89	20 - 30X 50 - 60Y		土師器 甕	口径 残存高	21.4 6.2	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ、ハ ケ	
430	59	177		89	20 - 30X 20 - 30Y		土師器 甕	口径 器高	25.0 7.2	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ、ハ ケ	外面に煤付着。
431	59	170		89	20 - 30X 20 - 30Y		土師器 甕	口径 残存高	21.8 7.6	外) 調整不明瞭 内) 調整不明瞭	内面黒色 (煤の可能性 あり)。
432	59	313	33	89	10 - 20X 50 - 60Y		土師器 甕	口径 残存高	23.3 4.0	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ハケ	
433	59	169	33	89	20 - 30X 20 - 30Y		須恵器 甕	口径 残存高	20.2 8.0	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ、指 頭圧痕	外面に煤付着。
434	59	172	33	89	20 - 30X 20 - 30Y		土師器 甕	口径 残存高	28.0 8.5	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ	
435	59	189	33	89	10 - 20X 20 - 30Y		土師器 甕	口径 残存高	25.4 6.3	外) 調整不明瞭 内) 指頭圧痕	
436	59	283		89	20 - 30X 30 - 40Y		土師器 甕	口径 残存高	19.6 7.2	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ハケ	
437	59	163	33	89	20 - 30X 130 - 140Y		土師器 甕	口径 残存高	22.4 6.9	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、カキメ	外面に煤付着。
438	59	150	33	89	10 - 20X 50 - 60Y		土師器 甕	口径 残存高	22.0 5.4	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ	
439	59	310		89	10 - 20X 40 - 50Y		土師器 甕	口径 残存高	30.6 4.8	外) ヨコナデ、ハケ 内) ヨコナデ、ナデ	内・外面に煤 付着。
440	59	242	33	89	小路農道 北側調査区		土師器 甕	口径 残存高	21.2 6.0	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ	内面に水平に 煤付着。
441	59	378		89	10 - 20X 60 - 70Y		土師器 甕	口径 残存高	24.6 3.7	外) ヨコナデ、カキメ 内) ヨコナデ	
442	59	312	33	89	10 - 20X 40 - 50Y		土師器 甕	口径 残存高	21.4 2.6	外) ヨコナデ、叩き (平 行)、ナデ 内) ヨコナデ	
443	59	384	33	89	10 - 20X 30 - 40Y		土師器 甕	口径 残存高	25.0 13.0	外) ヨコナデ、ハケ、カ キメ 内) ヨコナデ、カキメ、 ハケ	外面に煤付着。
444	60	478	33	89	10 - 20X 50 - 60Y		土師器 甕	測定不能		外) ヨコナデ、ハケ、ナデ 内) なデ	
445	60	480	33	89	10 - 20X 50 - 60Y		土師器 甕	測定不能		外) ナデ 内) ハケ	
446	60	476	33	89	10 - 20X 90 - 100Y		土師器 甕	測定不能		外) タタキ (平行)、ハケ 内) 調整不明瞭	外面に煤付着。
447	60	385	33	89	10 - 20X 20 - 30Y		土師器 甕	残存高	7.3	外) ハケ 内) ハケ	2次焼成を受 ける。 底部外面には、 5分割してハ ケ調整してい る。
448	60	467	33	89	10 - 20X 40 - 50Y		土師器 甕	測定不能		外) ハケ 内) ハケ	2次焼成を受 ける。
449	60	393	33	89	20 - 30X 50 - 60Y		土師器 甕	測定不能		外) ヘラケズリ 内) 回転ナデ	
450	60	262		89	20 - 30X 70 - 80Y		土師器 甕	残存高	3.2	外) ケズリ 内) ハケ	2次焼成を受 ける。
451	60	394	34	89	20 - 30X 40 - 50Y		土師器 壺	測定不能		外) ヘラケズリ、ナデ 内) ハケ	
452	60	397	34	89	20 - 30X 10 - 20Y		土師器 甕	測定不能		外) 調整不明瞭 内) 調整不明瞭	外面は2次焼 成を受ける。
453	60	223	34	89	10 - 20X 70 - 80Y		須恵器 円面硯	底径 残存高	19.8 4.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	長方形透孔が 10箇所穿たれ る。

第25表 第2次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)		調 整 (外面) (内面)	備 考
	図版	実測番号	図版					口径	残存高		
454	60	473	34	89	10 - 20X 70 - 80Y		青磁 椀	口径 15.6 残存高 2.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	連弁文を施文。	
455	60	208	34	89	10 - 20X 110 - 150Y		青磁 椀	口径 14.3 残存高 3.1	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	2次焼成を受ける。 外面は引花文 である可能性 あり。 龍泉窯系	
456	60	207	34	89	20 - 30X 60 - 70Y		青磁 椀	口径 8.6 残存高 3.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面は連弁文 龍泉窯系	
457	60	176	34	89	20 - 30X 50 - 60Y		土師器 皿	口径 5.4 器高 1.4	外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ、ナデ		
458	60	209	34	89	10 - 20X 60 - 90Y		青磁 盤	口径 25.6 残存高 2.2	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	2次焼成受け る。 外面は引花文 である可能性 あり。 龍泉窯系	
459	60	474		89	10 - 20X 40 - 50Y		染付け 椀	残存高 1.7 底径 8.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	高台外面に圈 線が1条めく る。 染付けあり。	

第26表 第2次石製品観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序 遺構	種類 器種	法量 (cm)	重量 (g)	備考
	図版	実測番号	図版							
25	38	43	16	89		土坑 3	打製石鍬 緑色系 凝灰角礫岩	残存長 7.8 最大幅 6.2 最大厚 2.5	184.1	片側自然礫面あり。
64	40	23	18	89		土坑 9 (土坑 2)	打製石鍬 緑色系 凝灰岩 (砂岩)	残存長 10.9 最大幅 10.5 最大厚 2.3	306.2	片側自然礫面あり。 混入品。
81	41	5	19	89		SB 9 小穴11	打製石鍬 緑色系 凝灰岩 (砂岩)	残存長 8.4 最大幅 7.1 最大厚 2.3	158.6	片側自然礫面あり。 混入品。
460	61	17	34	89	10 - 20X 20 - 30Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	残存長 13.8 最大幅 8.9 最大厚 2.8	346.9	片側自然礫面あり。
461	61	55	34	89	10 - 20X 50 - 60Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	最大長 14.4 最大幅 8.3 最大厚 3.9	449.7	片側自然礫面あり。
462	61	38	34	89	10 - 20X 90 - 100Y		打製石鍬 白色系 凝灰角礫岩	最大長 24.2 最大幅 9.5 最大厚 3.2	383.1	片側自然礫面あり。 使用痕あり。
463	61	25	34	89	10 - 20X 10 - 20Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰岩 (砂岩)	最大長 13.9 最大幅 7.8 最大厚 2.7	301.2	片側自然礫面あり。
464	61	54	34	89	10 - 20X 90 - 100Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	残存長 14.8 最大幅 8.8 最大厚 2.2	300.4	片側自然礫面あり。
465	61	44	34	89	10 - 20X 40 - 50Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	残存長 13.0 最大幅 8.7 最大厚 2.3	272.1	片側自然礫面あり。
466	62	42	35	89	10 - 20X 70 - 80Y		打製石鍬 白色系 凝灰角礫岩	最大長 12.4 最大幅 7.0 最大厚 2.3	212.5	片側自然礫面あり。
467	62	49	35	89	20 - 30X 0 - 10Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	残存長 11.7 最大幅 9.8 最大厚 2.5	267.1	片側自然礫面あり。
468	62	45		89	20 - 30X 60 - 70Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	最大長 17.3 最大幅 8.3 最大厚 3.2	489.9	片側自然礫面あり。 使用痕あり。
469	62	47/48	35	89	10 - 20X 10 - 20Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	最大長 18.2 最大幅 9.4 最大厚 3.9	417.8	片側自然礫面あり。
470	62	16	35	89	10 - 20X 30 - 40Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	最大長 17.9 最大幅 10.5 最大厚 2.9	527	片側自然礫面あり。 使用痕あり。
471	62	36	35	89	10 - 20X 30 - 40Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	最大長 14.7 最大幅 8.4 最大厚 1.9	298	片側自然礫面あり。 使用痕あり。
472	63	35	35	89		出土地不明	打製石鍬 灰色系 凝灰角礫岩	最大長 12.6 最大幅 6.9 最大厚 3.3	335.1	片側自然礫面あり。
473	63	28	35	89	20 - 30X 30 - 40Y		打製石鍬 褐色系 凝灰角礫岩	最大長 17.6 最大幅 8.5 最大厚 3.7	610	片側自然礫面あり。
474	63	53	35	89	10 - 20X 80 - 90Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	残存長 10.3 最大幅 10.7 最大厚 2.3	288.7	片側自然礫面あり。
475	63	26	35	89	10 - 20X 40 - 50Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	残存長 5.7 最大幅 8.9 最大厚 2.4	144.4	片側自然礫面あり。
476	63	29	35	89	10 - 20X 50 - 60Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	最大長 14.1 最大幅 8.5 最大厚 3.1	419.7	片側自然礫面あり。
477	63	34	35	89	20 - 30X 60 - 70Y		打製石鍬 灰色系 凝灰岩 (砂岩)	残存長 13.4 最大幅 10.3 最大厚 4.2	611.7	片側自然礫面あり。
478	64	37	35	89	10 - 20X 50 - 60Y		打製石鍬 緑白色系 凝灰角礫岩	残存長 13.0 最大幅 10.2 最大厚 3.2	470.9	片側自然礫面あり。

第27表 第2次石製品観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序 遺構	種類 器種	法量 (cm)		重量 (g)	備考
	図版	実測番号	図版					最大長	最大幅		
479	64	50	36	89	10 - 20X 50 - 60Y		打製石鍬 白色系 凝灰角礫岩	最大長 13.7 最大幅 9.1 最大厚 3.1	397	片側自然礫面あり。 使用痕あり。	
480	64	51	36	89	10 - 20X 70 - 80Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	最大長 12.7 最大幅 8.8 最大厚 2.6	308.9	片側自然礫面あり。	
481	64	46	36	89	10 - 20X 80 - 90Y		打製石鍬 緑色系 凝灰角礫岩	残存長 13.0 最大幅 7.7 最大厚 2.3	292.4	片側自然礫面あり。 使用痕あり。	
482	64	41		89	20 - 30X 30 - 40Y		打製石鍬 白色系 凝灰角礫岩	最大長 18.2 最大幅 8.0 最大厚 3.5	471.6	片側自然礫面あり。	
483	64	52	36	89	10 - 20X 50 - 60Y		打製石鍬 緑白色系 凝灰角礫岩	最大長 18.0 最大幅 7.1 最大厚 3.3	486.4	片側自然礫面あり。	
484	65	56	36	89	10 - 20X 60 - 70Y		打製石鍬 灰色系 凝灰角礫岩	最大長 17.6 最大幅 8.2 最大厚 3.6	587.3	片側自然礫面あり。	
485	65	39	36	89	20 - 30X 60 - 70Y		打製石鍬 褐色系 凝灰角礫岩	最大長 18.7 最大幅 8.3 最大厚 4.0	647.9	片側自然礫面あり。	
486	65	27	36	89	20 - 30X 0 - 10Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	残存長 11.3 最大幅 7.5 最大厚 2.9	295	片側自然礫面あり。 使用痕あり。	
487	65	33	36	89	10 - 20X 0 - 10Y		打製石鍬 緑色系 凝灰岩 (砂岩)	残存長 11.5 最大幅 2.4 最大厚 2.5	337.5	片側自然礫面あり。	
488	65	32	36	89	10 - 20X 40 - 50Y		打製石鍬 緑灰色系 凝灰角礫岩	残存長 8.8 最大幅 6.5 最大厚 3.3	245.3	片側自然礫面あり。	
489	65	57	36	89	10 - 20X 40 - 50Y		打製石鍬 灰色系 凝灰角礫岩	残存長 9.3 最大幅 7.0 最大厚 2.7	190.6	片側自然礫面あり。	
490	65	19	36	89	10 - 20X 40 - 50Y		打製石鍬 灰色系 凝灰岩 (砂岩)	残存長 4.8 最大幅 9.1 最大厚 1.2	62	片側自然礫面あり。	
491	65	40	36	89	10 - 20X 30 - 40Y		打製石鍬 灰白色系 凝灰角礫岩	残存長 9.2 最大幅 7.2 最大厚 2.5	184.2	片側自然礫面あり。	
492	66	31	36	89	10 - 20X 10 - 20Y		打製石鍬 灰色系 凝灰角礫岩	残存長 5.8 最大幅 9.1 最大厚 2.1	120.1	片側自然礫面あり。	
493	66	30	36	89	10 - 20X 50 - 60Y		打製石鍬 灰色系 凝灰角礫岩	残存長 10.2 残存幅 6.7 残存厚 1.9	125.4	片側自然礫面あり。	
494	66	20	36	89	10 - 20X 30 - 40Y		敲石 灰色系 凝灰岩 (砂岩)	最大長 8.8 最大幅 8.7 最大厚 5.8	572.6	自然礫を使用。 敲打痕。	
495	66	24	36	89	10 - 20X 30 - 40Y		敲石 灰色系 凝灰岩 (砂岩)	最大長 7.7 最大幅 7.1 最大厚 4.4	342.1	自然礫を使用。 敲打痕あり。	
496	66	22	36	89	出土地不明		敲石 灰色系 凝灰岩 (砂岩)	最大長 11.2 残存幅 8.1 最大厚 5.2	711.3	敲打痕あり。	
497	66	21		89	10 - 20X 30 - 40Y		砥石 灰色系 凝灰岩 (砂岩)	最大長 10.9 最大幅 4.2 最大厚 3.2	204.1	敲打痕あり。 擦痕あり。	
498	66	18		89	10 - 20X 40 - 50Y		砥石 褐色系 凝灰岩 (砂岩)	残存長 12.5 残存幅 6.7 残存厚 5.4	368.9	敲打痕あり。	
499	66	15		89	10 - 20X 60 - 70Y		石盤 黒色 粘板岩	残存長 6.7 残存幅 8.8 最大厚 0.4	38.29	側面に斜行線状痕あり。	

第28表 第2次金属製品観察表

報告 番号	図版番号		写真番号	年度	調査区 グリット	層序 遺構	種類 器種	法量 (cm) (数値) は推定	備考
	図版	実測番号	図版						
7	37	3		89		竪穴建物3 (竪穴建物8)	鉄製刀子	最大幅 1.1 最大厚 0.4	
14	37	2		89		竪穴建物8 (竪穴建物3)	鉄製釘	最大長 10.47 最大幅 0.69 最大厚 0.65	断面正方形。
39	38	1		89		土坑5 (土坑10)	板状鉄製品?	最大幅 2.3 最大厚 0.35	
80	40	5		89		土坑5 (土坑10)	鉄製犁先	最大幅 (17.2) 最大厚 4.8 最大長 46.2 重量 1,620 g	
82	41	4		89		掘立柱建物8・9 小穴17	鉄製刀子	最大幅 11.1 最大厚 1.2	

第5章 第3次調査の成果

第1節 調査方法

第3次調査での調査方法

本事業は国道157号線バイパスの改修工事に係る事前調査である。本体工事が半永久的な構築物であるため、地山（無遺物層）までを調査対象として発掘調査を実施した。

調査区域は南北に延びる長方形を範囲としているが、昨年度の試掘調査の結果を受けて遺跡の存在が希薄である約84m区間（240R～330R区間）は調査を行っていない。つまり、対象となる調査地範囲内にトレンチを2箇所設定して調査したことになる。

地区割については、改修工事設計図上にある道路幅員中央を軸として南から任意にグリットを設定した。南北軸は南から北へ0R～420R、東西軸は西から東へ0Q～50Qとし、10m間隔にグリット杭を打設している。なお、国土座標（旧）北から任意グリット南北軸は西へ115振れる。

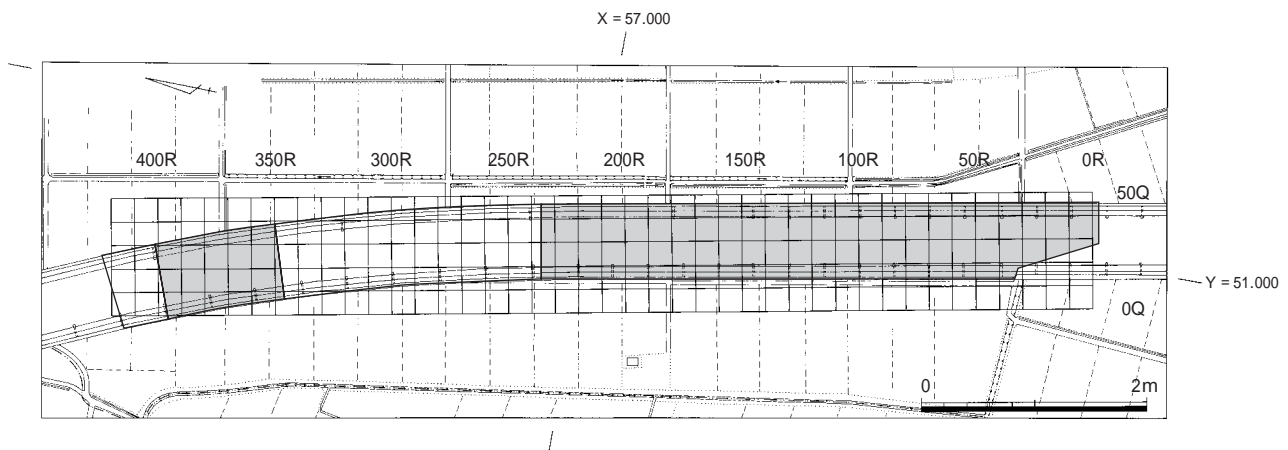
現地調査においては、当初機械による掘削を行い、人力で平面の調査を行った。調査時での掘削状況は、分層発掘を行うのに困難であったため、遺構面を確実に抑える事のできる深度まで機械掘削を行った。本来ならば、幾つかの遺構検出面があったと考えられる。そして、人力によって平面における遺構検出、調査区壁面の土層観察を行った。地山をT.P. +29.6～32.0mで確認できたため、本調査を終了した。調査した遺構面数は1面のみである。後に、機械による埋め戻し作業を行い、調査を完了している。

遺構番号は、遺構の種類によって各々順に付けた。なお、後に整理・検討して本報告に至っている。

土層断面は、調査区での基本層序となる箇所にて図化記録を行った。また、遺構面全体、個々の遺構、遺物出土状況等は適宜スケールを決定して図化作業を行っている。

遺構面、個々の遺構、土層、土層断面等は、35mmカメラ、ブローニー判カメラによるモノクロ、リバーサルでの撮影を行った。また、メモ代わりにネガカラー、ストロボカメラを適宜使用した。

出土遺物は調査区・グリット別・層位・遺構ごとに分類の上、選別作業を経て、実測を行っている。また、遺存状態の良好な遺物については、写真撮影をも実施し、本報告書に掲載した。



第67図 第3次調査区位置図

第2節 基本層序

本調査区は手取川扇状地に立地し、標高が東南方向から北西方向に向かって低くなる。さらに、微高地や微低地といった複雑な地形を形成しており、前者に立地している。

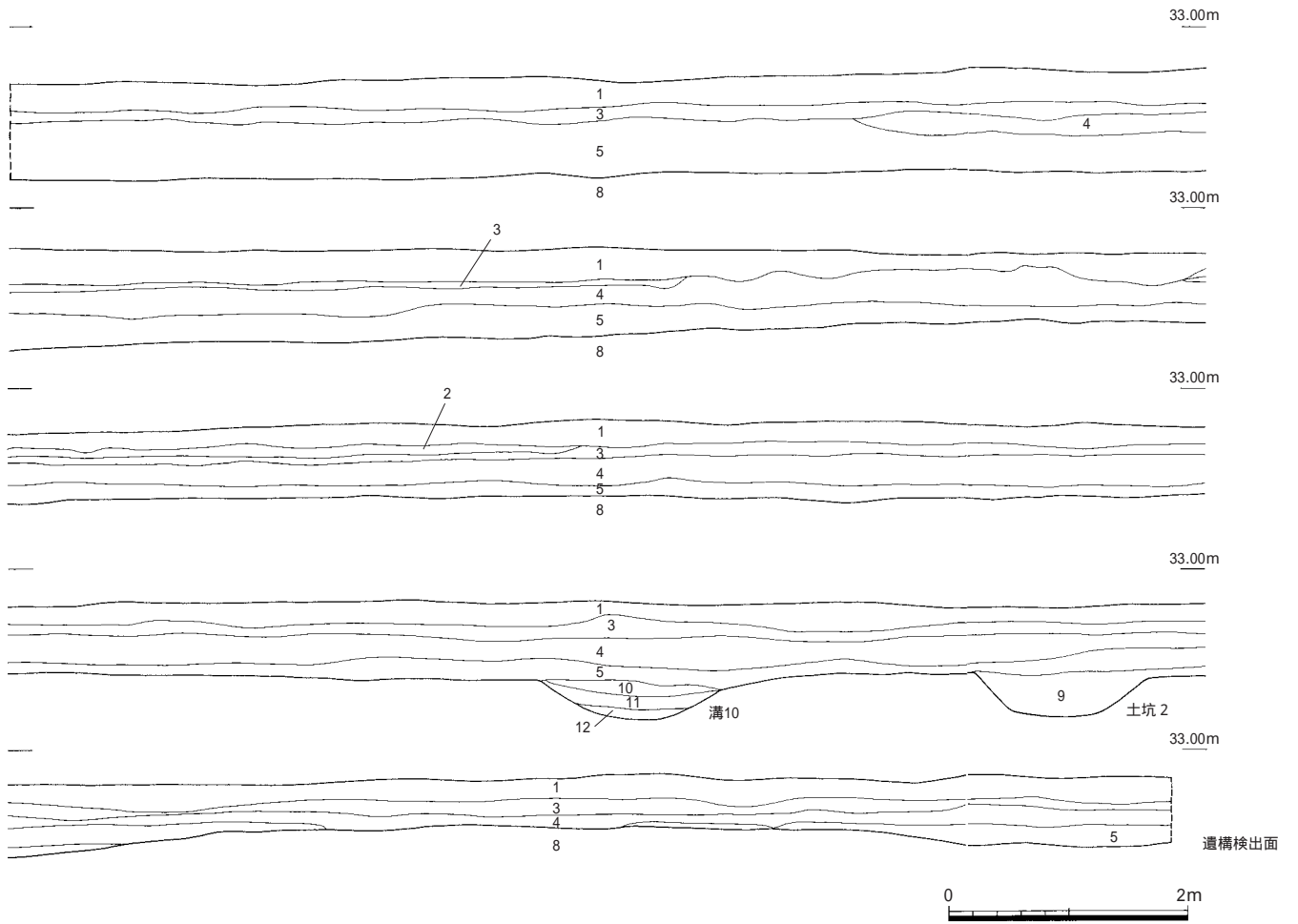
当該調査での土層については、大別して4層が認められるが、中でも細分が可能なものは行っている。1層は表土であり、水田に伴う耕作土である。2層も同様である。3層は作土で、遺物を多く含む層である。当該層中には上層や下層の堆積土を含んでおり、耕作による攪拌作用を受けた事象として捉える。これらの堆積層は概して水平堆積の状態であり、水田・畑等の耕作を行っていた可能性が高いため、少なくとも3層以上の堆積層は耕作土もしくは盛地層として連綿と継続して営まれていたことが看取される。4層は地山（無意物層）と考えた。色調・土質などが3層と違い明確に判別できる。主に砂で構成されているが、礫群や砂質土堆積層などが平面で散見される。調査時ではこの4層上面を遺構検出面として、平面調査を行っている。

本報告では、調査区の東壁面での2箇所の堆積状況が本調査区の基本層序として認識したため、以下に観察所見を記す。

基本層序

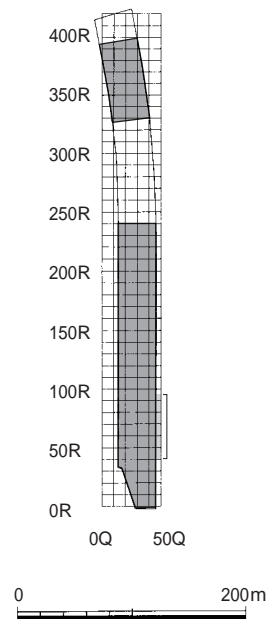
層（細分層）

- | | | |
|----|---------|---|
| 1層 | (1) | 層厚は約20cmである。現地表はT.P. + 32.7 ~ 32.8mである。灰色粘質土である。表土である。 |
| 2層 | (2 - 1) | 層厚約10cmである。灰白色粘質土である。部分的に堆積している。上からの攪拌が及ばず、残存したと考えられる。耕作土である。 |
| | (2 - 2) | 層厚約10cmである。上面には、攪拌による凹凸はあるが、概してT.P. + 約32.5mを保っている。灰色粘質土であり、やや褐色をおびる。耕作土である。調査区全体に堆積しており、一つの遺構面として捉えられたと考える。 |
| | (2 - 3) | 層厚約10cmである。上面での高さは、凹凸があるが、概してT.P. + 約32.4mを保っている。灰褐色粘質土である。耕作土である。 |
| 3層 | (3 - 1) | 層厚約20cmである。上面での高さは、凹凸があるが、概してT.P. + 約32.3mを保っている。暗灰褐色粘質土である。攪拌を受けていることから耕作土と考える。土中には上下層の土が混じる。当該層は、少なくとも2層に細分される可能性がある。なぜならば、上層の土が混じるのは上層からの掘り込みによる攪拌か土壌化の結果として認められるからであり、一方、下層の土が混じる事は下層に掘り込んだ際に当該層へ混じったと考えられるからである。 |
| | (3 - 2) | 層厚約20cmである。作土と考えられるが、整地層の可能性もある。上面での高さは、凹凸があるが、概してT.P. + 32.1mを保っている。黒褐色砂質土であり、粘性に富む。当該層は古代の遺物を多く包含する。 |
| | (3 - 3) | 層厚約10cmである。暗褐色砂質土である。上層と地山の土が混じる。 |
| 4層 | (4) | 黄褐色砂質土である。地山として認識した。T.P. + 約32.0mほどである。他の地点では礫や粘土などがある。 |

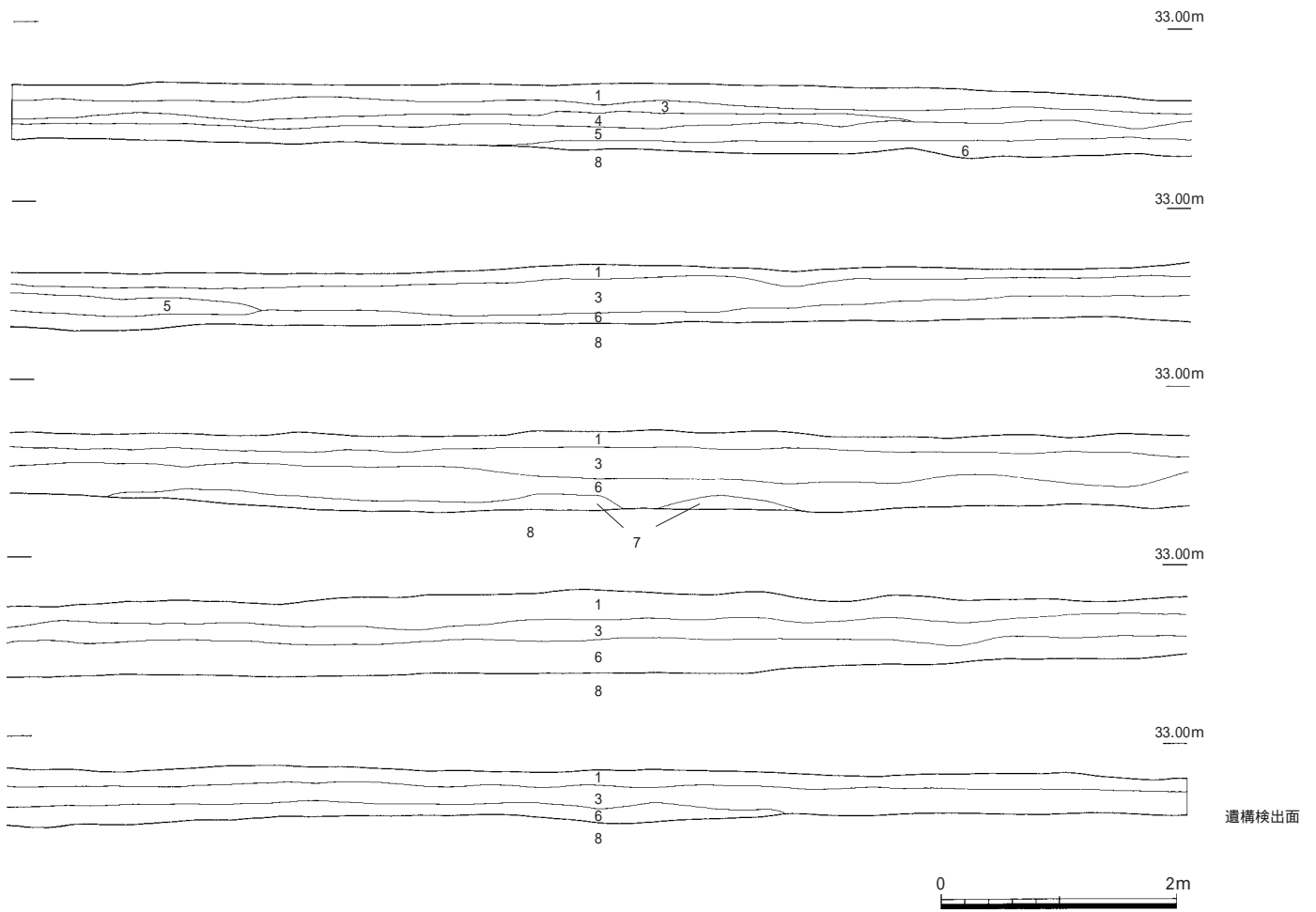


土層観察表

番号	堆積層	土色・土質	性格
1	1	灰色粘質土	(表土・耕作土)
2	2 1	灰白色粘質土	耕作土
3	2 2	灰色粘質土	耕作土
4	2 3	灰褐色粘質土	耕作土
5	3 1	暗灰褐色粘質土 (2・5の土を含む)	耕作土
6	3 2	黒褐色砂質土 (粘質に富む)	耕作土・整地土
7	3 3	暗褐色砂質土 (5・6・8の土を含む)	耕作土
8	4	黄褐色砂質土	地山 (無遺物層)
9		暗灰褐色粘質土	土坑2
10		黒褐色砂質土	溝10
11		濁灰褐色粘質土	溝10

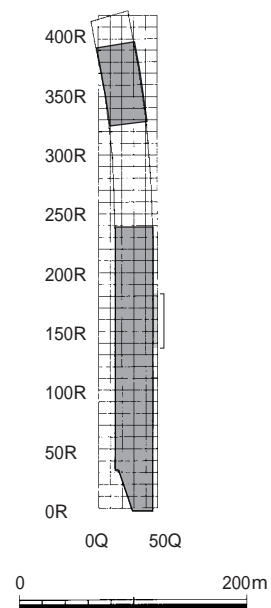


第68図 第3次調査 39R ~ 88R 土層図

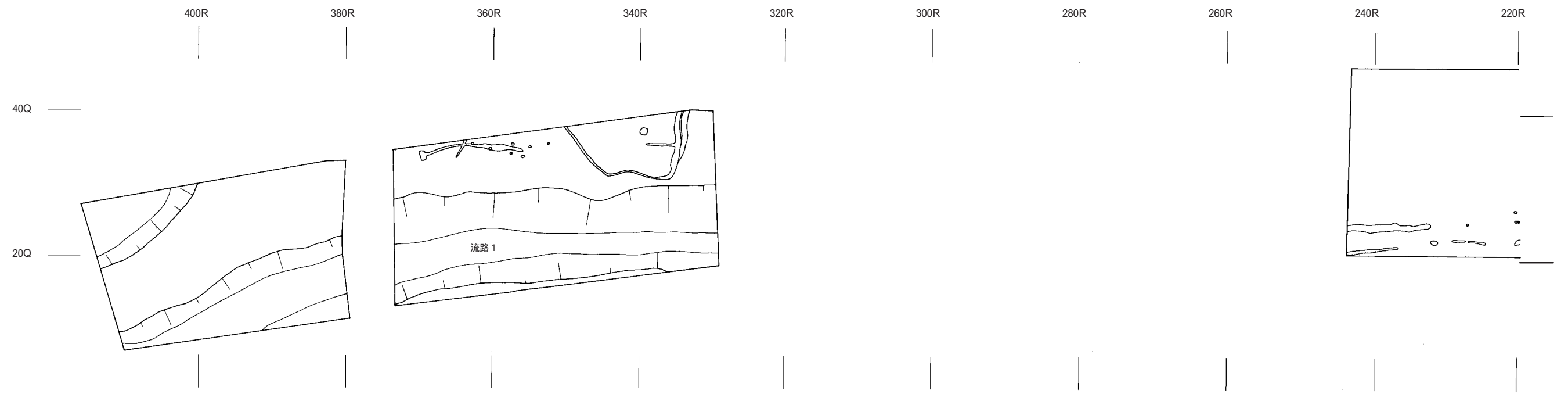
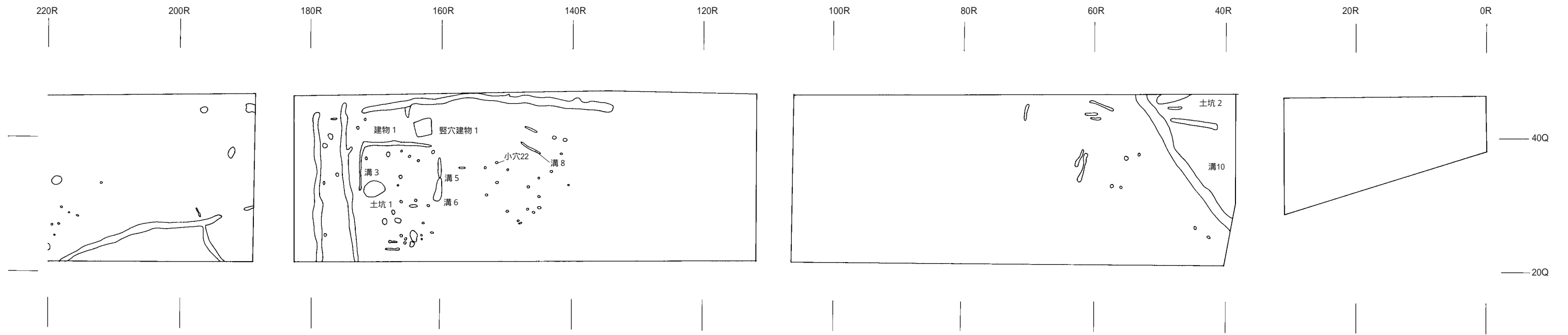


第2次調査 土層観察表

番号	堆積層	土色・土質	性格
1	1	灰色粘質土	(表土・耕作土)
2	2 1	灰白色粘質土	耕作土
3	2 2	灰色粘質土	耕作土
4	2 3	灰褐色粘質土	耕作土
5	3 1	暗灰褐色粘質土 (2・5の土を含む)	耕作土
6	3 2	黒褐色砂質土 (粘質に富む)	耕作土・整地土
7	3 3	暗褐色砂質土 (5・6・8の土を含む)	耕作土
8	4	黄褐色砂質土	地山 (無遺物層)



第69図 第3次調査 130R ~ 180R土層図



第70図 第3次調査 遺構配置図

第3節 調査成果

調査成果の概要

地山（無遺物層）をベースとした面で遺構検出を行った。遺構の密度は調査区中央（140～180R間）、南側（40R～90R間）で高いことが看取できる。主な遺構として、古代～中世の竪穴建物、区画溝を有した建物や小穴、土坑、溝などを検出している。また、北側の調査区（330R～446R間）では、南北方向の自然流路等を検出した。以下に遺構の概要を述べるが、調査区全体図も参照されたい。

検出遺構

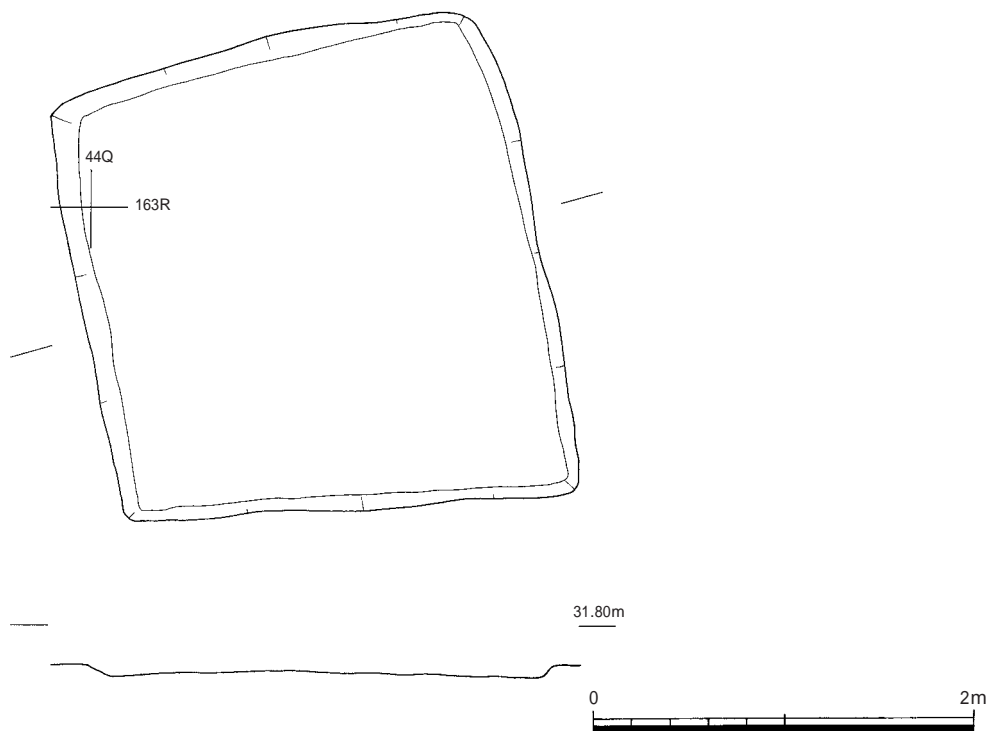
竪穴建物1（第71図）

T.P. + 31.6mで検出した。41Q、163Rに位置する。平面形は方形状であるが、床面は平坦となっている。南北軸2.5m、東西軸2.5m、深さ0.05m、面積は約6.25㎡である。建物内には柱穴等が認められなかった。遺物はなし。

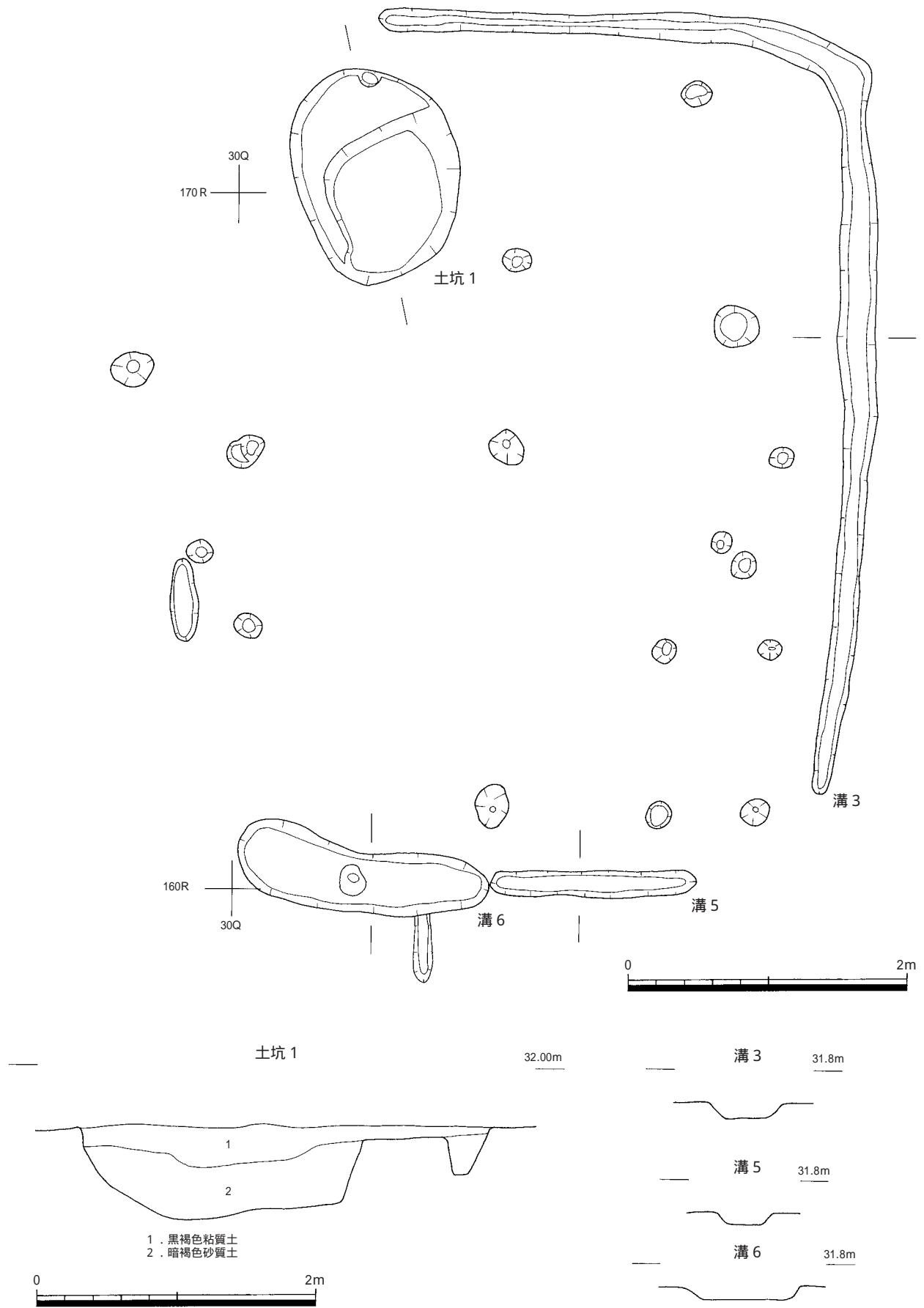
建物1（第72図）

当該遺構は、溝3・5・6、小穴群、土坑1が空間的に関連していると考えたため、総じて一つの遺構（建物）として構成していると考えた。

T.P. + 31.6mで検出した。34Q、167Rに位置する。幅0.25～0.55mの溝3・5・6は一連の遺構と考えられ、コの字状となると推定する。断面形状では底面が安定しており、板塀などがあった可能性は低いと考え、排水などの機能を有していた可能性が指摘できる。この溝を想定復元すると、南北軸約1.24m、東西軸約0.9mの長方形になると考えられ、建物に関連する区画溝の性格をもつと考える。また、区画内の南では小穴群を検出した。小穴群は概して長径0.3m～0.4mで、平面は正円形を呈す



第71図 第3次調査 竪穴建物1 平面・断面図



第72図 第3次調査 建物1 (土坑1・溝3・5・6) 平面・断面図

る。深さは0.2～0.5mとなる。小穴は溝の方向と平行または直交する並びをもっており、建物を構成する柱穴の可能性はある。ただ、他の柱穴は検出できなかったため、間取りは想定しなかった。また、同区画内の北西に土坑1を検出した。当該遺構もこの区画溝、小穴群と一連の遺構と考える。時期については、区画溝を構成する溝5から8世紀前半頃の須恵器（杯身）が出土しているが、混入の可能性が考えられ、これのみで当該遺構の時期を想定するには慎重になる必要がある。

土坑1（第72図）

建物1内の北西（32Q、170R）に位置する。南北軸3.0m、東西軸2.4m、深さ0.5mである。平面は楕円形で、土坑内は段になっている。堆積状況は、上・下層に2分でき、前者は黒褐色粘土、後者は暗褐色砂である。遺物はなし。

土坑2（第74図）

T.P. + 32.3mで検出した。46Q、48Rに位置する。調査した範囲での総延長は5.4m、幅員1.6m、深さ0.8mである。平面は隅丸長方形を想定するが、調査区外の南方へ伸びる可能性がある。土坑内は、中央部が浅く、北側の隅で一段深く落ち込む。埋土は暗灰褐色粘質土であり、短期間に埋まったと考える。遺物は須恵器の杯蓋（1）須恵器の大甕（2）等が出土している。時期は9世紀前半と考える。

小穴22（第73図）

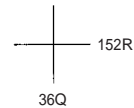
T.P. + 31.7mで検出した。36Q、151Rに位置する。長径0.3m、深さ0.4mである。平面は楕円形を呈する。遺物は須恵器の壺もしくは瓶（3）が出土している。時期は9世紀代に属する。

溝3

T.P. + 31.6mで検出した。建物1内の北、東側（39Q、170R）周辺に位置する。総延長約13.4m、幅員0.2～0.6m、深さ0.1mである。逆さL状を呈する。底面は安定しており、板塀痕跡等が認められないため、排水などの機能を有していたと考える。溝5・6と関連性がある。遺物はなし。

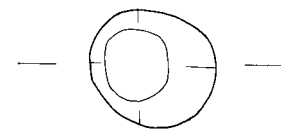
溝5（第72図）

T.P. + 31.6mで検出した。建物1内の南側（35Q、160R）に位置する。総延長3m、幅員0.4m、深さ0.5mである。東西方向に伸びる。底面は安定しており、板塀痕跡等が認められないため、排水などの機能を有していたと考える。溝3・6と関連性がある。遺物は須恵器の無台杯身（4）が出土している。時期は8世紀前半である。



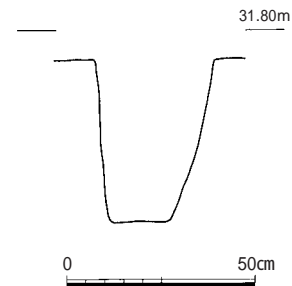
溝6（第72図）

T.P. + 31.6mで検出した。建物1内の南側（32Q、160R）に位置する。総延長約3.7m、幅員0.9～1.1m、深さ0.1mである。東西方向に伸びる。底面は安定しており、板塀痕跡等が認められないため、排水などの機能を有していたと考える。溝3・5と関連性がある。遺物はなし。



溝8（第74図）

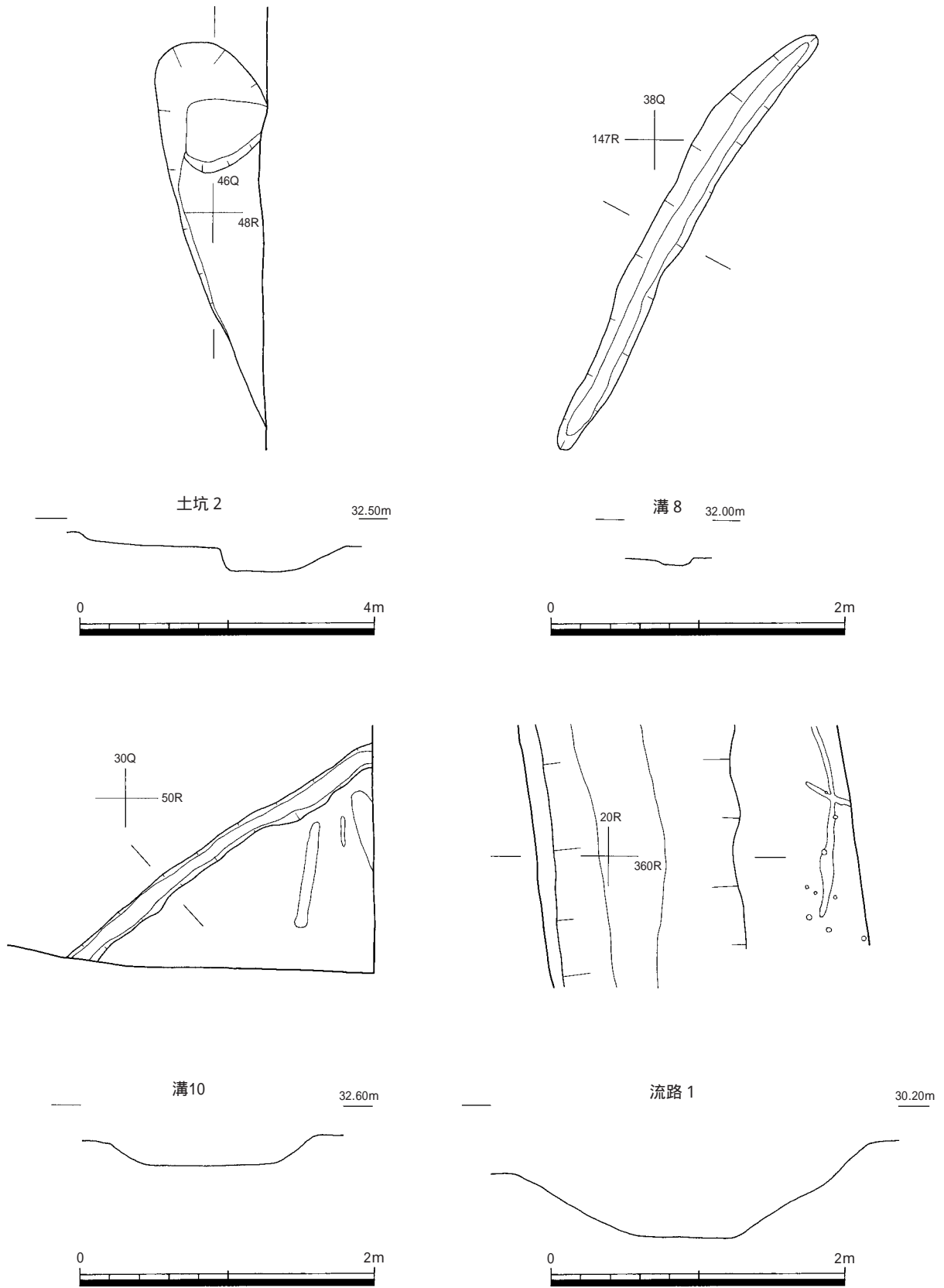
T.P. + 31.7mで検出した。38Q、147Rに位置する。総延長3.4m、幅員0.3m、深さ0.4mである。遺物は須恵器の大型壺または瓶（5）が出土した。時期は9世紀前半である。



溝10（第74図）

T.P. + 32.3mで検出した。調査区南側の35Q、45Rに位置する。直線的な溝で、それぞれ南西方向と北東方向へと調査区外に伸びる

第73図 第3次調査 小穴22 平面・断面図



第74図 第3次調査 土坑2・溝8・溝10・流路1 平面・断面図

と考える。幅員1.5～2m、深さ0.3mの比較的しっかりとした溝で、人の手が加わった人工的な用水・排水として機能していたと考える。遺物は、須恵器の杯蓋（6）等が出土した。時期は9世紀前半と考えられる。他に該期の須恵器・土師器の甕、杯などが多く出土している。

流路1（第74図）

T.P.+29.9mで検出した。調査区北側の0～30Q、330～420Rに位置する。幅員13m、深さ0.6mである。南北方向に伸びる自然流路と考える。遺物は土掘具とされる打製石斧（石鋸）（7）が出土している。現地点での時期を縄文時代～弥生時代の範疇を想定するが、新しくなる可能性もある。手取川扇状地上に複数流れる一支流と考えられ、地理的にみても、堆積環境に大きな影響があったと考えられる。

出土遺物

本調査では多くの遺物が出土しているが、まず遺構（土坑、小穴、溝、流路の順）から出土した遺物の報告から行いたい。ただし、所属時期については、整理作業途中、実測の選別段階で見落としや、遺物量が多いにもかかわらず数点しか選別していないため、時期の推定の証左とするには慎重に検討する必要があるものも含まれる。次に、包含層出土の遺物について報告を行う。本調査では、包含層からの出土が大勢を占めており、これらについては時代、器種ごとにまとめて報告する。なお、遺物観察表を作成したため、それとあわせて参照されたい。

土坑2（第75図）

須恵器の杯蓋1が出土しており、摘み部が欠損している。外面には突帯が逆位で貼り付けられており、特異な形態の蓋となる。2は須恵器の大甕である。時期は9世紀前半と考える。

小穴22（第75図）

3は須恵器壺もしくは瓶である。時期は9世紀代に属する。

溝5（第75図）

4は須恵器で、無台の杯身である。時期は8世紀前半である。

溝8（第75図）

5は須恵器の大型壺または瓶である。時期は9世紀前半である。

溝10（第75図）

6は須恵器の杯蓋である。時期は9世紀前半と考えられる。

流路1（第75図）

7は土掘具とされる打製石斧（石鋸）である。片面は自然礫面を残している。石材は凝灰角礫岩と考える。縄文時代～弥生時代の範疇に属する。

包含層（第75～82図）

包含層出土の遺物は、遺構検出面より上層からの出土であるが、主に3層（3-2層）から多量に出土している。3層は、主に古代の土器が中心で、8世紀前半～10世紀前半に属するものが多い。他に、弥生土器や中世・近世に下る遺物も発見された。少なくとも近世に属する遺物については、1層もしくは2層から出土したと考えられる。

8は弥生土器である。口縁部外面はヨコナデ。時期は弥生時代後期（法仏式期）と考える。9は須恵器杯蓋である。8世紀後半に属する。10は赤彩土器の杯蓋で内外両面に赤彩が塗布されている。11～17は須恵器の杯身である。11は有台、12～17は無台となる。12は底部外面に墨書されており、「T」、「人」とも捉えられる。18～40は土師器の椀である。なかでも、18～20、26～28、30は内面が黒色に

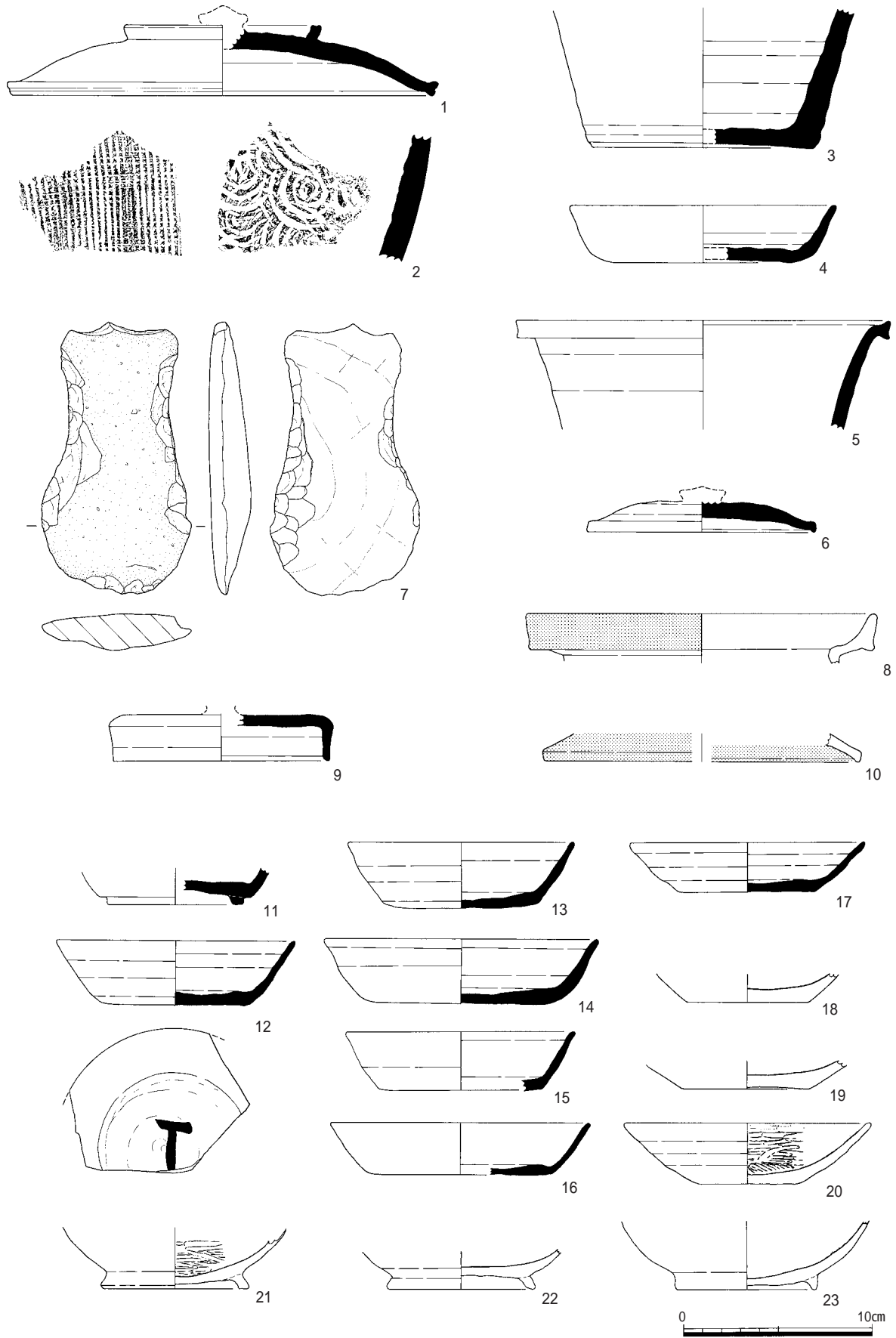
燻されている。21～25は有台。23は2次焼成を受けている。24～25は底部外面に回転糸切り痕があり、その後高台を取り付けていることがわかる。29、31～40は無台で底部外面に糸切り痕がある。30は底部に回転ケズリが認められる。32は2次焼成を受け、40は外面に煤が付着している。41～44は須恵器の皿または盤である。明確な形態の分類が困難なためまとめて報告した。41～43は無台である。42は2次焼成を受ける。44には高台がつき、底部外面には回転糸切り痕が残る。45は土師器の有台の皿と考えられ、内面には黒色に燻されている。46は須恵器の高杯である。47～49は土師器の鍋である。49は外面に煤が付着。47は内面黒色となる。50～62は須恵器の壺もしくは瓶である。51～56、62は有台であり、57～58、61は無台である。59～60は須恵器の小型壺である。61は2次焼成を受ける。63～68は須恵器の瓶である。破片の部位によっては壺と区別ができないため、長い頸部、肩部、取手部等の形態的特長から瓶とした。64は有台で肩部が明瞭に屈曲して稜をなす。67、68は大型瓶である。69～102は須恵器の甕で、大型甕である。70は内面に漆が付着。72～94は、外面が平行タタキ、内面が同心円の当具痕がある。95～101は外面が平行タタキ、内面も平行の当具痕が認められる。ただし、内面に同心円文の当具痕も見られるもの(97、98、99)もある。95は外面に2次焼成を受ける。102は外面が平行タタキ、内面が車輪文状の痕跡をとどめる当具痕がある。103～115は土師器の甕である。103は肩部がなだらかで底部は丸く収まると想定できる。104～113は長胴でやや丸底を呈すると思われる。116～119は陶磁器である。116は中国産の青磁椀で14世紀～15世紀に属する。117は中国産の白磁椀で12世紀～13世紀前半と考える。118は肥前産の白磁皿で18世紀前半と考える。119は鉄釉の椀か鉢で江戸時代後期に属する。

120～122は土掘具の機能を持つ打製石斧(石鋏)である。石材の供給地としては手取川流域が考えられる。いずれも片面には自然礫面が残っている。形態は刃部が中心で屈曲しているもの、直線状となっているものがある。時期の推定は難しいが、縄文時代～弥生時代の範疇と考える。123は平坦な円礫の一部を打ち欠いており、石錘の可能性を考える。124、125は砥石である。124は、断面正方形状で、4面ともに使用痕が見られる。126は、剥片石器と考える。

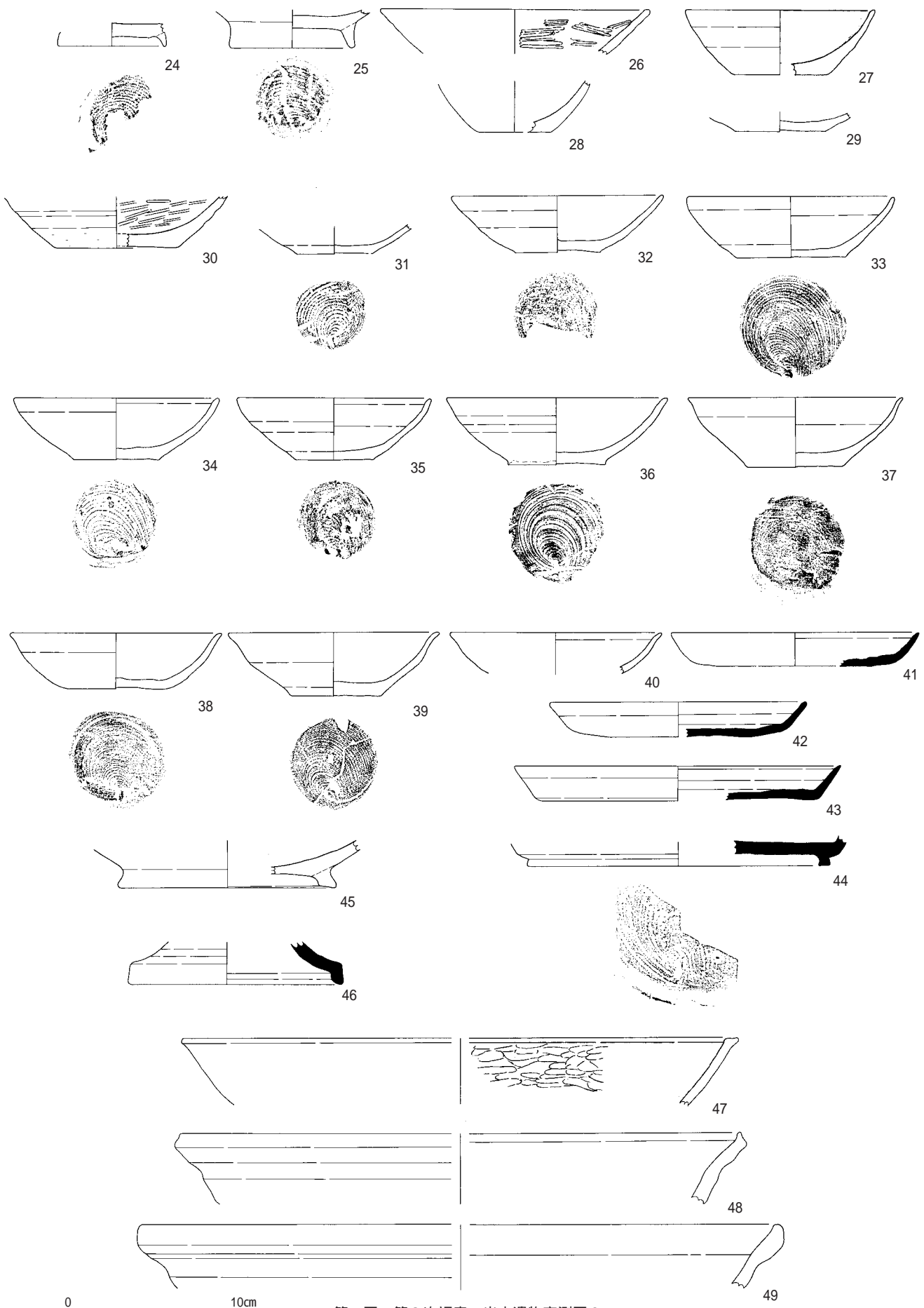
第4節 まとめ（第3次調査）

本調査の成果では、以下の点を指摘してまとめとしたい。

- ・ 縄文時代～弥生時代の範疇で捉えられる打製石斧（石鋤）が包含層から出土しており、周辺に人的活動が行われていたことが推測できる。流路1に関しても同様の当該時期を想定したが、将来周辺で調査する際に所属時期が改められる可能性は十分にある。今回、流路内の堆積状況などの観察記録等がないため検討すらできなく、周囲への影響を考える上での情報を提供するに至らなかったことは反省すべきである。流路などは洪水などによって、土地改変や土地利用に際しての影響が強いため、集落の移動などに関連するため重要な情報と考えられる。今後周辺で調査される際に検証されることを期待したい。
- ・ 弥生後期に属する土器が包含層から出土していることから、周辺に該当時期の集落があることが示唆される。
- ・ 8世紀前半になると確実に人の痕跡が見られる。方形に廻ると想定できる8世紀前半頃の建物1を確認している。区画している溝については、板塀があった可能性は低く、用水・排水などの機能を有していたと考える。削平が著しく全体像は把握できないが、特異な構造である。また、9世紀前半の南西 - 北東方向にそれぞれ伸びると思われる溝10等を検出した。これは人工的に作られ排水・用水としての機能を有したと考えられ、調査地に開発が行われたと推測できる。また、溝と同時期の土坑2等も確認されており、周辺に集落が営まれていたことを示唆している。他には、遺物がないため時期を推定するのに困難な竪穴建物1がある。堆積層の見解や他の検出遺構等の状況から勘案して時期を古代と想定する。包含層からは、主に古代の土器が多量に出土しており、概ね8世紀前半～10世紀前半に属するものが多く、当該遺跡の盛行がこの頃であったことが窺える。ただし、遺構の密度は低いため、周辺に集落があったと推測する。
- ・ 中世になると、14世紀～15世紀に属する中国産の輸入陶磁器等が包含層から散発的に出土していることから周辺では人が生活していたことが窺える。この頃以降では、当該地は生産域であった可能性がある。
- ・ 江戸時代後期の土器も包含層から数点出土しており、周辺に集落があったことを示唆している。

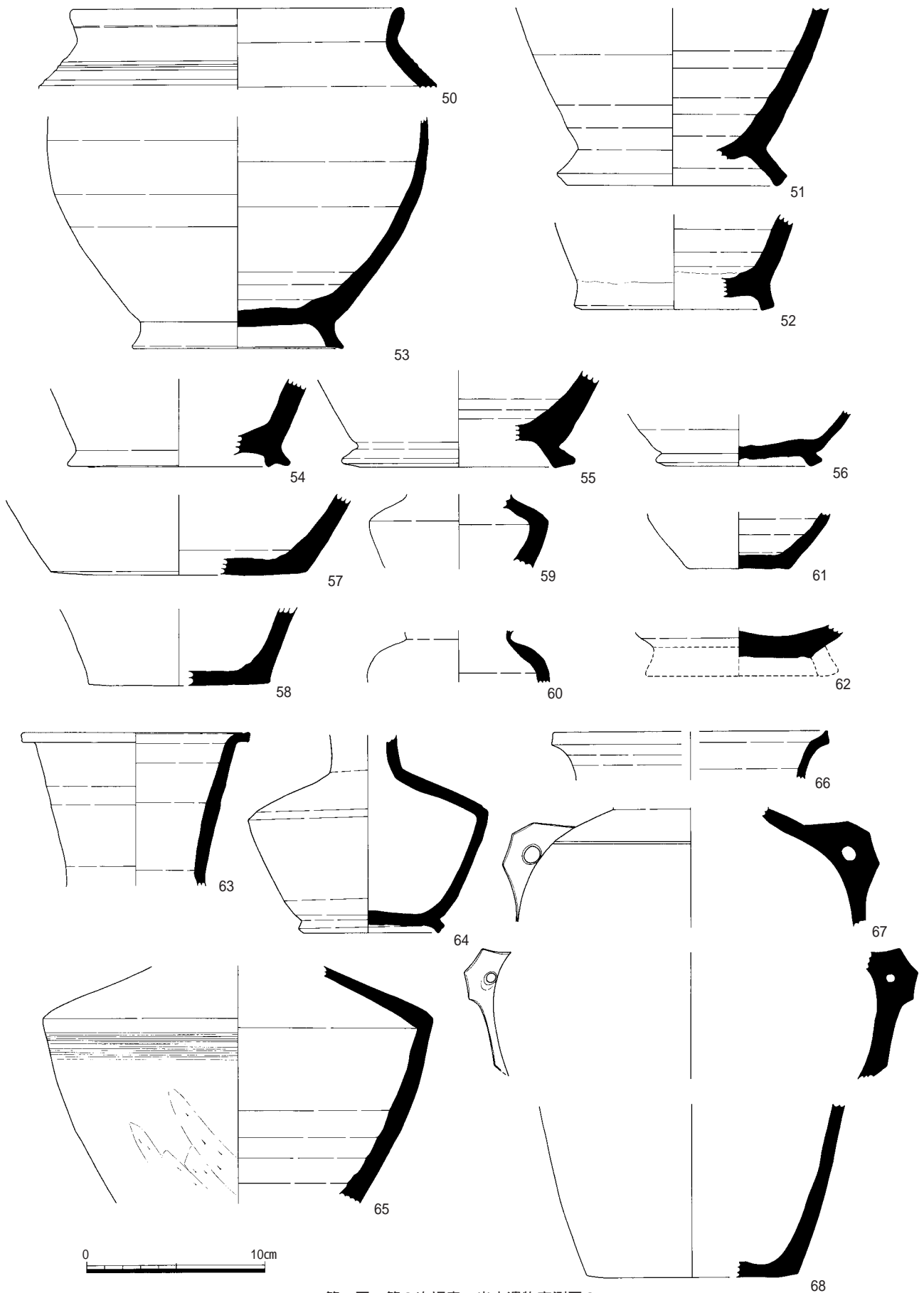


第75図 第3次調査 出土遺物実測図1

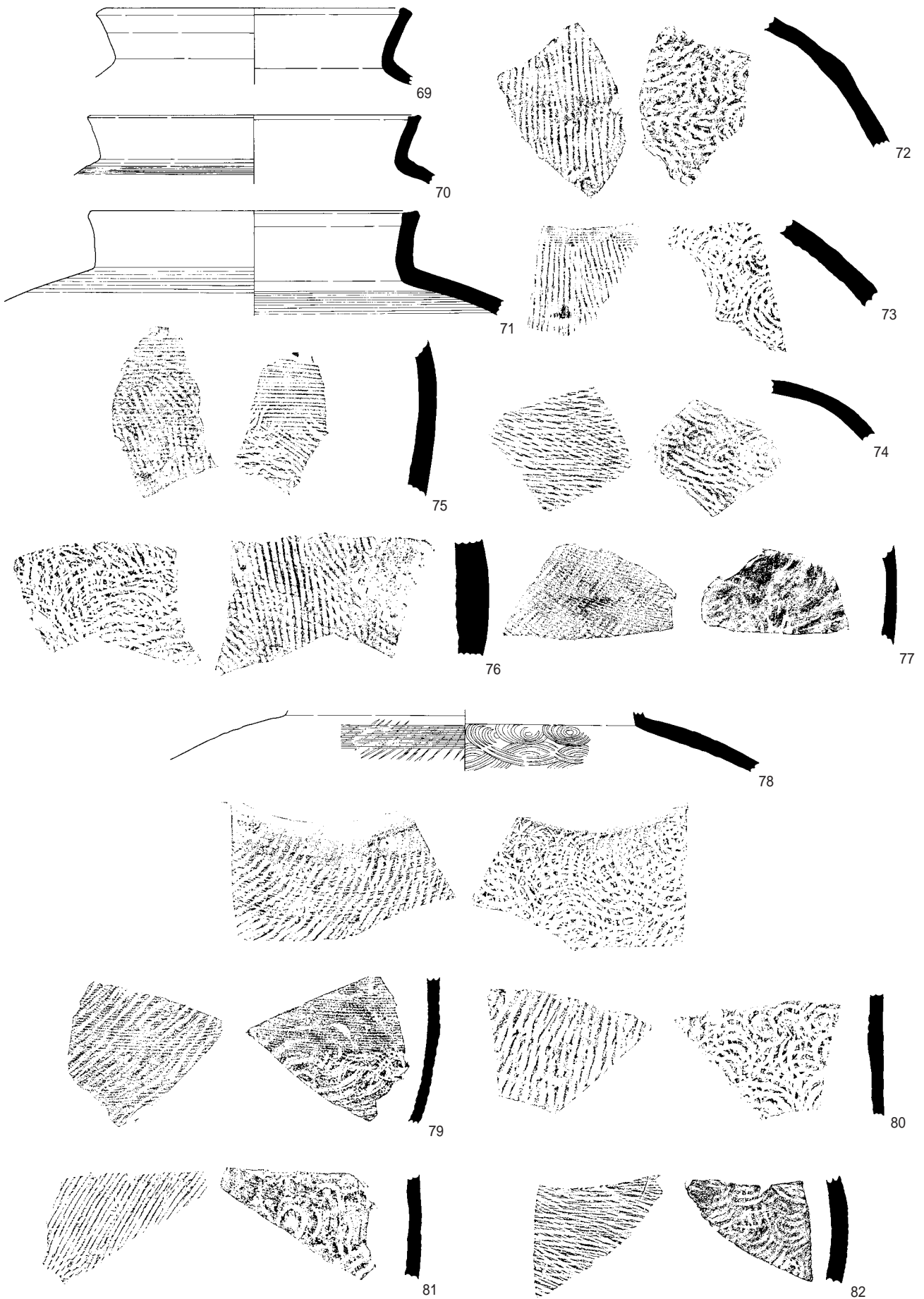


0 10cm

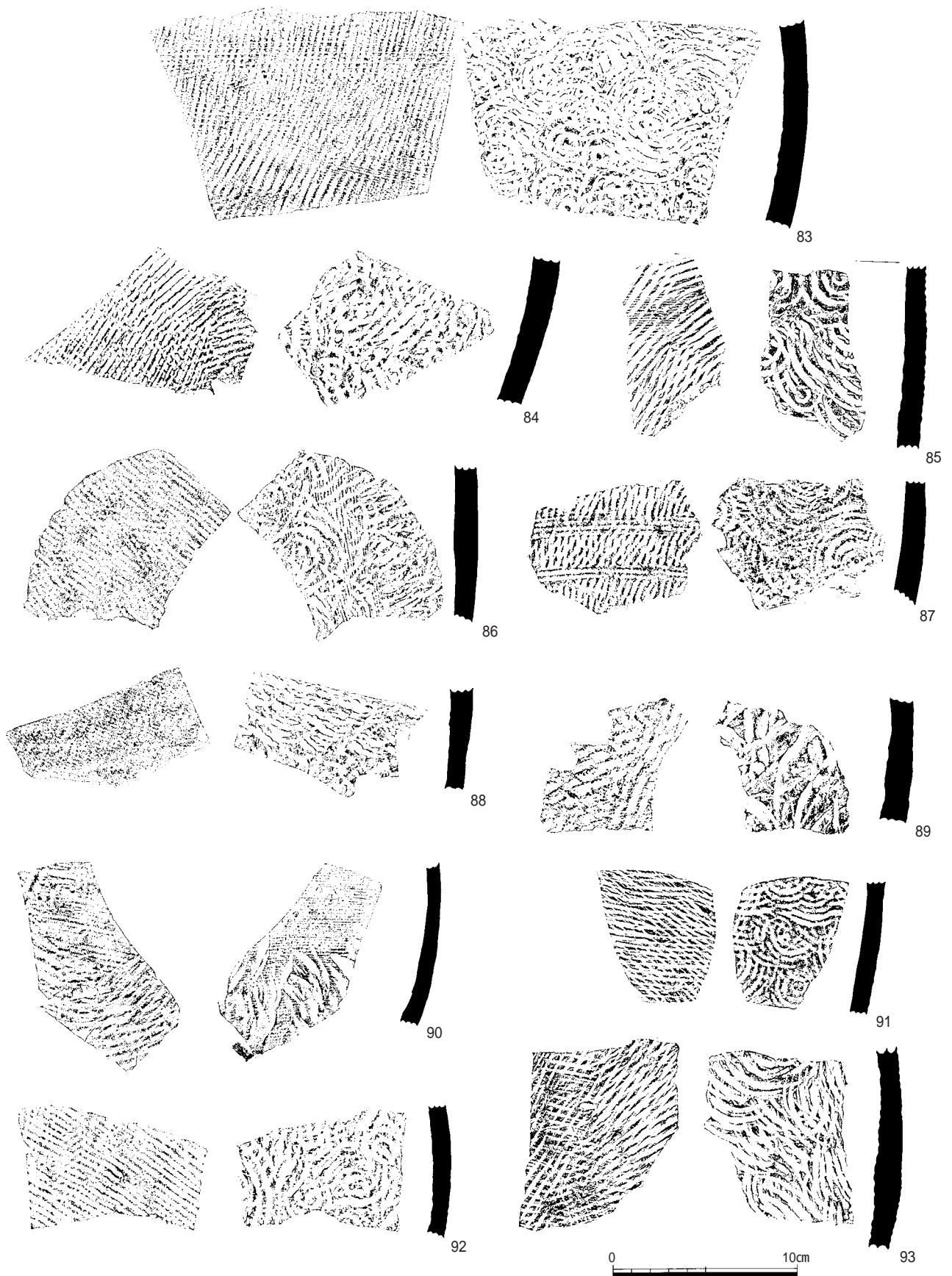
第76図 第3次調査 出土遺物実測図2



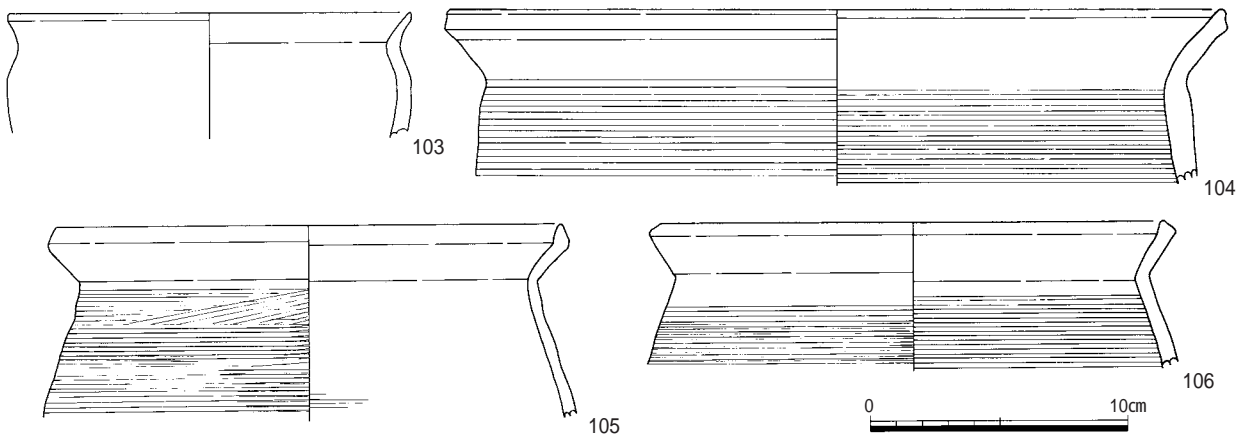
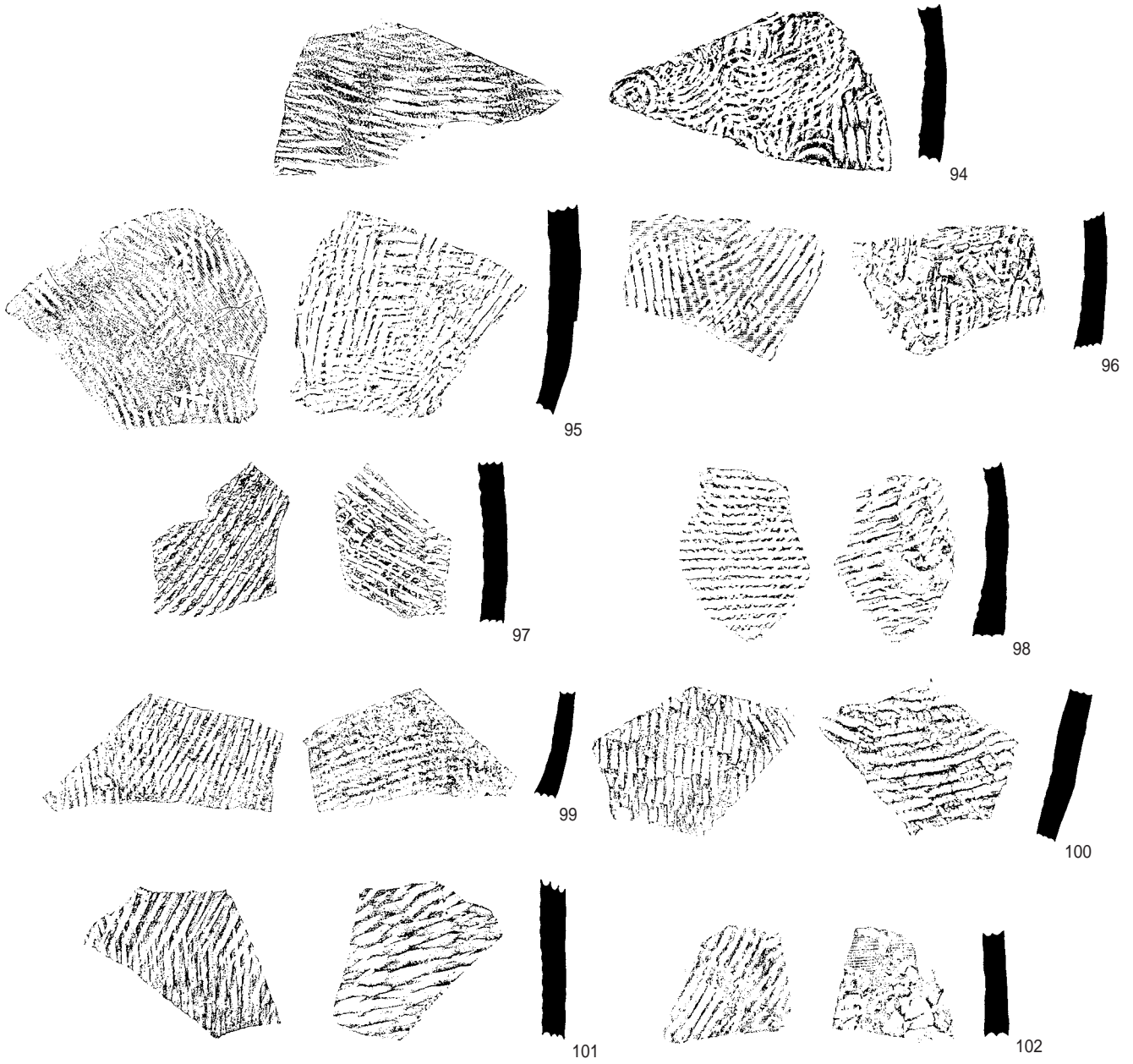
第77図 第3次調査 出土遺物実測図3



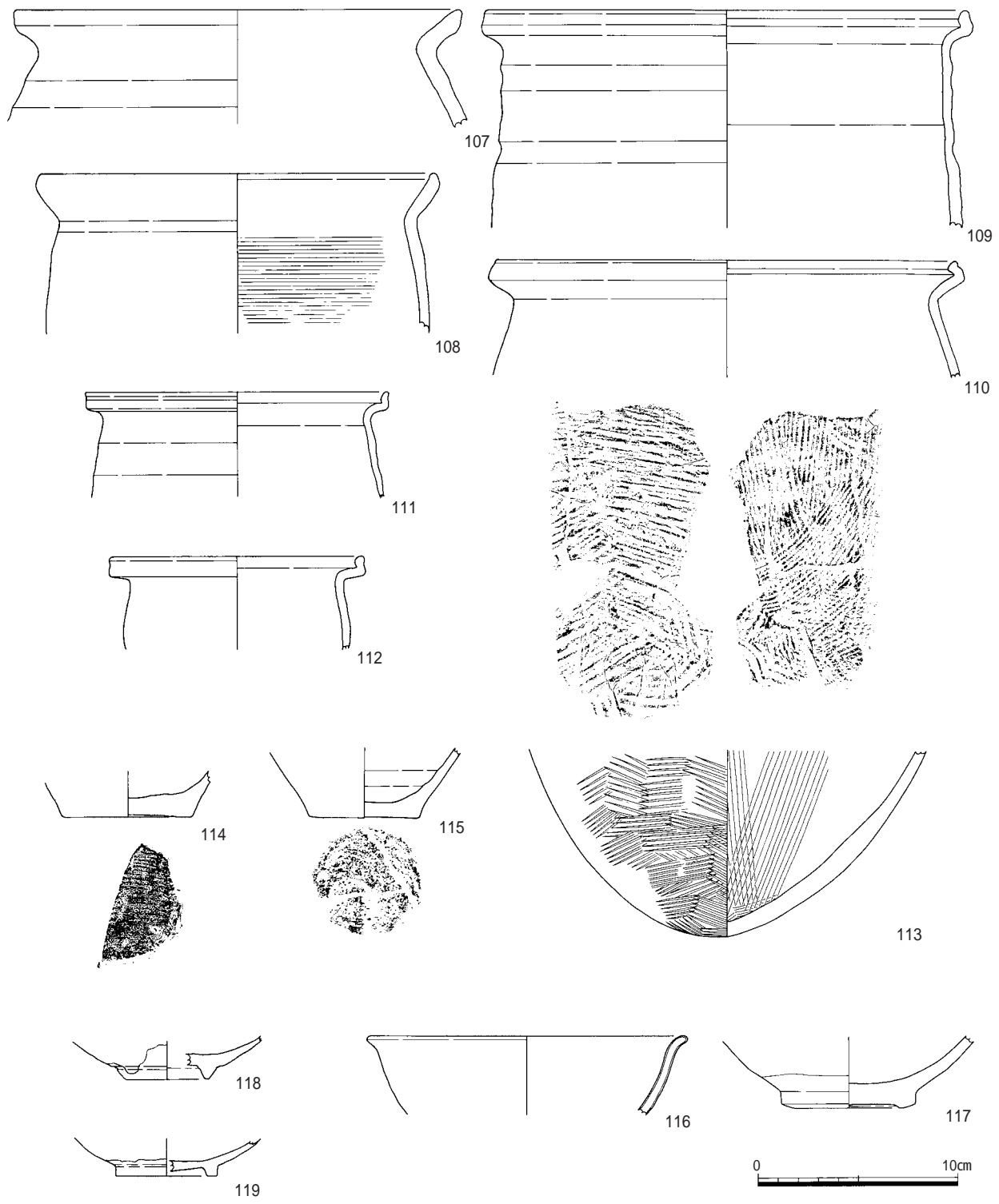
第78図 第3次調査 出土遺物実測図4



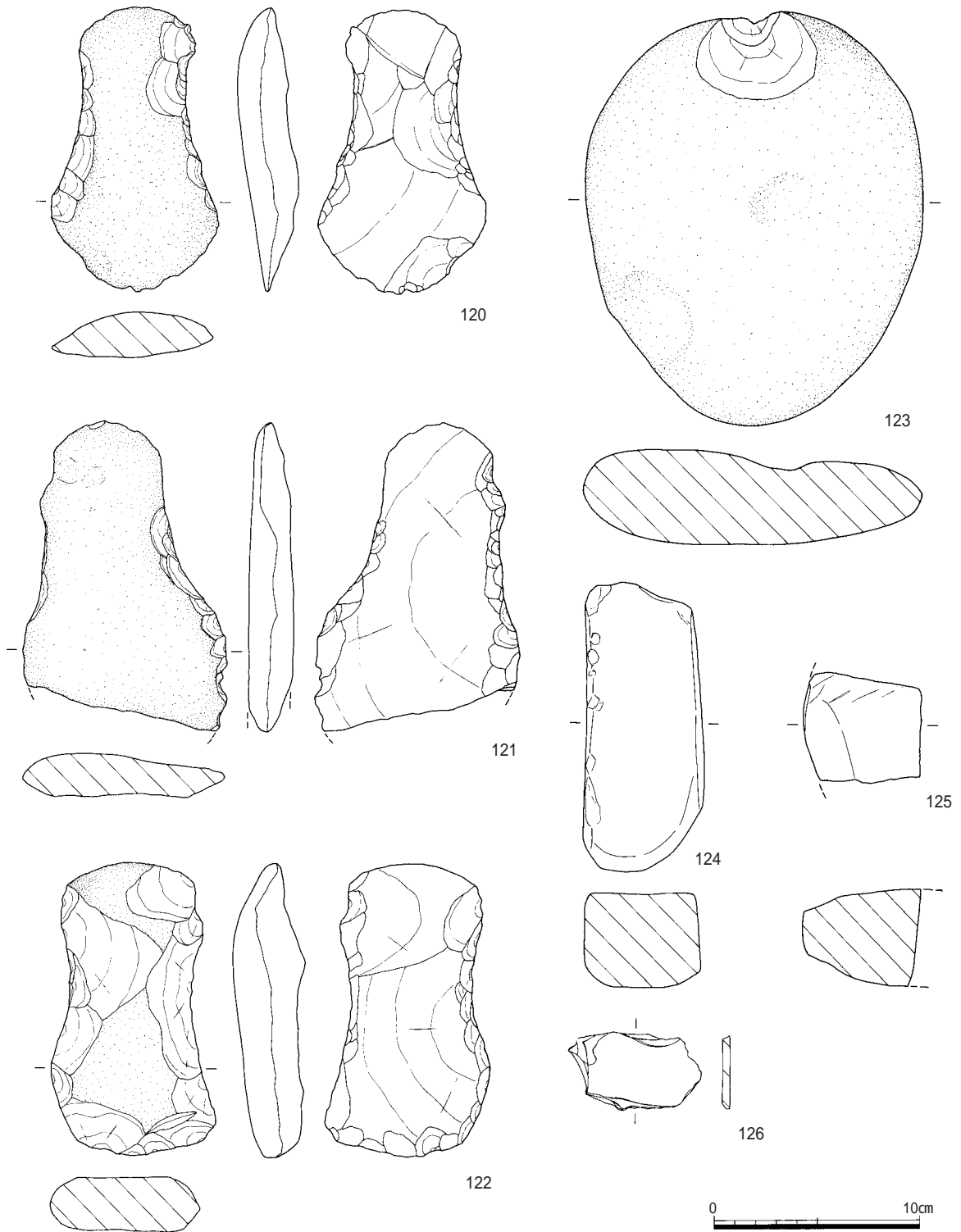
第79図 第3次調査 出土遺物実測図5



第80図 第3次調査 出土遺物実測図6



第81図 第3次調査 出土遺物実測図7



第82図 第3次調査 出土遺物実測図8

第29表 第3次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号	写真図版 番号	実測番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)	調 整 (外面) (内面)	図版
1	75	37	125	90	40 - 50Q 60 - 70R 20 - 30Q 60 - 70R 40 - 50Q 70 - 80R 40 - 50Q 40 - 50R	土坑 2	須恵器 杯蓋	口径 22.0 残存高 3.7	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ、回転ケズリ	外面に高台のようなものを貼り付けており、特異な形態をなす。
2	75	37	513	90		土坑 2	須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、カキメ 内) 当て具痕 (同心円)	
3	75	37	126	90		小穴22	須恵器 壺・瓶	口径 11.6 残存高 7.3	外) 回転ケズリ後ナデ、ナデ 内) 回転ナデ	
4	75	37	127	90	30 - 40Q 160 - 170R	溝 5	須恵器 杯身	口径 13.8 器高 3.0 底径 9.1	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に降灰かかる。
5	75	37	128	90		溝8	須恵器 瓶	口径 19.6 残存高 5.7	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内、外面に自然釉付着。
6	75	37	130	90		溝10	須恵器 杯蓋	口径 11.9 残存高 1.6	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	
8	75	37	463	90	30 - 40Q 70 - 80R		弥生土器 甕	口径 19.0 残存高 2.6	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ	
9	75	37	227	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 杯蓋	口径 11.3 残存高 2.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に降灰かかる。
10	75	37	431	90	40 - 50Q 10 - 20R		赤彩土器 杯蓋	口径 18.4 残存高 1.4	外) ナデ 内) ナデ	内外に赤彩塗布。
11	75	37	434	90	40 - 50Q 60 - 70R		須恵器 有台杯身	残存高 1.9 底径 7.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
12	75	37	217	90	40 - 50Q 50 - 60R		須恵器 杯身	口径 6.8 残存高 3.4	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	底面に墨書あり。「T」、「人」?
13	75	37	218	90	40 - 50Q 50 - 60R		須恵器 杯身	口径 11.8 残存高 3.5	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	
14	75	37	110	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 杯身	口径 14.2 残存高 3.4 底径 8.8	外) 回転ナデ、ナデ、回転ヘラ切り後ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼き痕あり。
15	75	37	562	90	30 - 40Q 50 - 60R		須恵器 杯身	口径 12.0 器高 3.1 底径 8.5	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼き痕あり。
16	75	37	460	90	30 - 40Q 50 - 60R		須恵器 杯身	口径 15.6 器高 2.7 底径 10.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	
17	75	37	220	90	40 - 50Q 60 - 70R		須恵器 杯身	口径 12.4 器高 2.6 底径 6.7	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	
18	75	38	225	90	20 - 30Q 50 - 60R		土師器 杯身	口径 6.2 残存高 1.5	外) 回転ケズリ、回転糸 切り 内) ナデ	内面は黒色。
19	75	38	226	90	20 - 30Q 50 - 60R		土師器 杯身	口径 6.6 残存高 1.2	外) 回転ケズリ 内) ナデ	内面は黒色。
20	75	38	113	90	20 - 30Q 50 - 60R		土師器 椀	口径 12.8 器高 3.2 底径 5.0	外) 回転ナデ、回転ケズリ、 回転糸切り痕 内) ヘラミガキ	内面は黒色。
21	75	38	216	90	40 - 50Q 10 - 20R		土師器 有台椀	口径 7.8 残存高 3.2	外) ナデ 内) ヘラミガキ	内面は黒色。
22	75	38	233	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 有台椀	口径 7.5 残存高 2.1	外) 回転ナデ、回転糸 切り 内) ヘラミガキ	内面は黒色。
23	75	38	117	90	20 - 30Q 160 - 170R		土師器 有台椀	口径 7.4 残存高 3.6	外) 回転ナデ、回転糸 切り 内) ヘラミガキ	内面は黒色。 2次焼成をうける。

第30表 第3次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号	写真図版 番号	実測番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)	調 整 (外面) (内面)	図版
24	76	38	407	90	20 - 30Q 160 - 170R		土師器 有台椀	残存高 1.3 底径 5.9	外) 回転ナデ、回転糸切り 内) ナデ	内面は黒色。
25	76	38	391	90	30 - 40Q 210 - 220R		土師器 有台椀	残存高 2.2 底径 6.8	外) 回転ナデ、回転糸切り 内) 回転ナデ	
26	76	38	568	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 椀	口径 15.2 残存高 2.5	外) 回転ナデ 内) ヘラミガキ	内面は黒色。
27	76	38	123	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 椀	口径 10.8 器高 3.7 底径 5.3	外) 調整不明瞭 内) ヘラミガキ	内面は黒色。
28	76	38	458	90	40 - 50Q 0 - 10R		土師器 椀	残存高 2.9 底径 4.2	外) ナデ、回転ケズリ 内) ヘラミガキ	内面は黒色。
29	76	38	408	90	20 - 30Q 160 - 170R		土師器 椀	残存高 1.0 底径 5.0	外) 調整不明瞭 内) 調整不明瞭	
30	76	38	228	90	20 - 30Q 50 - 60R		土師器 有台椀	底径 11.3 残存高 2.7	外) 回転ナデ 内) ヘラミガキ	内面は黒色。
31	76	38	406	90	20 - 30Q 160 - 170R		土師器 椀	残存高 1.6 底径 4.4	外) ナデ、回転糸切り 内) ナデ	
32	76	38	409	90	20 - 30Q 160 - 170R		土師器 椀	口径 12.0 器高 3.2 底径 4.8	外) ヨコナデ、回転糸切り 内) ヨコナデ、回転ナデ	2次焼成を受ける。
33	76	38	115	90	20 - 30Q 160 - 170R		土師器 椀	口径 11.6 器高 3.5 底径 6.2	外) ヨコナデ、回転ナデ、 回転糸切り 内) ヨコナデ、回転ナデ	
34	76	38	404	90	20 - 30Q 160 - 170R		土師器 椀	口径 11.4 器高 3.5 底径 4.8	外) ヨコナデ、回転ナデ、 回転糸切り 内) ヨコナデ、回転ナデ	
35	76	38	405	90	20 - 30Q 160 - 170R		土師器 椀	口径 10.8 器高 3.5 底径 4.4	外) ヨコナデ、回転ナデ、 回転糸切り 内) ヨコナデ、回転ナデ	
36	76	38	119	90	20 - 30Q 160 - 170R		土師器 椀	口径 12.6 器高 3.8 底径 5.6	外) ヨコナデ、回転ナデ、 回転糸切り 内) ヨコナデ、回転ナデ	
37	76	38	116	90	20 - 30Q 160 - 170R		土師器 椀	口径 12.0 器高 3.9 底径 5.4	外) ヨコナデ、回転ナデ、 回転糸切り 内) ヨコナデ、回転ナデ	
38	76	38	118	90	20 - 30Q 160 - 170R		土師器 椀	口径 12.0 器高 3.2 底径 5.6	外) ヨコナデ、回転ナデ、 回転糸切り 内) ヨコナデ、回転ナデ	
39	76	39	185	90	30 - 40Q 200 - 210R、 30 - 40Q 210 - 220R		土師器 椀	口径 12.0 器高 2.7 底径 5.0	外) ヨコナデ、回転ナデ、 回転糸切り 内) ヨコナデ、回転ナデ	
40	76	39	186	90	30 - 40Q 210 - 220R		土師器 椀	口径 12.0 残存高 2.3	外) ヨコナデ、回転ナデ 内) ヨコナデ、回転ナデ	外面に煤付着。
41	76	39	561	90	30 - 40Q 50 - 60R		須恵器 皿	口径 14.0 器高 1.9 底径 8.7	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	重ね焼き痕あり。
42	76	39	221	90	40 - 50Q 150 - 160R		須恵器 皿	口径 14.6 器高 2.0 底径 7.8	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り後ナデ 内) 回転ナデ	2次焼成を受ける。
43	76	39	219	90	40 - 50Q 60 - 70R		須恵器 皿	口径 18.4 器高 1.9 底径 15.3	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
44	76	39	232	90	30 - 40Q 50 - 60R		須恵器 盤か	底径 17.0 残存高 1.7	外) 回転ナデ、回転糸切り 内) 回転ナデ	底部内面に降灰かかる。
45	76	39	228	90	20 - 30Q 50 - 60R		土師器 有台皿	底径 11.3 残存高 2.7	外) 回転ナデ 内) ナデ	内面は黒色。
46	76	39	241	90	30 - 40Q 60 - 70R		須恵器 高杯	底径 11.8 残存高 2.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に重ね焼き痕あり。
47	76	39	124	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 鍋	口径 31.4 残存高 3.8	外) 回転ナデ 内) ヘラミガキ	内面は黒色。

第31表 第3次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号	写真図版 番号	実測番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)	調 整 (外面) (内面)	図版
48	76	39	346	90	40 - 50Q 160 - 170R		土師器 鍋	口径 31.6 残存高 4.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、八ケ	
49	76	39	435	90	40 - 50Q 60 - 70R		土師器 鍋	口径 36.0 残存高 3.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に煤付着。
50	77	39	215	90	40 - 50Q 0 - 16R		須恵器 壺	口径 18.4 残存高 4.5	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 付着。 内面に降灰か かる。
51	77	39	114	90	20 - 30Q 70 - 80R		須恵器 有台壺	底径 11.8 残存高 9.9	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	内外面に自然 釉付着。
52	77	39	229	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 有台壺	底径 9.8 残存高 5.3	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	
53	77	39	109	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 有台壺	底径 11.6 残存高 12.9	外) 回転ナデ、回転ケズ リ 内) 回転ナデ	
54	77	39	412	90	30 - 40Q 60 - 70R		須恵器 有台壺	残存高 4.9 底径 10.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に自然釉 薬付着。
55	77		240	90	30 - 40Q 50 - 60R		須恵器 有台壺	底径 10.7 残存高 5.4	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
56	77	39	347	90	40 - 50Q 0 - 10R		須恵器 有台壺	残存高 3.0 底径 9.0	外) 回転ナデ、回転ヘラ 切り 内) 回転ナデ	
57	77	39	545	90	30 - 40Q 60 - 70R		須恵器 壺	残存高 4.5 底径 14.2	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
58	77	40	413	90	30 - 40Q 60 - 70R		須恵器 壺	残存高 4.3 底径 10.1	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
59	77		546	90	40 - 50Q 70 - 80R		須恵器 壺	測定不能	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外面に降灰か かる。
60	77	40	563	90	30 - 40Q 60 - 70R		須恵器 壺	測定不能	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
61	77	40	433	90	40 - 50Q 50 - 60R		須恵器 壺	残存高 3.1 底径 5.6	外) 回転ナデ、静止糸切 り 内) 回転ナデ	2次焼成を受 ける。
62	77		342	90	40 - 50Q 200 - 210R		須恵器 有台壺	測定不能	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
63	77	40	108	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 瓶	口径 12.5 残存高 8.5	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
64	77	40	107	90	24.6Q 55.5R		須恵器 瓶	底径 7.5 肩部 13.4 残存高 11.0	外) 回転ナデ、回転ケズ リ、回転ヘラ切り 内) 回転ナデ	外面に自然釉 付着。
65	77	40	111	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 瓶・壺	肩部径 21.8	外) 回転ナデ、ヘラケズ リ、カキメ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 付着。
66	77	40	459	90	20 - 30Q 70 - 80R		須恵器 瓶	口径 15.4 残存高 2.7	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内外面に降灰 かかる。
67	77	40	348	90	40 - 50Q 0 - 10R		須恵器 双耳瓶	測定不能	外) 回転ナデ、沈線 (1 条) 内) 回転ナデ	
68	77	40	112	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 双耳瓶	底径 11.8	外) 回転ナデ、回転ケズ リ、ナデ 内) 回転ナデ	外面に自然釉 付着。
69	78	40	414	90	30 - 40Q 60 - 70R		須恵器 甕	口径 16.6 残存高 3.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内外面に降灰 かかる。
70	78	40	457	90	40 - 50Q 50 - 60R		須恵器 甕	口径 18.6 残存高 3.9	外) 回転ナデ、カキメ 内) 回転ナデ	内外面に降灰 かかる。 内面に漆付着 か。

第32表 第3次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号	写真図版 番号	実測番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)	調 整 (外面) (内面)	図版
71	78	40	120	90	20 - 30Q 60 - 70R 30 - 40Q 70 - 80R 30 - 40Q 80 - 90R	農道北側 調査区	須恵器 大甕	口径 18.6 残存高 6.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、カキメ	外面に自然釉 付着。
72	78		540	90	20 - 30Q 70 - 80R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具痕 (同心円)	521と同一固 体か
73	78	40	551	90	40 - 50Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	外面に自然釉 付着。
74	78		517	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、カ キメ 内) 当て具 (同心円) 後 ナデ	
75	78	41	570	90			須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、カ キメ、ナデ 内) 当て具 (同心円)、 ハケ	内面に自然釉 薬付着。
76	78	41	571	90			須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	内面に自然釉 薬付着。
77	78	41	537	90	30 - 40Q 20 - 30R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円) の ちナデ	
78	78	41	519	90	20 - 30Q 40 - 50R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ナ デ、カキメ 内) 当て具 (同心円) 回 転ナデ	外面に降灰か かる。
79	78		538	90	30 - 40Q 200 - 210R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)、 ハケ	
80	78	41	515	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
81	78	41	541	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
82	78	41	542	90	20 - 30Q 80 - 90R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円) 後 ナデ	
83	79	41	520	90	20 - 30Q 40 - 50R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	
84	79		516	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	内面に降灰か かる。
85	79	41	533	90	30 - 40Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	
86	79		543	90	30 - 40Q 40 - 50R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具痕 (同心円)、 ナデカキメ	
87	79	41	416	90	20 - 30Q 40 - 50R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円) 後 ナデ	
88	79	42	525	90	30 - 40Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) ハケ、ナデ 内) 当て具 (同心円) 後 ナデ	
89	79	42	526	90	30 - 40Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円) の ちナデ	
90	79	42	524	90	20 - 30Q 60 - 70R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)、 カキメ	外面に自然釉 かかる。

第33表 第3次調査遺物観察表

報告 番号	図版番号	写真図版 番号	実測番号	年度	調査区 グリット	層序・遺構 () は旧番号	種類 器種	法 量 (cm)	調 整 (外面) (内面)	図版
91	79	42	415	90	30 - 40Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円) の チナデ	
92	79	42	521	90	20 - 30Q 70 - 80R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	540と同一固 体?
93	79	42	518	90	20 - 30Q 70 - 80R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円)	
94	80	42	535	90	40 - 50Q 70 - 80R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (同心円)	外面に自然釉 付着。
95	80	42	528	90	30 - 40Q 40 - 50R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (平行)	外面に2次焼 成を受ける。
96	80		514	90	20 - 30Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行)、ハ ケ 内) 当て具 (平行)	
97	80	43	534	90	30 - 40Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円、平 行)	
98	80	43	523	90	30 - 40Q 60 - 70R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円、平 行)	
99	80		527	90	30 - 40Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (同心円、平 行)	
100	80	43	432	90	40 - 50Q 50 - 60R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (平行)	
101	80	43	536	90	20 - 30Q 70 - 80R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (平行)	
102	80	43	484	90	40 - 50Q 40 - 50R		須恵器 大甕	測定不能	外) タタキ (平行) 内) 当て具 (車輪文?)、 ハケ	
103	80	43	462	90	30 - 40Q 60 - 70R		土師器 甕	口径 16.8 残存高 5.0	外) ナデ 内) ナデ	
104	80	43	231	90	20 - 30Q 50 - 60R		土師器 甕	口径 30.8 残存高 7.0	外) 回転ナデ、カキメ 内) 回転ナデ、ハケ	
105	80		238	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 甕	口径 20.0 残存高 7.7	外) 回転ナデ、ハケ 内) 回転ナデ	
106	80	43	236	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 甕	口径 19.8 残存高 5.9	外) 回転ナデ、ハケ 内) 回転ナデ、ハケ	
107	81		224	90	40 - 50Q 50 - 60R		土師器 甕	口径 22.0 残存高 5.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、ハケ	
108	81	43	235	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 甕	口径 19.6 残存高 7.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ、ハケ	
109	81	43	122	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 長胴甕	口径 24.0 残存高 10.7	外) 回転ナデ、ハケ 内) 回転ナデ	
110	81	43	239	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 甕	口径 22.8 残存高 5.8	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に煤付着。
111	81	43	234	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 甕	口径 15.0 残存高 5.2	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
112	81	43	237	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 甕	口径 12.4 残存高 4.6	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	内面に煤付着。
113	81	44	230	90	20 - 30Q 50 - 60R		土師器 長胴甕	残存高 8.4	外) タタキ (平行) 内) ハケ	外面に黒斑、 煤付着。
114	81	44	564	90	20 - 30Q 50 - 60R		土師器 甕	残存高 2.3 底径 6.4	外) 回転ケズリ、静止糸 切り 内) 回転ナデ	外面に煤付着。
115	81	44	461	90	30 - 40Q 50 - 60R		土師器 甕	残存高 3.5 底径 5.7	外) 回転ナデ、回転糸切 り 内) 回転ナデ	
116	81	44	121	90	20 - 30Q 160 - 170R		青釉磁 椀	口径 15.6 残存高 3.9	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	口縁は波どり している。

第34表 第3次調査遺物観察表

報告番号	図版番号	写真図版番号	実測番号	年度	調査区グリット	層序・遺構()は旧番号	種類器種	法量 (cm)	調整 (外面) (内面)	図版
117	81	44	273	90	30 - 40Q 50 - 60R		白磁椀	残存高 3.5 底径 6.0	外) 回転ナデ、回転ケズリ 内) 回転ナデ	内、外面に釉薬塗布。
118	81	44	345	90	40 - 50Q 170 - 180R		白磁皿(肥前)	残存高 2.1 底径 4.0	外) 回転ケズリ 内) 回転ナデ	内外面に釉薬付着。
119	81		343	90	40 - 50Q 170 - 180R		鉄釉椀・鉢	残存高 1.8 底径 5.0	外) 回転ケズリ 内) 回転ナデ	内外面に鉄釉付着。

第35表 第3次調査金属製品観察表

報告番号	図版番号	写真図版番号	実測番号	年度	調査区グリット	層序・遺構	種類石材	法量 (cm)	重量 (g)	備考
7	75	37	9	90	19Q 336R	流路1 (溝・河黒色土中)	石製鍬 灰色系凝灰角礫岩	最大長 14.3 最大幅 7.9 最大厚 2.2	262.3	片側自然礫面あり
120		44	4	90	30 - 40Q 0 - 10R		石製鍬 灰色系凝灰角礫岩	最大長 13.7 最大幅 8.1 最大厚 2.9	301.5	片側自然礫面あり
121		44	10	90	20 - 30Q 50 - 60R		石製鍬 灰色系凝灰角礫岩	残存長 14.9 最大幅 9.9 最大厚 2.2	349.7	片側自然礫面あり
122		44	12	90	28.8Q 239R	地山 (無為物層)直上	石製鍬 灰色系凝灰角礫岩	最大長 14.1 最大幅 8.0 最大厚 3.5	429	片側自然礫面あり
123		44	13	90	30 - 40Q 50 - 60R		不明 (石錘か) 灰色系凝灰岩質砂岩	最大長 18.0 最大幅 16.4 最大厚 4.6	2200	自然礫面あり 一部、剥離痕あり
124		44	11	90	30 - 40Q 50 - 60R		砥石 白色系凝灰岩	最大長 14.0 最大幅 5.8 最大厚 4.7	649	研磨面あり。
125		44	7	90	40 - 50Q 40 - 50R		砥石 黄褐色系砂岩	残存長 5.7 最大幅 5.3 最大厚 4.7	191.3	研磨面あり。
126			8	90	40 - 60Q 150 - 160R		剥片石器 黒色頁岩	最大長 6.5 最大幅 3.7 最大厚 0.4	12.7	層状に剥離している。

引用・参考文献

- 山本直人 1985 「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会々誌』第28号石川考古学研究会
- 田嶋明人ほか 1986 『漆町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 川畑誠ほか 1992 『小川』石川県立埋蔵文化財センター
- 藤田邦夫 1997 「中世加賀国の土師器様相」『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会編桂書房
- 石川県立埋蔵文化財センター 1997 『石川県立埋蔵文化財センター年報』第17号
- 石川県立埋蔵文化財センター 1997 『石川県立埋蔵文化財センター年報』第18号
- 日本貿易陶磁器研究会 1982 『貿易陶磁器研究』第2号
- 北陸古瓦研究会編 1987 『北陸の古代寺院 - その源流と古瓦』桂書房
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定 加賀地域にみる7世紀から11世紀中頃にかけての土器群の推移」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 北野 博 1989 『末松遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 石川県立埋蔵文化財センター 1990 『石川県立埋蔵文化財センター年報』第10号
- (社)石川県埋蔵文化財保存協会編 1990 『石川県埋蔵文化財保存協会年報』1
- 藤 則雄 1991 『粟田遺跡』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- (社)石川県埋蔵文化財保存協会編 1991 『石川県埋蔵文化財保存協会年報』2
- 田村昌宏 1992 『粟田遺跡第2次発掘調査報告書』野々市町教育委員会
- 金山弘明 1994 『北安田北遺跡』松任市教育委員会
- 安英樹・河合忍 1999 「石鍬雑考」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 農具』石川考古学研究会
- (社)石川県埋蔵文化財保存協会編 1998 『18年のあゆみ』
- (財)石川県埋蔵文化財センター 2000 『野々市町末松遺跡群』
- 石川県野々市町教育委員会 2000 『粟田遺跡藤平地区・清金アガトウ遺跡』
- 川畑 誠 2001 「土製馬形」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 補遺編』石川考古学研究会
- 野々市町史編纂専門委員会編 2003 『野々市町史資料編1』野々市町
- 横山貴広 2003 「扇状地における新興開発領主層の台頭とその後の展開 古代(6世紀末～9世紀中頃)手取川扇状地を中心として」富山大学考古学研究室論集『屋気楼』秋山進午先生古希記念 秋山進午先生古希記念論集刊行会編集 (有)六一書房
- 立原秀明ほか 2004 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター『末松遺跡群』
- 野々市町史編纂室 『野々市町史』考古編 2004
- 野々市町史編纂専門委員会編 2004 『野々市町史』集落編 石川県野々市町
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2005 『末松遺跡』
- 野々市町史編纂専門委員会編 2005 『図説 野々市町の歴史』石川県野々市町
- 松尾 実 2005 「石盤考」『石川県埋蔵文化財情報』第14号 (財)石川県埋蔵文化財センター

第6章 第2次調査10号土坑出土の犁先

犁先について

1989年度調査の9号土坑では、土坑底面に土師器皿を並べた上に鉄製の犁先が出土している。犁は、古墳時代以降に中国から伝わってきたといわれているもので、弥生時代から使われている人力による掘削具の鋤（すき）に対して牛馬に引かして耕す道具である。弥生時代から使われている鋤はまっすぐな櫛状のもので、人力で土中に押し込み耕す道具で現在のスコップのような使われ方をしたのに対し、犁はより深い耕作が可能であり、犁の使用はより安定し効率のよい耕地の開発を可能にした。

出土した犁は、2点ありいずれも犁先といわれる犁の先端部分につき土中に刺さる金属の部分である。犁先の大きさは17.2cm×46.2cm高さ4.8cmである。この大きさは他の遺跡出土の鉄製犁先に比べ非常に大型のものである（第36・37表）。犁は江戸時代までは床の長い長床犁が一般的であるが床の長さによって短床犁、長床犁、無床犁などと分けられることができる、当遺跡出土のものは八尾市の歴史民族博物館に収蔵される民俗資料などと形態が近似することから長床犁の犁先に属すると考えることができる。

今回出土した犁は犁先だけであるが、滋賀県草津市中畑遺跡では平安時代末のものが犁先を除いてほぼ完存しており、具体的な構造を知ることができる。また現在でも中国では昔から変わらない形で犁を牛馬に引かして耕作をしており、『六道絵』（大津市聖衆来迎寺蔵、鎌倉時代）や『松崎天神縁起』（山口県防府天満宮蔵、鎌倉時代）などの絵画資料からその当時の犁を使った牛馬耕の様子を知ることができる。

犁の変遷と犁先の主な出土例

古墳時代

犁は古墳時代に日本に伝わってきたとされているが、古墳時代の犁の出土例はきわめて少ない。古墳時代の犁といわれているものは現在のところ宮崎市の古墳出土のものと、鳥根県益田市匹見町広瀬の古墳出土、の2例が知られている。しかし匹見町のものは木下忠氏の再検討により、室町時代のころのものとされているが、宮崎市のものは古墳時代、5世紀から6世紀頃のものとして間違えないようである。古墳時代には鋤先、鋤先や、鎌などの鉄製農耕具の出土例は多いが、犁先の出土例は極端に少なく、他の鉄製農耕具に比べ犁は一般階級の農民のなかでは一般的な農具ではなかったと考えられる。

奈良・平安時代

奈良時代のものでは遺跡からの出土例ではないが正倉院には天平宝字二年の銘が入った「子の日の手辛鋤」といわれるものがある。奈良時代には古代中国から伝えられた、毎年年初めの十二支の一番初めの子の日に天皇みずから土地を耕す儀式があり、この「子の日の手辛鋤」は天平宝治二年一月三日に孝謙天皇によってその儀式に用いられたものだということがわかる。この犁は犁先のサイズが18.5cm×12cmで、匹見町の25×18cm、宮崎市の30×21cmに比べるとやや小型だが、その大きさからも実際に使用したのではなく儀式専用と考えることができる。延喜式においては天皇家の食事を作る内

膳司へ当てられていた農具の中には牛のほか、馬鍬（犁）辛鉏閑良（犁鑷）鋒（鍬先）があげられている、このようなことから8世紀初頭以来機内の官田においては牛による犁耕が行われていたようである。

金属製ではないが香川県坂出市の下川津遺跡では木製の犁先、犁へら、犁床を一木で作っている犁が発見されている。7世紀初頭から後半と考えられる流路内から出土している。

大阪府茨木市宿久庄西遺跡では金属製の犁先が平安時代のピットの中から発見されている。
中世

中世になると「今昔物語集」「宇治拾遺物語」などの文献からは唐鋤が「家の具」として鍋釜とともに農民の家に備わっていたものだということがわかる。また一乗員文書からも名主百姓クラスの農民は役蓄一頭、犁一具、鍬一口の鉄製農具を所有していたことがわかっている。文献資料からは犁の所有が一般的になってきたのはわかるものの遺跡からの発見事例は少なく石川県では野々市町長池キタノハシ遺跡、羽咋市永光寺遺跡の中世の土坑から発見されている。

犁などの農具と埋納祭祀について

当遺跡出土の犁先は土坑の底面に土師皿を並べその上に犁先を置くという出土状況であるが、土師器が意図的に並べてあることから埋納祭祀的なものが考えられる。

何かを埋納し祭祀的なことをするというと地鎮祭というものが考えられる。中世の地鎮というと一般的に輪法、賢瓶などの密教法具、輪法を墨書した墨書土器、銭貨と土師皿、銭貨と羽釜といったものを埋納するのが知られている。犁先に限らず農具を埋納する地鎮はあまり知られていない。地鎮といわれているものに限らず農耕具を埋納する祭祀の例も少数ではあるが見つかっている。

石川県野々市町長池キタノハシ遺跡、同県羽咋市永光寺遺跡では鉄製犁先が土坑内から出土しており土坑内に埋納されたと考えられている。大阪府茨木市宿久庄西遺跡では平安時代の掘立柱建物跡の柱穴内から鉄製の犁先が出土しており埋納されていたと報告されている。

また平安京では土坑内に礫や土師器を並べて配置しその上に鉄製の鍬を配置した土坑が発見された例が報告されている。

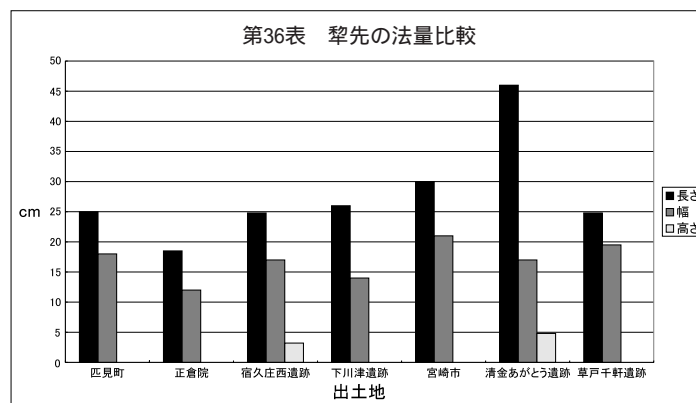
鉄製犁先以外の農耕具を土坑以外の穴に埋納した例を考えると木製の犁本体または鍬を井戸に埋納した例が複数例見られる。石川県金沢市梅田B遺跡では中世の井戸の掘り方内から木製の鍬が発見されている、この鍬はほぼ完形であり井戸の掘り方内部からの発見であることから井戸構築時に意図的に埋納されていたと考えることができる。また滋賀県の大津市関津遺跡、草津市中畑遺跡では井戸の掘り方から金属製の犁先以外の木製の犁本体が埋納された状態で発見されている。特に中畑遺跡のものは、埋納時期10世紀末～11世紀初頭と考えられており、井戸枠外の掘り方底面付近に木部完形の犁を埋納してある、埋納に当たっては犁轆の先端を折っている。また同遺跡の別の井戸では掘り方内に鉄製U字型刃先を装着した一本鍬を、刃先を折って埋納しておりこちらの埋納時期は10世紀前半と考えられる。

以上が犁または鍬の埋納祭祀を行っていたと考えられる主な遺跡の状況である。意図的に犁などの農耕具を埋納している遺構があるということがわかる。いずれの調査例においても祭祀の具体像を断言するのは難しいが土坑に埋納されたものは、土地、家屋に対する地鎮、と考えられるであろう、井戸で行うものは当然「水」に対する祭祀で、日常生活、生死に直接関わってくる水に対しては頻繁に

祭祀が行われていたと考えられる。ではなぜ農具を使ったのかということに関しては明らかではないが一般的に地鎮は土地、家屋の安堵を祈るためのであるが農具を使う場合は農地の安堵を祈る祭祀か豊作を祈る祭祀が行われていたと考えることができる。清金アガトウ遺跡においても意図的に土師皿を敷き詰めていることから埋納祭祀ということが強く言え、その上の犁先を重ねることから農地に関する祭祀をしていたことが推定される。

まとめ

日本の農具史においては鍬の時代と犁の時代が交互にあるといわれているが、古代から中世は犁の時代といわれるその時期において文献資料からは犁が一般的であったことがわかるが、考古遺物としての出土例は数少ない。清金アガトウ遺跡出土の犁先は一般的であった中世農民の犁の使用が手取川扇状地でもあったことが証明される数少ない資料のひとつとなる。また中世の埋納祭祀に関しては直接宗教と結びつけたることができるものや、近現代の民俗例に見られるもの以外にもたくさんあったと考えられるが農耕具の埋納祭祀の貴重な例として今後どのような祭祀行為があったかを考える重要な資料となるであろう。



第37表 犁、鍬の出土例

出土地	遺跡名	時期	出土状態
宮崎市		5から6世紀	犁先
益田市匹見町広瀬		5から6世紀または室町時代	犁先2点
石川県野々市町	清金アガトウ遺跡	13世紀	土師皿と共に土坑出土 犁先
奈良	正倉院	天平宝字年間	正倉院の宝物 犁先と木質部分全体
滋賀県大津市	関津遺跡	13世紀	沼 犁床犁柱部分出土
大阪府茨木市	宿久庄西遺跡	12世紀	掘立柱建物の柱穴上層から出土12世紀前半の瓦器椀と共範 犁
石川県野々市町	長池キタノハシ遺跡	13世紀～16世紀	中世の土坑出土 鍬先
石川県羽咋市	永光寺遺跡	中世	中世の土坑出土 鍬先？
香川県坂出市	下川津遺跡	7世紀初頭～後葉	流路内から金属部分以外
滋賀県草津市	中畑遺跡	10世紀末～11世紀初頭	井戸の掘り方から犁先の鉄の部分以外井戸の掘り方を埋めるときに意図的に埋めたと考えられる。
広島県福山市	草戸千軒遺跡	中世	

参考引用文献

- 滋賀県文化財保存協会 2005 『大津市関津遺跡現地説明会資料』
- 野々市町教育委員会 2000 『長池キタノハシ遺跡野々市町御経塚第二土地区画整理に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 石川県埋蔵文化財センター 1997 『永光寺遺跡』
- 香川県教育委員会 1990 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 下川津遺跡』
- 滋賀県文化財保護協会 2005 『中畑遺跡』
- 永原慶二 他 1983 『講座・日本技術の社会史 第一巻 農業・農産加工 日本評論者』
- 飯沼次郎 他 1976 『ものと人間の文化史 19・農具 財団法人法政大学出版局』
- 河野通明 1994 『日本農耕具史の基礎的研究』 和泉書院
- 北陸中世考古学研究会 2001 『中世北陸の井戸』
- (財)大阪府文化財センター 2002 『宿久庄西遺跡』
- 木下 忠 1977 『島根県匹見町広瀬出土の犁鏡の再検討』 松崎寿和先生退官記念事業会
- 久世 康弘 1999 『京都市域における埋納（遺構）の集成』 京都市埋蔵文化財研究所研究紀要第5号

写真図版



第 1 次調査区航空写真 (南より)



発掘作業風景 (南より)



掘立柱建物1ほか (北より)



竪穴建物1発掘状況 (南より)



掘立柱建物5ほか (北より)



竪穴建物3発掘状況 (北西より)



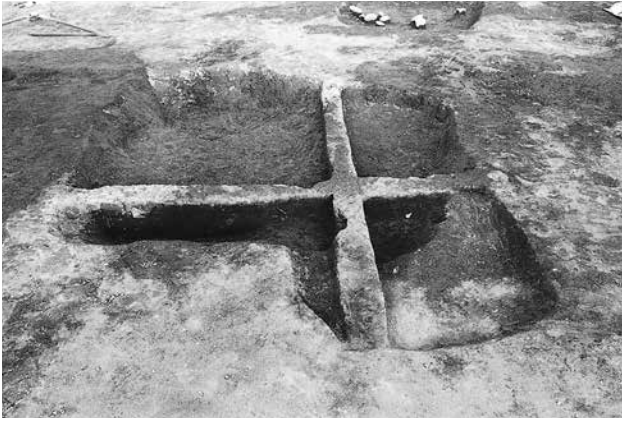
L字状区画の溝 (東より)



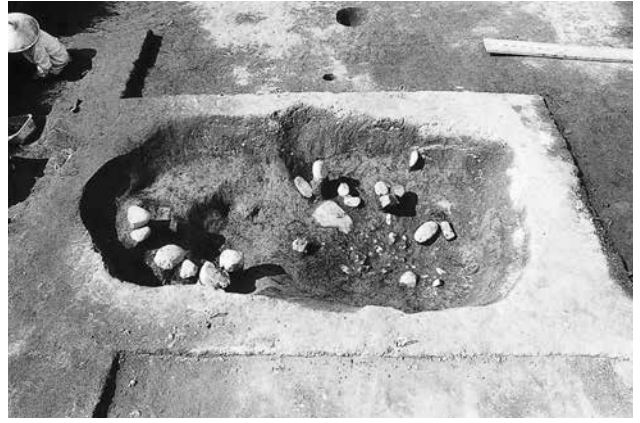
竪穴状遺構4・土坑2 (西側より)



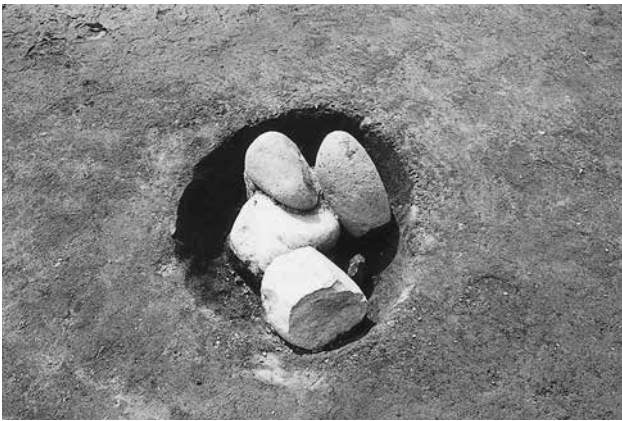
土坑3 (北より)



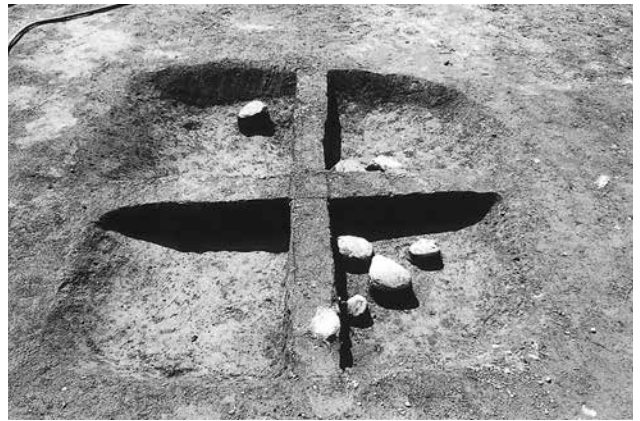
土坑 4 (西より)



土坑102 (南より)



B 7区小穴



土坑103 (北より)



B 7区小穴



土坑105 (東より)



土坑101西小穴 (南より)



土坑110・111 (北より)



第2次調査区全景



第 2 次調査区全景



調査区全景



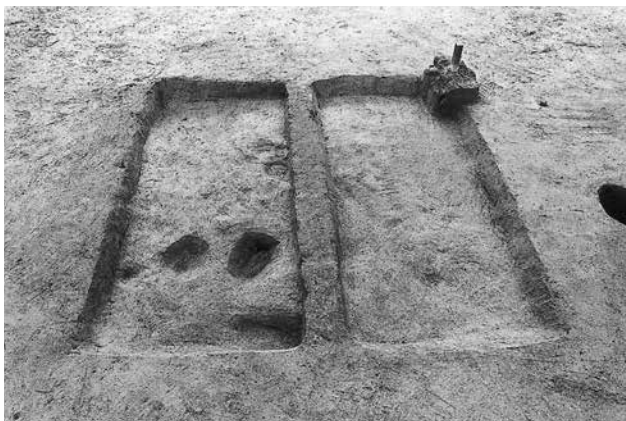
拡張区全景



0 ~ 10Y 西壁断面



30 ~ 40Y 西壁断面



竪穴建物1



竪穴建物2・3・4



竪穴建物5



竪穴建物6



竪穴建物7



竪穴建物8



竪穴建物9



竪穴建物10



竪穴建物11



掘立柱建物 4・5



掘立柱建物4・5



土坑3・4



土坑5・6・7



13.35X、42.10Y 土器出土状況



土坑10



0 ~ 30R 調査区全景



40 ~ 90R 調査区全景



80 ~ 130R 調査区全景



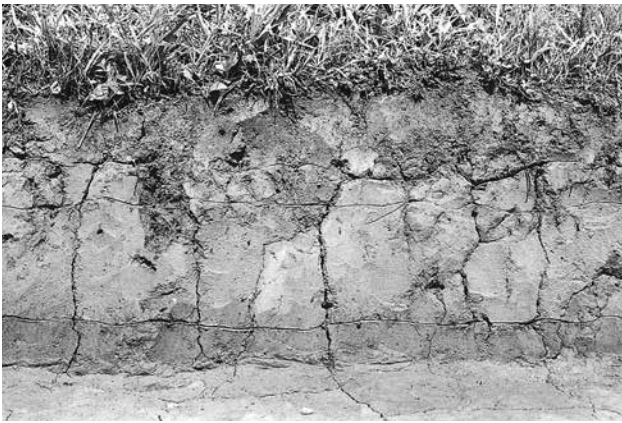
130 ~ 180R 調査区全景



190 ~ 240R 調査区全景



330R ~ 420R 調査区全景



55 ~ 60R 東壁断面



75 ~ 80R 東壁断面



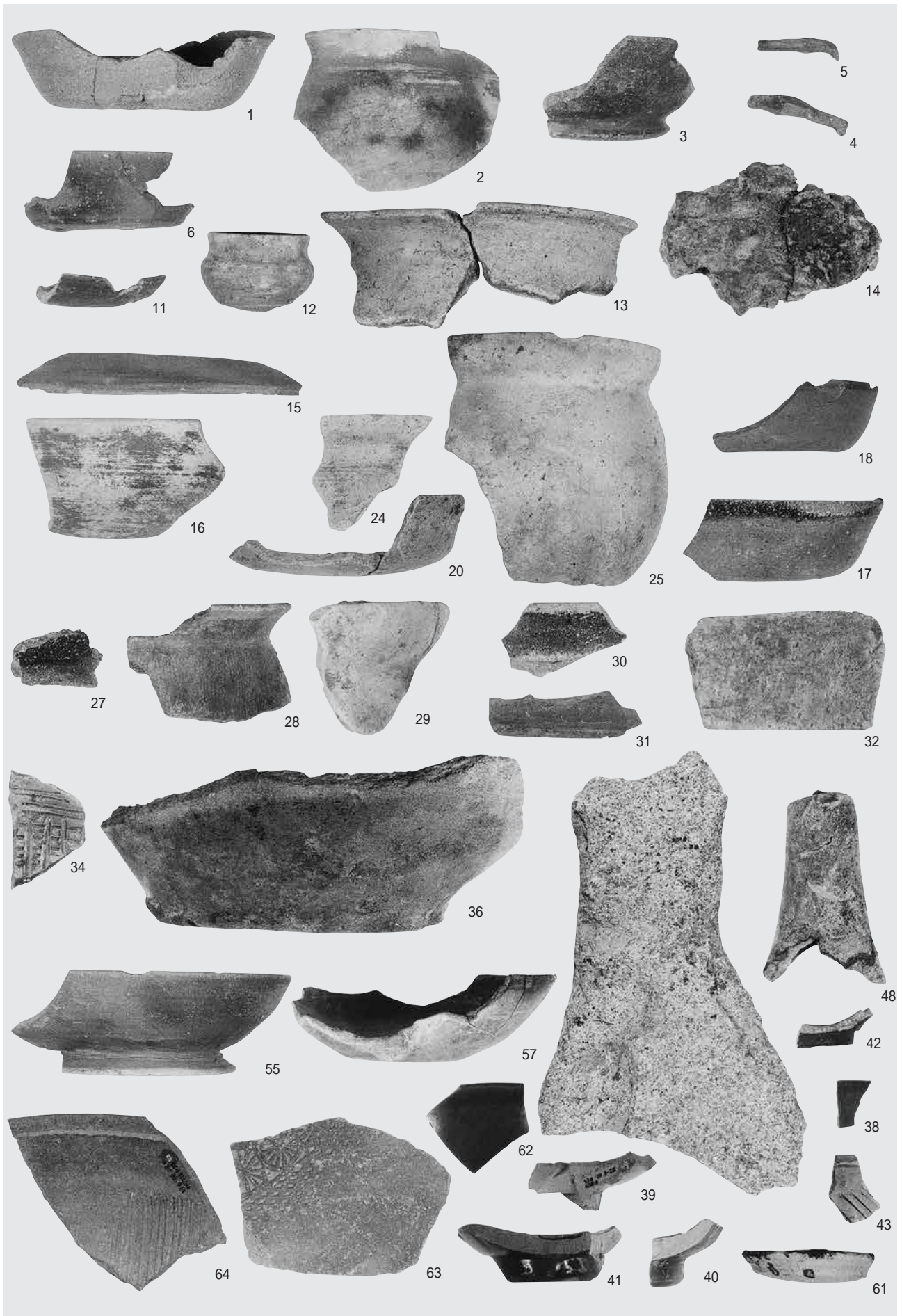
150R 付近断面図



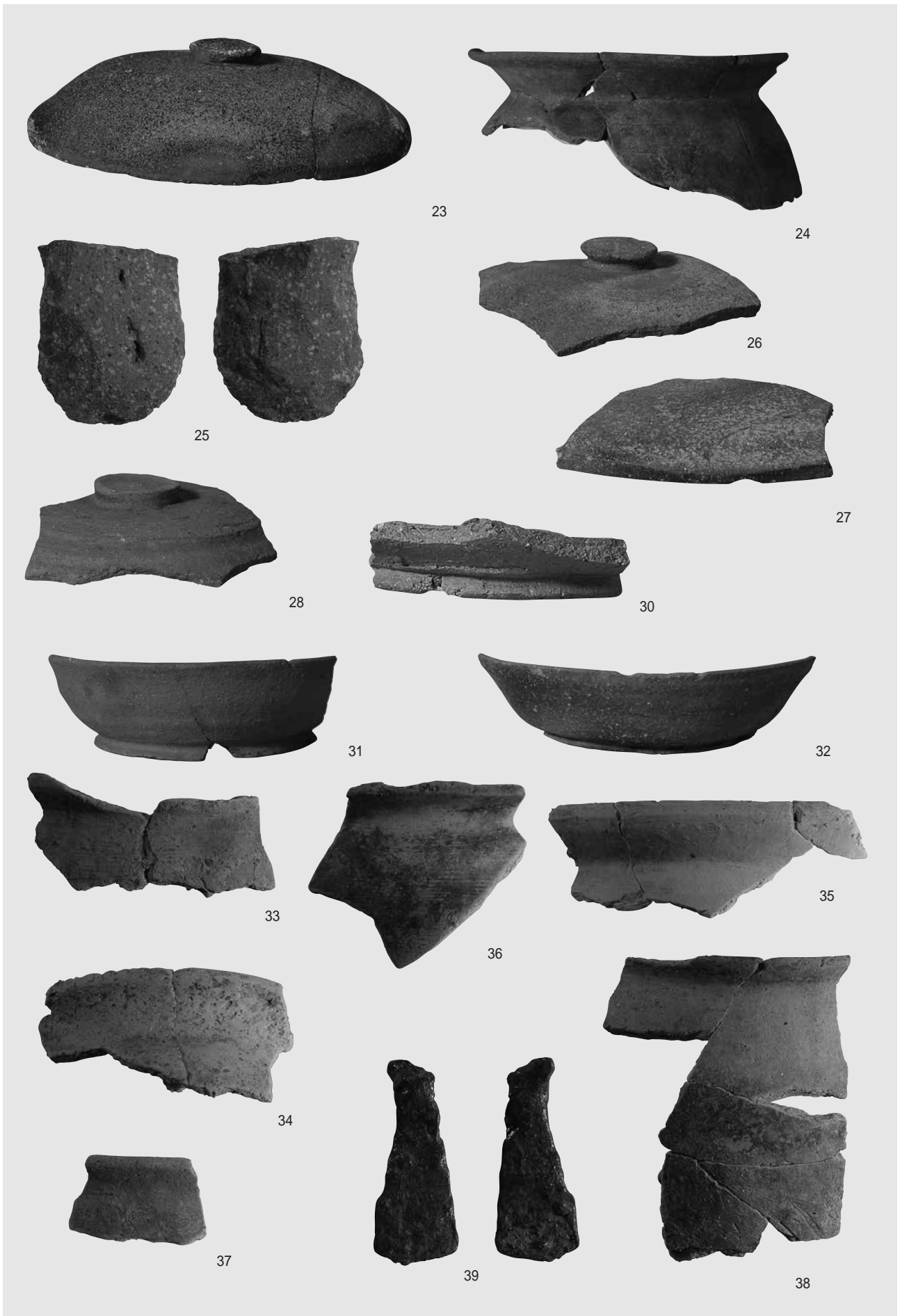
155 ~ 160R 壁断面

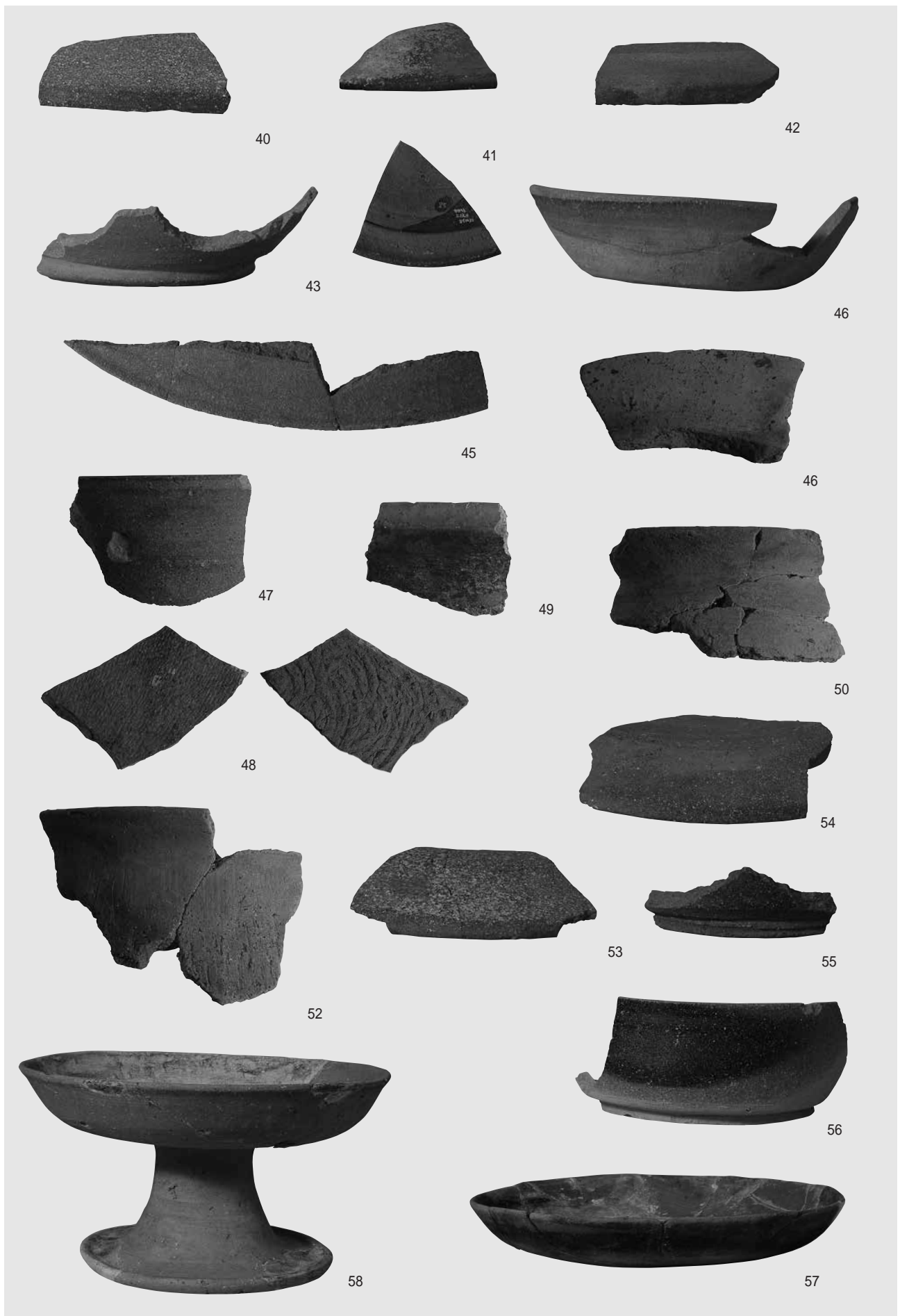


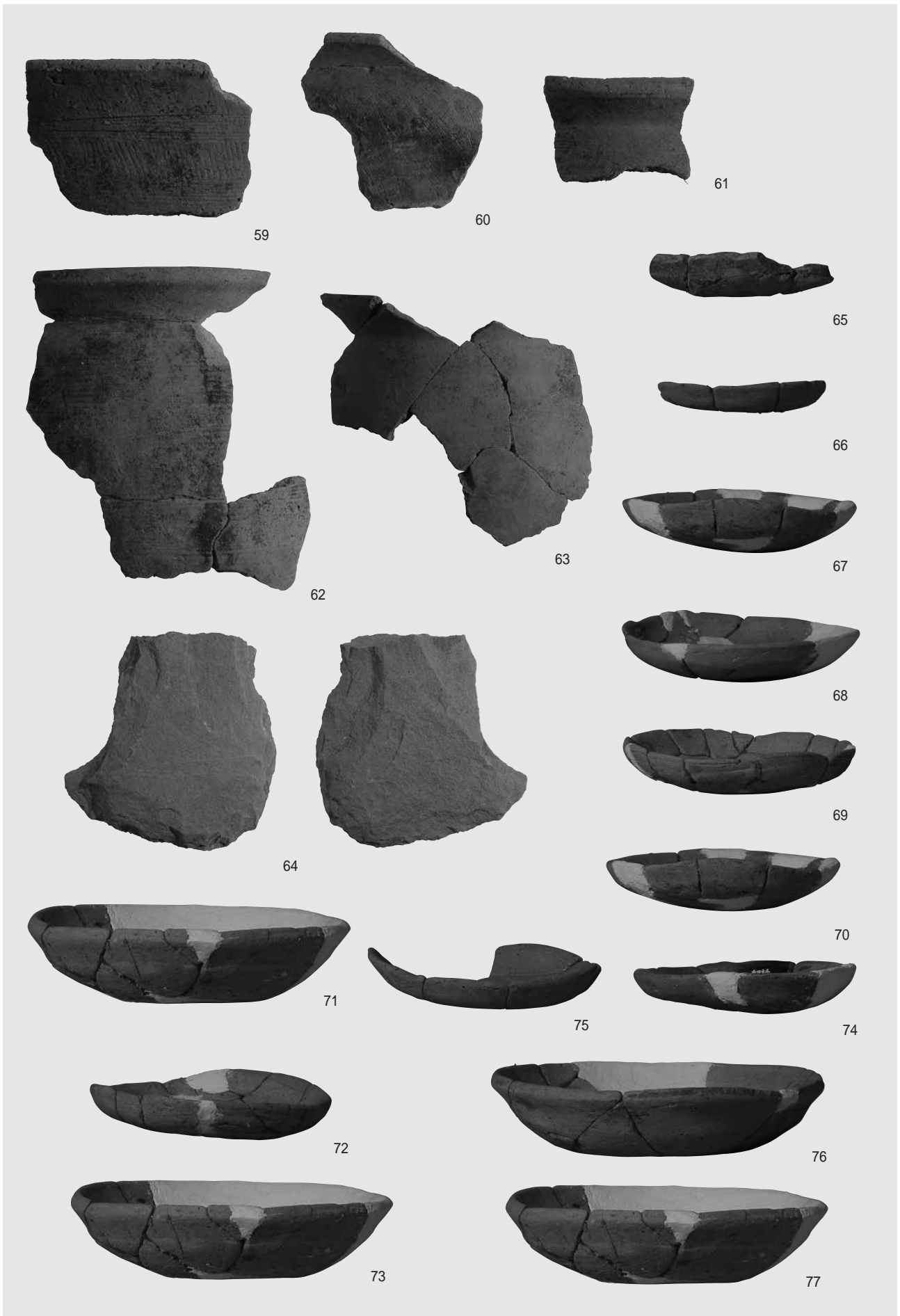
土坑1 検出状況

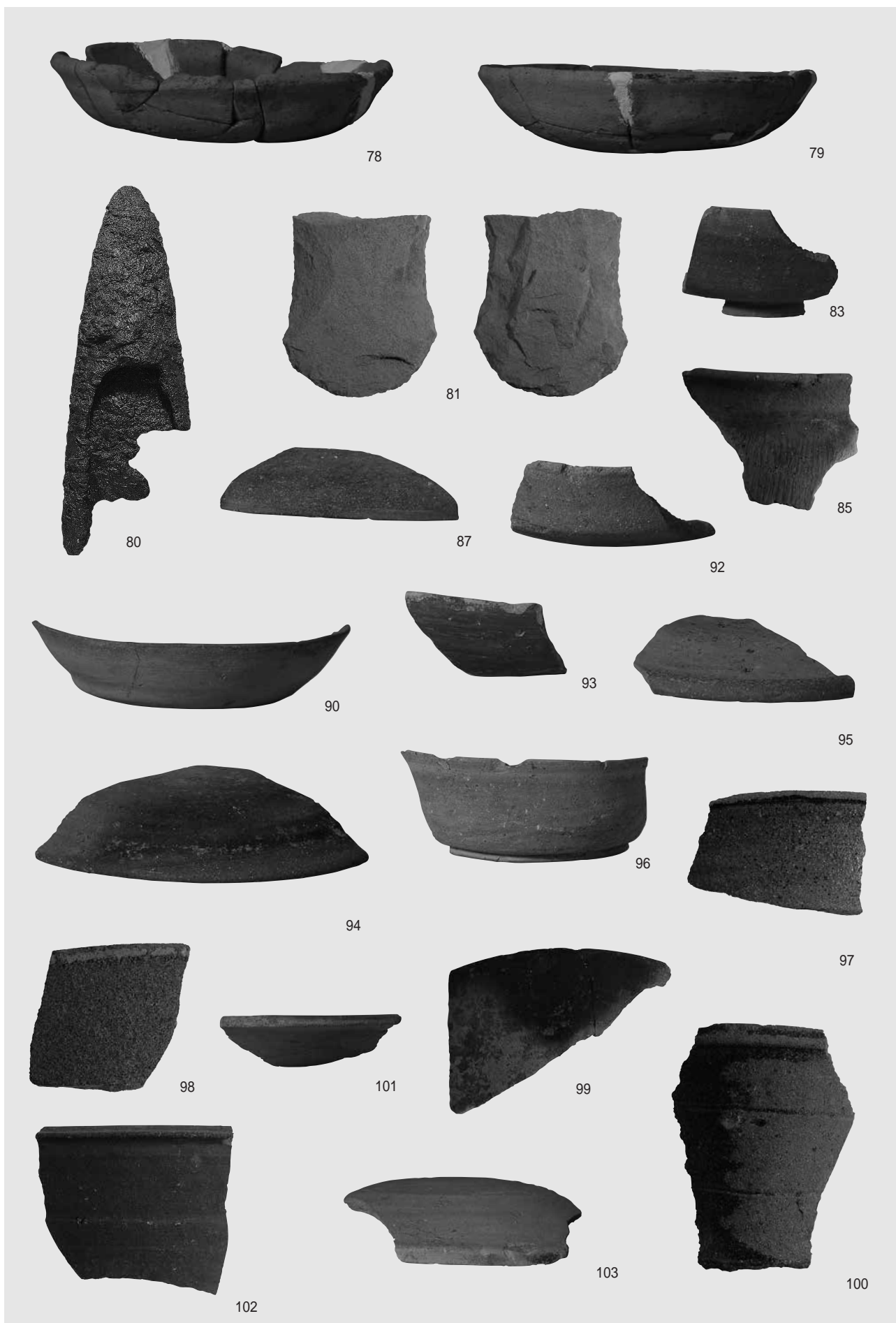


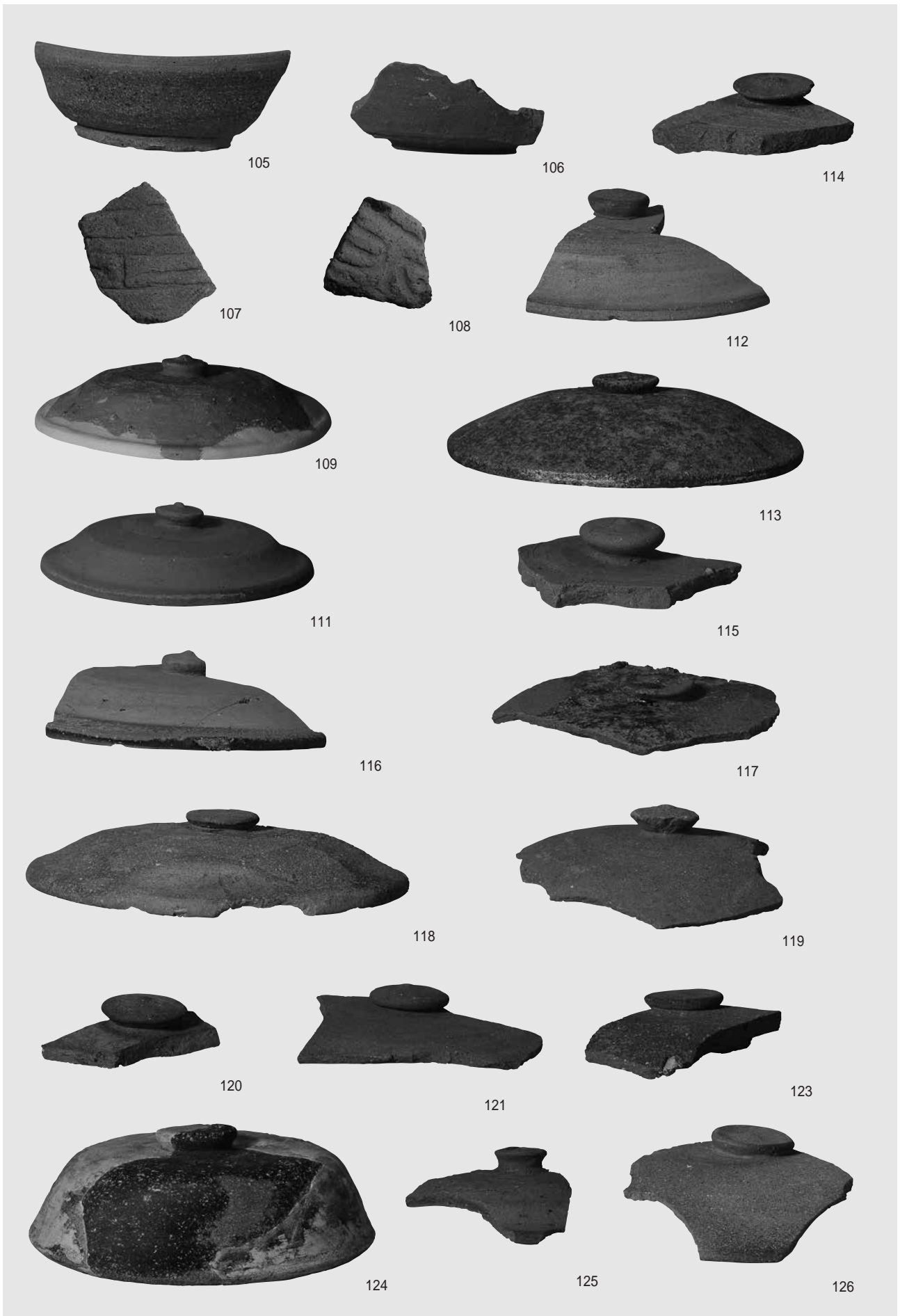


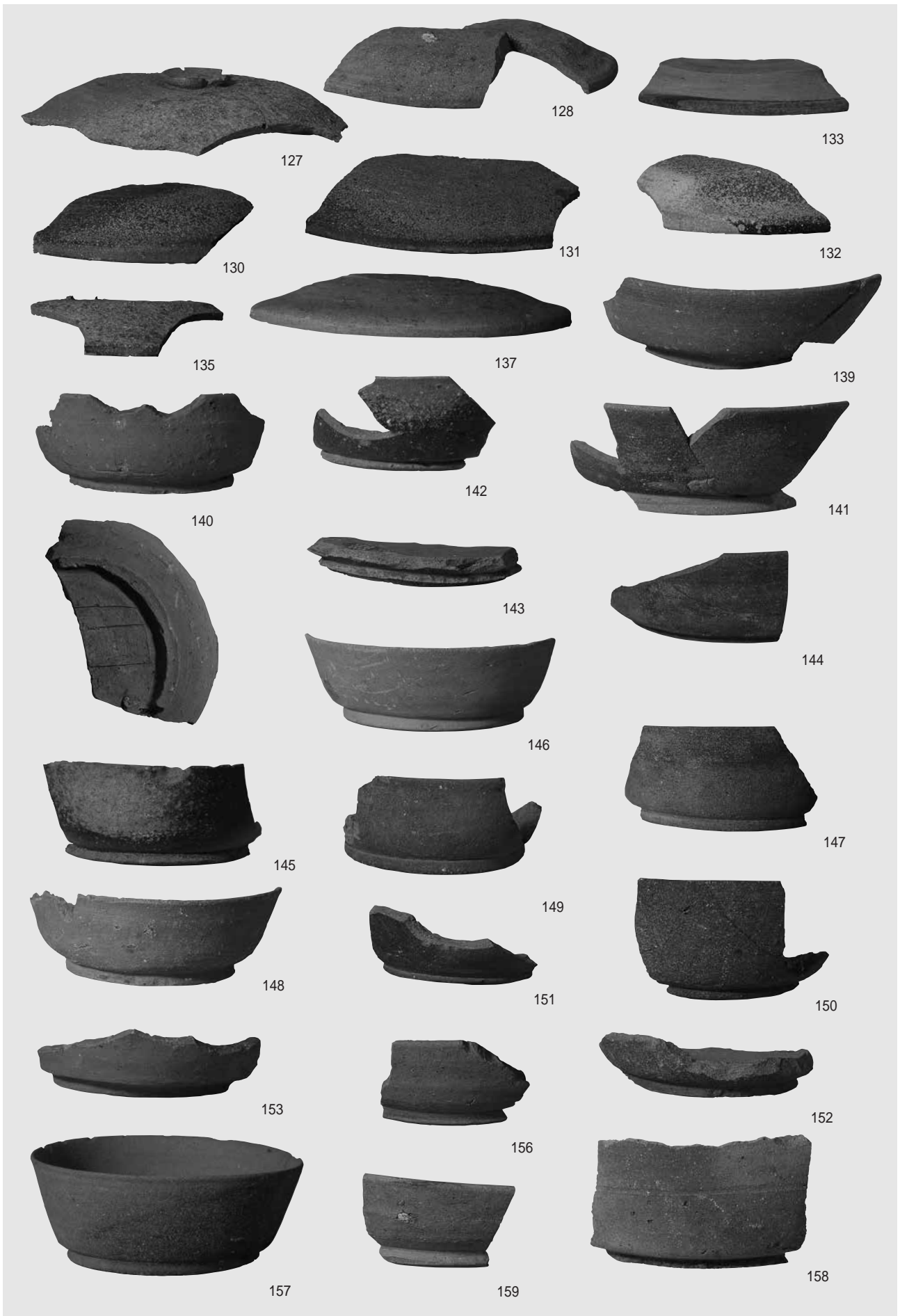


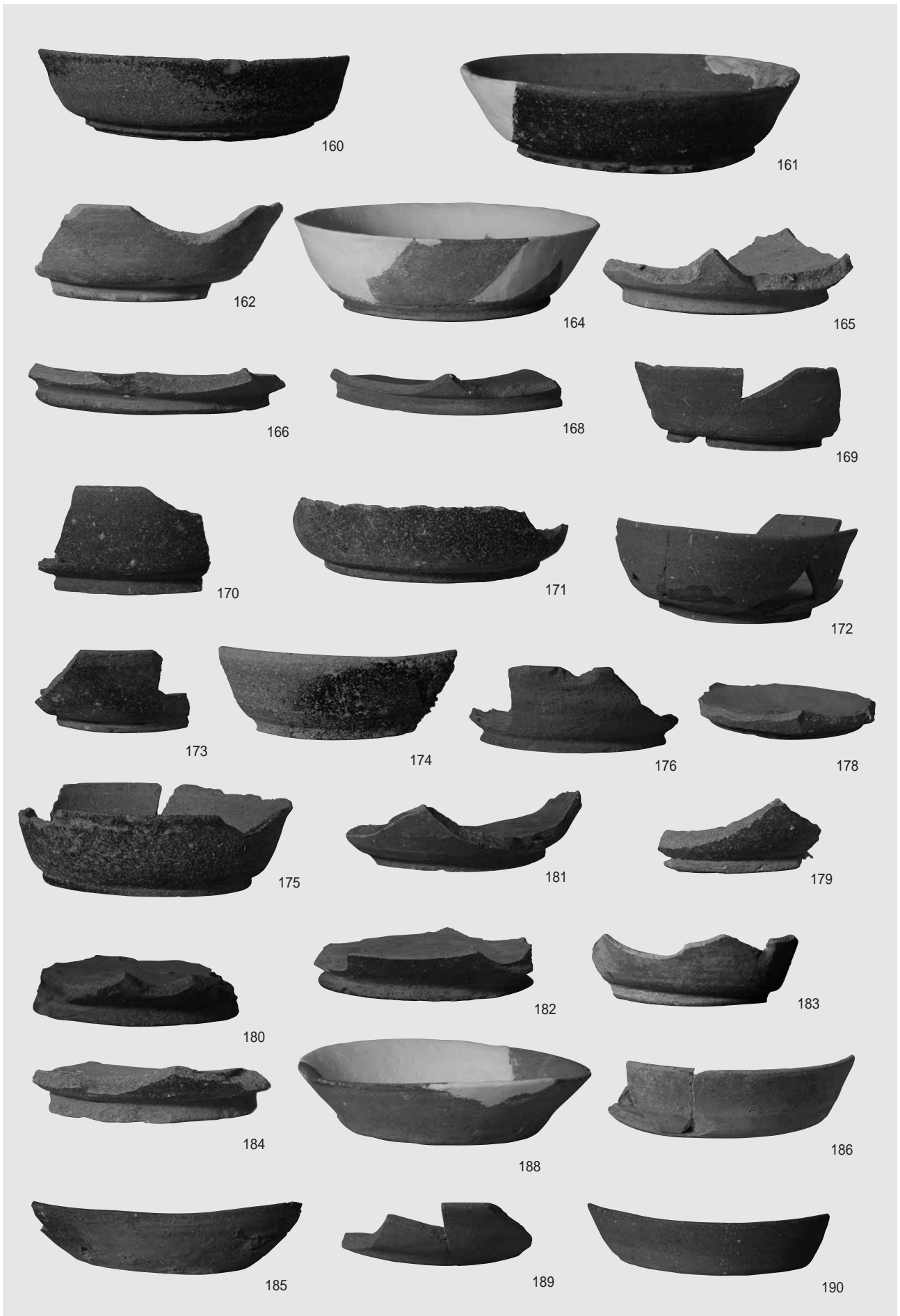


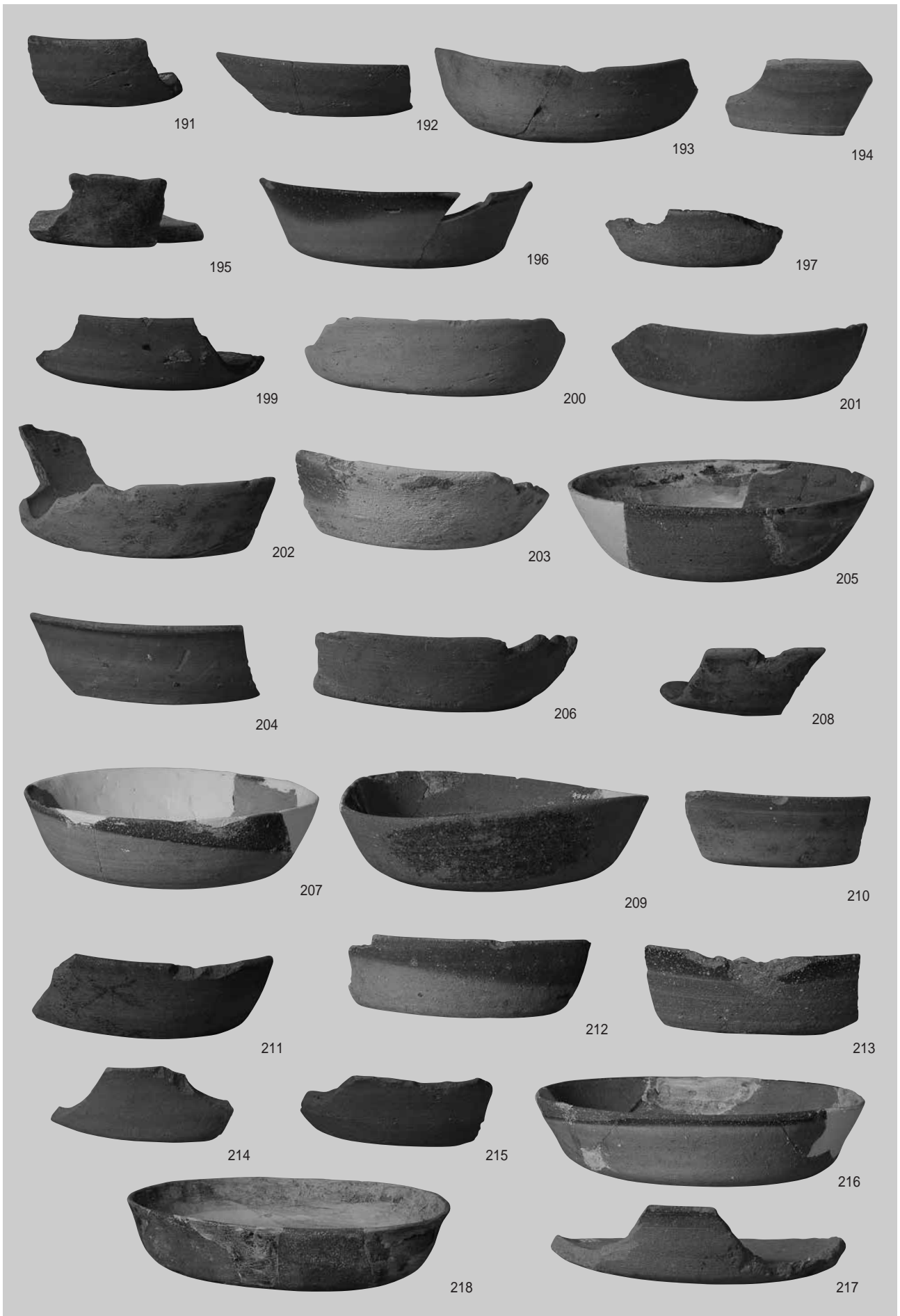


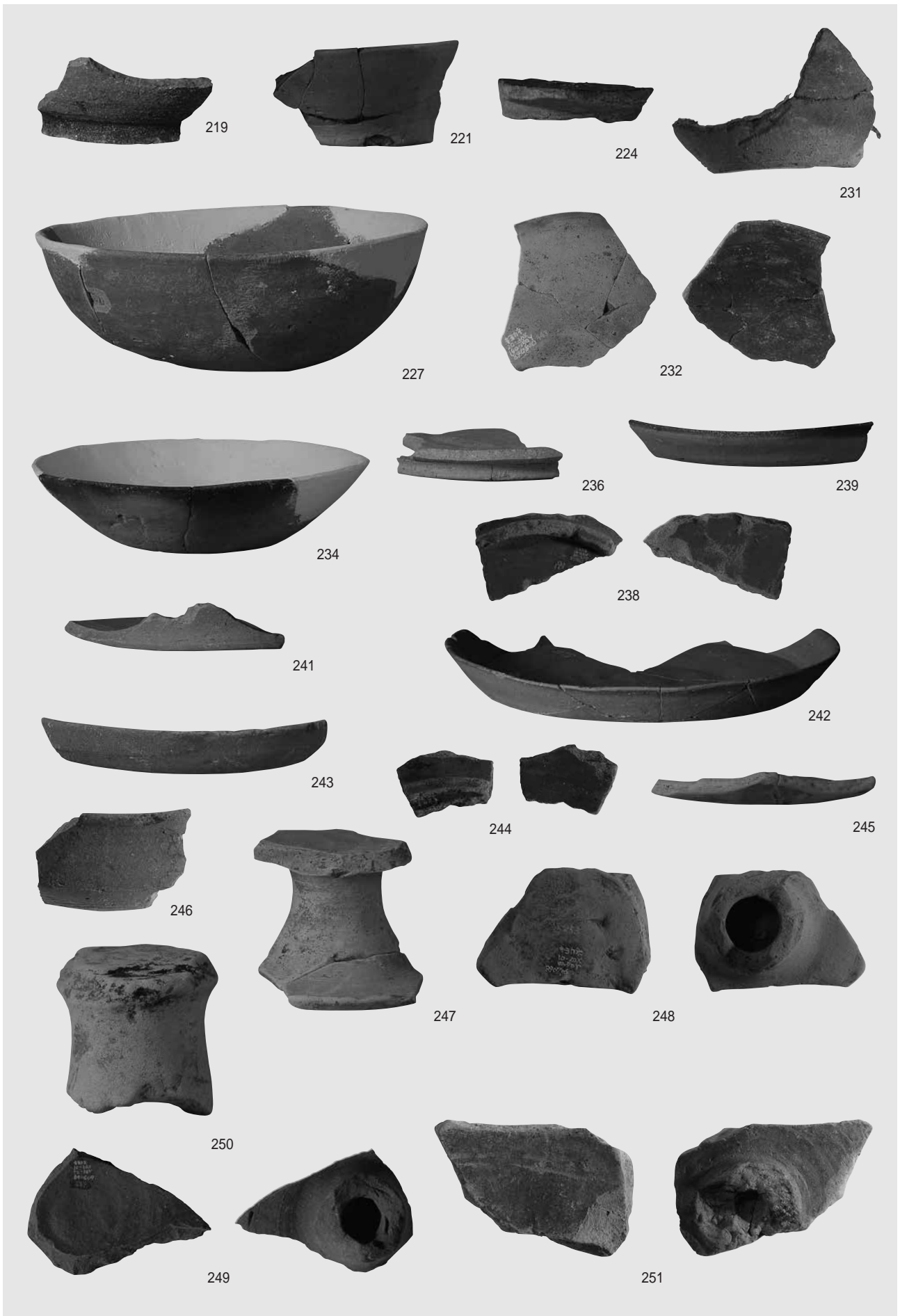


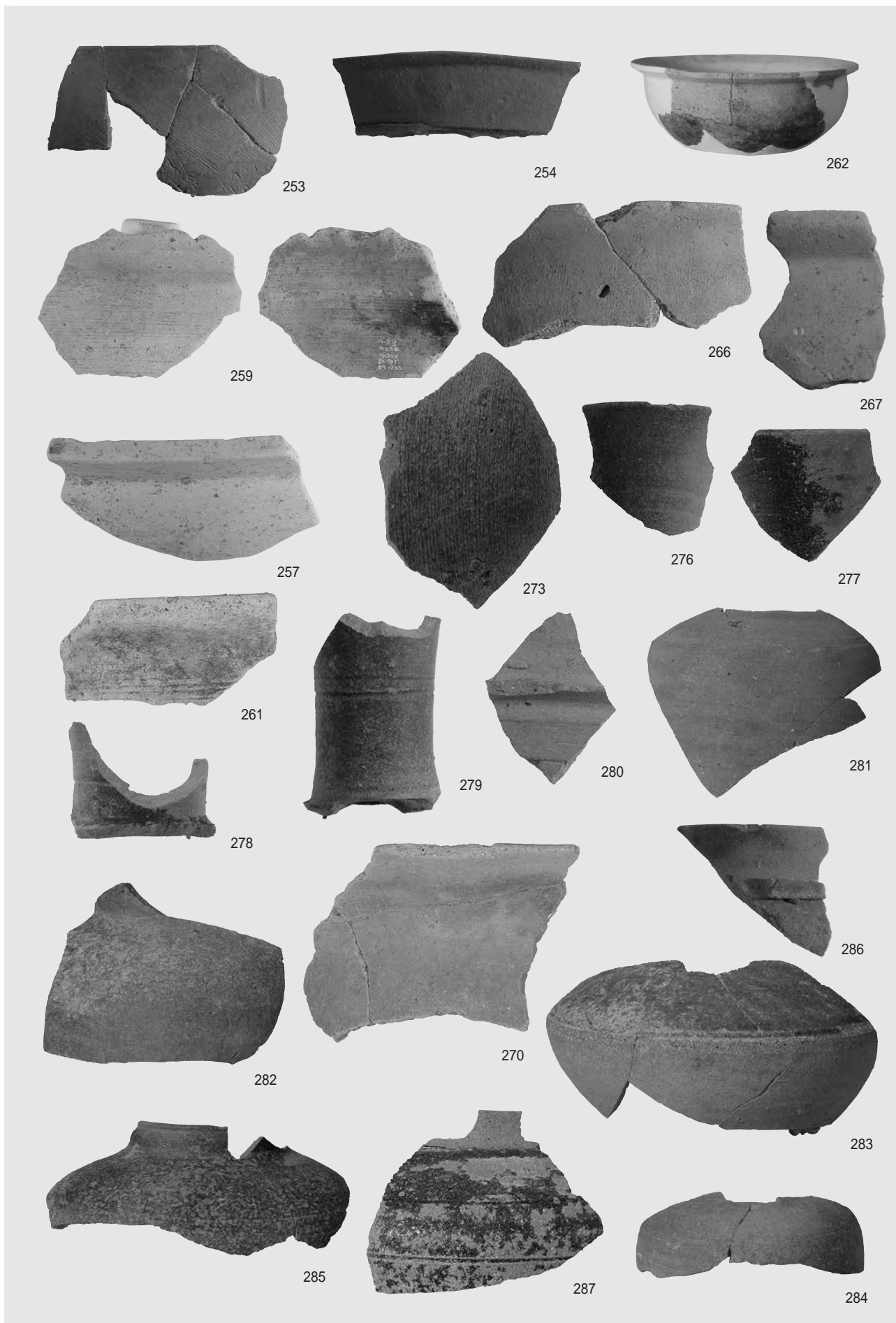


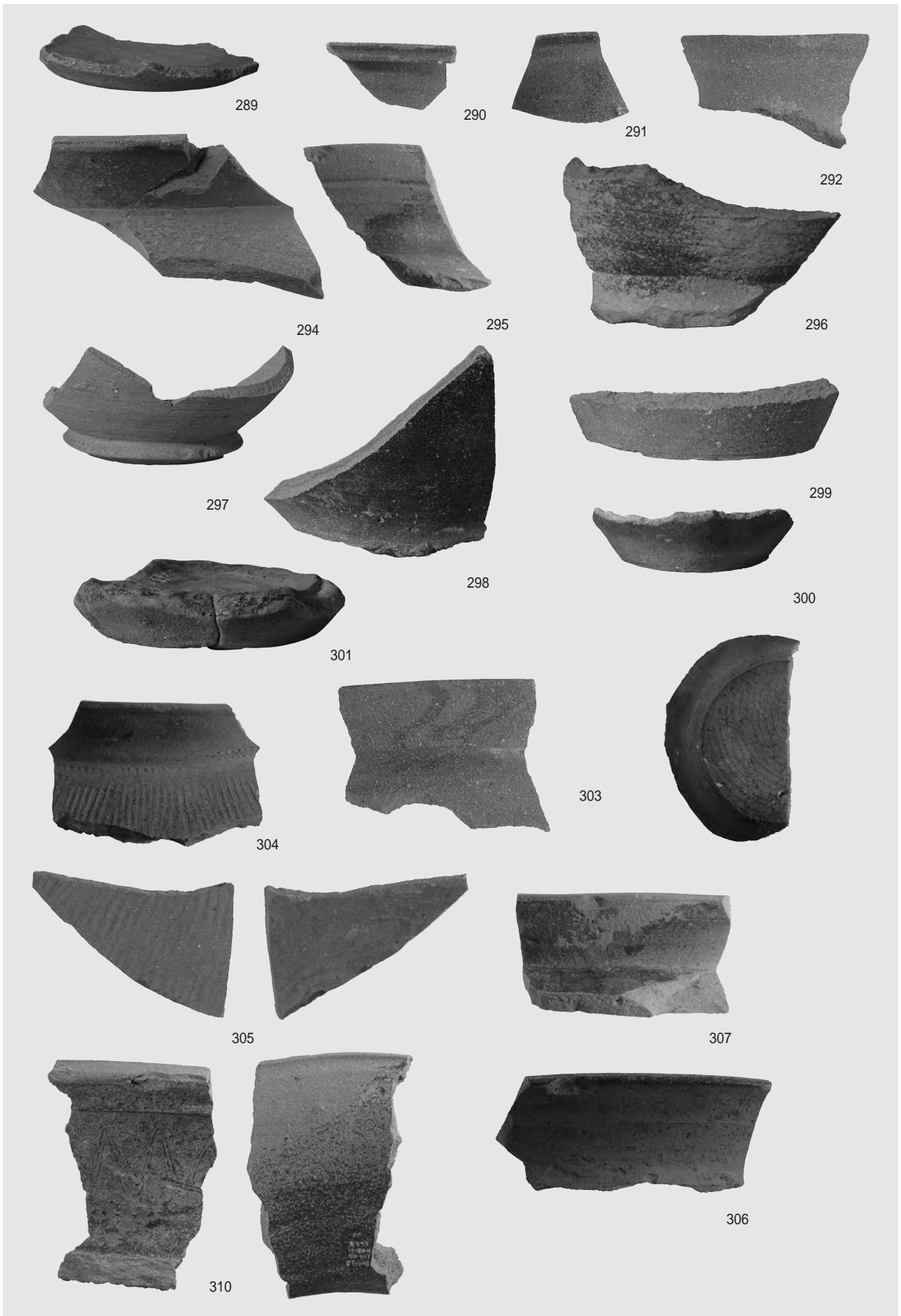


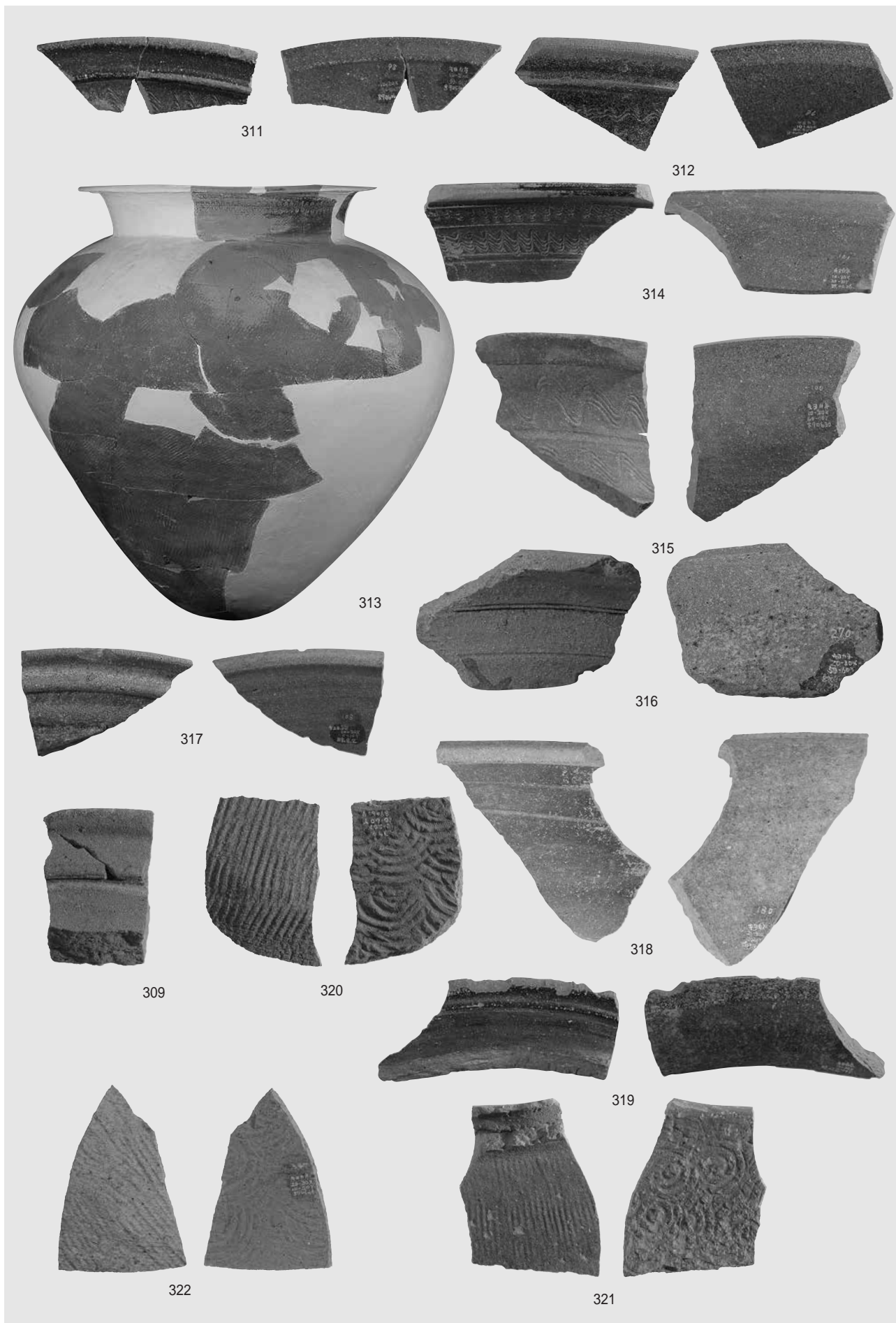


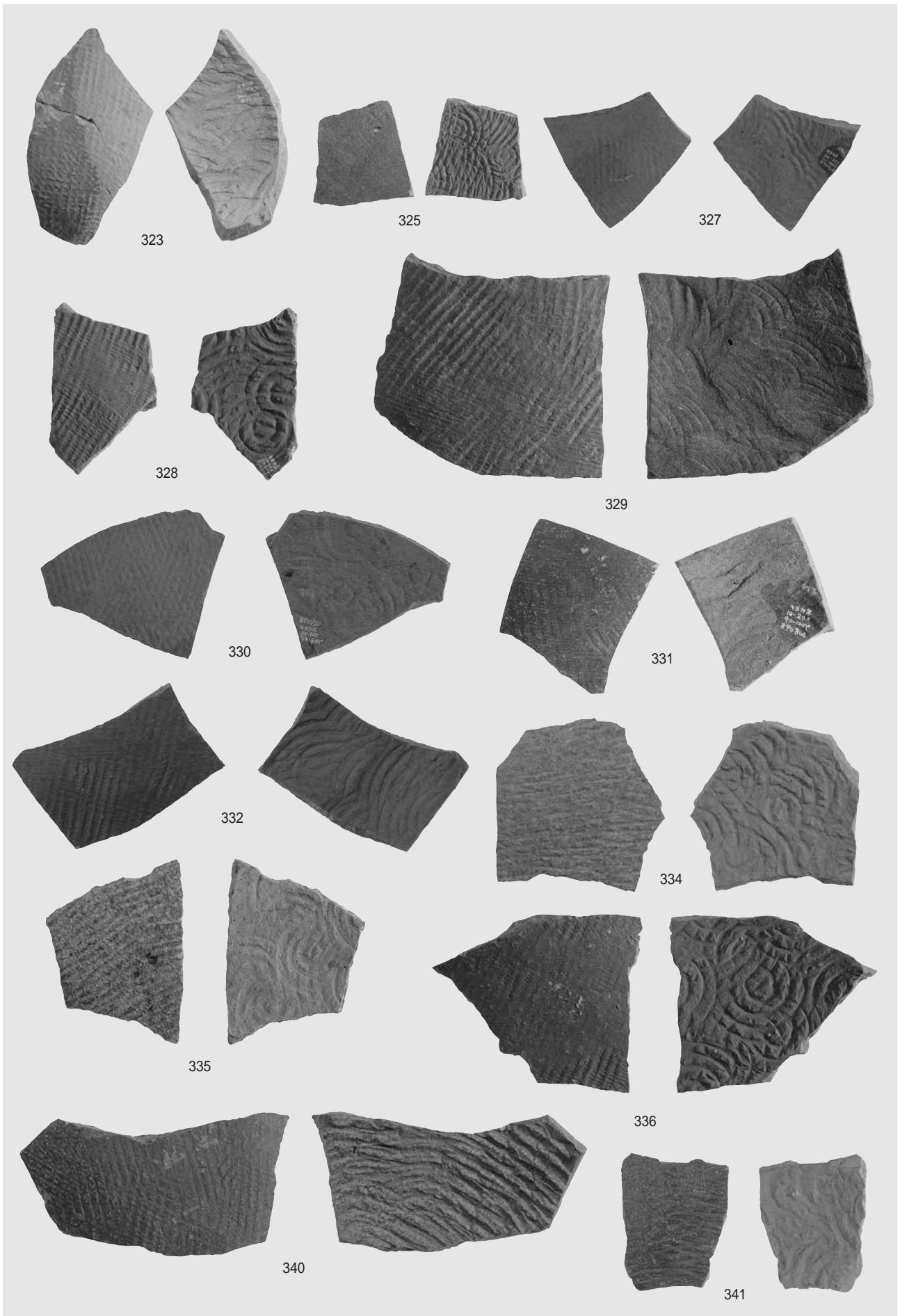


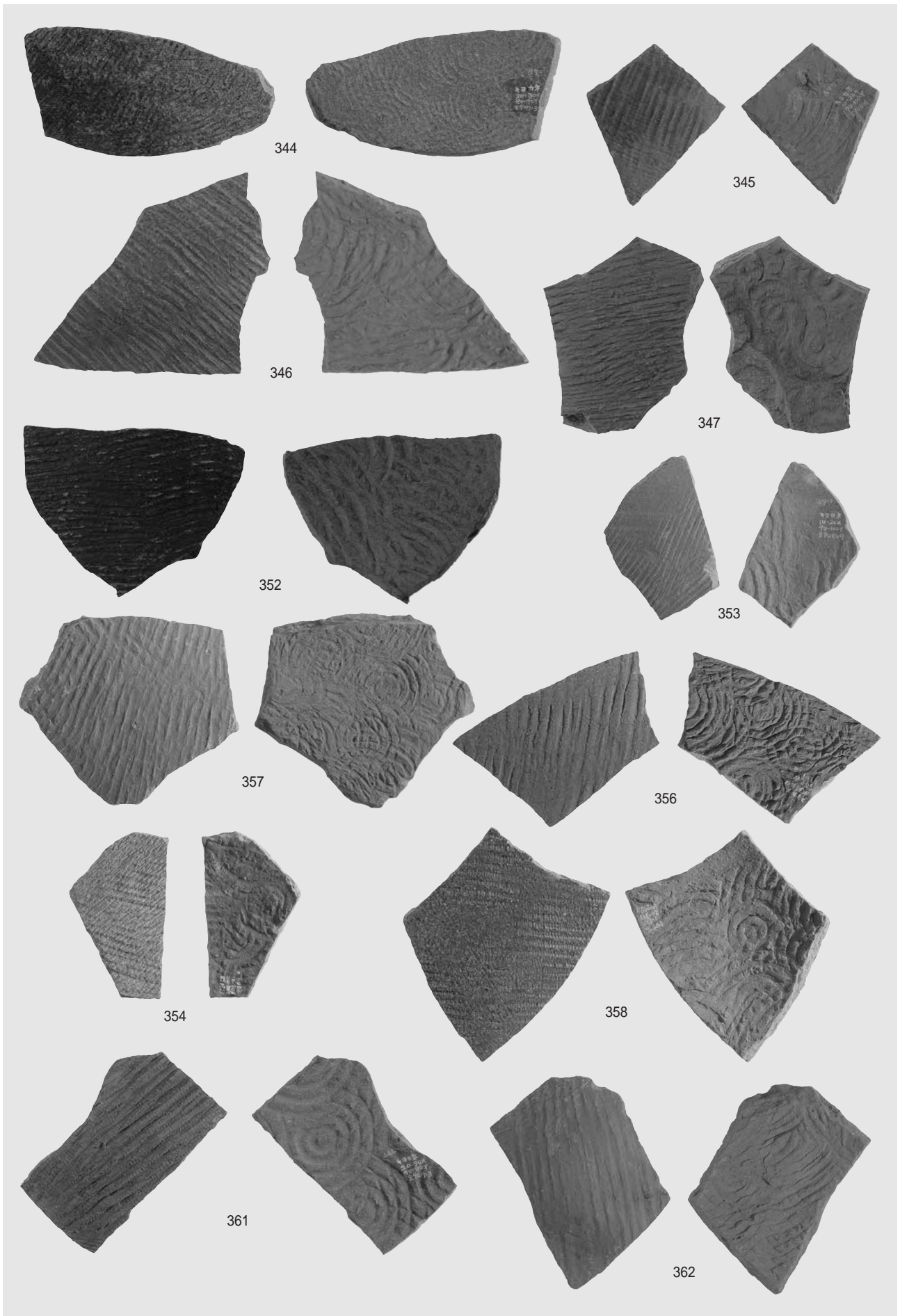


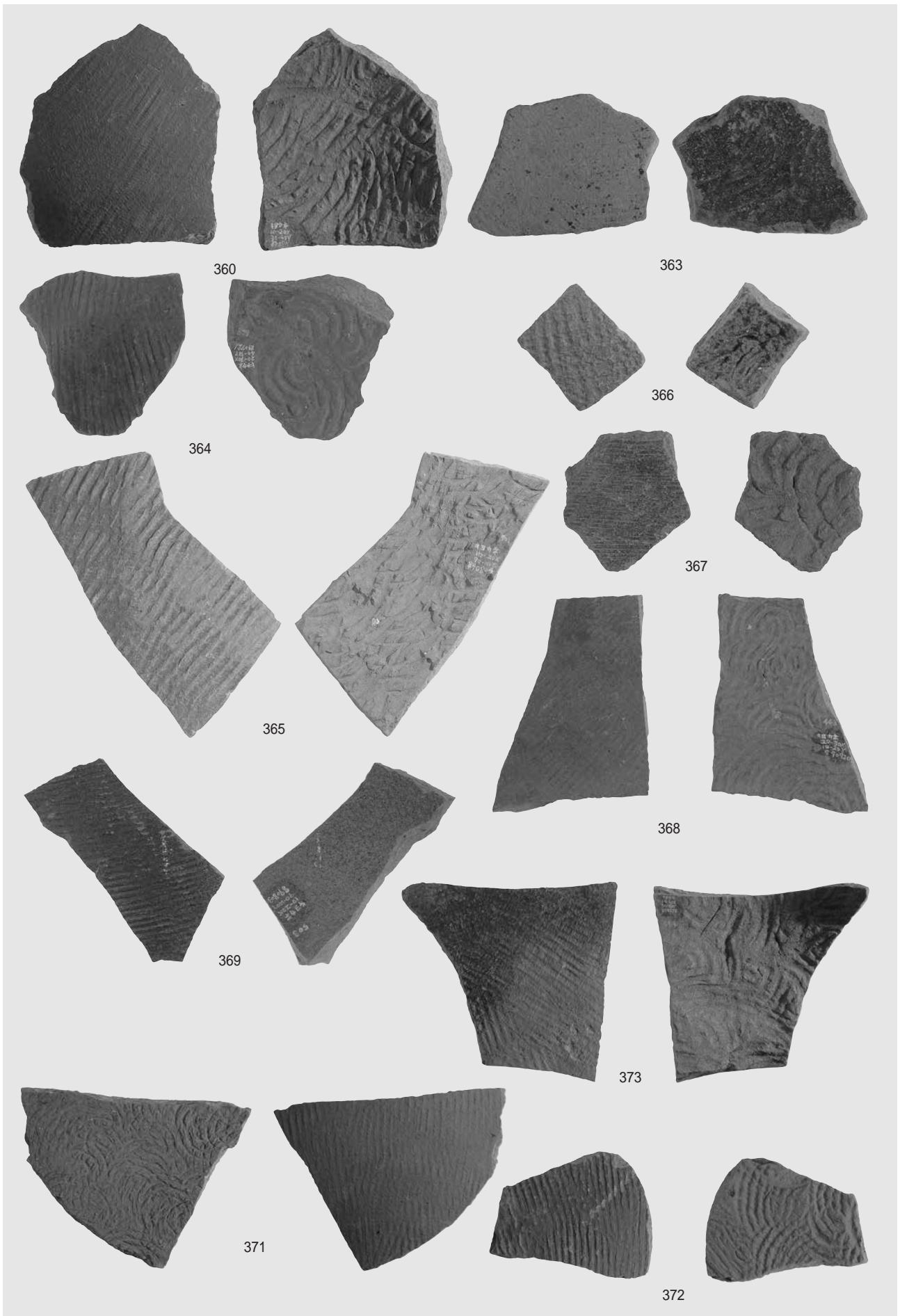


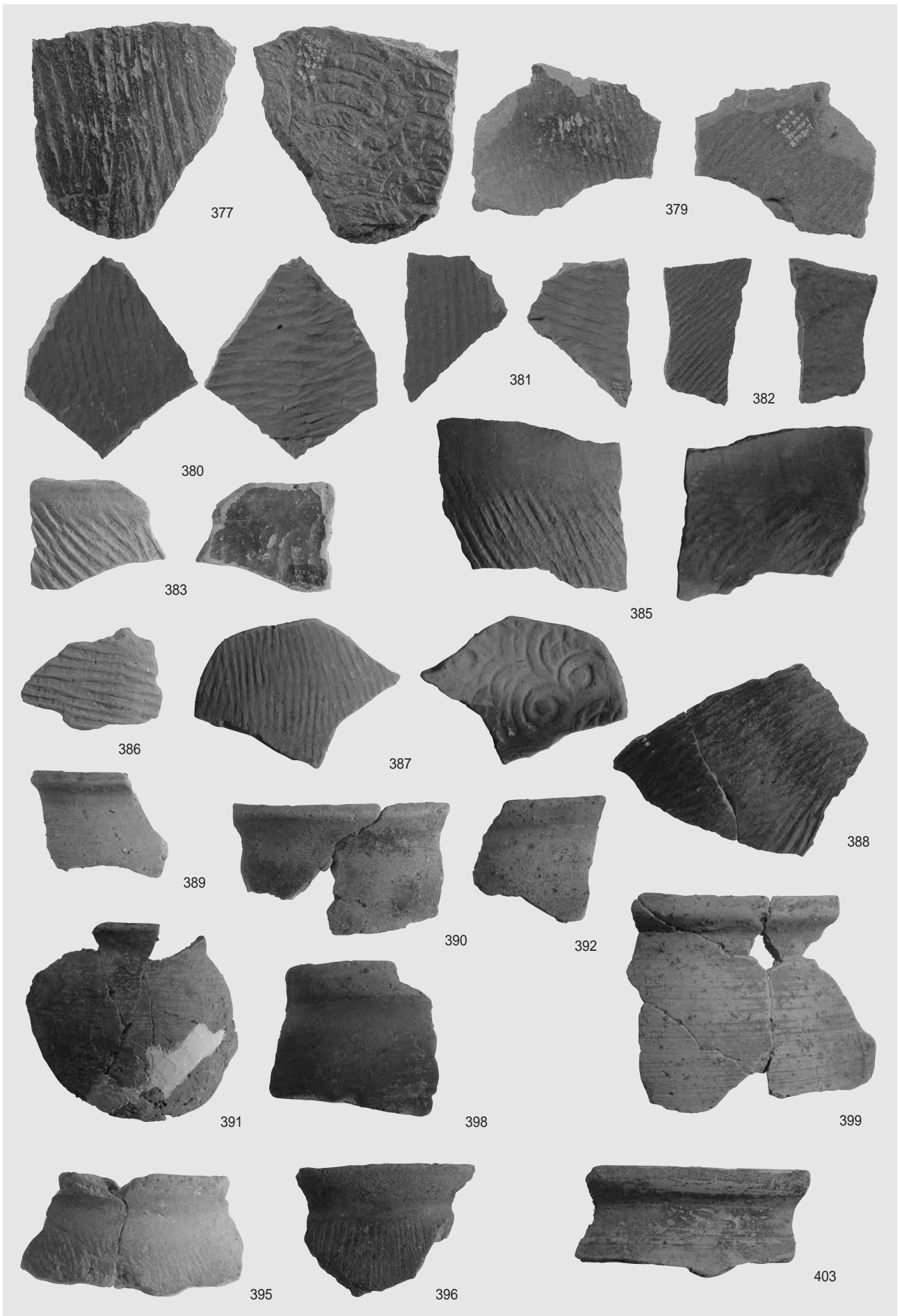


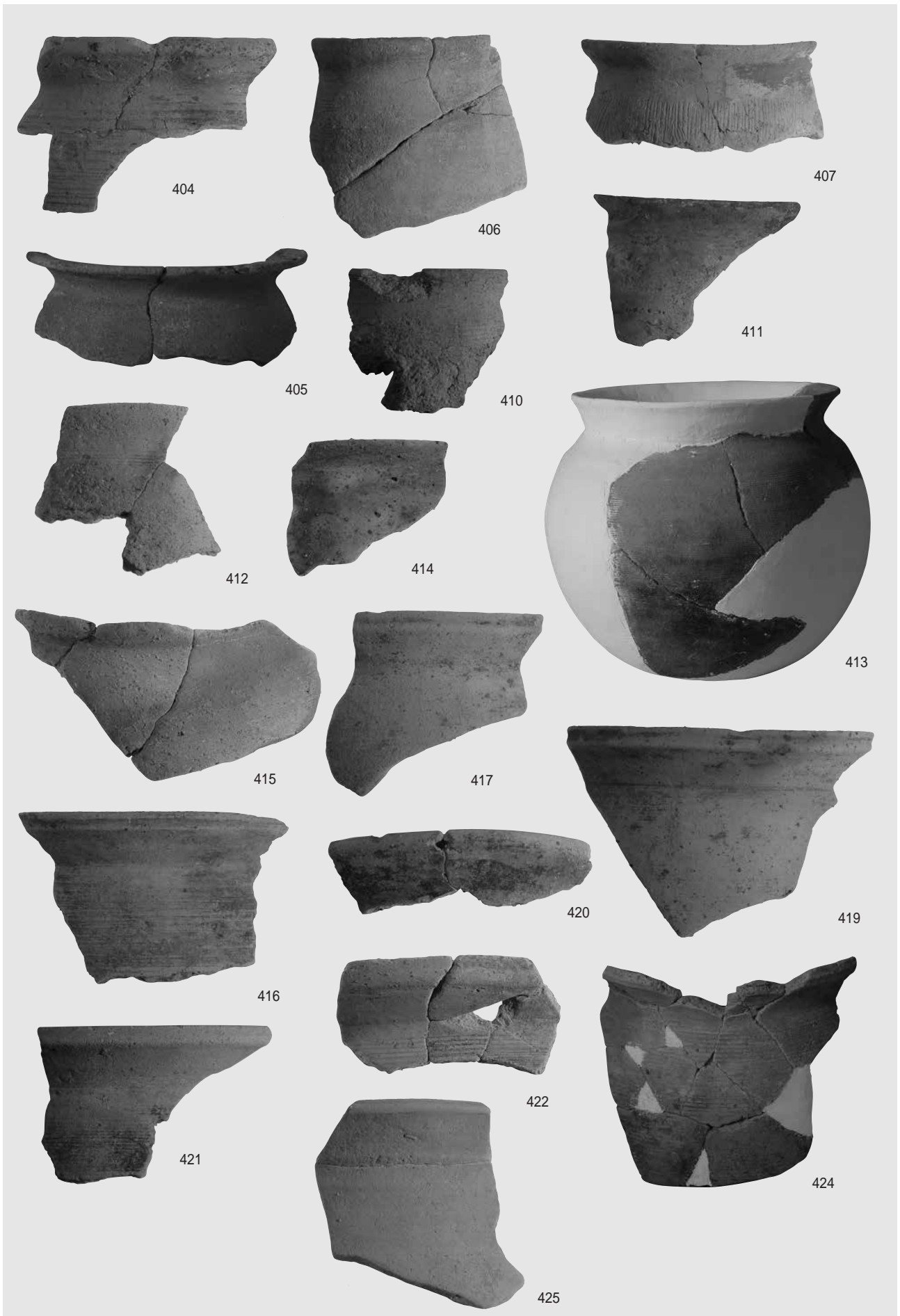


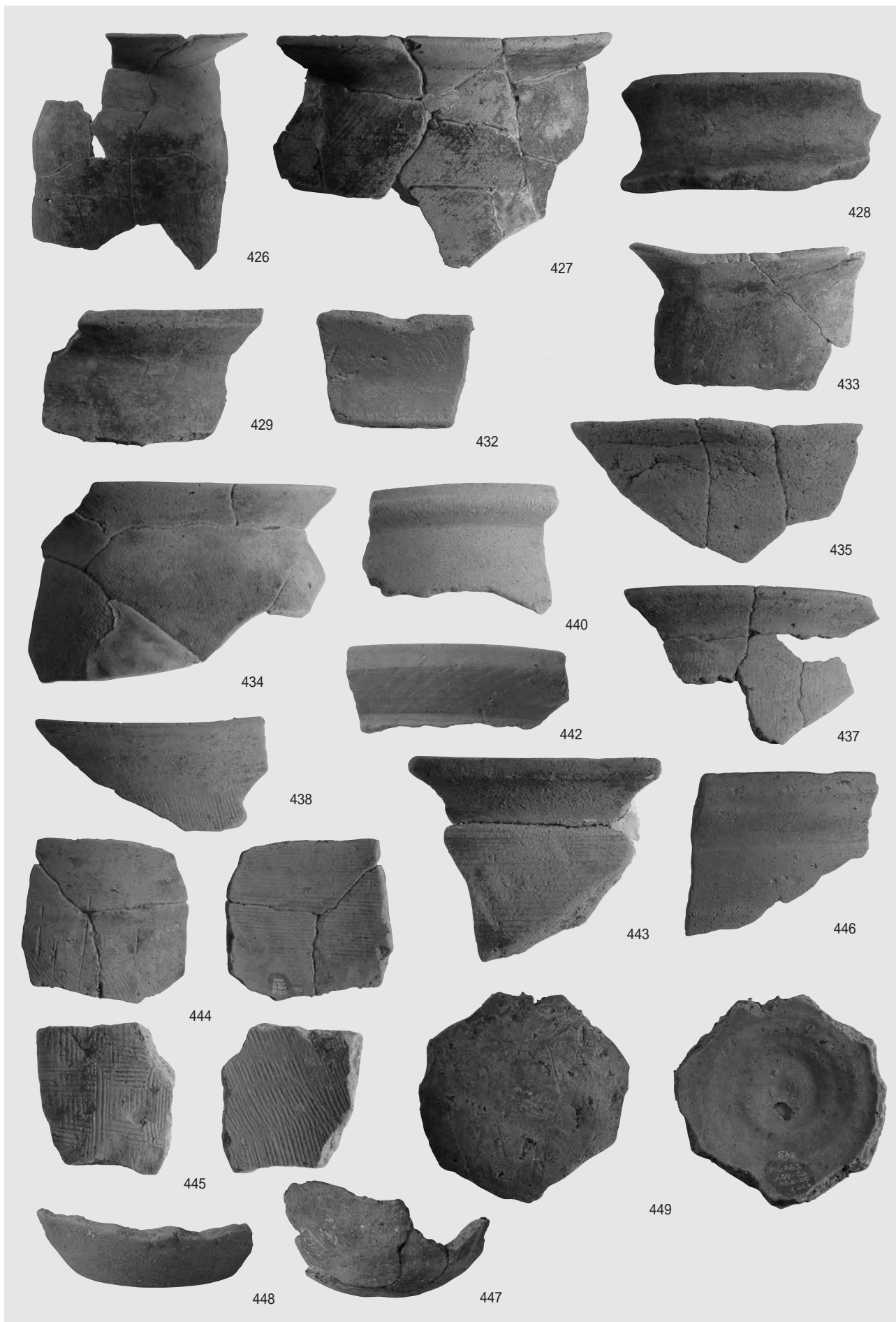


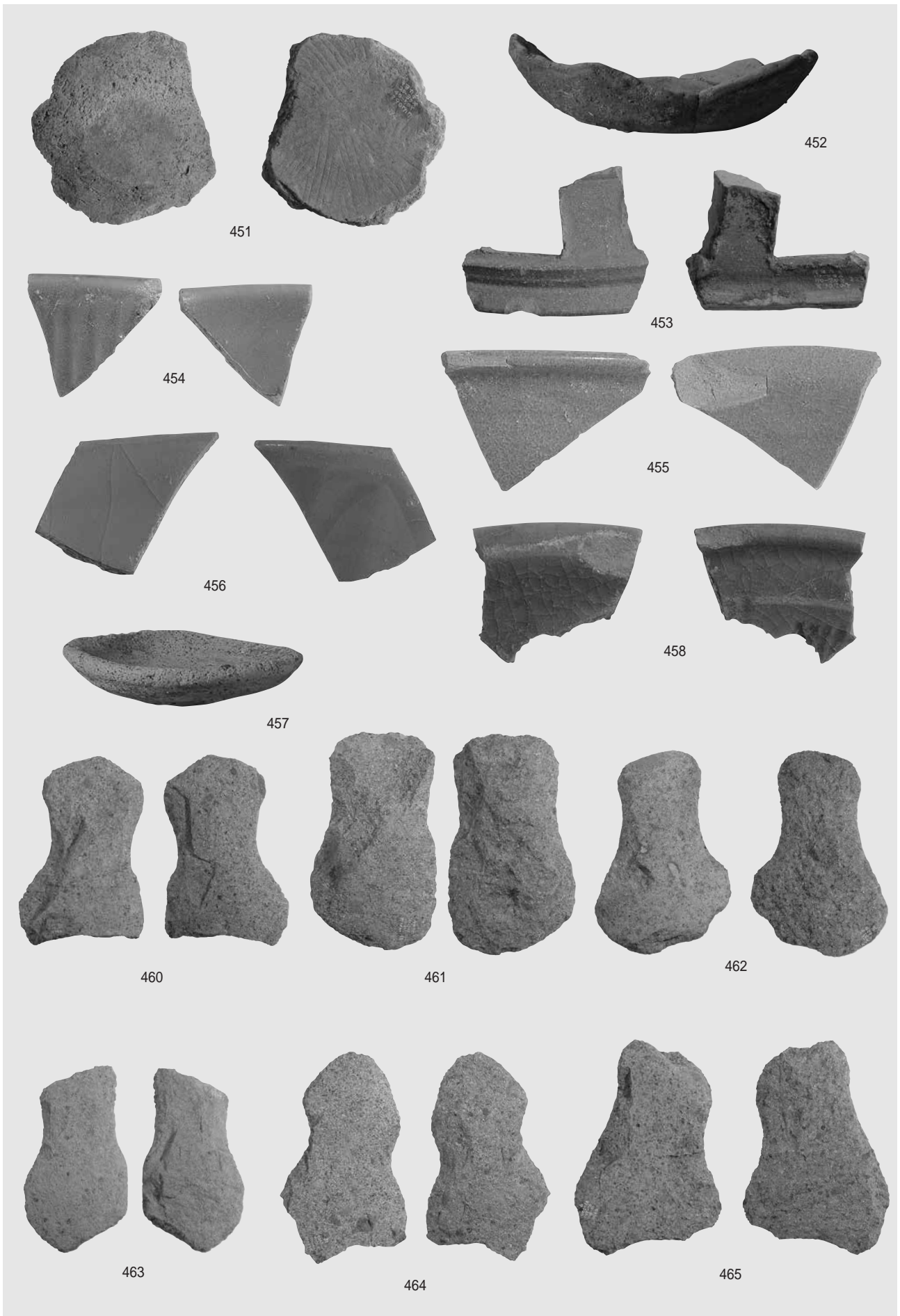


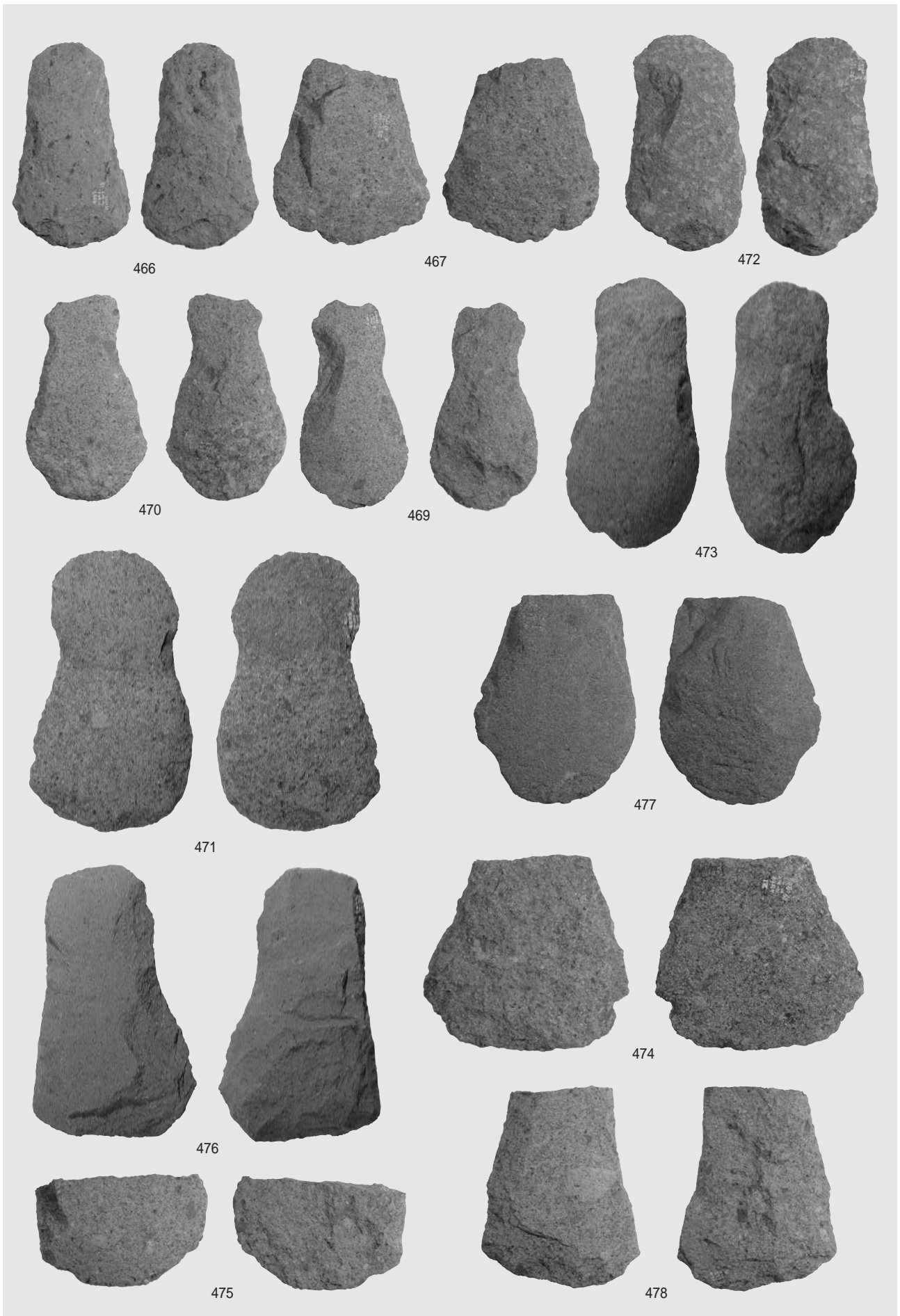


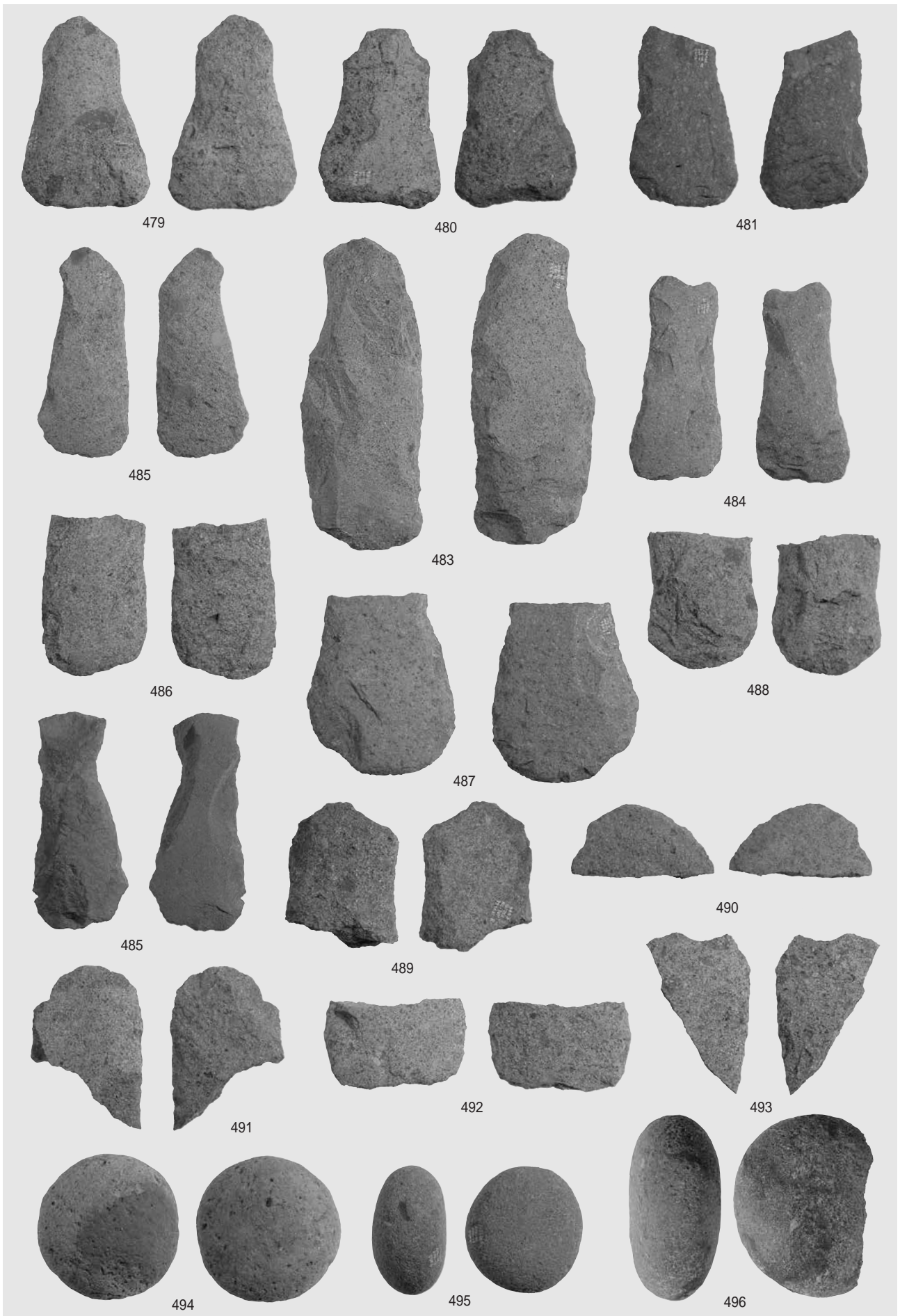


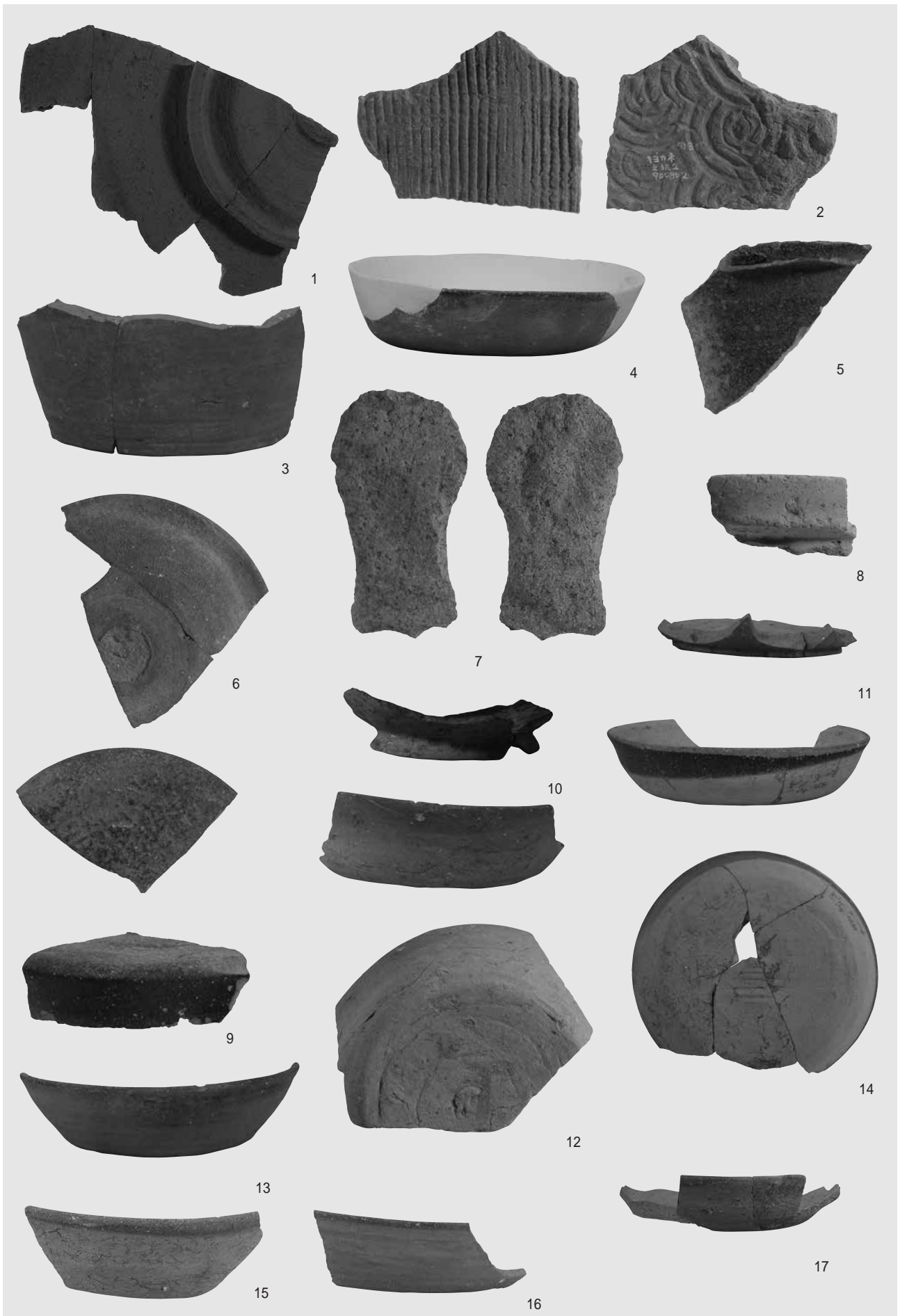


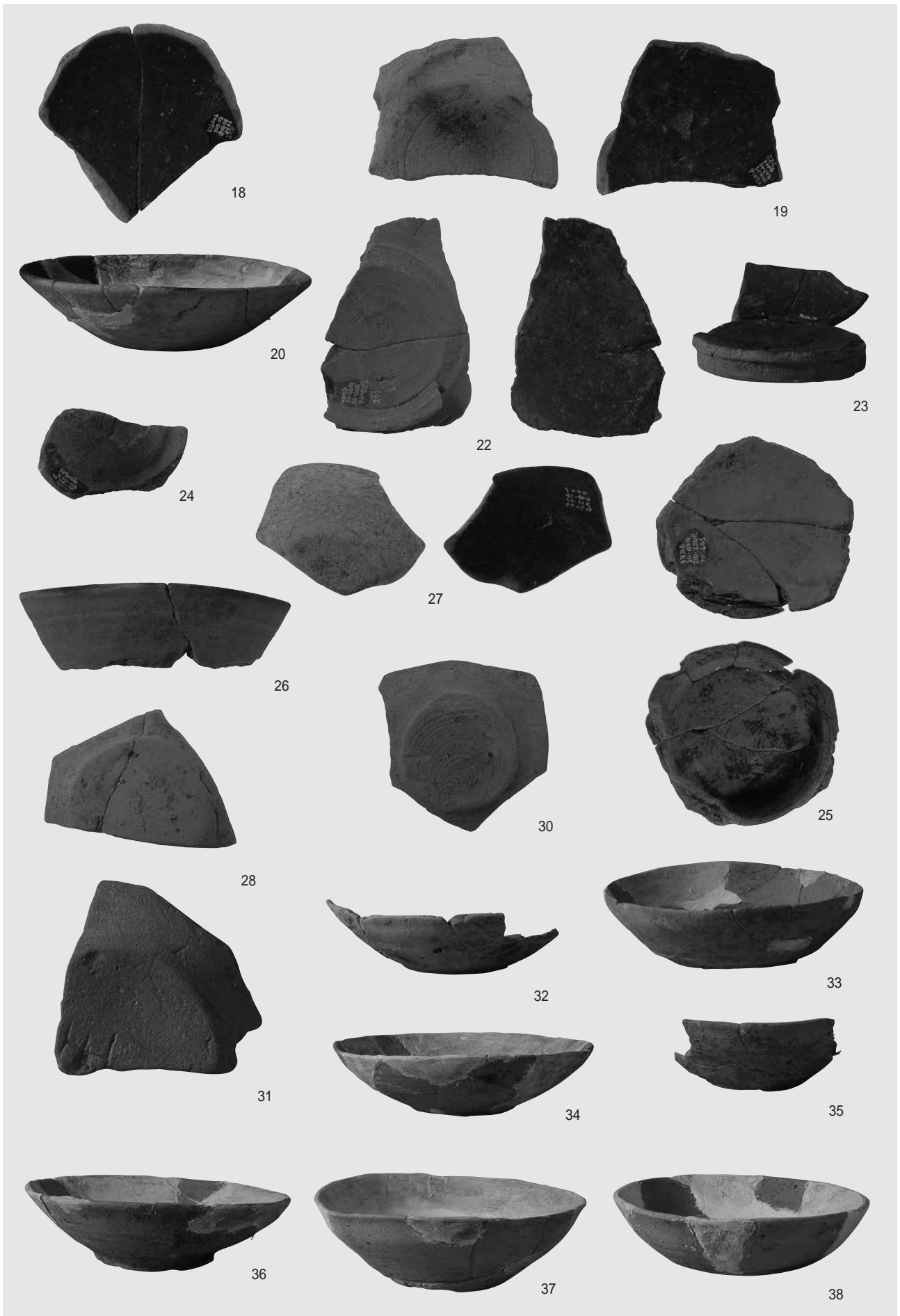






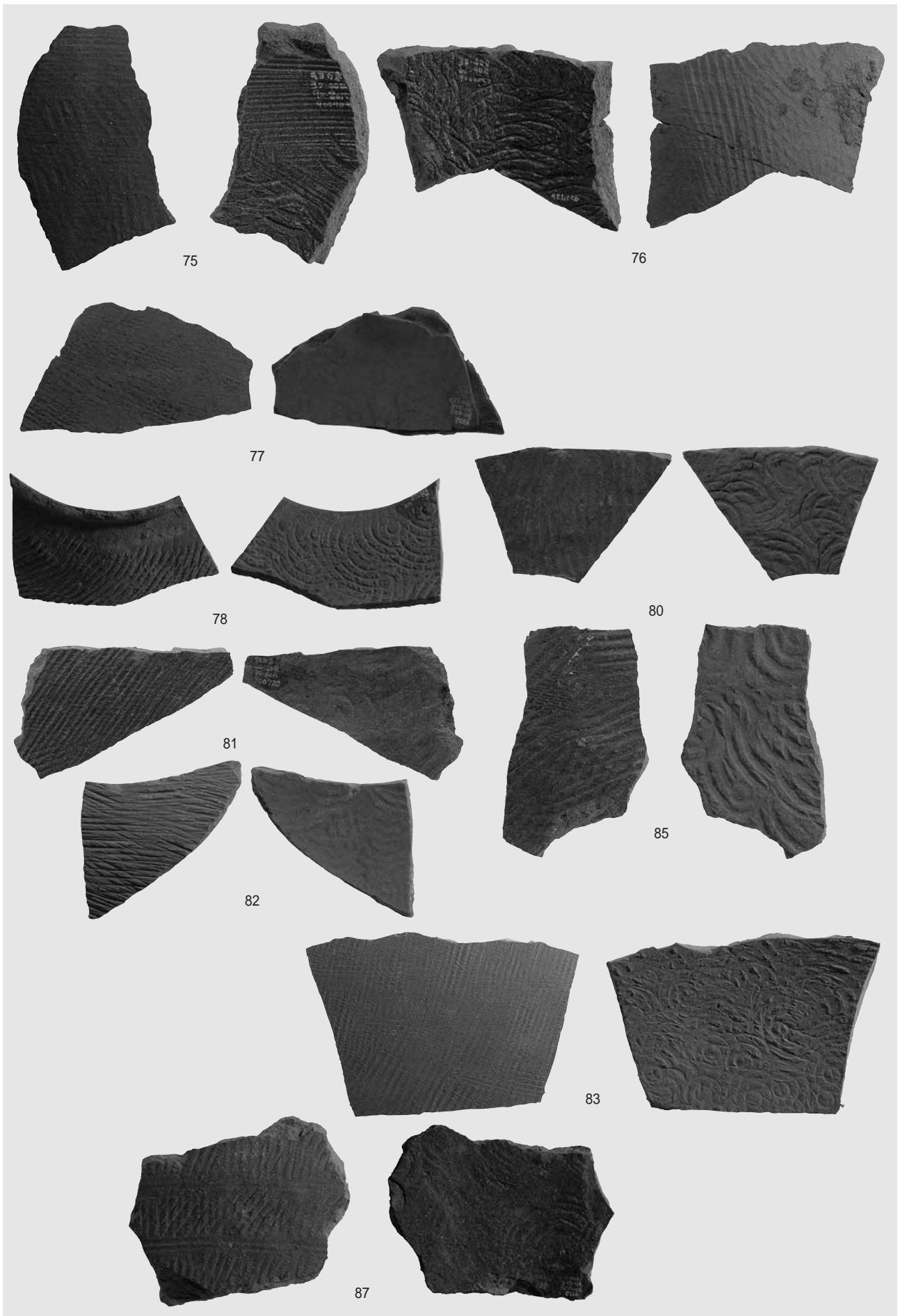


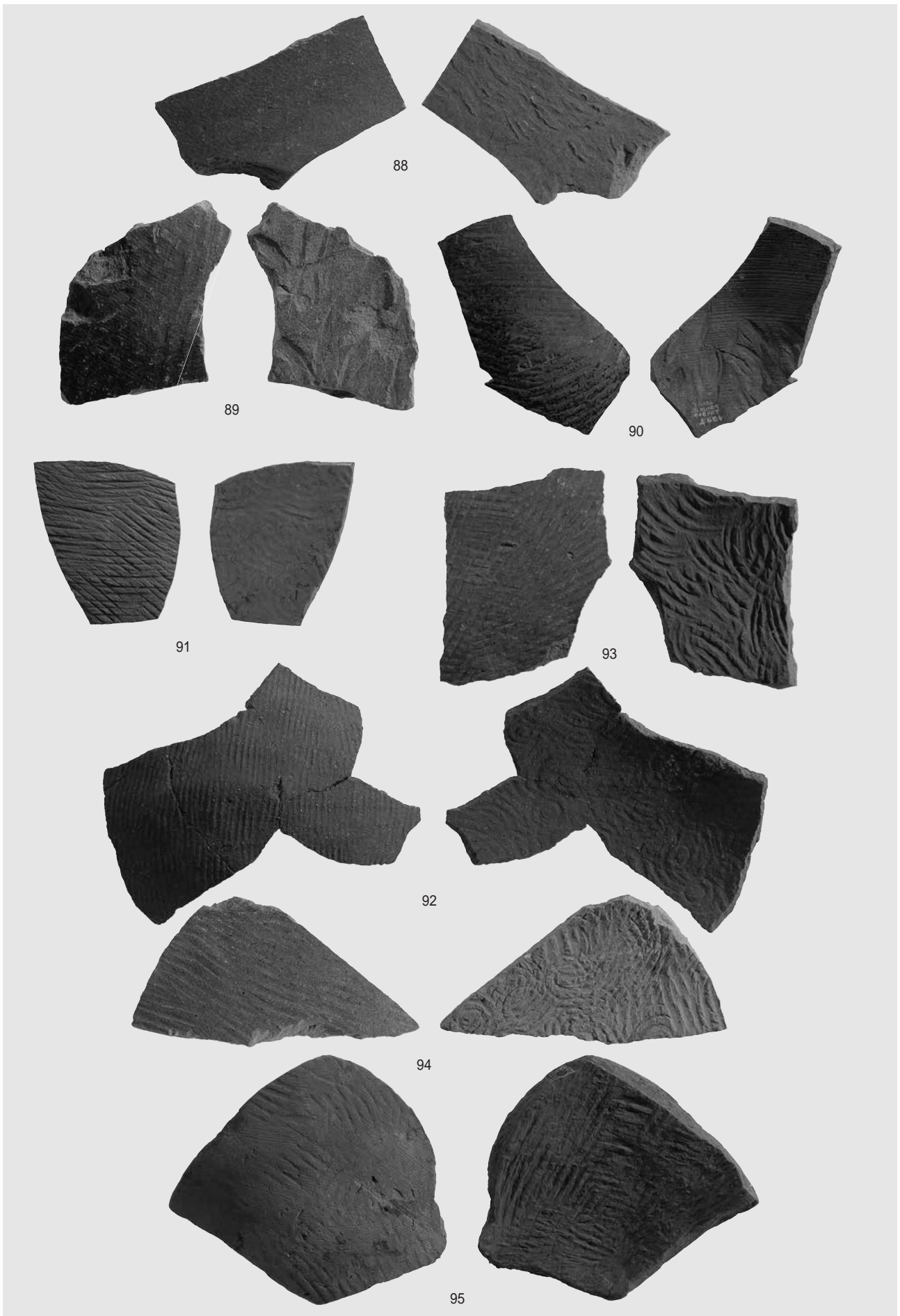


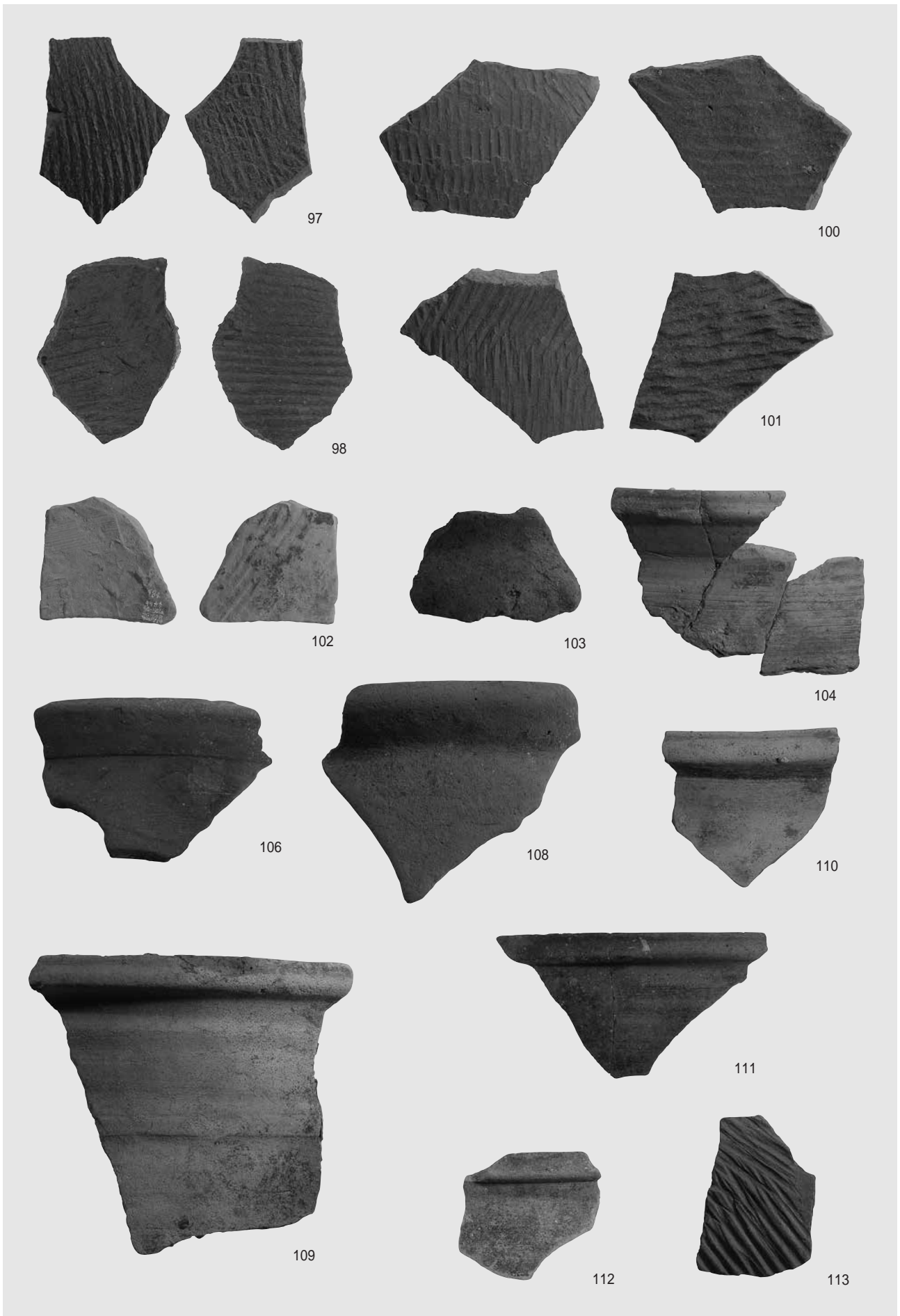


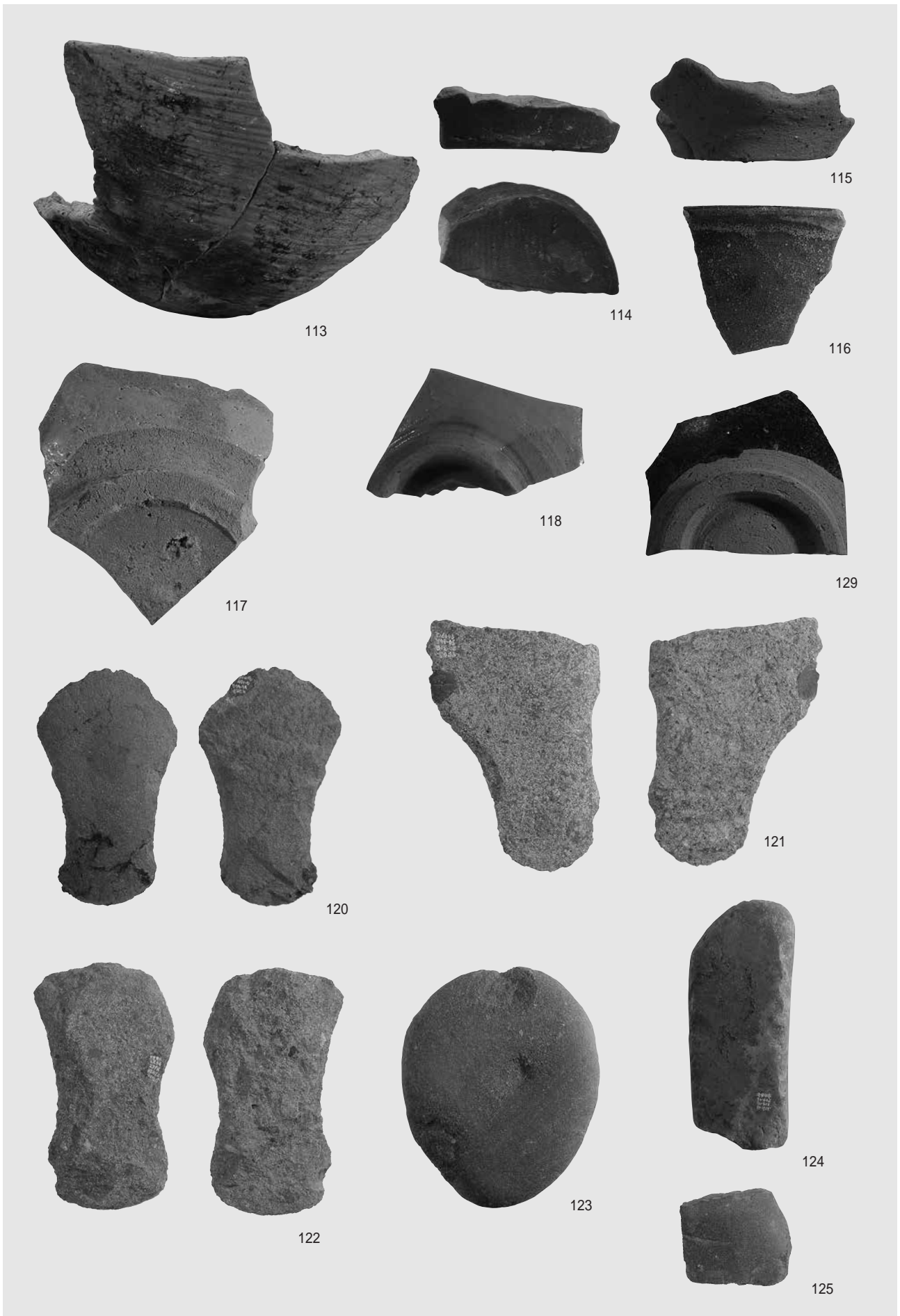












報告書抄録

ふりがな	ののいちまちきよがねあがとういせき							
書名	野々市町清金アガトウ遺跡							
副書名	一般国道157号（鶴来バイパス）改築工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	中島俊一・松尾実・空良寛							
編集機関	財団法人 石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL 076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人 石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きよがね 清金アガト ウ遺跡 第1次調査	いしかわけん 石川県	17344	16022	36度 30分 56秒	136度 35分 37秒	19880606 ～ 19881022	3,000m ²	道路建設
第2次調査	いしかわけん 石川県					198805116 ～ 19891204	6,100m ²	
第3次調査	ののいちまち 野々市町					19900426 ～ 19900828	9,800m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
清金アガト ウ遺跡	散布地	縄文・弥 生時代		縄文土器・弥生土器・打 製石斧				
	集落	飛鳥時代	竪穴建物・ 掘立柱建物・ 溝・土坑	土師器・須恵器		掘立柱建物・竪穴建 物・周辺に区画溝を 持つ建物など複数棟 の建物を検出。		
	集落	奈良・平 安時代	掘立柱建物・ 溝・土坑	土師器・須恵器				
	集落	中世	溝・土坑	土師器・珠洲焼・中世陶 器		鉄製犁先と土師器の 皿が重なり土坑から 出土		
要 約	7世紀から10世紀を中心とする集落跡で、掘立柱建物跡、竪穴住居跡が多数検出されている。南に接する、末松遺跡からは50メートルしか調査区は離れておらず、末松遺跡で5つの群に分かれている建物群の6群以降が当遺跡にあると考えられる。末松遺跡と同様に末松廃寺の造営に関わった集団の集落であろう。また中世の土坑では土師器皿が敷き詰められその上に鉄製犁先を置き埋設されていた。包含層からは多数の打製石斧が発見されている、しかし縄文時代から弥生時代までの土器片はごく少数しか見つかっておらず、打製石斧の時期は限定することが難しい。							

野々市町 清金アガトウ遺跡

発行日 平成18 (2006) 年 3 月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8577 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842 (文化財課)

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 宮下印刷株式会社